㈶大阪府文化財センター調査報告書　第79集

八尾市・東大阪市所在

池島・福万寺遺跡2

（福万寺Ⅰ期地区）

――一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

遺構・遺物編

２００２年８月

財団法人　大阪府文化財センター

池島・福万寺遺跡の現景観

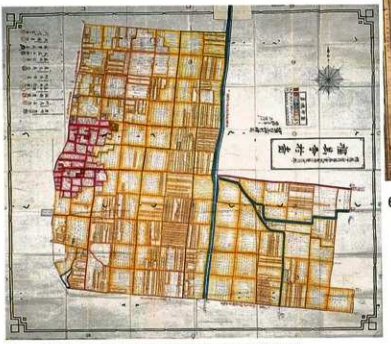
◀1．30年ほど前の調査地周辺
（北から、1969年10月撮影）
大阪府寝屋川水系改修工営所提供

2．恩智川治水緑地となった調査地▶
（北から、2001年5月撮影）

3．池島・福万寺遺跡の立地（西から、1991年6月撮影）

古地図に見る地割・土地利用

4.『福萬寺村惣繪圖』（沢井浩三氏影写本）
（享保19〔1734〕年作成、昭和32〔1957〕年模写）



5.『堺縣河内國第二大區四小區河内郡福萬寺村
地租改正地引繪圖』（明治12〔1879〕年作成）

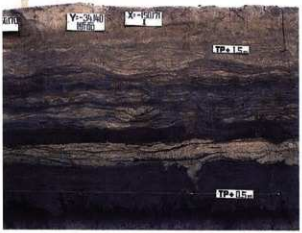
6.『河内國第二大區四小區河内郡池之
嶌村地引圖』（明治初期作成）

この３枚は、江戸時代～明治時代に作られた当遺跡周辺の古地図である。これらに記載された内容は、発掘調査成果を理解する上で参考になる情報を含んでいる。

地層に刻まれた人間活動の痕跡

7．地表面から約３ｍ下までの地層

8．飛鳥時代～平安時代の水路・大畦畔
（第９ａ層・第８ａ層）



9．弥生時代前期の氾濫堆積物（第13ｂ層）

10．砂で埋まった畦畔をさがす
（第12－１ａ面）

11．泥で埋まった畦畔をさがす（第11－２ａ面）

古代～中世の農耕技術

12. 中世後期の島畠（第３－３ａ面）

13. 現代に受け継がれた島畠
（奈良県大和郡山市長安寺町、2001年６月撮影）

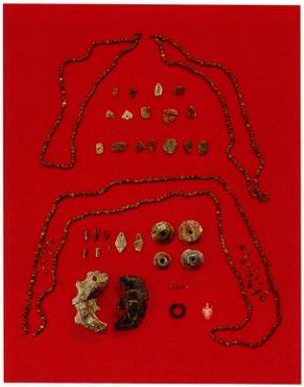
14. 表層条里型地割と一致する最古の水田（第８ａ面）

15. 水田作土の下面に残った馬鍬の歯の痕跡
（第６ｂ面）

16. 馬鍬の歯（第３層・第７層・第８ａ層）

古墳時代のムラ

17. 古墳時代中期後半～後期の建物群（第10ｂ面）

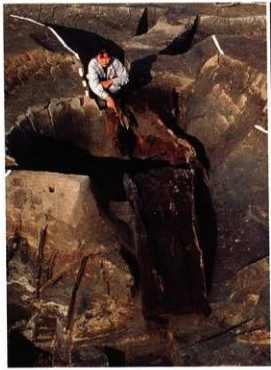


18. 玉類・滑石製品

弥生時代後期の流路が埋まって形成された微高地の上に、古墳時代中期後半～後期の居住域が立地していた。建物が集中する部分は区画溝で囲まれ、周囲に小規模な畠も存在していた。居住域内の遺構や居住域周辺からは、多量の滑石製玉類、土師器竈・羽釜・甑などが出土している。

弥生時代後期の灌漑システムと水田

19. 灌漑施設（取水堰と水路）



20. 木製導水管1

21. 水路の中に設けられた分水堰（堰16）

22. 水路38・40・41と小区画水田

23. 小区画水田

弥生時代の農具

24. 木製鍬（第13ｂ層・第13ａ面）

当遺跡からは木製農具も若干出土している。特に、弥生時代後期（第11－２ａ面）の水路肩部から出土した鍬は破損していたが、泥除け具がついたままの状態で出土した。

25. 泥除け具がつけられた鍬（第11－２ａ面）

26. 石庖丁（第11ｂ層）

石庖丁は、弥生時代前期末～中期初頭水田面（第13ａ面）、弥生時代中期水田面（第12－１ａ面）から出土した。

序　文

池島・福万寺遺跡は、大阪府が建設を進めている恩智川治水緑地付近に広がっており、1989年以降、財団法人大阪府文化財センターは恩智川治水緑地内での発掘調査を継続して行ってきました。恩智川治水緑地は、河内平野の東端を南北に流れる恩智川の洪水対策の一環として設けられた施設で、豪雨時には恩智川から勢いよく水が流れこむ遊水池となっています。そのために、掘削深度は地表面からおおよそ４～５ｍにも達し、縄文時代以降の遺物や遺構が検出されています。池島・福万寺地区のⅠ期部分は調査が完了しており、休日は野球やサッカーをする人達で賑わっています。

今回報告する福万寺Ⅰ期地区は恩智川左岸に位置しており、広さは約９万㎡を測ります。調査は1989年から1994年にかけての六ヶ年間行われ、調査区も延べ14調査区におよびました。調査結果は調査区ごとに概要報告書として既に報告されていますが、今回はその総集編ともいうべき調査報告書になります。

調査開始以降、調査担当者は真摯に調査にとりくみ、計画通り調査を終えることができました。しかし、調査面積が余りにも膨大なことや遺構面数の多さなどから部分的に齟齬をきたしている部分も存在しましたが、今回の報告書では、担当者の鋭い洞察力と観察力によって多くの面で問題点の解決が図られており、新たなる見解が報告されています。また分析・考察編では、貴重な玉稿をいただき、弥生時代以降の耕作地の変遷など今までの調査成果と合わせて詳細な検討を行うことができました。

池島・福万寺地区のⅠ期は前述のように調査が完了しており、野鳥の楽園とよばれた十数年前の姿に戻りつつあります。また近年、鮮やかな空色の羽根を持つカワセミが調査地付近に巣を作っており、その営巣地の確保のために池島Ⅰ期地区では水に囲まれた中の島が残されました。人間が生活していくうえで破壊という行為は不可避なものですが、上記のようにほんの少しの努力によって自然と共存する可能性ができました。現在、池島・福万寺地区のⅡ期では発掘調査が一部で始まっており、今後の調査成果に期待したいと思います。

最後になりましたが、調査の過程でお世話になった大阪府土木部、寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、その他関係者各位に御礼申しあげます。

平成14年８月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　言

1．本書は、恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）発掘調査の整理事業に対する本報告書である。なお、池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）は八尾市福万寺町北地内に所在する。

2．発掘調査は財団法人大阪文化財センター、整理事業は財団法人大阪府文化財調査研究センターが、大阪府寝屋川水系改修工営所の委託を受けて実施した。

3．総括的な整理事業および本書の作成作業は平成10年度～13年度に実施し、印刷に関しては平成14年度に行った。

4．整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。整理事業は調査部長井藤　徹、中部調査事務所長赤木克視（平成10･11年度）、藤田憲司（平成12・13年度）の指示の下、中部調査事務所調査第二係で実施した。各年度の担当者は以下のとおりである。

平成10・11年度

係長　小野久隆・専門調査員　新倉　香

平成12年度

係長　国乗和雄・主査　畑　暢子・技師　井上智博・専門調査員　新倉　香

平成13年度

係長　国乗和雄・主査　畑　暢子・技師　井上智博

なお、遺物写真撮影に関しては中部調査事務所主査片山彰一・調査補助員米子千智・水取康人が担当し、木製品の保存処理・樹種同定は主査山口誠治が担当した。

5．遺物整理には以下の方々を中心に参加・協力を得た。

安富猛員・井上幸子・奥村宏美・角田亜希乃・黒崎善雄・阪井祐美子・里　百代・佐藤智晶・田中エミ子・辻田有美・辻田多江・沼澤順子・増井英子・松本章子・宮本史子・若林　史・山本麻理・山本由紀子・湯澤洋子

6．福万寺Ⅰ期地区の発掘調査履歴に関しては、表Ⅰ－1（3ページ）に示した。

7．発掘調査および整理作業に伴い、委託分析として自然科学分析を実施した。その詳細については、第Ⅴ章1（359～360ページ）に示した。

8．遺跡周辺の古地図については、以下に記す所蔵者の方々の許可を得て写真撮影し、本書に掲載した。記して厚く感謝の意を表する次第である。なお、写真撮影は片山彰一・米子千智が行った。

『福萬寺村惣繪圖』（沢井浩三氏影写本）	八尾市立歴史民俗資料館
『河内国第二大區四小區河内郡池之宮村地引圖』	池島町自治会
『堺縣河内國第二大區四小區河内郡市場村地引圖』	岩崎孝朗氏
『堺縣河内國第二大區四小區河内郡福萬寺村地租改正地引繪圖』	岩崎孝朗氏
『堺縣河内國第二大區四小區河内郡上之島村地引圖』	岩崎孝朗氏

9．発掘調査成果の総括的整理および遺物整理作業の過程で、次の方々をはじめとする多くの方々に御指導・御教示賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

栗田　薫（富田林市教育委員会）・泉　拓良（奈良大学）・大野　薫（大阪府教育委員会）・荻田昭次（東大阪市文化財保護委員）・岸岡貴英（京都府教育委員会）・工楽善通（財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）・清水みき（向日市教育委員会）・高橋　学（立命館大学）・趙　哲済（財団法人大阪市文化財協会）・戸原和人（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）・長谷川　睦（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）・平川　南（国立歴史民俗博物館）・別所秀高（財団法人東大阪市文化財協会）・松井　章（奈良文化財研究所）・松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）・森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）

10．本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

11．本書の執筆分担は目次に示すとおりである。編集は井上が行った。

凡　例

1．地層の記載方法に関しては、第Ⅲ章に示した。発掘調査では、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』1990年度版を用いて土色の記載を行っており、今回掲載した断面図には、これに従って土色を提示したものがある。

2．挿図のうち、平面図・断面図は適宜縮尺を変えて掲載した。それぞれの縮尺は、各図に示している。

3．遺物実測図の縮尺は、以下のとおりである。

土　器：1/4
土製品：1/3
瓦　：1/4，1/6
石　器：2/3，1/2，1/3，1/4
木　器：1/2，1/3，1/4，1/6，1/20
金属器：1/2，1/3，1/4

4．遺物写真の縮尺は図版に記入している。未記入のものは任意である。

5．遺物実測図は、以下のような原則にもとづいて掲載した。

・口縁部残存部分が1/6未満の土器は、実測図の口縁部水平線を途中で切って表現する。
・遺物実測図の断面は原則として白抜き、須恵器は断面黒抜きとする。
・遺物の赤色顔料塗布の部分は朱彩で表す。

目　次

巻頭カラー図版

池島・福万寺遺跡の現景観
古地図に見る地割・土地利用
地層に刻まれた人間活動の痕跡
古代～中世の農耕技術
古墳時代のムラ
弥生時代後期の灌漑システムと水田
弥生時代の農具

序　文　　財団法人大阪府文化財センター　理事長　水野正好
例　言
凡　例

第Ⅰ章　発掘調査・整理作業の概要……(井上智博)　1

第Ⅱ章　位置と環境……(井上)　7

第Ⅲ章　遺構面の認識と標準層序……(井上)　18

第Ⅳ章　遺構・遺物……(畑　暢子・井上)　28
1．遺構・遺物整理の前提……28
2．第１ａ面～第９ａ層－条里型水田面の調査－……29
3．第10ｂ面－古墳時代遺構面の調査－……131
4．第10ｂ層～第13ｂ層－弥生時代水田の調査－……181
4－1．弥生時代後期……181
4－2．弥生時代中期……244
4－3．弥生時代前期～中期……257
5．第14－１面～第17層－縄文時代～弥生時代前期の古環境と人間活動－……304
掲載遺物一覧表……311

第Ⅴ章　自然科学分析
1．概　要……359
2．微化石・大型植物遺体・堆積物の分析
2－1．池島・福万寺遺跡の古環境復元……(辻本裕也・辻　康男)　361

2－2. 池島・福万寺遺跡の立地と環境 ……(外山秀一) 411
2－3. 池島・福万寺遺跡における種実同定 ……(㈱古環境研究所) 432
2－4. 池島・福万寺遺跡第18層の粒度分析 ……(井上智博) 436
微化石・大型植物遺体・堆積物の分析について ……439
3．残存脂肪分析
3－1. 池島・福万寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析
……(中野益男・中野寛子・長田正宏) 443
3－2. 池島・福万寺遺跡出土土器の残存脂肪分析及び解析
……(中野益男・中野寛子・長田正宏) 450
残存脂肪分析について …… 458
4．X線回折試験・化学分析
4－1. 池島・福万寺遺跡出土弥生土器の胎土分析 ……(井上 巌) 459
4－2. 池島・福万寺遺跡出土須恵器の胎土分析 ……(井上 巌) 471
4－3. 池島・福万寺遺跡出土滑石製品の化学分析 ……(井上 巌) 478
X線回折試験・化学分析について ……488
5．金属分析
5－1. 池島・福万寺遺跡出土品の金属学的分析調査（1994年度）……(大澤正己) 489
5－2. 池島・福万寺遺跡出土馬鍬の金属学的調査（2001年度）……(大澤正己) 507
金属分析について ……518
6．放射性炭素年代測定 ……520

第Ⅵ章 考 察

1．弥生時代における水田開発・経営の動態 ……(井上智博) 521
2．弥生時代の井堰に関する予察 ……(井上智博) 527
3．池島・福万寺遺跡の「滑石製品」－出土滑石製品とその「生産」について－ ……(廣瀬時習) 533
4．古代～近世における耕作地景観の動態 ……(井上智博) 545

挿図目次

第Ⅰ章

図Ⅰ－1　福万寺Ⅰ期地区調査区位置図……2
図Ⅰ－2　地区割図（第Ⅲ・Ⅳ区画）……5

第Ⅱ章

図Ⅱ－1　河内平野等高線図……7
図Ⅱ－2　地形分類図……8
図Ⅱ－3　表層における微高地の分布……9
図Ⅱ－4　池島・福万寺遺跡周辺の遺跡……10
図Ⅱ－5　表層条里型地割と坪付関連地名……12
図Ⅱ－6　「福萬寺村惣絵圖」に描かれた地割・水利系統……13
図Ⅱ－7　『福万寺村地引図』における地割と土地利用……13
図Ⅱ－8　『池島村地引図』における地割と土地利用……14
図Ⅱ－9　1880年頃の土地利用……15

第Ⅲ章

図Ⅲ－1　福万寺Ⅰ期地区断面柱状図……22
図Ⅲ－2　福万寺Ⅰ期地区断面模式図……23～24
図Ⅲ－3　第13ｂ～第21ｂ層柱状図……25

第Ⅳ章

図Ⅳ－1　第１ａ層出土遺物……30
図Ⅳ－2　第１ｂ面平面図……31
図Ⅳ－3　第１ｂ面井戸分布図……32
図Ⅳ－4　第１ｂ面土坑群……33
図Ⅳ－5　井戸形態模式図……34
図Ⅳ－6　第１ｂ面井戸①……34
図Ⅳ－7　第１ｂ面井戸②……35
図Ⅳ－8　第１ｂ面遺構出土遺物①……37
図Ⅳ－9　第１ｂ面遺構出土遺物②……38
図Ⅳ－10　第１ｂ層出土遺物……38
図Ⅳ－11　第２－１ａ面平面図……39
図Ⅳ－12　第２－１ａ面と『福萬寺村惣絵圖』の比較……40
図Ⅳ－13　足跡列Ａ～Ｅ……41
図Ⅳ－14　第２－１ａ層出土遺物……42
図Ⅳ－15　第２－２ａ面平面図……44
図Ⅳ－16　第２－２ａ面・第２－２ａ層出土遺物①　…46
図Ⅳ－17　第２－２ａ面・第２－２ａ層出土遺物②　…47
図Ⅳ－18　第２ｂ層出土遺物……47
図Ⅳ－19　第３－２ａ面平面図……49
図Ⅳ－20　第３－２ａ面等高線図……50
図Ⅳ－21　第３－２ａ面～第５ａ面における島畠の変遷51
図Ⅳ－22　第２－１ａ面～第４ａ面島畠断面図①……52
図Ⅳ－23　第２－１ａ面～第４ａ面島畠断面図②……53
図Ⅳ－24　第３－２ａ面遺構・第３－２ａ・３ａ・４ａ層出土遺物……54
図Ⅳ－25　第３ｂ層出土遺物……54
図Ⅳ－26　第４ａ面平面図……57
図Ⅳ－27　第４ａ面遺構・第４ａ層出土遺物①　……58
図Ⅳ－28　第４ａ面遺構・第４ａ層出土遺物②　……59
図Ⅳ－29　第５ａ面平面図……60
図Ⅳ－30　第５ａ面遺構・第５ａ層出土遺物　……61
図Ⅳ－31　第６ａ面平面図……62
図Ⅳ－32　第６ａ面遺構・第６ａ層出土遺物①　……63
図Ⅳ－33　第６ａ面遺構・第６ａ層出土遺物②　……64
図Ⅳ－34　第６ｂ面平面図……67
図Ⅳ－35　第６ａ層・第６ｂ面・層出土遺物……68
図Ⅳ－36　第７面平面図……69
図Ⅳ－37　第７面島畠関連断面図……70
図Ⅳ－38　水路12遺物出土状況……72
図Ⅳ－39　第７面水路12出土遺物①……76
図Ⅳ－40　第７面水路12出土遺物②……77
図Ⅳ－41　第７面水路12出土遺物③……78
図Ⅳ－42　第７面水路12出土遺物④……79
図Ⅳ－43　第７層出土遺物……80
図Ⅳ－44　第７ｂ面土器埋納遺構……81
図Ⅳ－45　第７ｂ面遺構・第７ｂ層出土遺物　……82
図Ⅳ－46　第８ａ面平面図……83
図Ⅳ－47　第８ａ面等高線図……84
図Ⅳ－48　第８ａ面島平面図……85
図Ⅳ－49　第８ｂ面溝平面図……85
図Ⅳ－50　第８ａ面～第８ｂ面遺物出土位置図……87
図Ⅳ－51　大畦畔１下面検出遺構・遺物出土位置図　…89
図Ⅳ－52　第８ｂ面土器埋納遺構……91
図Ⅳ－53　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物①　……93
図Ⅳ－54　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物②　……94
図Ⅳ－55　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物③　……95
図Ⅳ－56　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物④　……96
図Ⅳ－57　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物⑤　……97
図Ⅳ－58　第８ｂ面土器埋納遺構出土遺物……98
図Ⅳ－59　第８ｂ面遺構出土遺物……99
図Ⅳ－60　第９ａ面・第９ｂ面検出遺構　……100
図Ⅳ－61　水路35断面図　……101
図Ⅳ－62　土器埋納遺構と微地形の関係　……102
図Ⅳ－63　第９ｂ面土器埋納遺構①　……105
図Ⅳ－64　第９ｂ面土器埋納遺構②・土坑　……106
図Ⅳ－65　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物①　……108
図Ⅳ－66　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物②　……109
図Ⅳ－67　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物③　……110
図Ⅳ－68　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物④　……111
図Ⅳ－69　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑤　……112
図Ⅳ－70　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑥　……113

図Ⅳ－71　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑦……114
図Ⅳ－72　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑧……115
図Ⅳ－73　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑨……116
図Ⅳ－74　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑩……117
図Ⅳ－75　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑪……118
図Ⅳ－76　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑫……119
図Ⅳ－77　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑬……120
図Ⅳ－78　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑭……121
図Ⅳ－79　第９ｂ面遺構出土遺物（奈良時代）……122
図Ⅳ－80　第９ｂ面遺構出土遺物（飛鳥時代）……123
図Ⅳ－81　第９ａ面以上から出土した弥生時代遺物①……124
図Ⅳ－82　第９ａ面以上から出土した弥生時代遺物②……125
図Ⅳ－83　第10ｂ面平面図……131
図Ⅳ－84　第10ｂ面等高線図……132
図Ⅳ－85　第10ｂ面集落関連遺構平面図……134
図Ⅳ－86　第９ｂ・10ｂ面建物①……137
図Ⅳ－87　第９ｂ・10ｂ面建物②……138
図Ⅳ－88　第９ｂ・10ｂ面建物③……139
図Ⅳ－89　第９ｂ・10ｂ面建物④……140
図Ⅳ－90　第９ｂ・10ｂ面建物⑤……141
図Ⅳ－91　第９ｂ・10ｂ面建物⑥……142
図Ⅳ－92　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物①……144
図Ⅳ－93　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物②……145
図Ⅳ－94　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物③……146
図Ⅳ－95　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物④……147
図Ⅳ－96　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物⑤……148
図Ⅳ－97　第10ｂ面ピット出土遺物……150
図Ⅳ－98　第10ｂ面井戸……152
図Ⅳ－99　第10ｂ面井戸出土遺物①……153
図Ⅳ－100　第10ｂ面井戸出土遺物②……154
図Ⅳ－101　第10ｂ面土坑出土遺物①……155
図Ⅳ－102　第10ｂ面土坑出土遺物②……156
図Ⅳ－103　第10ｂ面溝出土遺物①……157
図Ⅳ－104　第10ｂ面溝出土遺物②……158
図Ⅳ－105　第10ｂ面溝出土遺物③……159
図Ⅳ－106　第10ｂ面溝出土遺物④……160
図Ⅳ－107　第10ｂ面溝出土遺物⑤……161
図Ⅳ－108　第10ｂ面溝21・22……163
図Ⅳ－109　第10ｂ面土器埋納遺構……164
図Ⅳ－110　第10ｂ面土器集積遺構１出土遺物……165
図Ⅳ－111　第10ｂ面土器埋納遺構出土遺物①……166
図Ⅳ－112　第10ｂ面土器埋納遺構出土遺物②……167
図Ⅳ－113　第10ｂ面落ち込み１出土遺物①……169
図Ⅳ－114　第10ｂ面落ち込み１出土遺物②……170
図Ⅳ－115　第10ｂ面耕作痕出土遺物……170
図Ⅳ－116　遺物出土位置図凡例……172
図Ⅳ－117　第10ｂ面関連遺物出土位置①……172
図Ⅳ－118　第10ｂ面関連遺物出土位置②……174
図Ⅳ－119　第10ｂ面関連遺物出土位置③……175
図Ⅳ－120　第10ｂ面関連遺物出土位置④……176
図Ⅳ－121　第10ｂ面関連遺物出土位置⑤……178
図Ⅳ－122　第10ｂ層出土遺物①……182
図Ⅳ－123　第10ｂ層出土遺物②……183
図Ⅳ－124　第10ｂ層出土遺物③……184
図Ⅳ－125　第10ｂ層出土遺物④……185
図Ⅳ－126　第10ｂ層出土遺物⑤……186
図Ⅳ－127　第10ｂ層関連出土遺物……187
図Ⅳ－128　第11－１面出土遺物……189
図Ⅳ－129　第11－１層出土遺物……190
図Ⅳ－130　第11－２ａ面流路復原図……191
図Ⅳ－131　第11－２ａ面平面図……191
図Ⅳ－132　第11－２ａ面等高線図……192
図Ⅳ－133　第11－２ａ面水田ブロック・遺構名称……194
図Ⅳ－134　流路１右岸水利施設・水田遺構……195
図Ⅳ－135　第11－２ａ面堰９平面・立面図……196
図Ⅳ－136　第11－２ａ面堰12平面・立面図……197
図Ⅳ－137　第11－２ａ面木製導水管１……198
図Ⅳ－138　木製導水管１断面図……199
図Ⅳ－139　流路１右岸水利施設の変遷……200
図Ⅳ－140　堰12と流路堆積物の関係……201
図Ⅳ－141　第11－２ａ面水利系統復原図……204
図Ⅳ－142　第11－２ａ面関連土器出土状況……205
図Ⅳ－143　第11－２ａ面微高地出土遺物①……208
図Ⅳ－144　第11－２ａ面微高地出土遺物②……209
図Ⅳ－145　第11－２ａ面微高地出土遺物③……210
図Ⅳ－146　第11－２ａ面微高地出土遺物④……211
図Ⅳ－147　第11－２ａ面畦畔出土遺物①……212
図Ⅳ－148　第11－２ａ面畦畔出土遺物②……213
図Ⅳ－149　第11－２ａ面堰出土遺物①……215
図Ⅳ－150　第11－２ａ面堰出土遺物②……216
図Ⅳ－151　第11－２ａ面堰出土遺物③……217
図Ⅳ－152　第11－２ａ面堰出土遺物④……218
図Ⅳ－153　第11－２ａ面水路出土遺物①……221
図Ⅳ－154　第11－２ａ面水路出土遺物②……222
図Ⅳ－155　第11－２ａ面水路出土遺物③……223
図Ⅳ－156　第11－２ａ面流路１出土遺物①……224
図Ⅳ－157　第11－２ａ面流路１出土遺物②……225
図Ⅳ－158　第11－２ａ面流路１出土遺物③……226
図Ⅳ－159　第11－２ａ面流路１出土遺物④……227
図Ⅳ－160　第11－２ａ面流路１出土遺物⑤……228
図Ⅳ－161　第11－２ａ面流路１出土遺物⑥……229
図Ⅳ－162　第11－２ａ面流路２出土遺物①……230
図Ⅳ－163　第11－２ａ面流路２出土遺物②……231
図Ⅳ－164　第11－２ａ層出土遺物①……232
図Ⅳ－165　第11－２ａ層出土遺物②……233
図Ⅳ－166　第11ｂ面平面図……234
図Ⅳ－167　第11ｂ面建物……235
図Ⅳ－168　第11ｂ面溝30出土遺物①……236
図Ⅳ－169　第11ｂ面溝30出土遺物②……237
図Ⅳ－170　第11ｂ面溝30出土遺物③……238
図Ⅳ－171　第11ｂ面溝30出土遺物④……239
図Ⅳ－172　第11ｂ面溝30出土遺物⑤……240
図Ⅳ－173　第11ｂ面溝30出土遺物⑥……241
図Ⅳ－174　第11ｂ面溝30出土遺物⑦……242
図Ⅳ－175　第11ｂ面遺構出土遺物……242
図Ⅳ－176　第11ｂ層出土遺物①……245
図Ⅳ－177　第11ｂ層出土遺物②……246
図Ⅳ－178　第11ｂ層出土遺物③……247
図Ⅳ－179　第12－１ａ面平面図……249
図Ⅳ－180　第12－１ａ面流路復原図……250

図Ⅳ－181　第12－１ａ面水田ブロック・遺構名称　…251
図Ⅳ－182　第12－１ａ面水利系統復原図……253
図Ⅳ－183　第12－１ａ面等高線図……253
図Ⅳ－184　第12－１ａ面遺物出土状況……255
図Ⅳ－185　第12－１ａ面遺構出土遺物……257
図Ⅳ－186　第12－１ａ層出土遺物①……258
図Ⅳ－187　第12－１ａ層出土遺物②……259
図Ⅳ－188　第12－１ａ層出土遺物③……260
図Ⅳ－189　第12－１ａ層出土遺物④……261
図Ⅳ－190　第12－１ａ層出土遺物⑤……262
図Ⅳ－191　第13ａ面平面図……263
図Ⅳ－192　第13ａ面水田ブロック・遺構名称　……265
図Ⅳ－193　第13ａ面水利系統復原図……266
図Ⅳ－194　第13ａ面等高線図……266
図Ⅳ－195　第13ａ面堰20平面・立面図　……267
図Ⅳ－196　堰20の立地……268
図Ⅳ－197　第13ａ面遺物出土状況……270
図Ⅳ－198　第13ａ面出土遺物①……271
図Ⅳ－199　第13ａ面出土遺物②……272
図Ⅳ－200　第13ａ層出土遺物①……273
図Ⅳ－201　第13ａ層出土遺物②……274
図Ⅳ－202　第13ａ層出土遺物③……275
図Ⅳ－203　第13ａ層出土遺物④……276
図Ⅳ－204　第13ａ層出土遺物⑤……277
図Ⅳ－205　第13ａ面～第12ｂ面の層序と
　遺構・遺物の関係　……280
図Ⅳ－206　堰21平面・立面図　……281
図Ⅳ－207　第13ｂ面平面図……282
図Ⅳ－208　第13ｂ面落ち込み２平面・断面図　……283
図Ⅳ－209　第13ｂ面遺構出土遺物①……285
図Ⅳ－210　第13ｂ面遺構出土遺物②……286
図Ⅳ－211　第13ｂ層～第14－１面平面図……287
図Ⅳ－212　第13ｂ層出土遺物①……288
図Ⅳ－213　第13ｂ層出土遺物②……289
図Ⅳ－214　第13ｂ層出土遺物③……290
図Ⅳ－215　第13ｂ層出土遺物④……291
図Ⅳ－216　第13ｂ層出土遺物⑤……292
図Ⅳ－217　第13ｂ層出土遺物⑥……293
図Ⅳ－218　第13ｂ層出土遺物⑦……294
図Ⅳ－219　第13ｂ層出土遺物⑧……295
図Ⅳ－220　第13ｂ層出土遺物⑨……296
図Ⅳ－221　第13ａ面～第10ｂ面の微地形……298
図Ⅳ－222　第10ｂ層～第14－２ａ層断面図①……301
図Ⅳ－223　第10ｂ層～第14－２ａ層断面図②……302
図Ⅳ－224　第10ｂ層～第14－２ａ層断面図③……303
図Ⅳ－225　第14－１面遺構・第14－２ａ層出土遺物…306
図Ⅳ－226　第14－２ａ面出土遺物……307

表目次

第Ⅰ章

表Ⅰ－１　福万寺Ⅰ期地区調査一覧……３
表Ⅰ－２　池島・福万寺遺跡概要報告一覧　……３

第Ⅳ章

表Ⅳ－１　福万寺Ⅰ期地区遺構面対応表……28
表Ⅳ－２　第１ｂ面遺構名称……31
表Ⅳ－３　第１ｂ面井戸一覧……35
表Ⅳ－４　第２－１ａ面遺構名称……39
表Ⅳ－５　第２－２ａ面遺構名称……43
表Ⅳ－６　第３－２ａ面遺構名称……48
表Ⅳ－７　第３－３ａ面遺構名称……51
表Ⅳ－８　第４ａ面遺構名称……56
表Ⅳ－９　第５面遺構名称……60
表Ⅳ－10　第６ａ面遺構名称……62
表Ⅳ－11　第６ａ面出土動物遺存体一覧……65
表Ⅳ－12　第６ｂ面遺構名称……66
表Ⅳ－13　第６ｂ面関連土器理納遺構一覧……68
表Ⅳ－14　第７面遺構名称……69
表Ⅳ－15　第７面水路12出土動物遺存体一覧……73
表Ⅳ－16　第７面水路12出土岩石肉眼鑑定結果……77
表Ⅳ－17　第７ｂ面土器理納遺構一覧……81
表Ⅳ－18　第８ａ面遺構名称……83
表Ⅳ－19　第８ａ面関連動物遺存体一覧……87
表Ⅳ－20　第８ａ面直上遺物一覧……88
表Ⅳ－21　第８ａ層・第８ｂ面遺物一覧　……88
表Ⅳ－22　第８ｂ面遺構名称……90
表Ⅳ－23　第９面遺構名称　……100
表Ⅳ－24　第９ｂ面検出遺構一覧　……107
表Ⅳ－25　第10ｂ面遺構名称　……130
表Ⅳ－26　第９ｂ・10ｂ面建物一覧　……143
表Ⅳ－27　第10ｂ面土器理納遺構一覧　……165
表Ⅳ－28　第10ｂ面関連動物遺存体一覧　……177
表Ⅳ－29　第11面遺構名称　……193
表Ⅳ－30　水田ブロック面積　……203
表Ⅳ－31　第11－２ａ面関連出土土器一覧　……206
表Ⅳ－32　第11ｂ面遺構名称　……234
表Ⅳ－33　第12－１ａ面遺構名称　……250
表Ⅳ－34　水田ブロック面積　……251
表Ⅳ－35　第12－１ａ面出土遺物一覧　……256
表Ⅳ－36　第13ａ面遺構名称　……264
表Ⅳ－37　水田ブロック面積　……265
表Ⅳ－38　第13ａ面出土遺物一覧　……269
表Ⅳ－39　第13ｂ面遺構名称　……282
表Ⅳ－40　第13ｂ層中遺構名称　……287
表Ⅳ－41　第14面遺構名称　……305

第Ⅰ章　発掘調査・整理作業の概要

1. 発掘調査の経緯と経過

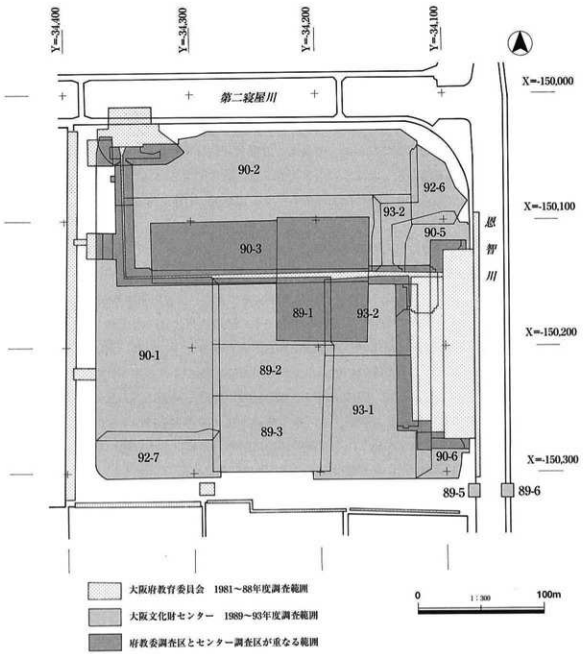
旧大和川水系の河川活動は、河内平野南東部の地形形成に大きな影響を与えてきた。旧大和川の河道は中世以降に築堤によって固定化されたため、中世末～近世初頭には天井川化が深刻な問題となり、河川の氾濫が活発化した。当遺跡の西を北流する玉串川筋では、特に延宝２（1674）年の二重堤決壊の後、洪水が頻発するようになった。こうした状況を克服すべく、宝永元（1704）年には大和川を西へ向けて付け替える工事が実施された。

しかし、大和川付け替え後も、旧大和川流域では排水不良の問題が解決したわけではなかった。当遺跡の中を北流する排水河川の恩智川は明治初年に大規模な浚渫が実施されたが、その後河床に土砂が堆積して排水機能が低下したため、1930～34年に改修工事が実施された（恩智川水防事務組合1987）。また1960年代になると、河内平野一帯で市街化が進行し、地下水の汲み上げによって大きな地盤沈下が引き起こされた。その結果、豪雨時には河川水位の急激な増水がみられるようになり、水田・溜池など、降雨時に水位調節の役割を果たしていた施設の激減と連動して水害に悩まされるようになった。大阪府はこれに対処するための治水事業として、幹線河川の河幅の拡張や堤防の補強に合わせて、豪雨時に水を一時的に貯留し、平水時には公園として利用する「多目的遊水池」の建設を1975年に計画した。恩智川流域に計画されたのは花園多目的遊水池と、当遺跡の調査に関わる恩智川治水緑地である。後者は総面積40.2ha、のべ掘削土量124万㎥におよぶ大規模なもので、恩智川左岸の福万寺地区Ⅰ・Ⅱ期（八尾市）、右岸の池島地区Ⅰ・Ⅱ期（東大阪市）の４期に分割して整備されることになった。

この恩智川治水緑地が計画された地域には条里型地割が良好に遺存しており、「池島条里遺構」と呼ばれて注目されていた（井上1921）。そして、1972～80年には東大阪市池島地区において、府立池島高校建設や水道管埋設に伴う発掘調査が実施された（荻田ほか1973、芋本1974、上野・阿部1981）。これらの調査では、条里遺構だけでなく、その下層から古墳時代や弥生時代の遺構・遺物も発見された。こうした状況をふまえて治水緑地建設に先だち、大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。そして、その合意にもとづいて1981・82年には、福万寺Ⅰ期地区において試掘調査が実施された。その結果、現地表下約2.5mまで条里遺構が重層的に遺存していること、さらにその下層に弥生時代前期の遺物包含層や遺構が遺存していることなどが判明した。この結果をふまえて関係機関による協議が再度おこなわれ、①治水緑地の構造上、現状保存は不可能であること、②破壊が不可避な部分については発掘調査を実施し、記録保存を図ることが合意された。そして1984年には、大阪府教育委員会によって福万寺Ⅰ期地区の発掘調査が開始された。

その後、1989年には福万寺Ⅰ期地区の諸施設の完成に伴い、池床部の文化財調査が必要となった。このため、今後の調査体制についての検討がなされた結果、福万寺Ⅰ期・池島Ⅰ期分については㈶大阪文化財センター（1995年４月～㈶大阪府文化財調査研究センター、2002年４月～㈶大阪府文化財センター）が調査を担当するという結論に達した。

福万寺Ⅰ期地区における㈶大阪文化財センターの調査は1989年４月から開始し、1995年３月に終了した。その調査区割は、図Ⅰ－１・表Ⅰ－１に示したとおりである。



図Ⅰ－1　福万寺Ⅰ期地区調査区位置図

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、㈶大阪文化財センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』(㈶大阪文化財センター1985）に準拠した地区割を用いて実施した。

その地区割は、国土座標軸（第Ⅵ座標系、原点は東経136度00分、北緯36度00分）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小６段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、１／10,000地形図の区画割図をそのまま利用したもので、縦６km、横８kmが１区画となる。南西端を基点とし、縦軸Ａ～Ｏ、横軸０～８で表示する。

第Ⅱ区画は、１／2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km，横2.0kmに16分割している。地区名は、南西端を１、北東端を16とする東方向への平行式で表示する。

表Ⅰ－1　福万寺Ⅰ期地区調査一覧（㈶大阪文化財センター分）

調査区名称	調査期間	面積（㎡）	担当者	概要報告
89-1調査区　(池島その1)	1989.4.22～1990.3.25	5020	江浦　洋　本間元樹	Ⅰ
89-2調査区　(池島その2)	1989.4.22～1990.3.25	3440	小野久隆　金光正裕	Ⅰ
89-3調査区　(池島その3)	1989.5.2～1990.3.25	4570	寺川史郎　松山　聡 三宮昌弘	Ⅰ
89-5調査区　(池島その5)	1990.3.1～1990.3.25	80	國乘和雄　寺川史郎	Ⅰ
90-1調査区　(池島その4)	1990.5.12～1993.3.25	13910	寺川史郎　三宮昌弘 森本　徹　佐藤玲子	ⅩⅡ
90-2調査区　(池島その5)	1990.5.12～1993.3.25	10700	松山　聡　本間元樹 後藤信義	Ⅲ・Ⅵ・Ⅹ
90-3調査区　(池島その6)	1990.5.12～1993.3.25	12440	金光正裕　江浦　洋 井上智博　佐藤玲子	Ⅱ・Ⅷ・ⅩⅠ
90-4調査区　(池島その4)	1990.5.12～1993.3.25	12300	寺川史郎　三宮昌弘 森本　徹	ⅩⅡ
90-5調査区　(池島その5)	1990.5.12～1993.3.25	2000	松山　聡　本間元樹 後藤信義	Ⅲ
90-6調査区　(池島その6)	1990.5.12～1993.3.25	1320	金光正裕　江浦　洋 井上智博　佐藤玲子	Ⅱ
92-6調査区　(池島その7)	1993.3.26～1994.3.25	3840	寺川史郎　後藤信義 佐伯博光　奈加智美	ⅩⅣ
92-7調査区　(池島その7)	1993.3.26～1994.3.25	2010	寺川史郎　後藤信義 佐伯博光　奈加智美	ⅩⅣ
93-1調査区　(池島その8)	1993.5.11～1995.3.25	7830	小野久隆　森本　徹 井上智博　宮路淳子 下岡珠美	ⅩⅤ
93-2調査区　(池島その9)	1993.5.11～1995.3.25	6220	本間元樹　村田幸子 本田奈都子	ⅩⅥ

表Ⅰ－2　池島・福万寺遺跡概要報告一覧（1982～1997）

編著名	発行年	書名	編集機関	頁数	略称
大野　薫	1982	『池島遺跡試掘調査概要Ⅰ』	大阪府教育委員会	22	府試Ⅰ
大野　薫・阪田育功	1983	『池島遺跡試掘調査概要Ⅱ』	大阪府教育委員会	34	府試Ⅱ
阪田育功	1985	『池島遺跡発掘調査概要Ⅰ』	大阪府教育委員会	81	府発Ⅰ
岸本道昭	1986	『池島遺跡発掘調査概要Ⅱ』	大阪府教育委員会	59	府発Ⅱ
岸本道昭	1988	『池島遺跡発掘調査概要Ⅲ』	大阪府教育委員会	131	府発Ⅲ
大野　薫	1989	『池島遺跡発掘調査概要Ⅳ』	大阪府教育委員会	146	府発Ⅳ
大野　薫・小山田宏一	1990	『池島遺跡発掘調査概要Ⅴ』	大阪府教育委員会	―	府発Ⅴ
江浦　洋	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』	㈶大阪文化財センター	188	概要Ⅰ
江浦　洋	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』	㈶大阪文化財センター	136	概要Ⅱ
松山　聡・本間元樹・後藤信義	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅲ』	㈶大阪文化財センター	64	概要Ⅲ
森本　徹	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅳ』	㈶大阪文化財センター	44	概要Ⅳ
國乘和雄	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅴ』	㈶大阪文化財センター	10	概要Ⅴ
松山　聡・本間元樹・後藤信義	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅵ』	㈶大阪文化財センター	70	概要Ⅵ
江浦　洋・井上智博	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』	㈶大阪文化財センター	106	概要Ⅶ
森本　徹	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ』	㈶大阪文化財センター	30	概要Ⅷ
國乘和雄	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅸ』	㈶大阪文化財センター	16	概要Ⅸ
松山　聡・本間元樹・後藤信義	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅹ』	㈶大阪文化財センター	63	概要Ⅹ
井上智博	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅠ』	㈶大阪文化財センター	114	概要ⅩⅠ
森本　徹	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅡ』	㈶大阪文化財センター	162	概要ⅩⅡ
本間元樹・村田幸子・本田奈都子	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅥ』	㈶大阪府文化財調査研究センター	98	概要ⅩⅥ
寺川史郎・佐伯博光	1996	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅣ』	㈶大阪府文化財調査研究センター	76	概要ⅩⅣ
井上智博・森本　徹	1997	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅤ』	㈶大阪府文化財調査研究センター	140	概要ⅩⅤ

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦軸Ａ～Ｏ、横軸１～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦軸ａ～ｊ、横軸１～10となる。なお、遺物の出土地点など、現場における地区表示は、第Ⅲ・Ⅳ区画のみでおこなっている。

マニュアルではこの他、第Ⅳ区画を５ｍ単位で４分割する第Ⅴ区画、第Ⅴ区画を任意に細分する第Ⅵ区画が規定されているが、これらについては遺物集中地点など、ごく一部で使用したにとどまる。

本書で報告する福万寺Ⅰ期地区の地区割は、第Ⅰ区画がＧ６、第Ⅱ区画が14となる。また図Ⅰ－２には、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画の地区割を示した。

なお、地区割が国土座標を基準としているため、方位は座標北を用いているが、それは磁北あるいは真北とは若干のずれが存在することに留意されたい。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.）を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾最低干潮面（O.P.）もあり、今も大阪府関係の土木工事などで使用されている。両者のレベル差はT.P.0m＝O.P.＋1.3mと定められている。

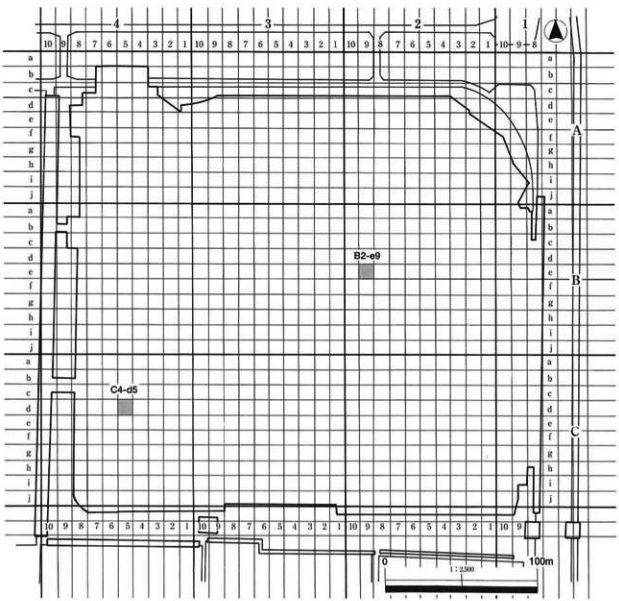
また、調査区が細分されることから、福万寺Ⅰ期地区全域をカバーする断面図の作成を意図したセクションベルトの設定が必要になった。さらに、調査面積が広いため、細かく層準をチェックして調査を進めなければ、層序対比すら完全にはできず、平面の調査精度も低くなってしまうことも危惧された。そのため、東西南北とも国土座標に合わせて20m間隔で幅１mのセクションベルトを設定し、南北方向のものについては東側、東西方向のものについては南側に、幅0.5～１mのトレンチを先行して掘削して、層序と平面の情報をつき合わせながら調査を進めるという方針をとった。ただし、坪境を縦断するものなど、平面調査の支障になる場合は、セクションベルトの設定およびトレンチの掘削を取り止めた。設定した断面は基本的にすべて縮尺１／20で実測したが、この結果、断面の実測に関わる作業量は膨大なものになった。しかし、実測までおこなうことで、複雑な層序を観察して平面調査で得られた情報とつき合わせる意識が次第に定着し、調査精度を高めるのに役立った。また、残された図面・写真類も膨大なものになったが、これらは調査終了後の再検討に大きな役割を果たした。今回の報告にあたっても、この資料を駆使して徹底した再検討をおこなうことができた。

各遺構面については、縮尺１／100の平板測量をおこなった他、重要な面については航空測量を実施した。また、検出遺構については、それぞれの規模や性格に応じて縮尺を適宜設定して、平面・断面・立面の実測をおこなった。なお、遺構面および検出遺構の一部には、トータルステーションを使った「てづかやま」システム（現、カタタ・システム）による測量をおこなったものもある（概要Ⅰ，pp.13-14）。

3. 整理作業の経過と本書の課題

各調査区では、調査終了後概要報告書を作成し、順次刊行してきた（表Ⅰ－１、本文中で概報を引用する際は、この表の略称を使用する）。今回の整理にあたっては、その記載を出発点として、全面的な再検討をおこなった。また、福万寺Ⅰ期地区では大阪府教育委員会も調査を実施しており、その成果についても概要報告書が刊行されている。大阪府教育委員会調査分については別途整理が進められているが、その情報を除外すると遺跡の評価が困難になるため、これも含めて検討をおこなった。

当遺跡の発掘調査が開始された1980年代は、全国各地で水田遺構の調査事例が増加し始めた時期にあたり、その後半には「東日本の水田跡を考える会」などの活動によって、水田遺構の認定方法や調査方



図Ⅰ－2　地区割図（第Ⅲ・Ⅳ区画）

法の充実がはかられた。1990年代に入ると調査精度は一定の水準に達し、水田遺構の調査方法をまとめた冊子も刊行された（㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1992）。福万寺Ⅰ期地区の調査は、調査技術確立のために試行錯誤していた段階のものであり、現在の水準からすると精度が高いとはいえず、誤った理解や解釈をしている部分も見うけられる。したがって、今回の報告にあたっては、できるかぎり現段階の認識にもとづいてデータを読み直すように努めた。

具体的な作業としては、整理の基本となる層序と遺構面の検討をおこなった。調査段階では、調査区ごとに層序番号や遺構面番号がつけられていた。その対応関係についてはその都度検討されていたが、概報刊行が遅れた調査区など、検討が不十分な部分もあった。また、ひとつの調査区内において、層序や遺構面に混乱や矛盾が存在するものもあり、全面的な再検討が必要であった。さらに、当地区の東に隣接する池島Ⅰ期地区の調査の進行に伴って、より広域の対応関係についても考慮する必要が生じてきた。本書では、こうした点をふまえて当遺跡の標準層序を設定し、その層序番号を用いて遺構面を整理した。遺物の出土層位についても、それにもとづいて整理した。

検出遺構の遺構番号は、調査区ごとに、遺構種類別につけられていた。概報はこれに従っているが、複数調査区にまたがって検出された遺構に対して、調査区ごとに異なった番号がつけられているなどの問題から、そのままでは使用することができなかった。したがって、今回の整理にあたっては遺構種類別に新たな番号を付け、それと調査時の遺構番号との対応関係を示すことにした。

また、遺構や遺物出土位置については遺物台帳などの記載と概報の記載をチェックしたほか、残されたカラー写真・スライドを積極的に活用し、図面との整合性、層位や出土状況をチェックした。その結果、概報の記載に明らかな誤りがあったものについては本書で訂正するとともに、全体の評価に関わるものについては訂正の経緯についても記述している。

当遺跡のように、縄文時代以降の堆積によって地形が形成されてきた沖積低地に立地する遺跡では、各時期の遺構面が重層して遺存しており、その地域の景観変遷に関する重要な情報を得ることができる。特に当遺跡では広い面積を調査したため、遺構配置などの空間的情報が良好な形で得られている。今回の整理作業の目的は、景観変遷を明らかにするための基礎データを整備することにある。そのためには、層序・遺構・遺物それぞれの情報だけでなく、それらの関係を明確にし、遺跡形成過程を復原することが課題となる。また、微化石などの分析結果もそうした観点から評価することで、遺跡の理解を深めるために利用できると思われる。

当遺跡の調査成果は一般向けの概説書（寺沢2000など）に引用されるようになっただけでなく、海外でも発表され（Miyaji1995，Inoue1999）、代表的な考古学の教科書のひとつにも取り上げられている（Renfrew＆Bahn2000）。しかしながら、その成果をさらに生かすためには、調査成果に対する厳しい検証作業が必要である。本書はその作業にあたっての基本資料のひとつであり、これをふまえて今後さらにデータの検討を続けていく必要がある。

参考文献

井上正雄1921『大阪府全志』巻四，pp.874-878.（復刻版1985.清文堂出版）

竿本敬裕1974『池島町の条里遺構－48年度・49年度発掘調査概要』，東大阪市遺跡保護調査会，14p.

上野利明・阿部嗣治1981『北島池遺跡・池島遺跡発掘調査概報』『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集　1980年度』，pp.31-72.

荻田昭次ほか1973『池島町の条里遺構－調査概報－』，東大阪市遺跡保護調査会，38p.

恩智川水防事務組合1987『水防のあゆみ－30年－』，28p.

㈶大阪文化財センター1985『遺跡調査基本マニュアル』，55p.

寺沢　薫2000『日本の歴史02　王権誕生』，講談社，pp.72-73，pp.84-85.

Inoue,T. 1999. Early irrigation systems of rice paddy fields in Japan. Coles,B. ,Coles,J. ＆Jørgensen,M. (eds.) *Bog bodies, Sacred Sites and Wetland Archaeology*. WARP Occasional Paper 12，pp.115-120.

Miyaji,A. 1995. Ikejima-Fukumanji site at Osaka, Japan. *News WARP* 17. Wetland Archaeology Research Project，pp.6-11.

Renfrew,C. ＆Bahn,P. 2000. *Archaeology：Theories, Methods and Practice*（3 rd edition）. Thames＆Hudson，p.257.

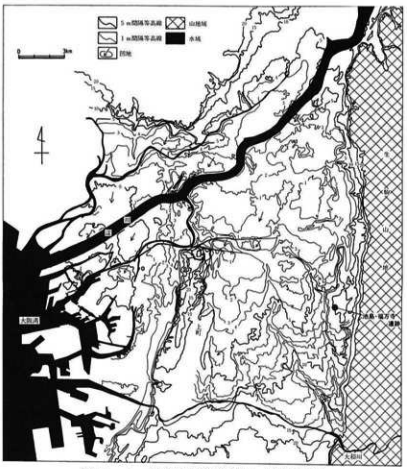
第Ⅱ章　位置と環境

1. 河内平野における古地理変遷の概要

池島・福万寺遺跡の立地する河内平野の古地理変遷については、梶山彦太郎・市原　実（梶山・市原1972・1986）の先駆的研究以来、いくつかの研究が発表されている。また、最近では、発掘調査データをもとにした地層や古環境復原についての研究成果も公表されつつある（地学団体研究会関西支部編1999）。当遺跡においても、1989～96年に高橋　学が地形環境分析を実施している（概要Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・ⅩⅠ・ⅩⅢ・ⅩⅤ）。ここではまず、こうした研究を参考にして、10^3年程度のオーダーでの河内平野の古地理変遷を簡単にみておきたい。

現在の河内平野にあたる部分は、最終氷期には山地に囲まれた丘陵と台地・段丘の間を淀川や大和川が流れる盆地であったと推定されており、古大阪平野と呼ばれている。花粉分析の結果などから、この時期、生駒山地西麓には湿原が広がっていたと推定されており、「古深野沼」と呼ばれている。当遺跡においても、池島Ⅰ期地区の96-3・99-1調査区で、T.P.－9.5m付近に泥炭質シルト～泥炭層（第21層）が堆積しており、その層中に姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）が挟まれていることが確認されている。

そして、治水緑地や下水道の工事に伴う立坑掘削の際に実施された断面観察では、縄文海進期の海成層も確認されており、^{14}Ｃ年代で7000yBPごろから縄文時代中期にかけての堆積環境の変化も明らかになった（秋山・朝田編2000）。この状況は、市原・梶山の命名した「河内湾Ⅰの時代」に対比される。なお当遺跡は、縄文時代後期には陸域になったが、この時期、河内平野中央部には河内湖が広がっていた。この河内湖は縄文時代晩期の海水準低下によって晩期末までに淡水化し、河内湖となった。そして、その名残は新開池・深野池として、近世初めまで残存した。



図Ⅱ－1　河内平野等高線図（高橋1991）

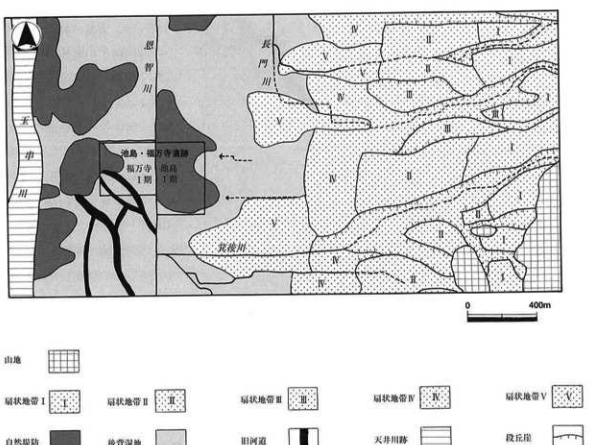
2. 遺跡周辺の地形形成

当遺跡は河内平野東南部に位置する（図Ⅱ－1）。地形的には、天井川化した玉串川（旧大和川の分流）と生駒山地西麓に広がる扇状地の間の後背湿地に立地する。表層では自然堤防などが

確認できるが、これはあくまで地表面の状況であり、調査では縄文時代以降の微地形変遷過程を明らかにする必要がある。

高橋　学（1991）は従来の地形分類図の問題点を整理し、高橋独自の視点にもとづいて河内平野の地形分類図を作成した。その図では、高橋の考える地形発達モデルにもとづき、三角州の発達過程に着目して、河内平野主要部を三角州帯Ⅰと三角州帯Ⅱに分類し、前者をさらにⅠａとⅠｂに細分した。当遺跡は三角州帯Ⅰａに立地するが、この地形帯は弥生時代中期までに陸化した範囲とした。この研究に対しては、各地形帯の境や陸化の時期などの検証や、海水準・湖水準変動、河道変遷などに着目した河内平野の発達史モデル（地学団体研究会関西支部編1999）との比較検討が必要であろう。

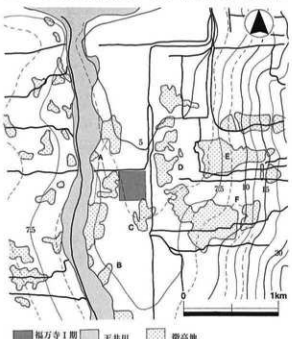
当遺跡周辺を対象にした地形分類図としては、河角龍典（1999）や別所秀高（1999）によるものが公表されている。河角は、生駒山地西麓の扇状地の発達過程に注目して地形分類図を作成した（図Ⅱ－２）。その中では、扇状地が５つに分類されている。その中で当遺跡に直接関連するのは「扇状地Ⅴ」で、形態および成因からみて、生駒山地から流下する河川に沿う自然堤防と考えられている。また、別所も地形発達を考慮しつつ、河角とは若干異なった観点から分類をおこなっており、最も下位の扇状地については、ロウプ状の高まりと開析谷との関係がつかめるように表現されている。これらの扇状地のうち、箕後川沿いに存在するものについては、㈶東大阪市文化財協会による池島遺跡第15次調査成果から、古墳時代後期以降に発達したことが判明した（三輪1997）。また、長門川沿いにも同様の地形面があるが、これについても上流に位置する段上遺跡における堆積層の検討によって、古墳時代後期以降に形成されたと推定されており（松田1999）、その南にある池島の集落が立地する微高地も同様な時期に形成された



図Ⅱ－２　地形分類図（河角1999を再トレース）

ものであろう。

なお、当遺跡の発掘調査の過程で、小山田宏一（1989）が土地条件図にもとづいて表層微地形を整理しており、その成果は井上（1995・1999）でも利用されている。それによると、当遺跡周辺で4つの微高地が存在しているとされていたが、後述する明治時代の地引図の検討結果（図Ⅱ－9）から、微高地の範囲や数を修正する必要が出てきたため、修正したものを図Ⅱ－3に示した。このうち、微高地Aは玉串川から供給された氾濫・破堤堆積物によって形成されたもので、福万寺の集落から北東方向にのびるものである。1880年ごろの土地利用をみると、この微高地に対応して畠が分布することがわかる。この微高地については、福万寺Ⅰ期地区および㈶東大阪市文化財協会による池島遺跡第12次調査成果（松田1995）によって、中世後期～近世初期に形成されたことが判明した。また、微高地Bについても微高地Aと同様の成因が考えられ、1880年ごろには畠として利用されていた。なお、この微高地の端にある玉串川堤防脇には「綿池」と呼ばれる溜池があり、その水が農業用水に利用されてきた。この池は『福萬寺村惣繪圖』（1734）にも記載されており、周囲に「切下」という地名が記載されていることが注意される（図Ⅱ－6、図版2－2）。このことから、高橋　学はこの池を玉串川の破堤によって生じたクレバスであると考えた（高橋1995、井上1995）。また、微高地Cは恩智川沿いに分布している。表層ではわずかな範囲しか認められないが、1880年代ごろの畠の分布からみて、本来は上之島村の範囲から福万寺村の北端付近までのびていたと考えられる。その形成時期については、福万寺Ⅰ期地区の発掘調査成果から、中世後期以降と考えられる。また、13～14世紀の屋敷地が検出された福万寺遺跡もこの範囲に含まれるが、この調査地点では屋敷地廃絶後に堆積した厚い砂層が確認されている（米田・徳谷1990）。この砂層は微高地Cの形成に関わったものである可能性が高く、微高地Cの形成が中世後期以降であることを示している。なお、この微高地の形成に関わった堆積物は、玉串川から供給されたと考えられる。さらに、恩智川右岸沿いに分布する微高地Dについては、池島Ⅰ期地区の調査により、中世末～近世に形成されはじめ、第1b層（19世紀初頭）の堆積によって現在の形となったことや、形成に関わった堆積物の供給源は恩智川であることが判明しつつある（河角2000）。そして、池島の集落が立地する微高地Eと、箕後川沿いの微高地Fは、前述のように古墳時代後期以降に形成されたと考えられる。



図Ⅱ－3　表層における微高地の分布
地形区分は1/25,000土地条件図（1983）による
等高線は陸地測量部板製日本図（明治18：1885）による

当遺跡の地形発達には旧大和川の分流と生駒山地から流下する河川が関与したと考えられるが、それに関連する河道変遷についても議論されてきた。また、玉串川沿いの自然堤防と生駒山地西麓扇状地の間を北流する恩智川の性格や起源についても検討がなされてきた。

まず高橋　学は、福万寺Ⅰ期地区に関して、弥生時代までは生駒山地から流下した河川の影響が強く、玉串川の影響は中世以降に活発化するとした。そして、玉串川については、中世以前にはなかったか、きわめて小規模なものであった可能性を指摘した。

図Ⅱ－4　池島・福万寺遺跡周辺の遺跡

1. 池島・福万寺遺跡
2. 稲葉遺跡
3. 観立遺跡
4. 狐塚遺跡
5. 出雲井古墳群
6. 神津嶽祭祀遺跡
7. 皿池遺跡
8. 河内寺跡
9. 水走氏館跡
10. 五条山古墳群
11. 客坊町古墳群
12. 市尻遺跡
13. 山畑古墳群
14. 山畑遺跡
15. 花草山古墳群
16. 五里山古墳群
17. 花園遺跡
18. 北鳥池遺跡
19. 五合田遺跡
20. 段上遺跡
21. 下六万寺遺跡
22. 縄手遺跡
23. 上六万寺遺跡
24. 船山遺跡
25. 桜井古墳群
26. 岩滝山古墳群
27. 往生院金堂跡
28. 玉串遺跡
29. コモ田遺跡
30. 半堂遺跡
31. 浄土寺谷古墳群
32. 池島東遺跡
33. 西代遺跡
34. 馬場川遺跡
35. 北屋敷遺跡
36. 貝花遺跡
37. 浄土寺跡
38. 西の口遺跡
39. 萩山古墳
40. 楽音寺遺跡
41. 楽音寺跡
42. 大竹西遺跡
43. 太田川遺跡
44. 心合寺跡
45. 大光寺山遺跡
46. 大竹遺跡
47. 高安古墳群
48. 薗光寺遺跡
49. 水越遺跡

A. 五条古墳
B. 瓢箪山古墳
C. えのき塚古墳
D. 大賀世古墳
E. 禿山古墳
F. 西の山古墳
G. 鏡塚古墳
H. 心合寺山古墳
I. 向山古墳
J. 向山瓦窯
K. 愛宕塚古墳

※この地図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「大阪東南部」(平成10年3月1日発行)、「信貴山」(平成10年11月1日発行)を使用したものである。
遺跡の範囲については、大阪府教育委員会「大阪府文化財分布図」(2001年3月発行)を参照した。

ただし、この点については、松田順一郎や阪田育功らの異論がある。松田は、現在の玉串川西側のボーリングデータを検討し、弥生時代に堆積した沖積頂部陸成層下部と考えられる層準に厚さ２～３ｍの砂礫層がしばしば挟まれることに注目し、現在の玉串川近辺に大和川の分流が北流していた可能性を指摘した（松田1998）。また阪田は、大和川水系の河道変動の過程を追究し、古墳時代中期～後期には付け替え以前の玉串川の流路が形成されていた可能性を指摘した（阪田1997）。なお、ここで想定されている流路の実態は現在のところほとんど明らかになっておらず、今後調査の機会があれば、堆積物を観察して流路変遷などについて検討する必要がある。

さらに、大竹西遺跡第３次調査で検出された縄文時代晩期から古墳時代中期にかけて流れていた河道については、堆積物の古流向などから、大和川の分流のひとつとする見解が出されている（藤岡1997、松田1998）。また、池島遺跡第11次調査における堆積物の砂礫鉱物組成から、恩智川左岸側において縄文時代後期～弥生時代の地形発達に大きな影響を与えたのは、旧大和川水系であるという見解も出されており（松田1994）、地区ごとに砕屑物の鉱物組成の層位的変化を検討する必要も出てきている。なお、福万寺Ⅰ期地区および池島Ⅰ期地区においては弥生時代の流路跡が複数検出されているが、当遺跡周辺の流路変遷に関する議論を深めるために、その整理を本書で試みることにしたい。

3. 歴史的環境

次に、当遺跡周辺での人間活動に関わる歴史的情報を簡単にまとめておきたい（図Ⅱ－４）。

当遺跡が海域であった縄文時代早期末から中期にかけての遺跡は、現在のところ当遺跡東方の扇状地上からは発見されていない。ただし、河内湾沿岸では、東大阪市鬼虎川遺跡（前期）、大阪市勝山遺跡（早期末～前期初頭）、宰相山遺跡（早期末～中期）、寝屋川市讃良川遺跡（中期）などでこの時期の遺構・遺物が見つかっており、今後周辺の調査によって発見される可能性がある。その際には、当遺跡で明らかになった古環境変遷と生業形態・集落変遷との対比が必要であろう。

当遺跡で出土した最古の遺物は、池島Ⅰ期地区の第15ｂ層から出土した縄文時代中期末の北白川Ｃ式土器である（概要ＸＸＩ[11]）。そして、その上の古土壌である第15－２ａ層（第５黒色泥層）、あるいはその上位の第15－１層からは縄文時代後期の遺物が出土している。この時期における周辺地域の遺跡としては、中期末～晩期の馬場川遺跡、後期の縄手遺跡、中期末～後期の段上遺跡があり、これらの遺跡を含む当遺跡東方の扇状地上に営まれた集落との関連が注目される。

縄文時代晩期には、河内湖周辺の低地に遺跡が増加する。特に、晩期における海水準・湖水準の低下とその直後の上昇に伴って、晩期末～弥生時代前期には河内湖南東岸付近では小規模貝塚がみられるようになる。この時期の貝塚は規模、継続期間、貝種構成などにおいて、それ以前の貝塚と異なっており、ウエットランドの環境変化に対応した食料獲得戦略の変化を反映するという見通しが出されている（松田・藤城・別所・三輪1997）。一方、当遺跡では弥生時代前期中葉の水田跡が検出されているが、これも河内湖沿岸部における弥生時代開始期の生業形態を明らかにする上で重要な資料である。

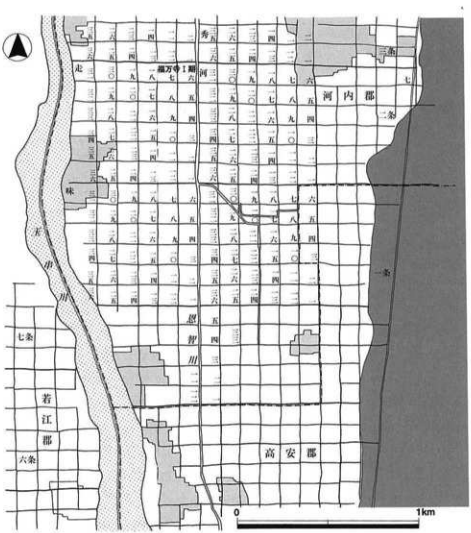
次に、当遺跡に隣接する弥生時代遺跡についてふれたい。まず、当遺跡の南東に隣接する大竹西遺跡からは弥生時代中期に属すると考えられる水田遺構面が３面検出された（高萩1991）。また前述のように、第３次調査では縄文時代晩期～古墳時代中期の河道が検出された。この河道は、弥生時代後期になると細粒の堆積物が堆積するようになるが、その段階で河道内に意図的に埋められた鉄剣（後期初頭）が出土している（西村・樋口1997）。また、後期の北島池遺跡も当遺跡の北東に位置している。このよ

うに、当遺跡周辺ではいくつかの遺跡が知られているが、詳細は不明な点が多い。これらを含む周辺遺跡に関する情報が増えれば、当遺跡で検出された水田遺構と合わせて、弥生時代の集落景観の復原を試みることも可能になろう。

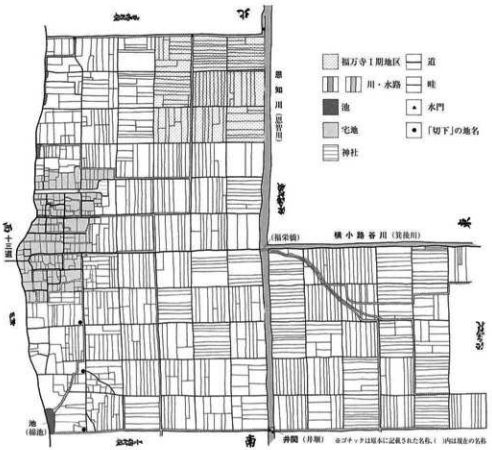
さて、当遺跡では古墳時代前期の遺構群や後期の集落跡が検出されている。出土遺物としては、前期では内行花文鏡と思われる鏡片を利用した懸垂鏡、画文帯神獣鏡片、後期では大量の滑石製玉類などがある。当遺跡の古墳時代の状況については、生駒山地西麓に築かれた古墳との関連を検討する必要が指摘されてきた。当遺跡東南の扇状地上には「楽音寺・大竹古墳群」があり、前期から後期までの首長墓系列が追える点で注目されている。特に心合寺山古墳については、近年史跡整備のための発掘調査が実施され、築造時期、墳丘形態、主体部の構造、副葬品など、詳しい内容が明らかになった（吉田編2001）。また、後期の群集墳としては、高安千塚、山畑、郡川、服部川などの古墳群が知られている。なお、当遺跡の古墳時代後期集落を「葬送儀礼専業集落」ととらえる見解も提示されており（森本1997）、その具体的な検証が必要となっている。

さて、当遺跡周辺に現在も遺存する条里型地割については、井上正雄（1921）によって条里プランの復原がなされて以来、「池島条里遺構」として注目されてきた。その条里プランを図Ⅱ－5に示す。ちなみに、福万寺Ⅰ期地区は河内郡字走四・五・六・七・八・九・十六・十七・十八ノ坪にあたる。

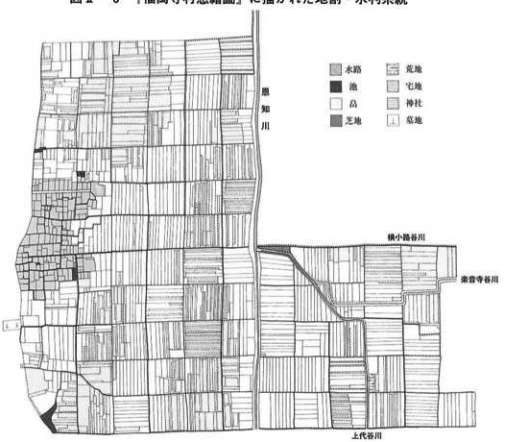
古代においては、当遺跡は「玉櫛庄」の範囲内であったと想定されている。この荘園は当初、摂関家の所領であったが、平等院創建とともに平等院へ施入され、平等院の維持管理に深く関与した荘園と考えられている。福万寺Ⅰ期地区において、表層条里型地割と一致する地割が施工されたのは10世紀であったことが判明しているが、これについては荘園開発と関連したものであっ



図Ⅱ－5　表層条里型地割と坪付関連地名



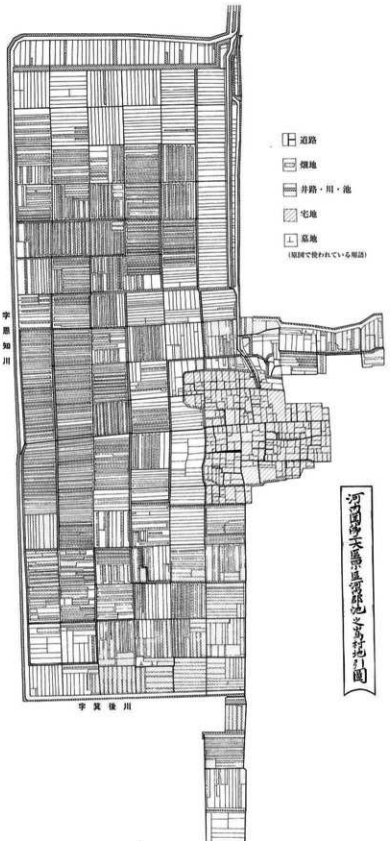
図Ⅱ－6　『福萬寺村惣繪圖』に描かれた地割・水利系統



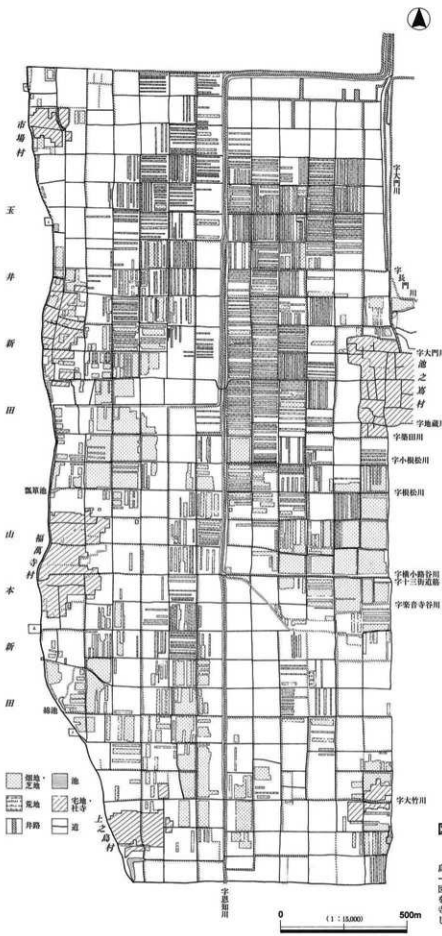
図Ⅱ－7　『福万寺村地引図』における地割と土地利用

た可能性が指摘されている（江浦1992）。また、恩智川は玉串川から取水した水路と生駒山地から流下する河川に関わって、人為的に整備された排水路である。恩智川が整備された時期については、条里型水田面の水利系統の変遷からみて、10世紀から11世紀末の間の時期であった可能性が指摘されている（井上1995）。

当遺跡では、中世の田畠が重層的に検出されているが、中世の水田跡は大竹西遺跡でも検出されている。また、八尾市立上之島小学校建設に伴って調査された福万寺遺跡では、13～14世紀の屋敷地（米田・徳谷1990）が検出されている。さらに、大和と河内を結ぶ十三街道が当遺跡の南側を通っているが、その北に接する位置に福万寺という寺院があったという伝承がある（井上1921など）。この福万寺は古代～中世前期ごろに存在した可能性があり、近世の絵図に記載がないことから、中世後期には廃絶していたと思われる。この寺については、福万寺Ⅰ期地区から出土した平安時代前半の瓦に注目して、その存続時期を推定しようとする研究もある（新倉2000）。さらに、福万寺町の集落内に位置する三十八神社の敷地は14世紀には「福万寺城」であったという伝承がある（井上1921）。これについては在地領主の居館が存在した可能性も考えておく必要があり、福万寺村の形成時期を考える上でも注意すべき問題といえる。また、



図Ⅱ－8 『池島村地引図』における地割と土地利用



図Ⅱ－9　1880年頃の土地利用

「市場村地引図」・「福万寺村地引図」・「上之島地引図」・「池島村地引図」をもとに作成。ベースマップは1961年大阪市作製1／3000地形図。川の名称は各地引図と荻田ほか（1973）を参照した。なお、箕後川については「福万寺村地引図」の記述に従い、「横小路谷川」とした。

池島の集落にも、「城の内」、「城が濁」、「北柵戸」、「外柵戸」、「大門」、「馬場」などの字名・畔名が残っており、「池島城」であったという説（荻田1985）や、集落の西・南縁を巡る水路を環濠とする説（枚岡市史編纂委員会1966）がある。ただし、この水路に関していえば、西方の水田の灌漑とともに、集落の排水を処理する機能も有していたと考えられる。いずれにせよ、当遺跡における耕作地のデータは、こうした情報とともに、中世の村落景観を考える上で重要な役割を果たすことが期待される。

近世・近代に関する史料としては、当遺跡周辺を描いた絵図・地引図が現存している。まず、享保19（1734）年に作成された『福萬寺村惣繪圖』は、模写が八尾市立歴史民俗資料館に保管されている（尾崎編2000、カラー図版４、図版２、図Ⅱ－６）。この絵図には、屋敷地、神社、溜池、水路、畦などが図示され、各坪の坪番号が記載されている。また最近、明治12・13（1879・80）年に作成された市場村、福万寺村、上之島村の地引図の所在が明らかになった。『堺縣河内國第二大區四小區河内郡市場村地引圖』（明治13年１月）、『堺縣河内國第二大區四小區河内郡福萬寺村地租改正地引繪圖』（明治12年11月）、『堺縣河内國第二大區四小區河内郡上之島村地引圖』（明治12年６月）の３枚である（カラー図版５、図Ⅱ－７、図版２・３）。また、池島地区を描いた地引図としては、『河内國第二大區四小區河内郡池之嶌村地引圖』の存在が知られている（荻田ほか1973、カラー図版６、図Ⅱ－８、図版２）。これについては、1951年に池島町自治会の所蔵となった際、「明治初年」作成と記載されたものの、作成時には年号が記されていない。この種の地引図は地租改正後に作成されたものであるため、この地引図についても他のものと同時期に作成されたと考えられる。これらの地引図には、宅地、墓地、畦、畠、水路などが表示されている。この記載をもとに土地利用図を作成した（図Ⅱ－９）が、前述のように、これは表層微地形を理解するのにも有効である[2]。

当遺跡の発掘調査では、縄文時代以降の各時期の情報が得られている。ただし、当遺跡の調査面積は広いものの、河内平野南東部という範囲でみれば、人間活動や地形形成のごく一部を明らかにしたに過ぎない。周辺遺跡と合わせて検討を進めることが、今後の課題として残されている。

註

1） この土器が出土した95-2調査区においては、調査段階に第10層の設定がなされていなかったため、概報では「第14ｂ層」と記載されている。

2） 以下、地引図については、『市場村地引図』、『福万寺村地引図』、『上之島村地引図』、『池島村地引図』と略称する。

参考文献

秋山浩三・朝田公年編2000「旧石器・縄文時代古環境の復原」『池島・福万寺遺跡』１（98-3・99-1調査区），㈱大阪府文化財調査研究センター，pp.148-186.

井上智博1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程－池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）の調査から－」『大阪文化財研究』第９号，㈶大阪府文化財調査研究センター，pp.29-54.

井上智博1999「島畠の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討－」『光陰如矢』，荻田昭次先生古稀記念論集刊行会，pp.193-200.

井上正雄1921『大阪府全志』巻四，pp.869-871，pp.874-878.（復刻版1985，清文堂出版）

江浦　洋1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ，㈶大阪文化財センター，pp.77-104.

荻田昭次1985『縄手の歴史散歩』『我が街わが農協』，縄手農業協同組合，pp.207-360.

尾崎良史編2000『特別展　絵図が語る八尾のかたち』，八尾市立歴史民俗資料館，66p.

梶山彦太郎・市原　実1972「大阪平野の発達史－^{14}C年代データからみた－」『地質学論集』第７号，日本地質学会，pp.101-112.

梶山彦太郎・市原　実1986『大阪平野のおいたち』，青木書店，138p.

河角龍典1999「池島・福万寺遺跡およびその周辺の地形」『研究調査報告』第２集，㈱大阪府文化財調査研究センター，pp.193-196.

河角龍典2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学』第42巻第１号，歴史地理学会，pp.1-15.

小山田宏一1989「87-2調査区の調査成果」『池島遺跡発掘調査概要』Ⅳ，大阪府教育委員会，pp.9-79.

阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』，和泉書院，pp.99-122.

高萩千秋1991「大竹西遺跡発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第24回)資料』，㈱大阪文化財センター，pp.25-36.

高橋　学1991「河内平野の地形環境分析Ⅰ－河内平野の環境復原に関する基礎的考察－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』89-1～６調査区の概要，㈱大阪文化財センター，pp.171-185.

高橋　学1995「河内平野の地形環境分析Ⅳ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』ＸⅠ，㈱大阪文化財センター，pp.71-80.

地学団体研究会関西支部編1999『大地のおいたち－神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類－』，築地書館，pp.149-194.

新倉　香2000「位置と環境」『池島・福万寺遺跡』１（98-3・99-1調査区），㈱大阪府文化財調査研究センター，pp.1-8.

西村公助・樋口　薫1997『大竹西遺跡第３次発掘調査－現地説明会資料－』，㈱八尾市文化財調査研究会，3p.

牧岡市史編纂委員会編1966『牧岡市史』第３巻　史料編（１），大阪府牧岡市役所，p.176.

藤岡達也1997「発掘現場での河川堆積物からみた先史時代の古環境と人間活動への影響－大阪府大竹西遺跡の旧玉串川を例として－」『歴史地理学』第39巻第５号，歴史地理学会，pp.19-32.

別所秀高1999「微細形態学の試行－その方法と考古遺跡への応用例－」『光陰如矢』，荻田昭次先生古稀記念論集刊行会，pp.147-158.

松田順一郎1994「池島遺跡第11次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1992年度』，㈱東大阪市文化財協会，pp.49-68.

松田順一郎1995「池島遺跡第12次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1993年度』，㈱東大阪市文化財協会，pp.23-30.

松田順一郎1998「弥生・古墳時代の沖積低地河川堆積物－大阪府大竹西遺跡の事例－」関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相－「実証」の地平－』，大明堂，pp.19-36.

松田順一郎1999「段上遺跡第８次・下六万寺遺跡第３次調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1998年度－』，㈱東大阪市文化財協会，pp.131-138.

松田順一郎・藤城　泰・別所秀高・三輪若葉1997「縄文時代晩期末の河内潟・河内湖における貝塚形成の変化」『世界古代湖会議　要旨集』，p.195.（ポスターセッション発表）

三輪若葉1997「池島遺跡第15次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1995年度－』，㈱東大阪市文化財協会，pp.5-8.

森本　徹1997「古墳時代葬送儀礼専業集落についての一考察」『大阪文化財研究』第12号，㈱大阪府文化財調査研究センター，pp.11-18.

吉田野乃編2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』，八尾市教育委員会，165p.

米田敏幸・徳谷尚子1990「福万寺遺跡－上之島３丁目22-1の調査－」，㈱八尾市文化財調査研究会，82p.

第Ⅲ章　遺構面の認識と標準層序

1. 層序整理の方針

当遺跡の発掘調査における地層観察の方法については、井上（1998）でふれている。ここで簡単に述べると、①粒度と堆積構造に着目して堆積環境の変化する部分で分ける堆積学的地層区分、②土壌とその母材の関係に着目する土壌層位学的観点、③連続する地層の粒度・構造が側方にどのような変化を示すのか（層相の同時異相）を把握する観点、という３つを組み合わせて、遺跡全体をカバーする層序（標準層序）を確立するというものである。ここでは、その問題点について論じることにする。

まず、「土壌化」という概念である。沖積低地では頻繁に氾濫堆積物をはじめとする水成堆積物が供給され、水成層とその上部を母材とする土壌のセットが重層的に確認されることがある。当遺跡では古土壌をａ層、その母材となった水成層をｂ層と呼称している。ａ層は土壌学でいうＡ層に対応する（運積土における土層のとらえ方については加藤〔1978〕を参照）。Ａ層の定義としては、起源の岩石や堆積物の組織を失ったもので、①腐植化した有機物の集積、②耕うん、放牧、または同様の攪乱の結果生じた性質、③表層攪乱作用の結果生じたＢ・Ｃ層とは異なる形状、のうちの１つ以上の特徴を持つものと定義されている（日本ペドロジー学会編1997）。縄文時代から弥生時代にみられる「黒色泥層」は①の特徴を有し、古代以降の水田作土層は②の特徴が顕著である。攪乱[1)]については、異種土塊、特に下層土のものが上の層に混じりこんだり、ラミナ構造が乱されている状況などに注目して認識する（加藤1992）。攪乱の度合いについて加藤芳朗（1997）は、大小多数の異質ブロックがある場合を「攪乱度弱」、ブロックが小さくかつ少なくなった場合を「攪乱度中」、ブロックがほとんどなく、均質な土層となったものを「攪乱度強」とする。これについては分類基準に曖昧な部分もあるが、第３層など、多数のブロックが明瞭に認められ、耕作期間が短かったと推定される作土層を評価する際に利用した。なお、第７層のような泥質の堆積物では、保存状態がよい部分でも攪乱の状況が肉眼では認識しにくく、土壌とその母材という関係が現地では明瞭でないものもある。こうした事例については今後、土壌微細形態の観察をおこない、攪乱の状況などを検討する必要がある。

遺構面については、さきに述べた土壌と母材の関係に対応して、古土壌の上面・下面をそれぞれ、ａ面・ｂ面としている（遺構検出面のとらえ方については趙〔1995〕も参照）。また、調査の進展により、ひとつのａ層が細分されることが判明したり、ｂ層と考えていたものを個別の番号で表示したほうがよいと判断した場合は、例えば第３－１ａ層、３－２ａ層などと枝番号をふって表示する。そして、前述した第７層のようにシルト～粘土が耕作された場合、攪乱の状況などがはっきりせず作土と下層土の区別が難しいことがあるが、これについては第７ａ層とはせず、単に第７層と呼称することにする。なお、第14－１層のように沼沢地の環境で堆積した地層など、古土壌とはいえない場合でも、上面で足跡をはじめとする人間活動の痕跡が確認されることもある。このような地層についてはｂ層として扱うのではなく、個別の番号を付した。さらに、第16層以下については海成層の評価をはじめとして、堆積環境の変化が問題となるため、堆積物の粒度・構造に注目して番号を付した。ここで注意しなければならないのは、上位の水田作土（ａ層）に対する耕作によって、下位のａ層が削られて消滅してしまった場合である。この場合、上位の作土層下面を精査すると、層序が良好に保存されていれば下位の古土壌下面で

検出されたはずの遺構も同時に検出されることになる。その例は第10ｂ面検出時にみられるが、遺構の整理にあたっては、出土遺物とともに遺構埋土を構成する土がどの地層に起源するものかを検討する必要がある。

次に、水田跡の時期推定の方法をまとめておきたい。加藤（1979）では、土壌の時期決定方法について、母材の中に含まれていた物体が土壌に取りこまれる場合と、土壌化の過程やそれと並行して起こる母材の緩やかな供給の過程で物体が土壌中に取りこまれる場合の両者があると整理している。また、Waters（1992）でも堆積・土壌化の進行過程と遺物の取り込まれ方に関する検討がなされている。こうした見方は水田作土中の遺物の性格を考える上で参考になる。さらに、作土層の上に作土層が直接重なっている場合には、下の作土層の上部は多少とも削られているため、本来下の作土層中にあった土器片が上の作土層中に含まれることがあるだけでなく、次のような技術的問題が生じる。すなわち、粒度が上下で極端に違わなければ、作土層と作土層の境の凹凸を厳密にわけることが難しいことも多く、上の作土層を掘削中に、掘りすぎて下の作土中の土器片を取り上げてしまったり、下の作土上面検出時に上の作土層の小さな落ち込みを認識できず、その落ち込み（上の作土）中に含まれている土器片を下の作土層の遺物として取り上げてしまう危険がある。こうした点をふまえた上で、水田跡の時期推定には以下のような資料を使用するのが望ましい。すなわち、①水田を構成する水路内に遺棄された土器や大畦畔に埋納された土器、②作土層下面で検出される土器埋納遺構などから出土した土器、③作土上面が明瞭に検出された場合、その直上に貼りつくような形で出土した土器である。それらと合わせて、作土中の土器片や前後の地層から出土した土器片も考慮して、水田跡の時期を検討するようにしている。

また、組み立てられた標準層序にも問題点が存在する。特に、層序対比の対象範囲が広がると、例えば福万寺Ⅰ期地区北西隅では第15－２ａ層から宮滝式土器が出土したのに対し、池島Ⅰ期地区では第14－２ａ層最下部から宮滝式土器が出土し、第15－１層から元住吉山Ⅰ式土器が出土するなど、層相が酷似し、層の前後関係などからみても対比できる地層において、遺物からみると場所により若干時期の異なる場合がある。これについては、その地層の段階の微地形や前後の層の堆積過程をみて、それらの地点が微地形や堆積過程においてどのように違っているのかを検討する必要がある。

なお、残されたデータをみると、調査区内でも層序に矛盾の存在するものがあった。具体的な問題点についてはその都度記述するが、代表的な誤りとして、水田作土層が連続して堆積している部分において、分層に際して混乱が起きた場合と、地層の堆積後に生じた酸化鉄や二酸化マンガンの集積による色の変化を層界と誤認した場合がある。後者は「偽畦畔（転写畦畔）」（赤木1989）の問題とも関わる。これらについては写真資料を用いて検証をおこない、基本的な点については整理できたと考えている。

今回の報告にあたっては、福万寺Ⅰ期地区を南北方向（Ｙ＝－34,160ライン）、東西方向（Ｘ＝－150,080ライン）に横切った断面を作成した（図Ⅲ－２）。また、各層の粒度や構造を表現するために、７本の柱状図も作成した（図Ⅲ－１）。粒度については地質学で標準とされるWentworthによる区分[2]を使用するべきであるが、現場で作成された断面図の記載には明瞭な基準があるとはいえないため、今回はその区分に合わせながら、やや幅をもたせて表示した。いずれにせよ、これによって全体の堆積状況の概略を知ることができる。ただし、これらの断面は必ずしも地形に合わせて切った断面ではないため、微地形の形成過程がうまく表現できない。したがって、その問題を論じるために、部分的な断面をいくつか作成し、各面の記述の中で提示している。その際、堆積構造については、近接写真を拡大して観察した上で、原図の記載と合わせて検討して描きこんだ。堆積構造の理解にあたっては、公文・立石編

(1998)、フリッツ・ムーア（原田訳，1999）などを参考にした。また、「洪水砂」という言葉については、当センターの発掘調査においても定義が曖昧な形で使用されることが多い。単に砂礫層の呼称として使用したり、河道を充填する堆積物に対しても用いる担当者もいる。本書ではこうした地層について、粒度、構造、分布などの特徴をとらえた後、その性格について解釈する際に次のような用語を使用する。すなわち、「逆グレーディング構造」（増田・伊勢屋1985）が認められるなど、人工堤防・自然堤防を溢流して堆積したと考えられるものを「氾濫堆積物」、水田域内に舌状に分布し、トラフ型斜交層理が認められるなど、人工堤防や自然堤防の破堤によってもたらされたと考えられるものを「破堤堆積物」とする。そして、流路を埋積する砂礫に対しては、「洪水砂」という用語は使用せず、「流路堆積物」という用語を用いる。ただし例えば、同一の地層においても、ある部分は流路堆積物で、別の部分は氾濫堆積物などということはよくあることであるし、判断に困るような状況もしばしば認められる。堆積学の知識に乏しいという担当者の能力の問題もあり、本書では、堆積営力の解釈についてはごく初歩的なレベルにとどめ、無理な解釈は避けるようにした。

2. 福万寺Ⅰ期地区の標準層序

以上のことをふまえて、各層準について順番に説明したい。なお、粒度・色調は場所によって異なるため、各調査区の記載に目を通した上で、やや幅をもたせて記載した。また、地層の堆積状況について詳細な説明が必要な場合は、調査成果の記述の中でふれることにする。

第１ａ層は、中砂～細礫混じりシルト（7.5Y5/2灰オリーブ～2.5Y6/2灰黄）で、現代作土に関連する酸化鉄および二酸化マンガンの斑紋が著しい。ただし、この層自体も撹乱されていると考えられ、水田作土層であった時期があると思われる。また、福万寺Ⅰ期地区西部では、その下に砂混じりシルト（7.5YR 5/3にぶい褐）が部分的に残存し、その中に第１ｂ層の砂のブロックを含む部分もある。第１ｂ面検出土坑群の埋土はこの土壌であり、これ自身も作土層と考えられる。**第１ｂ層**は下部が平行葉理のみられる極細砂～シルト（2.5Y3/2黒褐～7.5Y4/1灰）、上部が平行葉理やプラナー型などの斜交層理のみられる中砂～粗砂（2.5Y5/4黄褐～7/2灰黄）で、上方粗粒化しており、氾濫堆積物と考えられる。

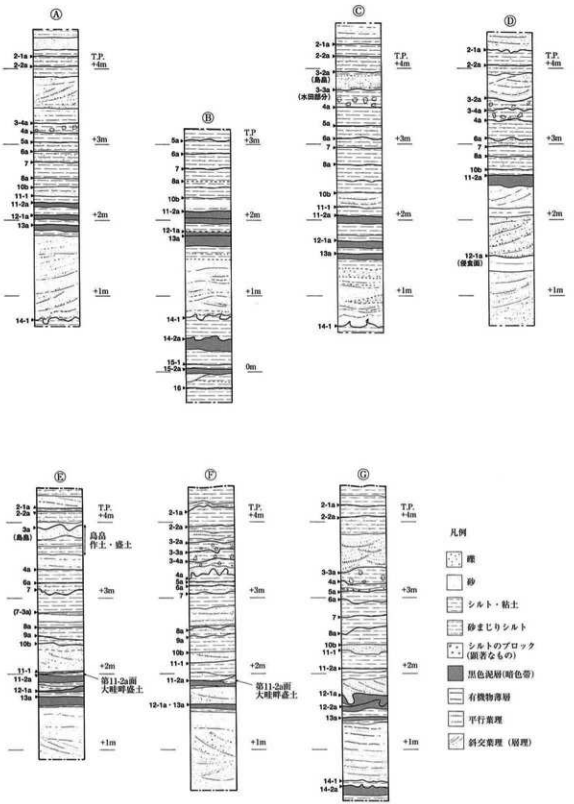
第２－１ａ層は中砂～粗砂混じりシルト（5Y5/1灰～7.5Y4/1灰）で酸化鉄の斑紋（糸根状～うん管状）が多く認められる。特に島畠の部分では酸化鉄・二酸化マンガンの斑紋が著しく認められる。砂とシルトの混じり方からみて、撹乱された水田作土層と考えられる。また、**第２－２ａ層**は粗砂～細礫混じりシルト（色調は第２－１ａ層に類似）で撹乱されており、酸化鉄・二酸化マンガンの斑紋（糸根状～うん管状）が多く認められる。この層の上には第２－１ａ層が直接のっている。そして、**第２ｂ層**は砂礫層（10YR6/6明黄褐～7.5Y5/2灰オリーブ）で、シルトの薄層を挟む部分もある。当地区を南西－北東方向に横切るラインを中心に厚く堆積しており、その中心部ではトラフ型斜交層理が認められる。ただし、当地区北西部では層厚が薄く、島畠間に部分的に遺存するにすぎない。なお、90-3調査区や93-1調査区などでは、第２ｂ層の中位に砂とシルトブロックが入り混じった部分が認められている。これは第２ｂ層が少なくとも二度の洪水によって堆積したことを示すが、特に90-3調査区のものについては人為的に撹乱された可能性が高い（図版10－４）。また、93-1調査区のものは、ブロックが横方向に連なっていること、下位のシルト層の上面がほぼ水平であることからみて、侵食によって生じたブロックが再堆積したと考えられる（図版10－５）。なお、第２ｂ層の砂礫が噴砂として上がり、第２－２面検出時に確認された地点があるが、これについては後述したい。

第３層は、シルトのブロックと砂が混じる攪乱された地層（2.5Y6/3にぶい黄～5BG5/1青灰）で、こうした地層が島畠間に累重している。ただし、その攪乱の度合いは低いと考えられ、それぞれが比較的短期間の水田作土層と考えられる。島畠間の地層の数は３層の部分が多いが、４層ある部分や１層、２層しかない部分も存在する。なお、当地区北西部の島畠間では最上部に１層多く存在し、島畠がかなり埋積された段階で第２ｂ層が堆積したことが判明した。そこでこの部分にのみ認められる層を**第３－１ａ層**とし、全体で連続して認められる最も上の層を**第３－２ａ層**とした。そして、その下にさらに地層が存在する場合は**第３－３ａ層、第３－４ａ層**とした。また、第３ｂ層は斜交層理がみられる砂礫層（2.5Y7/4浅黄～6/6明黄褐）で、下層を削って生じたシルトのブロックが含まれる部分もある。この層は当地区西半部に厚く堆積し、東半部では残存していない。

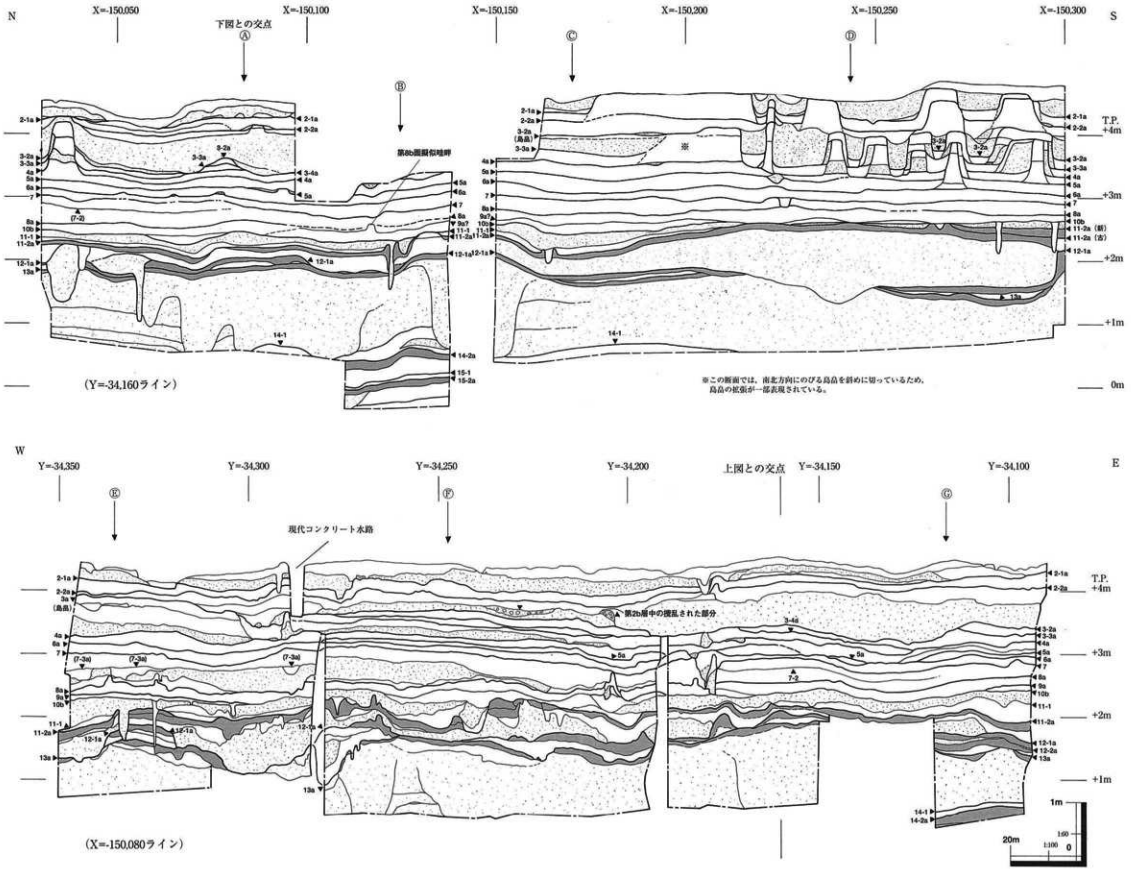
第４ａ層は細砂～中砂混じりシルト（５BG4/1暗青灰～7.5Y4/1灰）である。**第５ａ層**は中砂～細礫混じりシルト（2.5GY4/1暗オリーブ灰～7.5Y4/2灰オリーブ）で、当地区の東半部にのみ残存する。**第６ａ層**は粗砂～中礫混じりシルト（5B4/1暗青灰～5Y5/2灰オリーブ）である。それぞれが攪乱された水田作土層であると考えられるが、大半の地点では間層がなく、連続して堆積している。このため、第４ａ～６ａ層の細分は、局所的に認められる間層（砂・シルト）とともに、粒度の違いや島畠・坪境畦畔の立ち上がりなどに着目しておこなった。なお、詳細は後述するが、第６ａ層の母材となった**第６ｂ層**は、２回にわたって堆積した氾濫・破堤堆積物である。

第７層はシルト～粘土（5B4/1暗青灰～5Y4/1灰）である。第６ｂ層の粗砂が若干残存し、上面が覆われた部分もあるが、その部分でも上部が若干暗色を呈する程度で、肉眼では攪乱などの特徴はとらえられていない。また、第６ａ層段階の耕作により上部が削られた部分も多いと考えられ、後述する第６ｂ面の島畠の下に残存した田面との比高から、削られた厚さは２～４cm程度と推定される。なお、当地区北東部では、坪境水路の埋没過程を目安にして第７層が２層に細分されたため、必要な場合は**第７－１層、第７－２層**と呼び分けた。また、**第７ｂ層**は当地区の西半部に厚く堆積している。下部はシルト～粘土質シルト（10BG4/1暗青灰～10Y3/1オリーブ黒）、上部は葉理のみられる細砂～粗砂（2.5Y5/4黄褐～7.5Y5/2灰オリーブ）で上方粗粒化しており、氾濫堆積物と考えられる。ただし、上部は第８ａ面畦畔１の西側にのみ認められ、東半部には代わりに第７層が厚く堆積する。なお、第７ｂ層直上に部分的ながら、５Y5/2灰オリーブシルトブロック混じり細砂が存在していた。詳しくは後述するが、この層は攪乱されており、その下面には馬鍬の歯の痕跡が残されていた。この層については、**第７－３ａ層**と呼称したい。

第８ａ層は粗砂混じりシルト～シルト（５G4/1暗緑灰～2.5GY2/1オリーブ黒）である。当地区西半部では明瞭に認識できるものの、東半部ではあまり明瞭ではない部分もあり、調査段階で第７層との区別ができなかった部分も存在した。また、**第９ａ層**は細砂～粗砂混じりシルト（5B4/1暗青灰～7.5Y5/1灰）で、90-1・90-2・90-3調査区などで残存していた。上面で水路跡が検出されたことからみて、水田が営まれていたと考えられる。なお、当地区東半部で第８ａ層が明確に認識できなかった部分では、中砂～粗砂混じりシルト（10Y6/1灰）の上面で、第８ｂ面に帰属すると考えられる擬似畦畔を検出した。この層は第８ａ層と比べて灰白色を呈していた。93-1調査区では第８ａ層とこの層の上部において、また93-2調査区（Ａ区）では第７層下部からこの層の上部の間で、変形構造が認められる部分もあった。こうした点は池島Ⅰ期地区の状況に類似しており、この層が第９ａ層に対比される可能性を示している。そして**第10ａ層**は、調査時には注意されていなかったが、90-3調査区などの断面写真を検討した結果、局



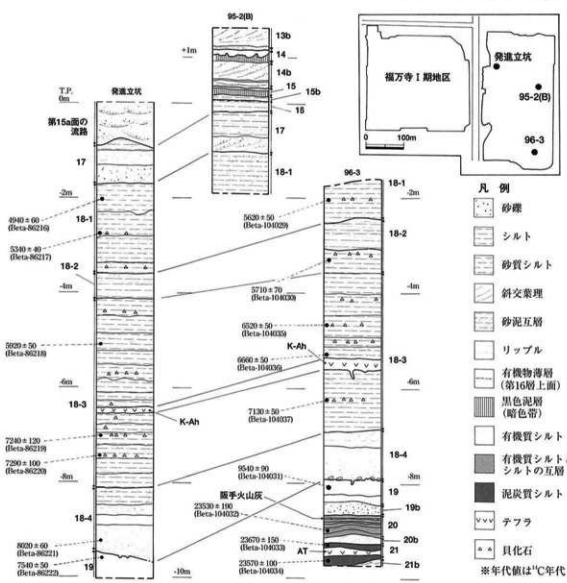
図Ⅲ－1　福万寺Ⅰ期地区断面柱状図



図Ⅲ－2　福万寺Ⅰ期地区断面模式図

所的に残存していたと考えるに至ったものである（図版22－7・8）。古墳時代の遺構埋土をみると、第9a層とは異なった土が埋土の中に混入しているものも少なくないため、本来存在していた第10a層が第8a・第9a層段階の耕作によって削られてしまったと考えられる。第10b面の精査時に第9b・第10b面に帰属する遺構が同時に検出されたのは、このためである。なお、**第10b層**は砂礫層（5Y6/4オリーブ黄～2.5GY5/1オリーブ灰）で、氾濫・破堤堆積物の地点と流路堆積物の地点がある。

第11－1層はシルト～粘土層（5BG4/1暗青灰）で、上面で多くの足跡が検出されている。**第11－2a層**はシルト～粘土（N4/0灰～5B3/1暗青灰）で有機物を多く含み、場所によっては砂礫が混じる部分もある。いわゆる「第1黒色泥層」である。なお、当地区南東隅では、その上にシルト（5B4/1暗青灰～10GY4/1暗緑灰）が堆積し、「第1黒色泥層」が細分される。この部分では、上層を第11－2a層（上）、下層を第11－2a層（下）とした。また、**第11b層**は、上部はシルト～粘土（5BG5/1～10BG5/1青灰）であり、これが第1黒色泥層の母材となっている部分が多い。そして、下部は砂礫（7.5Y6/3オリーブ黄～N6/0灰）で、当地区東半部ではトラフ型斜交層理が確認できた。なお、下部の砂礫が厚く堆積した部分は、上部のシルト～粘土が薄く、砂礫が第11－2a層と直接接している部分もあった。そうした部分におけ



図Ⅲ－3　第13b～第21b層柱状図

る第11－２ａ層には砂礫が多く混じる。

第12－１ａ層はシルト～粘土（5BG4/1暗緑灰～10YR4/1褐灰）で、有機物を含み、細砂が混じる部分もある。いわゆる「第２黒色泥層」である。当地区北東隅の92-6調査区では、砂礫が間層として挟まることで第12ａ層が２層にわかれる部分があり、**第12－１ａ層・第12－２ａ層**とした。詳しくは後述するが、この状況は池島Ⅰ期地区との層序対比や、弥生時代中期水田面の評価に際して重要な意味を持っている。

第13ａ層は砂混じりシルト～粘土（2.5Y3/1黒褐～N5/0灰）で、有機物を多く含んでいる。いわゆる「第３黒色泥層」である。その下の**第13ｂ層**は従来、「弥生時代前期洪水砂層」と呼ばれてきたが、これは流路堆積物と氾濫・破堤堆積物の集合体であると考えられる。その堆積過程は弥生時代の地形形成に密接に関わるので、後に詳しく論じる。なお89-2調査区では、第13ｂ層上部において噴砂が確認されている。これは第13ｂ層中で取束していたようである。

第14－１層は植物遺体を多く含むシルト～粘土（2.5Y4/1黄灰）で、ヒシの種実が多く含まれる。その上面では人・シカ・イノシシ・大型の鳥類の足跡が多数検出された。また、この層の上面から第13ｂ層最下部には変形構造が顕著に認められるが、これについては松田順一郎が地震動によって生じたとする見解を発表している（Matsuda2000）。**第14－２ａ層**はシルト（2.5YR2/1赤黒～10YR1.7/1黒）で、腐植を多く含む。いわゆる「第４黒色泥層」である。池島Ⅰ期地区南半部では、この層の上面で弥生時代前期中葉の水田跡が検出されているが、その部分と粒度を比較すると、当地区のほうが泥質である。**第14ｂ層**は大部分がシルト（10G6/1緑灰）であるが、一部砂礫が堆積している部分もある。**第15－２ａ層**はシルト～粘土（上部5YR1.7/1黒、下部N5/0灰）で、腐植を多く含む。いわゆる「第５黒色泥層」である。その直上にはやや色の薄いシルト～粘土（層厚３cm程度）が堆積した部分があり、これを**第15－１層**とした。その下には、抽水植物の茎が横位ないし斜めになって含まれるシルト～粘土（上部5G5/1緑灰～2.5GY7/1明オリーブ灰、下部5Y5/2灰オリーブ）の**第15ｂ層**が堆積する。また、その下には有機物層が数枚集積する部分（厚さ１～２cm）があり、その下には第15ｂ層と同じように抽水植物の茎が入り、色調も第15ｂ層の状況に類似するシルト～粘土が堆積している。この有機物層以下を**第16層**とした。

次に、立坑掘削に伴う立会で観察したのみであるが、当遺跡の形成過程を論じる上で必要な、第17層から第21層について説明する。この層準に関しては秋山・朝田編（2000）で詳しく検討されている。この層序番号は、その成果および粒度分析結果（第Ⅴ章２－４）にもとづいて設定した。

第17層は上部が砂泥互層、下部が斜交葉理のみられる砂礫層であり、河川性の堆積物と考えられる。**第18層**は縄文海進期の海成層で、以下のように細分する。第18－１層上部はシルト質細砂で貝化石の破片が散在する。第18－１層下部もシルト質細砂であり、上部に比べて砂の量は多い。また、貝化石が帯状に集中する部分が認められる。なお第18－１層では、砂分にしめる中砂～極粗砂の量が上位に向かって増加する傾向が確認されている。第18－２層は上部と下部に細分する。上部は細砂～極細砂を主体とする砂層と泥層が互層をなし、リップルが明瞭に認められる。下部は細砂～極細砂質シルトで、生物擾乱が激しいが、リップルが不明瞭ながら観察できる。第18－３層は細砂～極細砂質シルトで、砂と泥の比率は半々に近く、リップルが観察される部分もある。また、貝化石が帯状に集中する部分が数ヶ所認められる。なお、この層の下半部にＫ－Ａｈ（鬼界アカホヤ火山灰）が挟まれる。第18－４層は細砂～極細砂を主体とする砂層で、礫もわずかに含まれるが、中砂以上の粒子は上位に向かって減少する。生痕化石は多く認められるものの、貝化石は含まれない。なお、この層の最下部には第19層のブロックを

多く含む部分がある。

海成層の下は、砂礫層を挟んで特徴的な堆積物が存在していることに注目して番号をつけた。**第19層**は中礫～中砂混じりシルトで、有機物を多く含む。この下には淘汰の悪い砂礫層である**第19ｂ層**が堆積している。**第20－１層**上部は腐植質シルトとシルトの薄層が互層をなし、中位に阪手火山灰を挟む。第20－１層下部は腐植を含まないシルトである。また、**第20－２層**も上部が腐植質シルトとシルトの薄層が互層をなし、下部は腐植を含まないシルトとなる。その下には中砂～極細砂の**第20ｂ層**が堆積する。**第21層**上部は泥炭とシルトの薄層が互層をなしており、下部は泥炭～泥炭質シルトである。両者の間にはＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）が挟まれる。また、その下には葉理のみられる中砂～極細砂が堆積する（**第21ｂ層**）。さらにその下にはシルトが堆積する（**第22層**）が、掘削限界のため詳細は不明である。

註

1）概要報告では、これを「撹拌」と呼称していたが、本書では「攪乱」に統一する。

2）具体的には64～4㎜を中礫、4～2㎜を細礫、2～1㎜を極粗砂、1～1/2㎜を粗砂、1/2～1/4㎜を中砂、1/4～1/8㎜を細砂、1/8～1/16㎜を極細砂、1/16～1/256㎜をシルト、1/256㎜以下を粘土とする。なお、シルトと粘土を包括した名称が泥である。粒度は現地において、粒径見本と対照して記載している調査区もある。

参考文献

赤木克視1989「『偽遺構』考」『大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集』，㈶大阪文化財センター，pp.31-42.

井上智博1998「遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』ＸＸＩ，㈶大阪府文化財調査研究センター，pp.8-11.

加藤芳朗1978「土壌生成因子,母材」『土壌調査法―野外研究と土壌図作成のための』，博友社，pp.70-91.

加藤芳朗1979「土壌の生いたち」『新潟県理科実験講習，高校（地学），資料』，新潟県立教育センター，pp.1-20.

加藤芳朗1992「遺跡埋没水田の認定に関する土壌学的問題」『ペドロジスト』第36巻第２号，ペドロジスト懇談会，pp.167-174.

加藤芳朗1997「水田土壌の観察　資料」『奈良国立文化財研究所専門研修水田遺構調査課程資料』６p.

公文富士夫・立石雅昭編1998『新版砕屑物の研究法』地学双書29，地学団体研究会，399p.

趙　哲済1995「本書で用いる層序学的堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ，㈶大阪市文化財協会，pp.41-44.

日本ペドロジー学会編1997『土壌調査ハンドブック　改訂版』，博友社，165p.

ウイリアムＪ．フリッツ・ジョニーＮ．ムーア（原田憲一訳）1999『層序学と堆積学の基礎』，愛智出版，386p.

増田富士雄・伊勢屋ふじ子1988"逆グレーディング構造"：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『細粒砕屑性堆積物とその堆積機構』堆積学研究会報22／23，堆積学研究会，pp.108-116.

Matsuda, J. 2000. Seismic deformation structures of the post－2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology* 135, pp.99-116.

Waters, M. 1992. *Principles of Geoarchaeology : a North American perspective*. The University of Arizona Press, pp.93-95.

第Ⅳ章　遺構・遺物

1. 遺構・遺物整理の前提

遺構の整理にあたっては、前章で説明した遺構面の認識方法をもとに、次のような方針を立てた。すなわち、各調査区の遺構面の対応関係を標準層序に合わせて整理することと、各遺構面における微地形を等高線図によって表示することである。

調査段階では、各調査区において独自に遺構面が設定されていた。それらの対応関係については調査段階から検討が繰り返されており、その成果をふまえて今回再検討をおこなった。その結果、いくつかの点で修正が必要となった。それについては後述するが、ここではまず、標準層序番号を用いて遺構面を設定し、それらと各調査区の遺構面の対応関係を表Ⅳ－１に示しておきたい。

また、当遺跡では広い範囲を調査しているため、遺構配置と微地形との関係を比較的明瞭に把握することができる。水田内での水回りを復原する場合、隣り合う水田区画の高低を矢印で表示する方法もあるが、今回は等高線図によって微起伏を表示し、微地形と遺構分布との関係を検討することにした。調査においては主要な遺構面で航空測量による平面図を作成しており、それをつなぎ合わせて各面の等高線図を作ることは可能である。しかし、作成された等高線図を解析する際には、次のような問題点を考慮する必要がある。まず、砂層で覆われて検出が容易であった面であっても、埋没時に侵食されていたり、埋没後の圧密等によって変形や不等沈下する場合もある。また、粒度があまり違わない地層が累重している場合には、細かな凹凸を掘りわけることは難しく、掘り過ぎた部分や、掘り足らない部分が存在することも少なくない。さらに、航空測量図、あるいは平板・レベルを使用して作成した測量図の精度についても考慮しなければならない。このような問題に対処するために、等高線で表現される起伏が

表Ⅳ－１　福万寺Ⅰ期地区遺構面対応表

遺構面	89－1	89－2	89－3	90－1	90－2 (H2)	90－2 (H3)	90－2 (H4)	90－3 (A)	90－3 (B)	90－3 (C)	90－5	90－6	92－6	92－7	93－1	93－2 (A)	93－2 (B)	93－2 (C)	93－2 (D)
1b	2	2	2－1	3	3			3				3							
2－1a	3	4	3	4	5	4	5	4	4	4	4	4	3	2	2	3	3	2	2
2－2a	4	5	4	5	6	6	6	5	5	5	5		4	3	3	4	4	3	3
3－1a				6															
3－2a	5	6	5	7	7	7－1	7－1	6－1	6－1	6	6		6	5	4－1	5	5	4	(4)
3－3a						7－2							7						
3－4a						7－3	7－3				5				4－II		6	4	4
4a	6	7	6	9	8	8	8	7	7	7－1	7		8	6	5－1	6	7	(5)	(5)
5a										7－2		6		7 7	5－II	7	(8)	(6)	6
6a		9		10	9	9	9	8	8	8	8		9	8－9	6	(8)	9	7	7
7	7	10	7	11	10	10	10	9	9	9			10	10	7	9	10	8	8
7－2							11			9－2									
7－3a																			
7b				12	11	11		10	10				11	11					
8a	8	11	9	14	12	12	12	11	11	11		7	12	12	8			9	9
8b			10													10	11	10	10
9a				16－1		13－0		11_2	12－1										
10b	9	12	11－1	16－2	13	13－1	13－1	12	12－2	12	10	8	13	13	9	11	12	11	11
11－1				17			14－0											12	12
11－2a	10	13	12－2	18	14	14	14－1	13	13	13	11	9－1	14	15	10－1	12	13	13	13
11－2a（下）												9－2			10－II				
11b				19	15	15	15								10－2	13	14	14	14
12－1a	12	14	14－1	20	16	16	16	14	14	14	12		15	17	11－1	14	15	15	15
12b				21											11－2				
13a	13	15	14－2	22	17	17	17	15	15	15	13	11	16	18	12－1	15	16	16	16
13b				23											12－2		17	17	17
14－2a					18			16	16	16－1	14	12	18	19	13	16	18	18	18
15a					19			17			15	13			14	17	19	19	

生じた原因を、断面の検討によって明らかにしたい。例えば、破堤堆積物は上に凸の断面形を呈することが多いため、堆積後にその部分は微高地となり、堆積物と堆積後の起伏が対応する。また、田面の埋没の際に侵食によって形成された凹地は、埋没以前の微地形を考える際には除外する必要がある。このように起伏の特徴とその形成要因が明らかになれば、その中から意味のある起伏を抽出し、それと遺構配置の関係を検討することができる。なお、等高線については5cm間隔が望ましいが、今回は残された記録の制約から10cm間隔で表現した。しかし、それでも堆積状況と対比できるような起伏を示すことはできた。ただし、a層上面が上位のa層に関わる耕作によって削られている場合、上層の耕作の影響によって凹凸が生じており、意味のある起伏を読み取ることはできない。したがって、そのような場合は等高線図を作成しなかった。

また、遺物については、第1a層から第14－2a面まで、近世から弥生時代（一部縄文土器も含む）の遺物を掲載している。どのように器種分類し、時期を判断[1]したかは、本章の末尾の掲載土器一覧で確認していただきたい。なお、各遺物の時期について、陶磁器に関しては堺市立埋蔵文化財センター森村健一氏に、瓦に関しては当センター駒井正明に御教示いただいた。その他の参考文献については本章末尾に掲載している。

註

1）時期についてはある程度の幅をもたせて考える必要もあり、そのくらいと判断したということである。

2. 第1a面～第9a面－条里型水田面の調査－

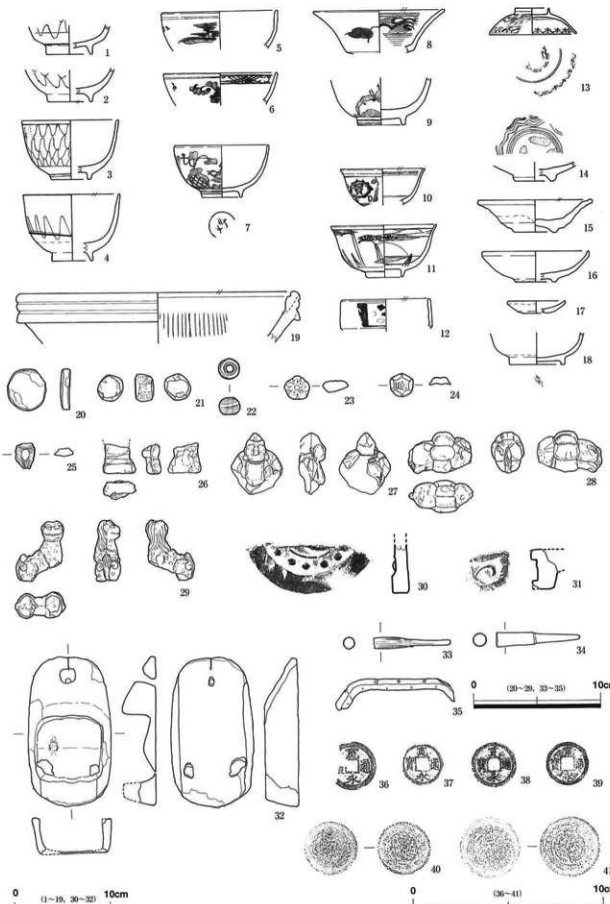
第1a面　第1a面は、盛土および現代作土を重機によって掘削して検出した。この面は現代の耕作、攪乱の影響が大きく、坪境や島畠の痕跡が検出できたのみである。

この面の作土層と考えられる第1a層からは、以下のような遺物が出土した（図Ⅳ－1：1～41）。磁器杯（10）・碗（1～7・9・11）・蓋碗蓋（13）・鉢（8）・重ね鉢（12）、陶器小皿（17）・反端皿（15）・丸皿（16）・碗（14・18）・擂鉢（19）、瓦質円板（20・21）、ミニチュア土製品（23～29）、軒丸瓦（30）、軒平瓦（31）、玉（22）、木製下駄（32）、金属製キセル（33・34）、金属製品（35）、銭貨（36～41）である。

磁器は17世紀後半～18世紀の波佐見焼染付が多く、19世紀の瀬戸焼染付も出土している。（13）は伊万里窯系で、19世紀のものである。（12）は伊万里焼の五彩である。陶器は17～18世紀の唐津窯系、肥前窯系のものである。（19）は堺擂鉢である。ミニチュア土製品は遊び道具の泥面子、泥人形である。銭貨は寛永通寶が4枚出土している。このように、第1a層から出土した遺物の時期は17～19世紀である。

第1b面　第1a層を除去した面が第1b面である。ここからは、第1a層を埋土とした遺構や、シルトブロックが多く混じる土で埋まった遺構が検出された（図Ⅳ－2・3）。検出遺構は当地区西側に集中しているが、これは第1b層の残りがよかった範囲に対応している。これらは第1a層の耕作に関連する井戸・土坑・溝等であるが、埋土の状況などからみて、検出された遺構には時期幅があると考えられる。ここでは新しいものとして井戸を、比較的古いものとして土坑群を取り上げる。

井戸は図Ⅳ－5に示すように、4類に分類される。図Ⅳ－6・7はその代表例を示したものである。Ⅰ類は井戸枠として桶と方形木枠を組み合わせるもので、図Ⅳ－5では最下段に桶が描かれているが、方形木枠で終わるものもある。Ⅱ類は桶を連結して井戸枠とするものであり、Ⅲ類は竹筒と桶を組み合



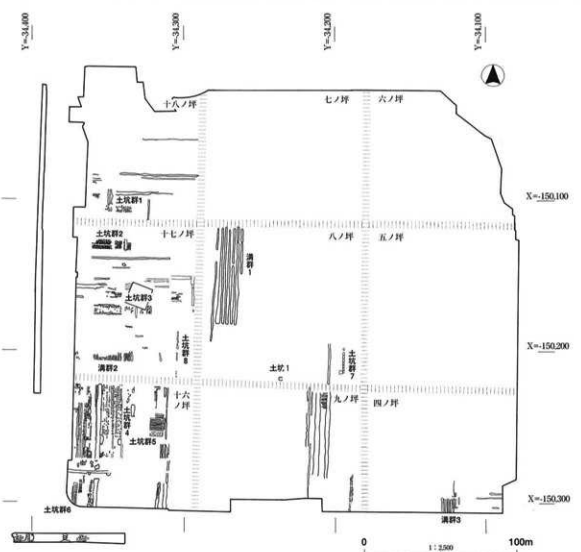
図Ⅳ－1　第1ａ層出土遺物

わせた井戸枠を有するものである。Ⅰ～Ⅲ類には、井戸枠の最上段に瓦を１段～数段積み上げるものが多い。また、Ⅳ類は素掘りのものである。図Ⅳ－７に示した井戸37では、底を抜いた約２つに瓦管を差し込んで埋めていたが、これは水を上げるための工夫と考えられる。なお、井戸には「はねつるべ」が伴っていたと考えられるが、その支柱の痕跡と考えられるピットは井戸30（府発Ⅰ，pp.44-47）を除いて検出されていない。これは、支柱を掘えるための穴があまり大きなものではなかったことと、井戸の機能していた面が検出面よりも上であることに関係すると考えられる。なお、第２－１ａ面の精査時に確認された井戸もあるが、福万寺Ⅰ期地区においては、第１ｂ層や第２－１ａ層によって埋没した状態で検出されたものはない。したがって、それらは少なくとも第１ｂ面までは立ち上がっていたが、廃絶時に上部が破壊されたことにより、下層に至って輪郭が明瞭に確認されたものと考えられる。

表Ⅳ－２　第１ｂ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
土坑群1	90-3(A)　方形土坑群1
土坑群2	90-3(A)　方形土坑群2
土坑群3	90-1　—
土坑群4	90-1　—
土坑群5	90-1　土坑167
土坑群6	92-7　—
土坑群7	89-2　土坑群
土坑群8	90-1　—
溝群1	89-1　畝状遺構1～6
溝群2	90-1　—
溝群3	93-1　溝18～23 90-6　溝1～6
土坑1	89-2　土坑2

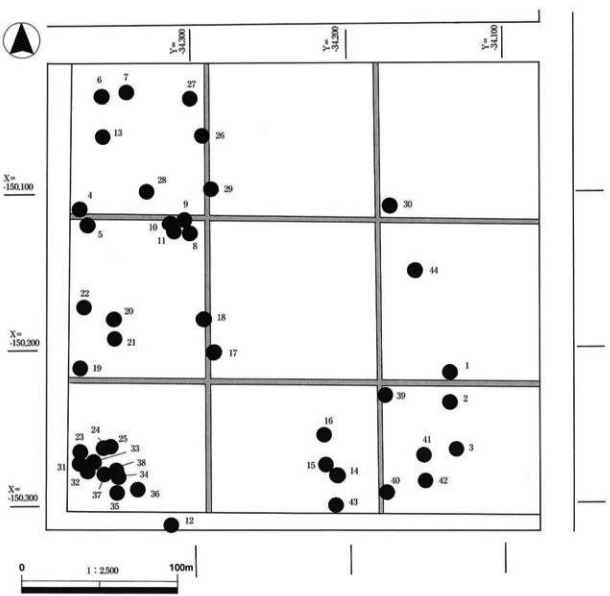
図Ⅳ－３には井戸の分布を示した。これらは１時期に掘削されたものではないが、各坪にまんべんなく存在するのではなく、集中する部分が認められる。まず、当地区南西部に集中する部分が認めら



図Ⅳ－２　第１ｂ面平面図（井戸を除く）

れるが、これは弥生時代の流路の位置におおむね対応している。この部分では、下層の流路堆積物が地下水を多く含んでおり、水が得やすかったと考えられる。また、大局的にみて、井戸の分布が当地区の西部と南東部に集中することも注意される。この分布は、図Ⅱ－３で示した微高地ＡとＣの末端に対応しており、微地形に対応した土地利用や水回りと関連する可能性がある。

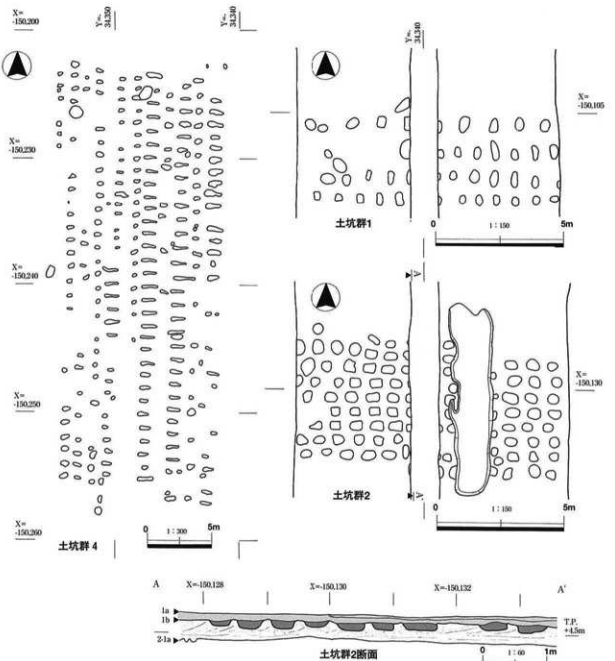
土坑群は当地区西部で検出された（図Ⅳ－４、図版５－４～７）。それらの特徴は、第１ｂ層の中程まで掘削され、第１ａ層下部（7.5YR5/3にぶい褐細砂～中砂混じりシルト）に第１ｂ層の砂のブロックが若干混じった土で充填されていることにある。このことは、この遺構が第１ａ層の初期段階の耕作に伴って形成されたことを示している。土坑群は、整然と並んだ長辺１ｍ前後の土坑によって構成されている。また、溝群３も断面の様子が土坑群と類似する。これらはすべて、第１ｂ層が撹乱を受けずに良好に残存している場所でのみ検出されているが、同様な遺構が他の部分にも本来存在し、第１ａ面の耕作によって消滅してしまった可能性もある。これらの遺構の性格については断定できないが、ひとつひとつの土坑が何らかの作物に対応するようにも見えるため、畠作に関連する遺構の可能性もある。



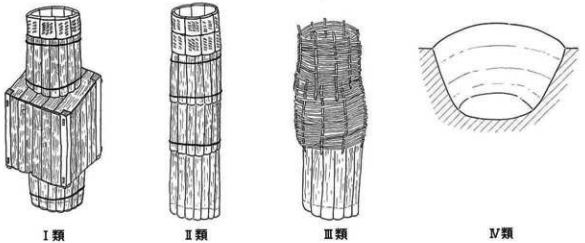
図Ⅳ－３　第１ｂ面井戸分布図

また、十六ノ坪で検出された土坑群５は、第２－２ａ層下面まで達する土坑により構成されていた。その埋土はシルトブロックと第１ｂ層の砂が入り混じったもので（図版５－７）、一気に埋め戻したものと考えられる。この遺構の性格については、何らかの目的で第２－１ａ・２－２ａ層の砂混じりシルトを採取した痕跡と推定される。

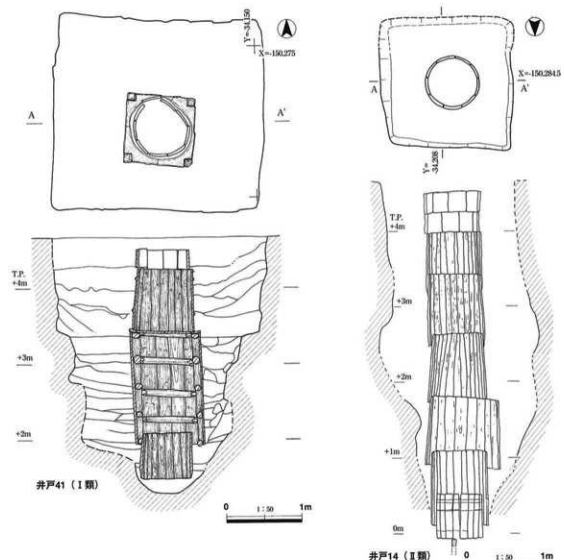
なお最後に、遺物との関係で大きな変更がある土坑１についてふれておく。この遺構は第１ｂ面で検出されたが、第１ｂ面段階の掘削の際に完掘できていなかったようであり、第２－２ａ面の写真（図版８－１）でその存在が確認できた。概要Ⅰ（p.54）では、第２－２ｂ面検出の土坑とそこから出土したとされる磁器の写真が並べて掲載されているが、台帳で確認したところ、磁器はこの遺構から40ｍも離



図Ⅳ－４　第１ｂ面土坑群



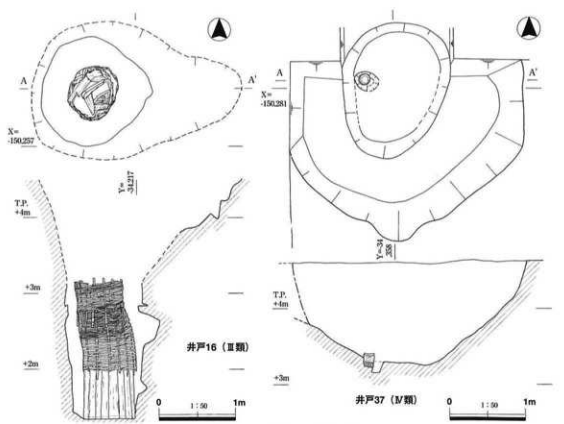
図Ⅳ－5　井戸形態模式図



図Ⅳ－6　第1ｂ面井戸①

表Ⅳ－3　第1ｂ面井戸一覧

番号	調査区	調査時の遺構名称		現状構造（上から）	備考	掲載報告書	概要ⅩⅡ掲載番号
1	Dトレ	SE01	II	瓦1段積4段	内部より瓦出土	府試Ⅰ	1
2		SE02	II	桶4			2
3		SE03	II	桶1	抜取痕あり。下部を93-1調査区で調査（井戸7）		3
4	Bトレ	SE201	I	方形枠1桶1		府試Ⅱ	4
5		SE202	I	方形枠二重1桶1	方形枠内外二重		5
6	86-1	井戸1001	I	方形枠1	側板半部竹。枠上に板並べる。内部より瓦	府発Ⅲ	6
7		井戸1002	I	方形枠1。内部より瓦出土			7
8	86-2	井戸101	IV	漆	水漏		8
9		井戸102	IV	漆			9
10		井戸103	IV	漆			10
11		井戸104	IV ?	木桶	笹方2段。径5cmの木・竹を打ち込む。		11
12	86-4	井戸101	II	瓦2段以下不明	瓦落ち込む		12
13	88-1	井戸101	I	瓦1方形枠1桶1		府発Ⅳ	13
14	89-3	井戸1	II	瓦2桶6	90・4調査区井戸1として下部を調査	概要Ⅰ	14
15		井戸2			廃絶時に破壊		
16		井戸3	III	竹籠2桶1			15
17	90-1(B)	井戸4	I	瓦1方形枠1桶1		概要Ⅳ/ⅩⅡ	16
18		井戸6	I	方形枠1桶1			17
19	90-1(C)	井戸9	I	方形枠1		概要ⅩⅡ	18
20		井戸11	I	方形枠1	桶抜取痕あり		19
21		井戸12	I	方形枠1	桶抜取痕あり		20
22		井戸13	II	桶4(方形枠1)	方形枠確認後桶のみで再構築（当初は1類）		21
23	90-1(D)	井戸17	I	方形枠1			22
24		井戸19	I	方形枠1	井戸25によって破壊される。		23
25		井戸25	I	方形枠1桶1	井戸19を壊して設置。桶抜取痕あり		24
26	90-2(A)	井戸1	I	方形枠1桶2		概要Ⅲ	25
27		井戸2	IV	漆			26
28	90-3(A)	井戸1	I	方形枠		概要Ⅱ	27
29		井戸4	I	桶1方形枠1桶1	現代水路により上部破壊	概要未掲載	
30	90-3(C)	井戸	I	瓦1桶1方形枠1桶3小桶1	府教委ECトレンチSE201に同じ	府発Ⅰ・概要ⅩⅠ	29
31	92-7	井戸1	II	桶2	上部は抜き取られる。井戸瓦あり	概要ⅩⅣ	30
32		井戸2	I	方形枠1	桶2の抜取痕あり		31
33		井戸3	I	桶2方形枠1桶1	井戸瓦・竹集あり		32
34		井戸4	I	方形枠1桶2	抜取痕あり		33
35		土坑1	IV	漆			
36		土坑3	IV	横倒した瓦管1			
37		土坑5	IV	瓦管を柄杓の中に差し込む			
38		土坑6	IV	漆			
39	93-1(A)	井戸1	II ?		廃絶時に井戸枠抜き取られる	概要ⅩⅤ	34
40	93-1(B)	井戸2	II	桶3			35
41		井戸3	I	瓦1桶1方形枠1桶1			36
42		井戸4	I	桶2方形枠1			37
43		井戸5	I	瓦2方形枠1			38
44	93-2(B)	井戸1	I	桶1方形枠1桶1	内部に井戸瓦落ち込む	概要ⅩⅥ	39



図Ⅳ－7　第1ｂ面井戸②

れた位置から出土したことが判明した。その位置は土坑１の周辺にあたるため、この磁器（図Ⅳ－９：22）は土坑１埋土に含まれていた可能性が高い。

次に第１ｂ面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－８・９）。

（１～５）は井戸44から出土したものである。磁器蓋（３）、碗（２）、陶器擂鉢（４）、硯（５）等である。磁器は18世紀代の波佐見焼染付である。硯（５）の石材は高鳴石で、外面以外に黒色物質が塗布されており、凹みは砥石としての使用痕かもしれない。（１）は井戸枠瓦である。井戸31からは磁器碗（６）、漆器椀（７）等が出土した。（６）は波佐見焼染付で18世紀中頃後半のものである。（７）は外面に黒漆、内面に朱漆が塗られている。井戸29からは磁器碗（８）が出土した。17世紀後半～18世紀前半の唐津系灰釉陶器である。井戸25からは、磁器蓋碗蓋（９）、皿（10）、砥石（11）、鉄釘（12）等が出土した。（９）は伊万里窯系、（10）は波佐見焼染付で、どちらも18世紀代である。井戸26からは土師器皿（13）が出土した。17世紀ぐらいのものと考えられる。井戸33からは、陶器蓋（15）、ミニチュア土製品（14）等が出土した。（15）は唐津窯系灰釉の茶入れの蓋であるが、木や骨で作られた蓋が多いため、出土することは少ないものらしい。16世紀末～17世紀のもので、（14）の土人形が18～19世紀のものと考えられるので、遺構の時期は示さない。井戸17からは木製箸（16）が出土した。井戸18からは木製下駄（17）が出土した。井戸34からは金属製簪（18）が出土した。金メッキで耳かきがつき、18世紀前半くらいのものと思われる。また、（19）・（20）の木製柄杓と（21）の瓦質土管は、前述のように井戸37の底面に設置されていたものである。時期は不明である。なお、（22）は肥前系黒釉徳利で、前述のように土坑１から出土したと考えられる。19世紀代のものである。

このように、第１ａ層中や第１ｂ面検出遺構の出土遺物は、時期にばらつきがある。このうちの最新遺物の時期や第１ｂ層・第２－１ａ層出土遺物の時期を勘案すれば、第１ａ層の耕作時期は19世紀以降と考えられる。

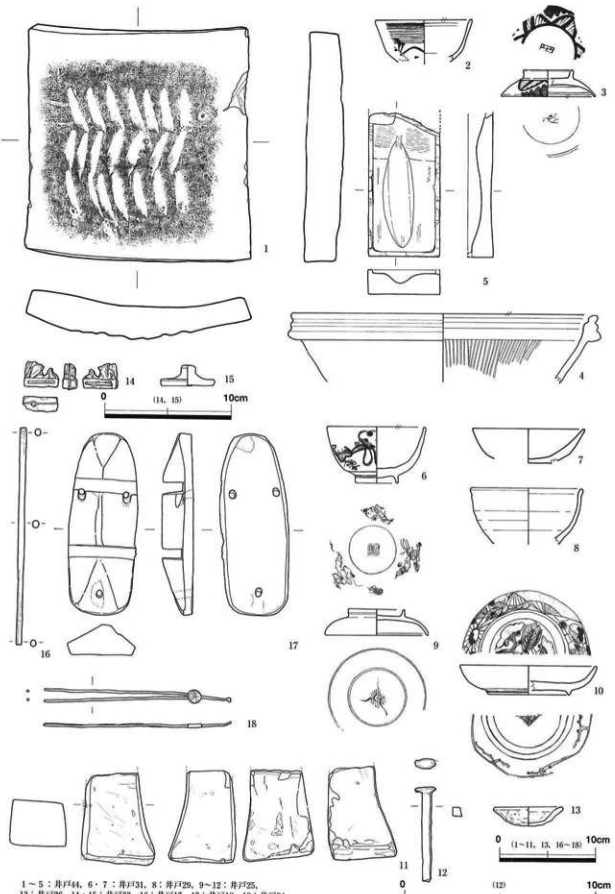
第１ｂ層　泥濘堆積物である第１ｂ層からは、図Ⅳ－10に示した遺物が出土した。磁器碗（４）、重ね鉢（３）、陶器端反皿（６）、碗（１）、鉢（２）、乗燭灯明皿（５）、土師器皿（７・８）、羽釜（９）、木製横櫛（10）等である。

磁器は伊万里窯系染付（３）、波佐見焼染付（４）で、いずれも18世紀のものである。陶器は瀬戸・美濃窯系（１）、美濃窯系（６）、唐津窯系（２）、備前焼（５）とさまざまで、時期も16世紀中頃～18世紀と幅がある。（１）は黄釉天目、（２）は灰釉である。土師器皿は16～17世紀ごろ、土師器羽釜は15世紀と思われる。このように、第１ｂ層から出土した土器は18世紀までのものである。

第２－１ａ面　この面は第１ｂ層を除去して検出した。遺存状況については、第１ｂ層が厚く残存していた当地区西部と南東部ではよかったが、他の部分では第１ａ層段階の耕作の影響で悪かった。なお、90-2調査区においては第２－１ａ層が２層に細分されているが、平面図では第１ｂ面に覆われた面を対応させた。このため、90-2（Ｈ３）調査区については、第４面が第２－１ａ面に対応する。

遺存状況がよかった十六ノ坪、十八ノ坪、四ノ坪においては、レベルはそれぞれT.P.+4.1～4.4m、3.9～4.3m、4.2～4.4mであり、全体として平坦であることがわかる（図Ⅳ－11）。

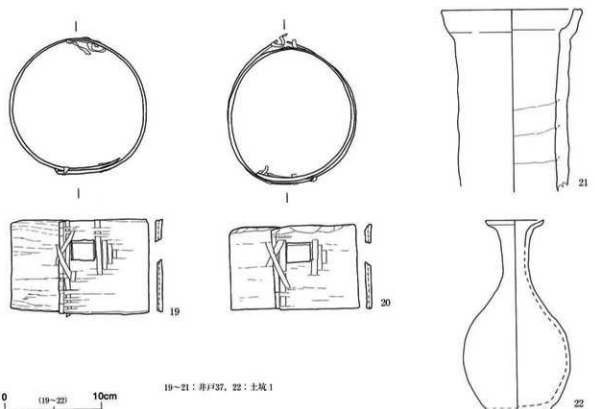
検出した遺構としては水路、畦畔、島畠等がある。まず坪境では、六・七ノ坪、五・八ノ坪、四・九ノ坪間を南北に貫く水路１が検出された（図版７－４）。この水路の東側は坪境畦畔によって画されていたが、西側は島畠16、島畠13、小畦畔によって画されていた。この水路１に関連する遺構として、九ノ坪北東隅では水口が、また四ノ坪北西隅では大畦畔に埋設された木樋１が検出された（図版７－６）。木



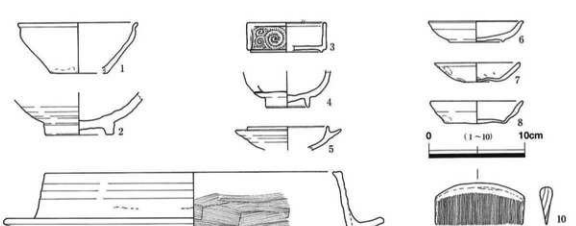
1～5：井戸44，6・7：井戸31，8：井戸29，9～12：井戸25，
13：井戸26，14・15：井戸33，16：井戸17，17：井戸18，18：井戸34

図Ⅳ－8　第1ｂ面遺構出土遺物①

樋１は板材を組み合わせたものである。また、七・十八ノ坪、八・十七ノ坪、九・十六ノ坪間の坪境は、現代のコンクリート水路によって破壊されていた。その他の坪境では大畦畔が検出されたが、このうち、七・八ノ坪間のものには水口が２ヶ所認められた。なお90-1調査区では、Ｂ地区とＤ地区の間で十六・十七ノ坪間坪境の畦畔が数mずれて検出されたと報告されている（概要ＸⅡ，pp.37-38）。このうち、Ｂ地区に関しては概要Ⅳ（p.21）に断面図が掲載されているが、この断面の解釈には大きな問題があり、これが遺構検出に影響を与えたと考えられる。すなわち、第２－１ａ面の坪境畦畔は、第２－２ａ面坪境の南側にある大畦畔が踏襲されたと想定されている。これは、第１ｂ層に対比される「３－２層」が堆積時の構造を保持していると判断し、それを除去した段階の段差を第２－１ａ面に帰属すると考えた



図Ⅳ－９　第１ｂ面遺構出土遺物②



図Ⅳ－10　第１ｂ層出土遺物

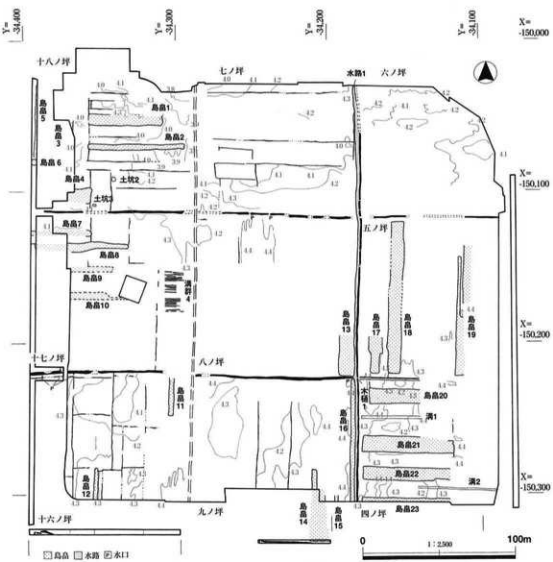
表Ⅳ－4　第２－１ａ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畑1	90-2(H2)　島畑1
島畑2	90-2(H2)　島畑2
島畑3	90－1　島畑1
島畑4	90-1　島畑5
島畑5	Fトレンチ島畑
島畑6	Fトレンチ島畑
島畑7	Fトレンチ島畑
島畑8	90-1　島畑2
島畑9	90-1　—
島畑10	90-1　島畑49
島畑11	90-1　島畑6
島畑12	92-7　島畑1
島畑13	89-2　島畑3
	93-1　島畑6
	93-2(C)　島畑18
島畑14	89-3　島畑3
	93-1　島畑28
島畑15	93-1　島畑27
島畑16	93-1　島畑7

遺構番号	概要における遺構番号
島畑17	93-1　島畑1
	93-2(C)　島畑17
島畑18	90-3(C)　島畑4
	93-1　島畑2
	93-2(B)　島畑4
	93-2(C)　島畑16
島畑19	87-2　島畑204
	88-2　島畑403
島畑20	93-1　島畑4
島畑21	93-1　島畑5
島畑22	93-1　島畑25
島畑23	93-1　島畑26
水路1	90-2(H4)　溝132
	90-3(C)　坪境3
木植1	93-1　木植1
溝群4	90-1　畝群
土坑2	90-3(A)　水湿め状遺構1
土坑3	87-3　土坑201
溝1	93-1　—
溝2	93-1　溝26

ものである。確かに、X＝－150,220地点付近には段差が存在するが、写真を確認したところ、「３－２層」と記載された砂層にはシルトブロックが多く混じっており、人為的攪乱を受けた可能性が高いことが判明した。この段差は、第２－１ａ面埋没後の人為的攪乱によって形成されたと推定される。なお、Ｄ地区で検出された坪境畦畔の延長部分は平坦であるが、人為的攪乱を受けた「３－２層」はこの部分にも存在しているので、第２－１ａ面の坪境畦畔は削られてしまった可能性が高い。

その他の畦畔は、第１ｂ層が厚く堆

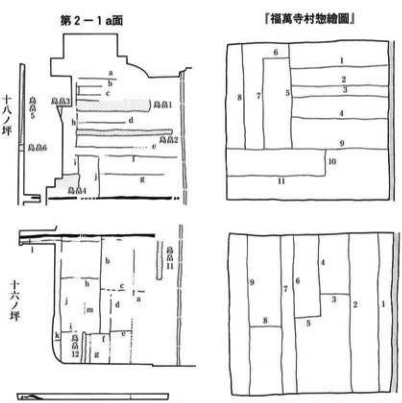


図Ⅳ－11　第２－１ａ面平面図

積していた十六・十八ノ坪や七ノ坪の一部で良好に検出された。その配置状況は後述することにし、ここでは水回りに関係する畦畔について説明する。まず、十六・十七ノ坪間坪境畦畔の南側で検出された東西方向の畦畔は、坪境畦畔に平行してのびており、幅３ｍ程度の細長い区画を形成していた。この区画の中は南北方向の畦畔で細分されていた。また、四・五ノ坪間でも大畦畔の南側に小畦畔が平行して存在しており、同様の細長い区画が存在していたが、この区画の西端には木樋１があり、水路１からこの区画に導水していたと考えられる。このような細長い区画内は田面の他の部分とレベル差がないため、稲が植えられていた可能性が高いものの、導水時には坪内に水を回すための水路としての役割も有していたと推定される。このような細長い水田区画は、第３－２ａ面や第４ａ面でも検出されており、坪内の水回りに関係した畦畔配置の工夫と考えられる。

島畠は、当地区南東部にあたる四ノ坪、五ノ坪、八ノ坪東端、九ノ坪東部、そして当地区西部にあたる十六ノ坪の一部、十七ノ坪北半、十八ノ坪において、計24基検出された。前者の範囲で検出されたものは高さが20cm程度であったが、後者の範囲のものは５cm程度と低かった。

その他の主要遺構としては、土坑２・３、溝１・２、溝群４があげられる。これらはすべて第１ｂ層によって埋没していた。十八ノ坪で検出された土坑２・３は溜井と考えられる。さらに、四ノ坪の溝１・２は深さが５cm程度であるが、坪内の水回りの補助的役割を果たしたものか、地割に関わるものの可能性がある。なお、十七ノ坪で検出された溝群４に調査が不十分で不確定要素もあるが、畝間の溝の可能性が考えられる。その場合、溝群４の西側で南北方向にのびる小畦畔が検出されており、この畦畔と八・十七ノ坪間坪境に挟まれた部分が畠として利用されていたと推定される。ただし、この畠が常畠であったかどうかは疑問であり、周囲の田面とレベル差がないことからすれば、田畠輪換（宮本1994）によって、水田が畠に切り替えられた段階で埋没した可能性も考えられる。

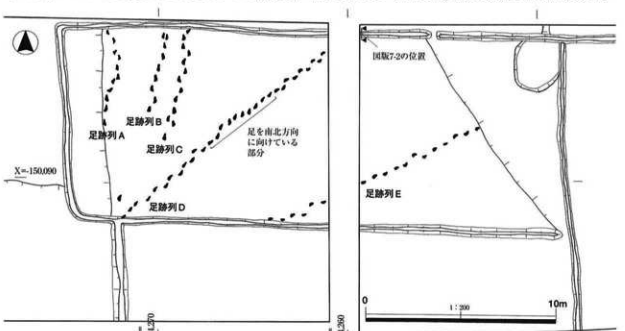


図Ⅳ－12　第２－１ａ面と『福萬寺村惣繪圖』の比較

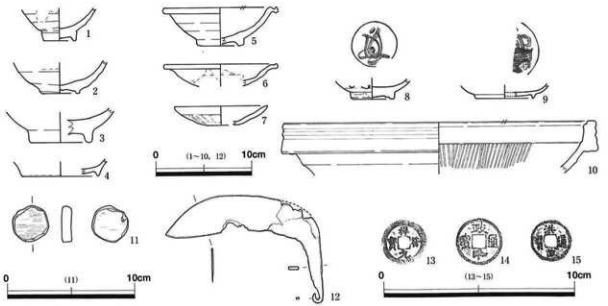
遺構配置で注目されるのは、『福萬寺村惣繪圖』との比較である（図Ⅳ－12）。この問題については、遺構配置の全容がほぼ判明した十六ノ坪、十八ノ坪を中心に検討されたことがある（井上1995）が、遺構の認識に若干の変更があるため、ここで再検討したい。まず十八ノ坪の北側では、畦畔ｈを境に地割の方向が変化している。すなわち、その東側は東西方向で、西側は島畠３・５からみて南北方向と思われる。そして、島畠６は東西方向にのびる可能性が高く、その北端と畦畔ｅをつないだ線の南側は、間に南北方向の畦畔ｉ・ｊがあるものの、基本的に東西方向の地割と考えられる。こうした

点は絵図にみられる地割の特徴と一致する。さらに細かい部分をみると、畦畔ｅ・ｄ・ｃが絵図の９・４・３に対応し、島畠１・２はこれらの畦畔で区画された地割内の中央に造成されていた可能性が考えられる。また、絵図の２は畦畔ａないしｂに、絵図の10は畦畔ｊの北半に対応する可能性がある。一方、十六ノ坪では畦畔ｂ・ｆ・島畠12を結ぶクランク状の区画線の存在が注意される。これは絵図の４・５・６の南半を結ぶ区画線に対応すると考えられる。そして、絵図の２・３が畦畔ａ・ｃ、７が畦畔ｊに対応し、畦畔１のあり方からみて、絵図の９に対応する畦畔が調査区外に存在すると予想される。なお、絵図の６の北半に対応する畦畔は検出されていないが、誤認の不安があるため破線で示したｍが正しいとすれば、これが６北半に対応する可能性も考えられる。このように、これらの坪においては、遺構配置と『福萬寺村惣絵圖』に示された地割は完全には一致しないものの、共通点が認められる。その他の坪に関しては、四ノ坪では島畠および第１ｂ層で埋没した溝が検出されているが、東半では遺構が検出されておらず、十分な比較ができない。また、七ノ坪は基本的に南北方向の地割と考えられるが、遺構の遺存状況が悪く、本来存在した畦畔の一部しか検出されていない可能性が高いため、詳細な検討はできない。

また、この面からは足跡が多数検出されている。ただし、第１ｂ層の構造が乱された部分では第１ａ層の段階で踏みこまれた足跡（特にウシのもの）も存在すると考えられる。図Ⅳ－13には、七ノ坪で検出された人の足跡列を示した。これらは第１ｂ層で埋まっており、第２－１ａ面埋没直前につけられたと考えられるもので、歩行状態が明確に認識できる。特に、足跡列Ｄ（図版７－３・５）は全体として北東から南西に向かって歩いているが、足を南北方向に向けて歩いた部分が一部存在する。足の向きと進行方向から考えて、この部分は足を交差させて歩いたと考えられるが、その動きから何かをまたいで歩いた状況が推定できる。つまり、この田面には稲が植わっていたが、丈がまだ低く、またいで歩けたと想像される。この点に注目すれば、第２－１ａ面が埋没したのは初夏であったという推定も可能になる。江浦　洋（1992ａ）は、この点と水害関連史料を合わせて検討し、第２－１ａ面は享和２（1802）年の洪水によって埋没したと考えた。この推定は、前述した第１ｂ層出土遺物の時期とも矛盾しない。



図Ⅳ－13　足跡列Ａ～Ｅ



図Ⅳ－14　第２－１ａ層出土遺物

第２－１ａ層から出土した遺物を、図Ⅳ－14に示した。中国製磁器（３・４・８・９）、陶器溝縁皿（５・６）・杯（１）・碗（２）・擂鉢（10）、土師器皿（７）、瓦質円板（11）、鉄鎌（12）、銭貨（13～15）等である。

中国製磁器は、龍泉窯系（３）、景徳鎮窯系（４・９）、漳州焼（８）である。15世紀前半～17世紀初めのものである。陶器は唐津窯系（２・５・６）、肥前系（１）があり、（10）は堺産である。陶磁器の時期としては17～18世紀のものが多い。瓦質円板は面子に使ったためか、周縁を擦っている。銭貨は（13）が北宋銭（祥符元寶）、（14）が北宋銭（政和通寶）、（15）が明銭（洪武通寶）である。

以上のような遺物のあり方と第２－２ａ層出土遺物の時期、さらには第１ｂ層の時期に関する推定を勘案すると、第２－１ａ層の耕作時期は18世紀代と考えられる。

第２－２ａ面　第２－１ａ層を除去することによって検出した面である。第２－２ａ層の上には第２－１ａ層が直接のっているため、第２－１ａ面の耕作による攪乱で本来の第２－２ａ層上面は削られてしまっており、第２－２ａ層自体が消滅してしまった部分も少なくなかった。なお、第２－１ａ層を除去した段階で第２ｂ層の頭（第２－２ｂ面）が検出された範囲では、帯状にのびる砂礫の盛り上がりが検出された部分もあった。これは第２－２ａ面に存在した島畠の芯であったと推定されるため、それによって島畠の位置を復原した（図Ⅳ－15）。

遺構面の対比に関しては、当センターの調査範囲では変更はないが、府教委87-3調査区と同Ｂトレンチの間で変更が必要となった。従来の考え方では、87-3調査区の第４遺構面とＢトレンチの第２遺構面が対応するとされていた。しかし、前者がT.P.＋4.0m前後であるのに対し、後者はT.P.＋4.2m前後と食い違っている。しかも、後者については厚い砂層に覆われているが、その砂の上には、第１ｂ面土坑群と酷似する遺構が断面で確認できる。これらのことからみて、後者は第２－１ａ面に対応すると考えられる。また、87-3調査区では第３遺構面という面が設定されたが、部分的に残存した砂層の頭で遺構検出をおこなったため、「遺構面としての認識が混乱しており、誤認の部分が多い」と報告されている（府発Ⅳ，pp.94-95）。また、Ｂトレンチ第３遺構面（T.P.＋4.0m前後）では島畠が検出されているが、写真をみると島畠の芯の砂が露出した状態で検出されたようである。位置関係からみて、この島畠は87-3調査

区第３遺構面で砂の高まりとして表示されたものに連続する。したがって、87-3調査区第３遺構面については、すべてが誤認というわけではないと考えられる。さらに、90-1調査区における断面観察から、87-3調査区第３遺構面ベース層とされた砂層が第２ｂ層に対比されると考えられ（図Ⅳ－23：下）、第２－２ａ面に対比されるのは87-3調査区第３遺構面、Ｂトレンチ第３遺構面と思われる。なお、87-3調査区第４遺構面は後述の第３－１ａ面に対比できる。

この面で検出されたのは、坪境畦畔、畦畔、鳥畠等である。まず、坪境の畦畔については、この面で造成されたものが第２－１ａ面にまで踏襲されたことが判明した。しかし、第２－１ａ面水路１についてはこの段階から存在したかどうかは明確にできていない。そして、現代コンクリート水路の部分はこの面も破壊されており、本来の姿は明らかにできなかった。ただし、七・八・十七・十八ノ坪の接点となる坪境交差点では「湿地」とされる凹地が検出されている（府発Ⅲ，p.73）。これは第２ｂ層の堆積に伴って形成されたと推定されているが、「砂を踏みこんだ足跡が何層にもわたって検出された」とされており、徐々に埋没していったようである。この凹地に関しては、水田に導水する際に溜井として機能した可能性も考えられる。なお、第２－１ａ面の記述でもふれた90-1調査区Ｂ地区の坪境は、この面においても問題がある。すなわち、概要Ⅳ（p.21）に掲載された坪境の断面図（Ｙ＝－34,300ライン）と、平面で検出された遺構の間に矛盾点が存在する。断面図では、Ｘ＝－150,220ラインの南側には大畦畔が明瞭に確認できるものの、その北側には第２－２ａ層が存在しないことになっている。概要Ⅳ（p.22）の説明によると、第２ｂ層の堆積後、幅約７ｍの溝が掘られたとされている。この溝については、下の面の坪境をあまり破壊していないことから、「坪境探しの溝」と推定された。第２－２ａ層が存在しないのは溝とされた部分にあたるが、平面調査ではこの部分から坪境畦畔が検出されたことになっている。こうした矛盾は、概要Ⅳで推定された溝が平面調査で確認されたのではなく、断面図を見ながら想像されたものであることに起因するようである。今回断面写真を検討したところ、この溝の埋土の最下層は、第２ｂ層の斜交層理を細分したものの可能性が高く、上層の

表Ⅳ－５　第２－２ａ面遺構名称

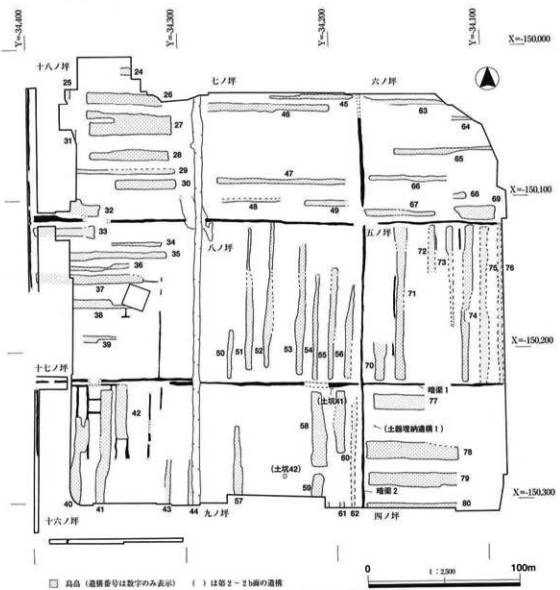
遺構番号	概要における遺構番号
鳥畠24	86-1　鳥畠2004
鳥畠25	86-1　名称不明（第2面）
鳥畠26	86-1　鳥畠2001
鳥畠27	90-2(H2)　鳥畠3
	86-1　鳥畠2002・2003
鳥畠28	90-2(H2)　鳥畠4
鳥畠29	90-1　鳥畠68
	90-3(A)　名称不明（第5面）
鳥畠30	90-3(A)　名称不明（第5面）
鳥畠31	90-1　鳥畠7
鳥畠32	90-1　鳥畠70
鳥畠33	87-3　砂の高まり
鳥畠34	86-2　名称不明（第3面）
鳥畠35	90-1　鳥畠8・9
	90-3(A)　鳥畠2
	87-3　鳥畠304
鳥畠36	90-1　鳥畠10
	87-3　鳥畠305・306
鳥畠37	90-1　鳥畠11・48
	87-3　鳥畠307
鳥畠38	90-1　鳥畠49
鳥畠39	90-1　鳥畠50
鳥畠40	90-1　鳥畠74
	92-7　名称不明（第3面）
鳥畠41	90-1　鳥畠75
	92-7　―
鳥畠42	90-1　鳥畠76
鳥畠43	92-7　鳥畠2
鳥畠44	92-7　鳥畠3
鳥畠45	90-2(H3)　鳥畠36
鳥畠46	90-2(H3)　鳥畠27
鳥畠47	90-3(B)　鳥畠1
鳥畠48	86-2　名称不明（第3面）
鳥畠49	Ｅトレンチ　名称不明
鳥畠50	89-1　鳥畠3
	89-2　鳥畠11
鳥畠51	89-1　鳥畠2
	89-2　鳥畠10
	86-2　名称不明
鳥畠52	89-1　鳥畠1
	89-2　鳥畠9
	86-2　名称不明
鳥畠53	89-2　鳥畠8
	Ｅトレンチ　名称不明
鳥畠54	89-2　鳥畠7
	Ｅトレンチ　名称不明
鳥畠55	89-2　鳥畠6
	Ｅトレンチ　名称不明

遺構番号	概要における遺構番号
鳥畠56	89-2　鳥畠5
	Ｅトレンチ　（第3面）
鳥畠57	89-3　鳥畠9
鳥畠58	89-2　鳥畠13
	89-3　鳥畠7
鳥畠59	89-3　鳥畠3
	93-1　鳥畠33
鳥畠60	89-2　鳥畠12
	89-3　鳥畠6
鳥畠61	93-1　鳥畠32
鳥畠62	93-1　鳥畠31
鳥畠63	90-2(H4)　鳥畠48
	92-6　鳥畠1
鳥畠64	92-6　鳥畠2
鳥畠65	90-2(H4)　鳥畠49
	92-6　鳥畠3
鳥畠66	90-3(C)　鳥畠5
	93-2(A)　鳥畠1
鳥畠67	93-2(A)　鳥畠2
	90-5　鳥畠5
	Ｅトレンチ　名称不明
鳥畠68	90-5　鳥畠6
鳥畠69	90-5　鳥畠1
鳥畠70	93-1　鳥畠8
	93-2(C)　鳥畠20
	90-3(C)　鳥畠6
	93-1　鳥畠9
	93-2(B)　鳥畠5
	93-2(C)　鳥畠19
鳥畠72	90-5　鳥畠5
鳥畠73	90-5　鳥畠3
	88-2　―
鳥畠74	90-5　鳥畠2
	Ｉトレンチ　―
鳥畠75	86-3　―
鳥畠76	86-3　―
鳥畠77	93-1　鳥畠10
鳥畠78	93-1　鳥畠11
	Ｄトレンチ　―
鳥畠79	93-1　鳥畠29
鳥畠80	93-1　鳥畠30
暗渠1	93-1　暗渠1
暗渠2	93-1　暗渠2
（第2・2b面）	
遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構1	93-1　土器埋納遺構1
土坑41	89-2　―
土坑42	89-3　井戸10

「ラミナのある粘土～シルト層」（２層分）のうち、上は攪乱を受けた地層で、第２－２ａ層に対比できることがわかった。その上を覆う「砂層」は第２－１ｂ層というべきものである。なお、第２－２ａ層の上に蒲鉾状に表現された地層があるが、位置的にはこれが坪境畦畔と認識されたと考えられる。この部分に関しては良好な写真がなかったため十分な検証はできなかったが、Ｄ地区で検出された坪境に連続するため、畦畔が存在した可能性は十分考えられる。なお、この坪境南側の大畦畔の延長線上では、島畠42の北端とそこから西にのびる畦畔が検出されている。両者の間には遺構が検出されなかった部分もあるが、本来は全体に畦畔が存在し、坪境畦畔とその畦畔の間が水路として機能していた可能性も考えられる。

また、四・五ノ坪間坪境畦畔盛土中から瓦管がつぶれた状態で出土した。これについては暗渠として機能していた時期があると推定し、暗渠１とした。また、四・九ノ坪間坪境畦畔盛土中からは、丸瓦を組み合わせた暗渠２が検出された（図版８－４）。

この面で検出された島畠は57基ある。このうち四ノ坪のものは、一部が拡張されて、第２－１ａ面に踏襲されたことが判明した。しかし大半のものは、第２－１ａ面の耕作によって削られ、芯になってい



図Ⅳ－15　第２－２ａ面平面図

た砂だけが帯状に盛り上がって遺存していた。また、十六・十七ノ坪においては畦畔が検出されたと報告されている（概要ⅩⅡ，pp.39-41）。このうち、島畠40の北端から北にのびる２本の畦畔は、畦畔としてはやや規模の大きなものである。第３－２ａ面にも同じ位置に畦畔が存在しており、それが第２－２ａ面に踏襲されたと考えられる。ちなみに、島畠40も第３－２ａ面島畠98を踏襲したものである。その他の畦畔についても一応図示したが、面の遺存状況からみて疑問もあり、その存在を前提とした議論には注意が必要である。

ちなみに、この面の遺構配置を『福萬寺村惣繪圖』と比較すると、十八ノ坪では島畠26～28の西端を結ぶラインが図Ⅳ－12の５に対応する可能性があり、島畠25・31のあり方からみて、その西側の地割の方向は南北方向と考えられる。一方、十六ノ坪は絵図とは一致しないようである。

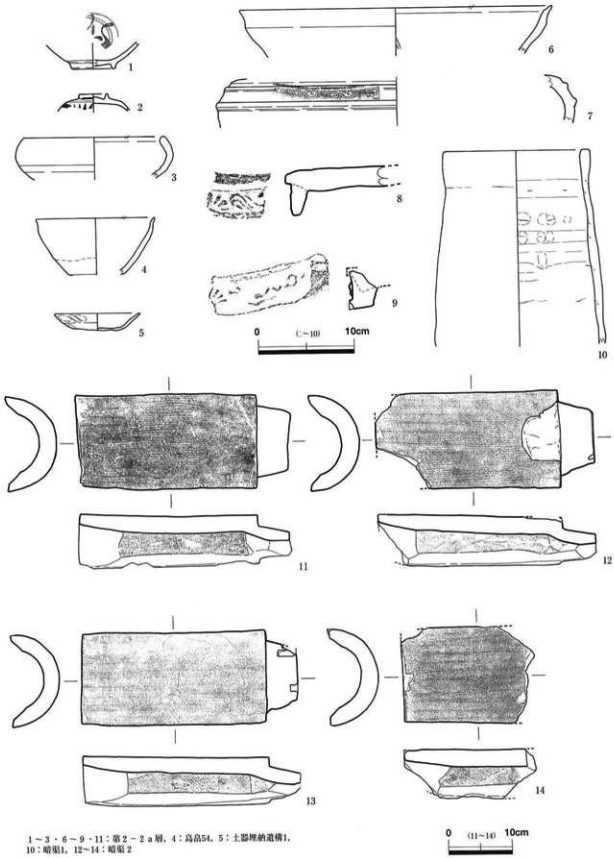
なお、第２－２ｂ面に帰属すると考えられる遺構もいくつか検出されている。四ノ坪では第２ｂ層掘削中に完形の土師器皿が出土したが、その周囲から種子がまとまって発見された。ウリ類30点、イヌホオズキ１点が取り上げられた（第Ⅴ章２－３）が、すべて回収することはできなかった。この状況からみて、第２－２ｂ面の遺構を見落としたものである可能性が高く、土器埋納遺構１とした。後述するように、この種の土器埋納遺構は農耕祭祀に関わるものと推定されているが、その中でも最も新しい事例である。また、八・九ノ坪間坪境畦畔脇にあたる部分から、土坑41が検出された（図版８－５）。断面のみで確認されているので平面形態は不明であるが、幅２ｍ、深さ1.2ｍを測り、底は第４ａ層下部まで達している。断面形状は上部がすり鉢状で、下部はほぼ垂直に立ち上がる。報告では、これを水田復旧時に坪境を探した「試掘」の跡と解釈している（概要Ⅰ，p.54）。その根拠は、七・八ノ坪間、五・八ノ坪間の坪境でそのような「試掘」跡と解釈される土坑が検出された（府発Ⅰ，pp.48-49）ことである。しかし、それらは深さが0.4ｍ程度で皿状を呈しており、土坑41とは形状や規模が異なる。位置や形状からすれば、井戸ないし水溜の可能性が高く、短期間の使用の後、人為的に埋め戻されたようである。また、土坑42も同様な機能を果たしたと推定される。

最後に、第Ⅲ章で若干ふれた噴砂についてみておくことにする（図版４－５）。これは89-1調査区において、第２－２面検出時に確認されたものである。ただしこの部分では、第２－１ａ面の耕作によって第２－２ａ層が大きく削られており、噴き出して地表に広がった砂も確認されていない。このため、噴砂が第２－２ａ面まで上がっていたかどうかは不明である。この噴砂を生じさせた地震の発生時期は、第２ｂ層堆積以降、第２－１ａ面の埋没以前と推定される。寒川　旭は、この地震を1707年10月28日の宝永南海地震に比定している（宮地・田結庄・吉川・寒川1998）。

第２－２ａ層からは以下のような遺物が出土した（図Ⅳ－16・17：１～３・６～９・11・16・18～22）。磁器蓋（２）・碗（１）、陶器鉢（３）、瓦質擂鉢（６）、火鉢（７）、軒平瓦（８・９）、丸瓦（11）、鉄製摯先（16）、漆器椀（18）、銭貨（19～22）等である。

磁器は広東省のものかと思われるもの（１）と波佐見焼（２）で、時期は17世紀前半、18世紀のものである。（２）は五彩である。陶器鉢（３）は肥前系で16世紀後半～17世紀初めのものと考えられ、重ね焼きの痕跡がある。瓦質擂鉢・火鉢は14世紀後半～16世紀ぐらいのもので、軒平瓦は室町時代前半のもの、丸瓦は室町時代（後半か？）のものである。17世紀までの時期の遺物が多い中、（２）のみが18世紀である。

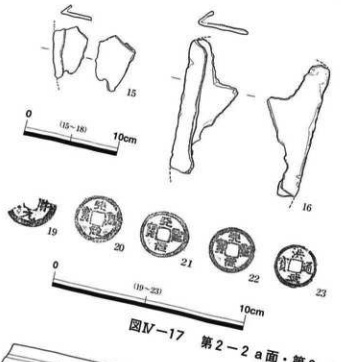
漆器椀には内外面とも黒漆を塗っている。銭貨（19～22）はいずれも北宋銭で、祥符元寶（19）、天聖元寶（20～22）である。初鋳は前者が1009年で、後者が1023年である。



1～3・6～9・11：第2－2a層，4：島品54，5：土器埋納遺構1，
10：暗渠1，12～14：暗渠2

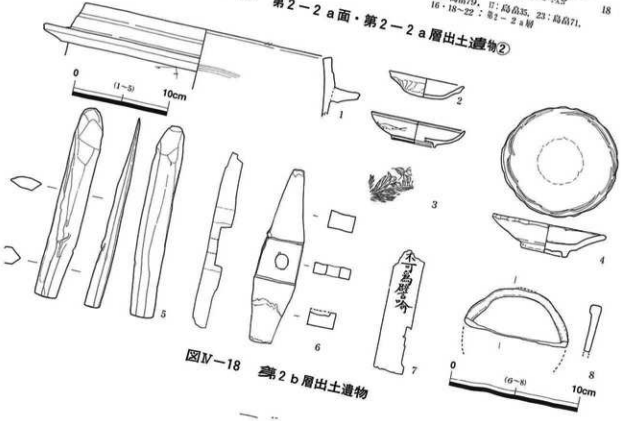
図Ⅳ－16　第2－2a面・第2－2a層出土遺物①

次に、第２－２ａ層関連の遺構から出土した遺物を概観する（図Ⅳ－16・17）。島畠35盛土内からは、木製杓か桶の底板（17）が出土した。島畠54盛土内からは瀬戸・美濃窯系天目茶碗（４）が出土した。鉄泥で16世紀前半のものである。島畠71盛土内からは洪武通寶（23）が出土した。明銭であり、初鋳は1368年である。島畠79盛土内からは鉄製挙先（15）が出土した。（10）は暗渠１に使用された瓦管である。（12～14）は暗渠２に使用された丸瓦であり、室町時代（後半か）のものと思われる。（５）は第２－２ｂ面土器埋納遺構１から出土した土師器皿である。16～17世紀頃のものと思われる。このように、第２－２ａ層では17世紀代までの遺物が主体をしめる。（２）は18世紀代のものであるが、第２－１ａ層と第２－２ａ層が接して堆積していた状況の中では、上層の遺物が混入する危険性もある。



15：島畠79、17：島畠35、23：島畠71、
16・18～22：第２－２ａ層

図Ⅳ－17　第２－２ａ面・第２－２ａ層出土遺物②



図Ⅳ－18　第２ｂ層出土遺物

この作土層の耕作時期を推定するために最も適した遺物は、第２－２ｂ面土器埋納遺構１出土の土師器皿であるが、この土器については時期の絞り込みが難しい。以上の点と、第２－１ａ層・第２ｂ層出土遺物の時期を勘案して、第２－２ａ層の耕作時期は17世紀代を中心とし、18世紀に一部かかる可能性もある、と考えておきたい。

第２ｂ層　泥濘・破壊堆積物である第２ｂ層からは、図Ⅳ－18に示した遺物が出土した。中国磁器稜花皿（４）、土師器皿（２）、瓦質羽釜（１）、窯状木製品（５）、木製糸巻（６）、柿経（７）、漆器蓋？（８）等である。

（４）は龍泉窯系青磁で16世紀後半のもの、土師器皿や瓦質羽釜は15世紀のものである。このように、第２ｂ層出土土器の時期は16世紀後半までである。（６）は糸巻の横木である。柿経は『法華経』第六巻の一部、「不可為譬喩」と書かれている。柿経は第３－２ａ層（図Ⅳ－24：８）からも出土している。漆器は蓋かと思われるもので、内外面に黒漆が塗られている。

なお（３）の磁器皿は、89-3調査区において第２ｂ層から出土したとされ、第３－２ａ面の時期推定に利用されたこともあった（三宮1991）。この調査区からは、この他にも同層準から染付の細片が出土したとされている。この点について関連資料を点検したところ、問題の陶磁器が出土したのはＣ３－ｈ３地区に限られることが明らかになった（合計５点、遺物登録番号151）。空洞写真や平面図などを検討したところ、出土地区には府立八尾学園の基礎に伴う大きな攪乱が２つあり、両者合わせて10ｍグリッドの半分近い面積をしめていたことがわかった。この攪乱は第２ｂ層の中位までおよんでいたことが判明しているため、問題の陶磁器は攪乱土中の遺物の混入品である可能性がきわめて高い。ちなみに、

表Ⅳ－６　第３－２ａ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畑81	86-1　島畑3001
島畑82	90-2(H2)　島畑8
	86-1　島畑3002
島畑83	90-2(H2)　島畑9
	90-1　島畑71
	86-1　島畑3003・3004
島畑84	90-2(H2)　島畑10
島畑85	90-3(A)　島畑7
	90-1　島畑24
島畑86	90-3(A)　島畑6
	90-1　島畑25
島畑87	90-3(A)　島畑5
	86-2　島畑405
島畑88	90-3(A)　島畑4
	86-2　島畑406
	90-1　島畑26
島畑89	90-3(A)　島畑3
	90-1　島畑27
	86-2　島畑407
島畑90	90-1　島畑23
	90-1　島畑23　島畑37
島畑91	90-1　島畑23　島畑51
島畑92	90-1　島畑23　島畑52
島畑93	90-1　島畑23　島畑53
島畑94	90-1　島畑23　島畑54
島畑95	90-1　島畑23　島畑38
島畑96	90-1　島畑23　島畑40
島畑97	90-1　島畑23　島畑41
島畑98	90-1　島畑23　島畑77
	92-7　島畑11
島畑99	90-1　島畑23　島畑78
	92-7　島畑12
島畑100	90-1　島畑79
島畑101	92-7　島畑13
島畑102	92-7　島畑14
島畑103	92-7　島畑15
島畑104	92-7　島畑16
島畑105	9C-2　島畑28
島畑106	9C-2　島畑26
島畑107	9C-2　島畑25
島畑108	90-3(B)　島畑2
島畑109	90-3(B)　島畑3
	86-2　島畑401
島畑110	90-1　島畑39
	86-2　島畑404
島畑111	86-2　島畑403
島畑112	86-2　島畑402
島畑113	89-1　島畑4
	89-2　島畑16
島畑114	89-2　島畑15
	Ｅトレンチ　島畑401
島畑115	89-2　島畑14
	Ｅトレンチ　島畑402
	Ｅトレンチ　島畑403
島畑116	Ｅトレンチ　島畑403
島畑117	89-3　島畑11
島畑118	89-3　島畑10
島畑119	90-2(H4)　島畑50

遺構番号	概要における遺構番号
島畑120	90-2　島畑6
島畑121	92-6　島畑5
島畑122	92-6　島畑4
島畑123	90-5　島畑7
島畑124	90-5　島畑8
島畑125	93-2(C)　島畑23
	Ｅトレンチ　名称不明（第4面）
島畑126	93-1　島畑18
島畑127	93-1　島畑17
島畑128	93-1　島畑12
	93-2(C)　島畑22
	93-2(B)　島畑8
島畑129	93-2(C)　島畑21
	93-2(B)　島畑7
	Ｄトレンチ　－
島畑130	Ｄトレンチ　－
島畑131	90-5　島畑11
島畑132	90-5　島畑10
	87-2　島畑203
島畑133	88-2　島畑708
島畑134	90-5　島畑9
	87-2　島畑205
島畑135	Ｉトレンチ　掻き掘げ田8
島畑136	Ｉトレンチ　掻き掘げ田7
島畑137	93-1　島畑13
島畑138	93-1　島畑14
島畑139	93-1　島畑15
	93-1　島畑16
	93-1　島畑34
	Ｉトレンチ　掻き掘げ田2・3・4
島畑140	93-1　島畑35
島畑141	93-1　島畑36
畠1	90-1　畝群22
畠2	93-1　畠1
	93-2(D)　溝46～50
畠3	89-2　畝溝群2
	89-3　畝群
	90-1　畝群
畠4	89-2　畝溝群1
	89-3　畝群
	93-1　畠2
畠5	92-6　畝立て状遺構
畠6	92-6　畝立て状遺構
畠7	92-6　畝立て状遺構

（第3－2ｂ面）

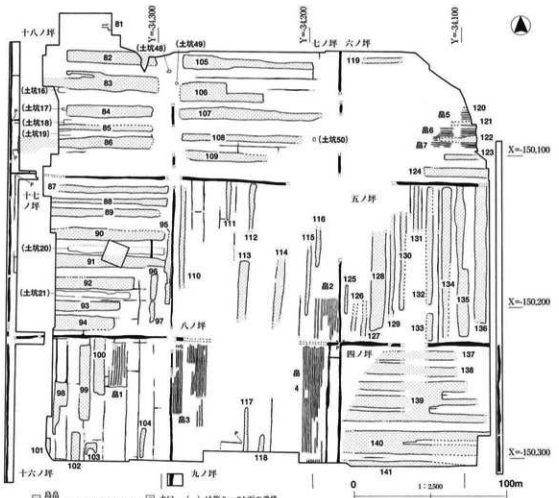
遺構番号	概要における遺構番号
土坑16	90-1　掘田1
土坑17	90-1　土坑29
土坑18	90-1　掘田2
土坑19	90-1　掘田3
土坑20	90-1　掘田4
土坑21	90-1　掘田5
土坑48	90-2(H2)　土坑2
土坑49	90-2(H2)　土坑3
土坑50	90-3(B)　土坑2

（3）は伊万里窯系染付で、17世紀末のものである。また、その他の陶磁器片には18世紀以降と考えられるものも含まれている。

こうした状況と前後の層準の遺物を勘案すると、第２ｂ層の堆積時期は16世紀後半代と推定される。

第３面　第２ｂ層と、水田作土層である第４ａ層に挟まれた層準が第３層である。この層には、第４ａ面を覆う第３ｂ層以外に複数の氾濫堆積物が挟まれ、これに注目することで細分できる。その細分は島畠の肩部から水田部分で可能であるが、細分された地層には砂とシルトがブロック状に混じった様子が認識できるものも複数存在し、それぞれが比較的短期間耕作された水田作土層と推定された。

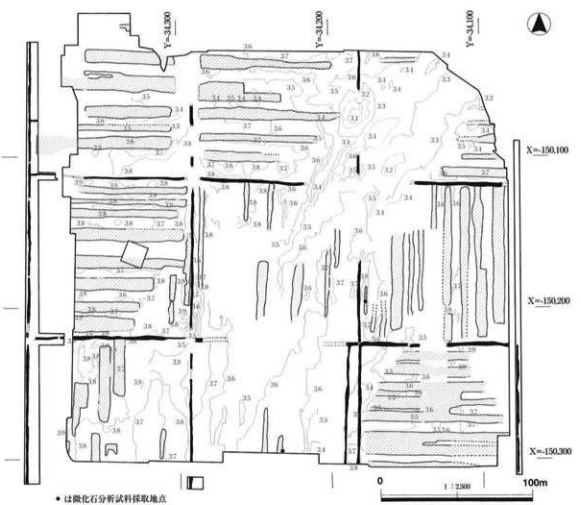
遺構面対比にあたって、整理の必要な点が２つある。まず、十七・十八ノ坪の状況である。90-1調査区では第２ｂ層に対比される「第５－２層」の下に、「第６面」が設定されている（概要Ⅱ，pp.41-44）。これについては、層位的な関係や面的広がりが十分にとらえられておらず、混乱があるとされる。十六ノ坪では「第６面」と「第７面」の遺構は基本的に同一なので、「第６面」が設定できる部分は十七・十八ノ坪に限られる可能性が高い。また、90-1・87-3調査区の断面図の比較からみて、前述した87-3調査区の「第４遺構面」がこの「第６面」に対比されると考えられる。調査区全体に存在する「第７層」の上に「第６層」が堆積していたという所見が正しいとすれば、この２つの坪の島畠間には堆積が起こったものの、他の部分では堆積がほとんどなかったため、同一の面を耕作し続けたと推定される。ここでは、この２つの坪にのみ存在する地層を第３－１ａ層、その下の当地区全域で確認される面を第３－２



図Ⅳ－19　第３－２ａ面平面図

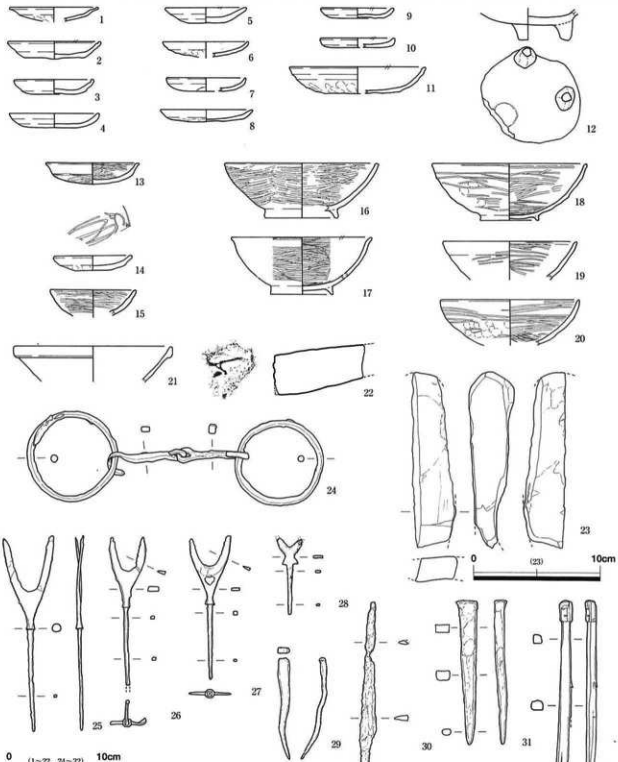
a面とし、平面図としては、第３－２ａ面のものを示した（図Ⅳ－19）。次に問題になるのが、93-2調査区である。この調査区では、第３層から第５ａ層にかけての層序対比に問題があり、概報も未整理の状態で記述されている。今回、平面図と断面図を比較点検したところ、両者に記された認識が異なっていることが判明した。断面図に示された認識は、写真の検討によってその妥当性が確認できるだけでなく、隣接する93-1調査区のものと一致している。この調査区の問題は、平面を精査した段階の不十分な認識が、その後断面の検討によって修正されたにもかかわらず、平面図の修正がおこなわれなかったことに起因すると思われる。例えば、93-1調査区「島畑17・18」の続きは93-2調査区では検出されていないが、断面図・写真では明瞭に確認できる。また、Ａ区の「島畑６」については、南側のＢ・Ｃ区の島畠と食い違っているが、これはＡ区において、第２ｂ層堆積時に生じた侵食痕を島畠の肩と誤認したものである。なお、第３－３ａ面に対比される可能性が高いＣ区「第５面」では、「島畑24」の東肩に畦畔が存在したとされているが、これは酸化鉄・二酸化マンガンによる変色部分を、層界と誤認して掘削したものである。

第３－２ａ面は砂礫層で覆われていたため、等高線図を作成した（図Ⅳ－20）。それをみると、九ノ坪南西隅から六ノ坪北東隅に向かってのびる凹地が確認できる。この凹地はトラフ型斜交層理が認められる砂礫層で埋没していた（図Ⅳ－22:下）。これは周囲の遺構を破壊して形成されているため、第２ｂ層

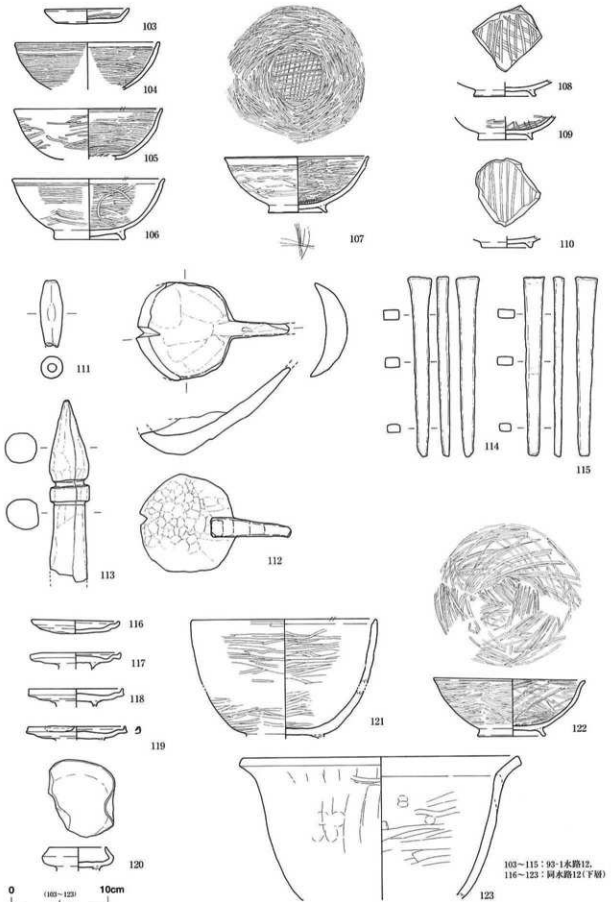


図Ⅳ－20　第３－２ａ面等高線図

次に、第７ｂ面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－45）。土器埋納遺構５からは瓦器椀が出土した（図Ⅳ－45：１）。12世紀中頃のものである。土器埋納遺構７からは黒色土器Ｂ類椀（２）が出土した。11世紀中頃のものである。土器埋納遺構８からは瓦器椀（３）が出土した。大和型で、12世紀中頃のものである。土器埋納遺構９からは瓦器椀（４）が出土した。大和型で12世紀初め頃のものである。土器埋納遺構10からは瓦器椀（５）が出土した。12世紀中頃のものである。土器埋納遺構11からは瓦器椀



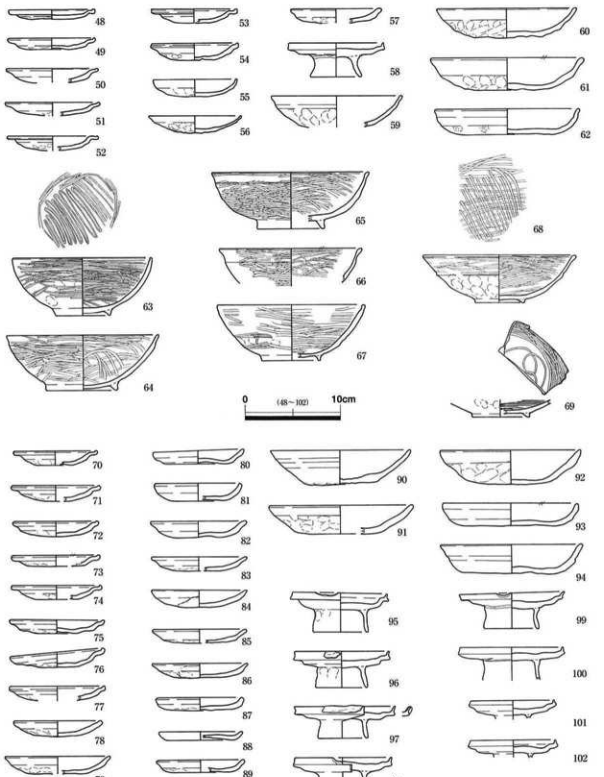
図Ⅳ－43　第７層出土遺物



図Ⅳ－42　第７面水路12出土遺物④

構面で検出されたものと同様に、平面形が方形を呈し、壁の立ち上がりが垂直に近いものである。

また、土器埋納遺構は十六ノ坪南部に集中して認められる（図Ⅳ－36）。遺構の詳細は図Ⅳ－44・表Ⅳ－17に示した。なお、内容が不明となっているものは、第７層～第７ｂ層掘削中に取り上げられ、状況からみて土器埋納遺構と推定されたものである。



図Ⅳ－41　第７面水路12出土遺物③

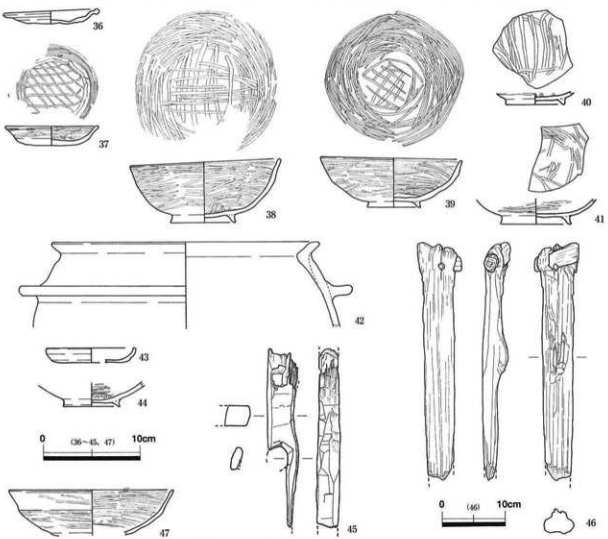
48～69：93-2水路12，70～102：93-1水路12

から出土している。前述した第６層の堆積過程を考慮すると、この部分には第６ｂ層（下）が堆積しなかった可能性が考えられる。

第７ｂ面　第７層（シルト）の下には氾濫堆積物と考えられる第７ｂ層が存在するが、この砂層の上には部分的ながら撹乱された砂混じりシルトが存在した（第７－３ａ層）。第７ｂ層の上（第７ｂ面）では馬鍬の歯の痕跡と思われる平行した筋状の落ちが検出された（図版14－８）が、その中には第７－３ａ層が入っており、第７－３ａ層の耕作に伴うものと考えられる。このことからみて、第７ｂ面で検出された遺構の中には、第７層関連のものとともに、第７－３ａ層関連のものが存在すると思われる。この面で検出された遺構としては土坑、落ち込み、ピット、土器埋納遺構がある。土坑37～39は上位の遺

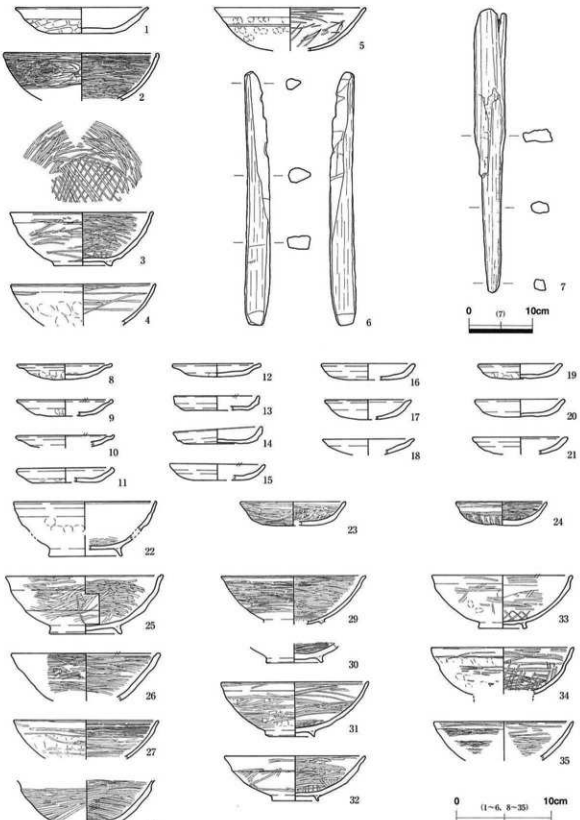
表Ⅳ－16　第７面水路12出土岩石肉眼鑑定結果

深成岩	71	アプライト	28	花崗閃緑岩	11	トーナル岩	11	斑糲岩	3
		閃緑岩	3	花崗岩	5	輝緑岩	4	角閃石斑糲岩	1
		黒雲母花崗岩	1	微石英閃緑岩	1	ペグマタイト	2	片状花崗閃緑岩	1
火山岩	3	輝石安山岩	1	デイサイト	1	流紋岩	1		
火砕岩	1	凝灰岩	1						
堆積岩	5	花崗砂岩	3	砂岩	2				
変成岩	1	片麻岩	1						
変質岩	1	変斑糲岩	1						



図Ⅳ－40　第７面水路12出土遺物②

36～42・45・46：90-3(C) 水路12、43・44：同水路12(古) ※47：水路75



図Ⅳ－39　第７面水路12出土遺物①

1～5：90-2(H４) 水路12(新)，6～35：同水路12(古)

落ち込み部分（下層）と、それよりも上層に分かれる。

（D）地点およびその南側周辺の上層からは、土師器皿（76～83・86～89・91・93・94）・杯（90）・台付皿（95～102）、瓦器皿（103）・椀（104・105・107～110）、土錘（111）、鉄製馬鍬の歯（114・115）等が出土した。また、（E）地点は（D）地点の上層にあたる部分から、土師器皿（70～75・84・85・92・94）、瓦器椀（106）、木製杓子（112）、木製擬宝珠（113）等が出土した。これらの土器を見ると、土師器皿は11～12世紀、土師器台付皿は11世紀後半、瓦器皿は12世紀後半、瓦器椀は11世紀後半～12世紀後半のものである。このうち台付皿は、（D）地点から集中して出土している。また、木製杓子には黒漆が塗られている可能性がある。

（D）地点の下層から土師器皿（116）・台付皿（117～119）・台付耳皿（120）・甕（123）、黒色土器A類鉢（121）、瓦器椀（122）等が出土した。土師器皿・台付皿・台付耳皿、瓦器椀は11世紀後半ぐらいのもので、黒色土器A類鉢、土師器甕は11世紀ぐらいのものである。

水路12出土土器は、全体的にみて11世紀後半～12世紀後半のものが多いといえる。水路底落ち込み部分とそれより上層に分かれた部分、あるいは（古）と（新）に分かれた部分では、上層の方が下層の遺物より少し新しい時期の遺物が多い傾向がみられる。

次に、水路12から出土した石についてまとめておきたい。石の大きさは拳大から人頭大程度で、人為的に搬入されたと思われる。それらには加工痕が認められたものはほとんどなく、被熱の痕跡の認められたものがわずかにあった。これらのうち、82点については岩石肉眼鑑定を実施した[3]（表Ⅳ－16）。その結果、深成岩ないし半深成岩が圧倒的に多いことが判明した。その特徴は生駒山地を形成する領家深成岩類に酷似しており、苦鉄質岩類が少ないことを考慮すると、生駒山地でも南部の福貴畑～竪上付近からのものが多いと推定された。また、凝灰岩が1点含まれていたが、これは灰色の軽石を多く含み、二上山付近に分布する下部ドンズルボー累層に起源するものと考えられる。この凝灰岩には加工した面が一部残存しており、石製品の破片であると思われる。

その他、第7面に帰属する遺構としては土坑4がある。長辺4ｍ、短辺2ｍ、深さ10cmを測るもので、第6ｂ層で埋没していた。その機能については不明である。

次に、第7層から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－43）。この層の上には第6ａ層が重なっている部分が多く、一部第6ａ層の遺物を含めて取り上げてしまった可能性のある調査区も存在する。土師器皿（1～11）・三脚盤（12）、瓦器皿（13・14）・小椀（15）・椀（16～20）、中国製白磁碗（21）、軒平瓦（22）、砥石（23）、鉄製品（24～31）、木製人形（32）等が出土した。

白磁碗は厦門窯系で、森村健一による編年では12世紀後半のものである。土師器皿は12～13世紀、瓦器皿は11世紀後半と13世紀ぐらいのもの、瓦器椀は11世紀後半～12世紀前半のものである。軒平瓦も12世紀ぐらいのものである。（16）は黒色土器B類かもしれない。なお、13世紀代に入ると考えられる瓦器皿は、当地区北東隅の第7－1面水路12（新）周辺から出土している。

鉄製品は、（24）が素環式鏡付轡、（25～28）が雁叉鏃、（29）が釘であり、（30）は不明品である。また、（32）の木製人形は目？と口を表現しているように見える。砥石（23）は黒雲母デイサイトで、1面のみ使用している。

このように、第7面の遺構や第7層から出土した遺物をみると、11世紀後半～12世紀後半のものが多い。このうち、新しい時期のものは第6ａ面直上土器群の時期と重なる。なお、この面に関連して出土した遺物のうち、13世紀代になると思われる瓦器椀・皿などは、第7－1面水路12（新）およびその周辺

和型、(26) は楠葉型である。

さらに (A)・(B) 地点では、水路12(古) 埋土から骨68点、石52点も出土した (図版15－3・4)。骨はウシが多く、イヌ・サギ科・スッポン？なども認められた。なお、表Ⅳ－15で「ウシ／ウマ」としたものは遺存状況が悪く、ウシかウマか判別できないものを示す。ウマの骨は、頭蓋骨、下顎骨、歯、肋骨、椎骨、肩甲骨、上腕骨、大腿骨、脛骨、寛骨など、各部にわたっており、上腕骨、大腿骨、橈骨には解体痕が認められた。ただし、水路12(新) 埋土にはほとんど含まれておらず、シカの下顎骨 (B69) と同定不能の骨が出土した程度であった。

また、五・六・七・八ノ坪交差点にあたる部分の水路底部からは土坑5が検出された。この土坑にはウシの頭蓋骨がさかさまの状態で埋納されていた (図版15－1)。掘削ミスにより骨を大きく破損してしまったが、上顎の歯は回収されたのに対し、下顎骨・下顎の歯および角は存在しなかった。したがって、下顎骨や角が外れた状態の骨が埋納されたと考えられる。さらに、土坑5から南へ約25m離れた地点では土坑6が検出された。この土坑からはウシの下顎骨 (右) が出土した (図版15－2)。これは土坑の底から浮いた状態で出土したが、土坑の埋土にはシルトブロックが多く含まれており、人為的な埋め戻しの際に骨が入れられたと推定される。なお、土坑5と土坑6の骨については歯の磨耗のあり方から、前者が老齢と推定されるのに対し、後者は比較的若いと推定されるため、別個体の可能性が高い。

90-3調査区Cトレンチでは、五・六・七・八ノ坪交差点付近を中心とする場所から、土師器皿 (36)・羽釜 (42)、瓦器皿 (37)・椀 (38～41)、木製品 (45・46) 等が出土した。土師器皿は11世紀後半、瓦器皿は11世紀末、瓦器椀は11世紀末～12世紀前半、土師器羽釜は12世紀後半ぐらいのものである。木製品 (45) は第5a層出土のもの (図Ⅳ－30:10) と同じようなものである。(46) は頭部に横棒を通した後、穿孔を1ヶ所施している。用途は不明である。両方とも樹種はスギである。

(C) 地点よりも南では、後述する水路底落ち込み部分の他に、埋土が細分される部分も認められた。その部分が遺構面とどのように対応するのかわからなかったため、一括して遺物を取り上げてしまったが、上位の層準は第6b層 (下) 堆積後の可能性もある。ただし、上位の層準から出土した遺物の量は少なく、大半の遺物は第7面段階のものといえる。

(C) 地点を中心とする93-2調査区からは、土師器皿 (48～57・59～62)・台付皿 (58)、瓦器椀 (63～69) 等が出土した。土師器皿は11～12世紀、土師器台付皿は11世紀後半、瓦器椀は11世紀後半～12世紀のものである。瓦器椀 (63) は楠葉型である。(64) の外底部には、ひっかいたような×印がある。

また、(C) 地点付近からは骨6点、石7点も出土した。骨はウマ、ウシ、スッポンのものであり、スッポンの頭蓋骨には鉄製刺突具によると思われる刺突痕が認められた。

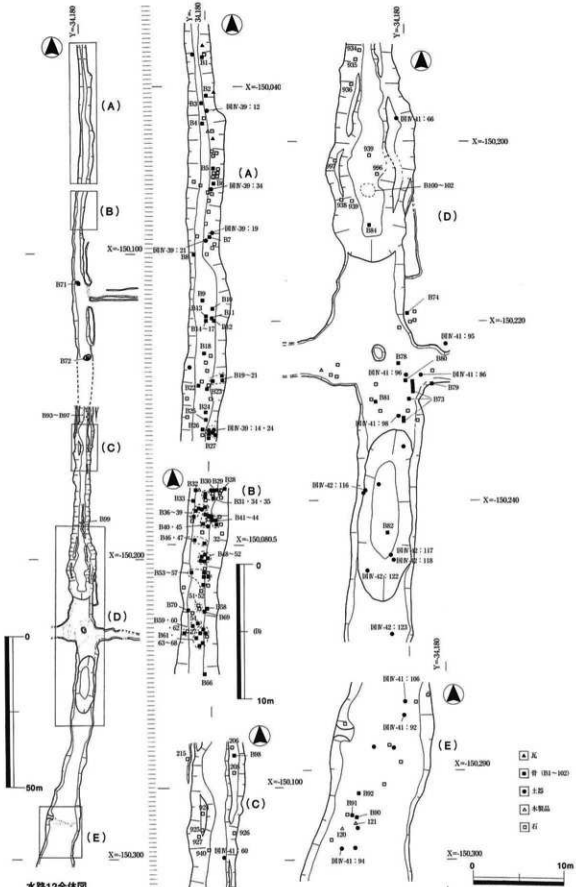
さらに、四・五・八・九ノ坪交差点にあたる部分の水路底からは土坑7が検出された。ここから骨は出土しなかったが、本来ウシやウマの骨や肉が埋納されていた可能性も考慮して、残存脂肪分析を実施した (第Ⅴ章3－1)。しかし、動物の骨や肉を埋納していた可能性を示すデータは得られなかった。

四・五・八・九ノ坪交差点付近にあたる (D) 地点では、骨が20数点、石が21点出土した。骨はウマのものが多く、シカ、サギ科、スッポン、イシガメ？が若干認められた。出土状況で注目されるのはB73の北側であり、すべてが取り上げられなかったものの、肋骨と椎骨が並んだ状態で出土した (図版15－5)。これは肋骨と椎骨がつながった状態で廃棄されたことを示すと考えられる。また、シカの大腿骨には解体痕が認められた。さらに、(E) 地点ではスッポンの腹甲板数点と石が8点出土した。

93-1調査区の範囲内では、(D) 地点と (E) 地点から遺物が集中して出土した。また、前者は水路底

表Ⅳ－15　第７面水路12出土動物遺存体一覧

番号	調査区	調査時の 出土層序	調査時の 遺構名称	遺物番号	種名	部　位	左右	部分	観　察
B1	90-2(H4)	第11面	溝154	1621	不明				
B2	90-2(H4)	第11面	溝154	1585	ウシ	大腿骨／関節骨端		遠位	
B3	90-2(H4)	第11面	溝154	1586	ウシ／ウマ	肩甲骨／寛骨破片			
B4	90-2(H4)	第11面	溝154	1590	ウシ	指骨		基節骨	
B5	90-2(H4)	第11面	溝154	1622	ウシ／ウマ	指骨		中足骨	
B6	90-2(H4)	第11面	溝154	1603	不明				
B7	90-2(H4)	第11面	溝154	1614	ウシ	上腕骨	左	遠位	
B8	90-2(H4)	第11面	溝154	1619	ウシ	大腿骨	左	体部	解体痕（切り傷）あり
B9	90-2(H4)	第11面	溝154	—	ウシ	下顎前臼歯第3	左		
B10	90-2(H4)	第11面	溝154	—	ウシ	下顎前臼歯第3	左		磨耗進む
B11	90-2(H4)	第11面	溝154	1638	不明				
B12	90-2(H4)	第11面	溝154	1639	不明				
B13	90-2(H4)	第11面	溝154	1633	ウシ／ウマ	寛骨破片			
B14	90-2(H4)	第11面	溝154	1634	ウシ	脛骨	左	体部	
B15	90-2(H4)	第11面	溝154	1635	ウシ／ウマ	寛骨？			
B16	90-2(H4)	第11面	溝154	1636	ウシ	寛骨（腸骨）			
B17	90-2(H4)	第11面	溝154	1637	ウシ／ウマ	肩甲骨破片			
B18	90-2(H4)	第11面	溝154	1640	不明				
B19	90-2(H4)	第11面	溝154	1645	ウシ	下顎骨	左		臼歯全長156.0mm。成獣10才未満
B20	90-2(H4)	第11面	溝154	1646	ウシ／ウマ	上腕骨		遠位	骨端
B21	90-2(H4)	第11面	溝154	1647	ウシ	橈骨	左	近位	傷あり
B22	90-2(H4)	第11面	溝154	1664	不明				
B23	90-2(H4)	第11面	溝154	1650	ウシ	末節骨			
B24	90-2(H4)	第11面	溝154	1653	ウシ	肩甲骨		遠位	
B25	90-2(H4)	第11面	溝154	1655	不明				
B26	90-2(H4)	第11面	溝154	1656	不明				
B27	90-2(H4)	第11面	溝154	1658	ウシ／ウマ	肋骨			
B28	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	1	ウシ／ウマ	肋骨			
B29	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	2	ウシ	肋骨			
B30	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	3	ウシ／ウマ	肋骨			
B31	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	8	不明				
B32	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	9	不明				
B33	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	11	サギ科の一種	上腕骨	左	近位	
B34	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	12	カメ類	大腿骨／上腕骨			スッポン？
B35	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	13	ウシ／ウマ	肋骨			
B36	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	15	ウシ	上顎後臼歯第1／第2	右		成獣
B37	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	17	ウシ	脛骨	左		骨端部未癒着。斧の痕跡あり
B38	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	18	ウシ	上顎後臼歯第1／第2	左		
B39	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	19	ウシ	上顎後臼歯	左		
B40	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	20	ウシ	尾椎骨（仙骨）			
B41	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	22	ウシ	上顎後臼歯第1－第3のいずれか	左		成獣
B42	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	25	ウシ／ウマ	椎骨			骨端部未癒着
B43	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	27	ウシ	尺骨	右	体部	
B44	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	28	ウシ	尾椎骨（仙骨）			
B45	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	30	不明				
B46	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	34	イヌ	上腕骨	右	体部	
B47	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	35	ウシ	上腕骨	右	体部	解体時の傷あり
B48	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	36	貝				淡水産。保存悪い
B49	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	37	ウシ／ウマ	頭蓋骨			破片
B50	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	38	不明				
B51	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	39	不明				
B52	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	40	不明				
B53	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	42	ウシ？	頭蓋骨			破片
B54	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	44	ウシ／ウマ	肋骨			
B55	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	45	ウシ	中節骨			
B56	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	46	ウシ／ウマ	椎骨			
B57	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	48	不明				
B58	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	53	ウシ	中節骨	右	遠位	骨端部未癒着。骨端最大幅61.5mm
B59	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	55	ウシ／ウマ	肋骨			破片
B60	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	56	ウシ／ウマ	肋骨			破片
B61	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	58	ウシ	後頭骨	右		
B62	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	59	ウシ／ウマ	肋骨			
B63	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	60	ウシ／ウマ	頭蓋骨			
B64	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	61	ウシ	上顎後臼歯第2	右		
B65	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	63	ウシ	中足骨	右		最大長22.0mm。骨端部癒着済
B66	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	64	ウシ	脛骨	右		
B67	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	65	骨	不明			
B68	90-3(C)	第9・2面	坪境17(古)	66	ウシ／ウマ	肋骨			
B69	90-3(C)	第9・1面	坪境17(新)	67	シカ	下顎骨	左		
B70	90-3(C)	第9・1面	坪境17(新)	68	不明				
B71	90-3(C)	第9・2面	土坑2	69	ウシ	頭蓋骨			上顎の歯から見て老齢（10才以上か？）土坑内に埋納
B72	90-3(C)	第9・2面	土坑1	70	ウシ	下顎骨	右		上記とは別の個体である可能性が高い。土坑内に埋納
B73	93-1	第7面	坪境30	389	ウシ／ウマ	肋骨			
B74	93-1	第7面	坪境30	390	ウシ／ウマ	肋骨／椎骨			
B75	93-1	第7面	坪境30	404	スッポン	腹甲板			
B76	93-1	第7面	坪境30	414－a	スッポン	腹甲板			
B77	93-1	第7面	坪境30	414－b	サギ科	胸骨			
B78	93-1	第7面	坪境30	458	ウマ	脛骨	右	遠位	遠位端最大幅77.5mm。解体痕あり。
B79	93-1	第7面	坪境30	459	不明				
B80	93-1	第7面	坪境30	476	ウマ	中節骨	右		
B81	93-1	第7面	坪境30	477	スッポン	腹甲板			
B82	93-1	第7面	坪境30	478	シカ	大腿骨	右	遠位	解体痕あり
B83	93-1	第7面	坪境30	479	スッポン	腹甲板			
B84	93-1	第7面	坪境30	484	ウシ／ウマ	寛骨（腸骨）	左		幼獣
B85	93-1	第7面	坪境30	488	スッポン	腹甲板			
B86	93-1	第7面	坪境30	494	スッポン	腹甲板			2点
B87	93-1	第7面	坪境30	1207	ウマ	臼歯	右下		
B88	93-1	第7面	坪境30	1214	イシガメ？	腹甲板			
B89	93-1	第7面	坪境30	1215	スッポン	腹甲板			
B90	93-1	第7面	坪境30	1248	不明				
B91	93-1	第7面	坪境30	1249	スッポン	腹甲板			
B92	93-1	第7面	坪境30	1250	スッポン	腹甲板			
B93	93-2(B)	第10面	溝25	192	ウマ	上腕骨	右		
B94	93-2(B)	第10面	溝25	197	不明				
B95	93-2(B)	第10面	溝25	198	ウシ	下顎臼歯	左		第3臼歯。7~10才（成獣）最大長41.5mm、最大幅15.5mm、高さ40.5mm
B96	93-2(B)	第10面	溝25	201	ウシ	基節骨	不明		
B97	93-2(B)	第10面	溝25	203	不明				
B98	93-2(B)	第10面	溝25	207	スッポン	頭蓋骨			刺突痕あり
B99	93-2(D)	8面	溝65	889	シカ	大腿骨			遠位端、未化骨
B100	93-2(D)	8面	溝65	948	ウマ	中足骨			遠位端、未化骨
B101	93-2(D)	8面	溝65	950	ウマ	基節骨			遠位端、未化骨
B102	93-2(D)	8面	溝65	951	スッポン	腹甲板			



図Ⅳ－38　水路12遺物出土状況

七、八、十七、十八ノ坪では、畦畔、島畠、土坑が検出された。畦畔については、部分的に残存していた第６ｂ層を除去して検出されたものを、この面の遺構として認識した。また、島畠は７基検出した。これらは図Ⅳ－37：中・下段に示すように、第６ｂ層に覆われて残存していたものである。これについては幅が１～２ｍ程度と狭く、これまで説明してきた島畠とはやや様子が異なる。しかし、第６ｂ面や第６ａ面に踏襲されたものは、後の島畠と共通した拡張過程をたどっている。その分布をみると、十七ノ坪南半に多く認められ、十八ノ坪からも検出されている。面の遺存状況が悪いため、削られてしまったものも存在する可能性は否定できない。このような不確定要素も存在するが、現状でその分布の特徴を検討すれば、その下層に第８ａ面で畠として利用されていた微高地が存在する点が注目される。この微高地は第７層によって埋積が進んだが、第７面段階でもやや高くなっていた可能性がある。そして、坪内の水回りをよくするために地表面が削平され、その結果生じた土を畦畔部分にかき寄せて、島畠が造成されたのではなかろうか。

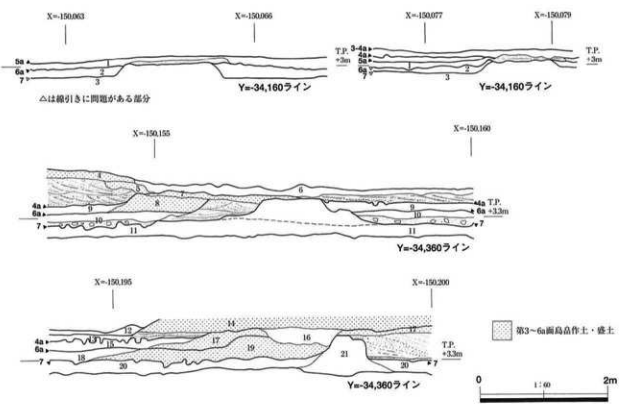
問題は、ここで島畠とした高まりが畠として利用されたかどうかである。調査時にはこの点を直接検討することができなかったが、今後は高まり部分の土壌微細形態（宮路2001、別所・井上〔伸〕2001、松田2001）を検討することで、この問題に対する見解を示す必要がある。現在のところ得られているデータの中で利用できるものとしては、花粉分析結果がある（第Ⅴ章２－１）。それによると、第７層からソバ属の花粉が検出され、以後上位の層準ではソバ属の花粉が連続して検出されている。この状況はまさに、調査で島畠と呼称した遺構の動向と一致する。なお、前述した第６ｂ層の堆積過程を考慮すれば、第７層で検出された花粉は第６ｂ層（下）堆積後の状況を示すとする意見もあり得る。しかし、花粉分析５・６地点は第６ｂ層（下）に対比した破堤堆積物の範囲内に含まれており、この地点でも同様の結果が得られているので、ソバ属花粉が認められ始めるのは第７面段階と思われる。さらに、こうした花粉の検出動向は、池島Ⅰ期地区における花粉分析結果（金原・井上・金原1997、辻本2002）とも整合している。ソバ属の花は虫媒花で、花粉の生産量も低く、飛散範囲も狭いが、実際に栽培されていた場所の特定は難しい面もある。しかし、この点をふまえたとしても、複数地点の結果が一致することからみて、こうした花粉の動向は当遺跡内および周辺の栽培の動向を反映している可能性が高い。第７面では、福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区ともに第８ａ面で認められたような微高地は認められないため、ここで島畠と呼んだ高まりが畠作地の候補となる。

第７面の遺構のうち、水路12からは多数の遺物が出土した。大きく４ヶ所の遺物集中地点が認められた他、水路底部からウシの骨を埋納した土坑が２基検出された（図Ⅳ－38：左）。水路埋土中からも多数の骨が出土した（図Ⅳ－38・表Ⅳ－15）[2]。

まず（A）・（B）地点では、前述のように、第７－１面と第７－２面の段階の２段階にわけられた。前者を水路12（新）、後者を水路12（古）と呼称することにする。（A）地点を中心とする90-2（Ｈ４）調査区において、水路12（新）から出土した遺物は（図Ⅳ－39：１～５）であり、水路12（古）から出土した遺物は（６～35）である。前者には、土師器皿（１）、瓦器椀（２～５）、刀子状木製品（６）・剣形木製品（７）等がある。土師器皿は12世紀後半ごろのもの、瓦器椀は11世紀後半～13世紀前半ごろのものと時期差がある。瓦器椀（２）は楠葉型である。木製品の樹種はいずれもヒノキである。また後者には、土師器皿（８～21）・椀（22）、瓦器皿（23・24）・椀（25～35）等がある。土師器皿は11世紀後半～13世紀ぐらいのもの、土師器椀は11世紀中頃ぐらいで、瓦器皿は11世紀後半～末、瓦器椀は11世紀後半～12世紀後半のものである。土器の時期としては11世紀後半～12世紀といえる。瓦器椀の（25）・（27）は大

第７面　第６ａ層ないし第６ｂ層を除去することにより検出した。第６ｂ層は一部しか残存しておらず、第６ａ層段階の耕作によって削られた部分も多いが、前述した第６ｂ面の島畠部分に残存した第７面と周囲のレベルを比較すると、削られた深さは数cm と考えられる。しかしながら、削られた深さは一定していないため、等高線図は作成しなかった。

従来提示されていた第７面の平面図には第６ｂ面の遺構が混在していたが、今回、第６ｂ層で埋没したもののみを抽出して図示した（図Ⅳ－36）。まず、坪境においては四・九ノ坪間、五・八ノ坪間、六・七ノ坪間を南北に貫く水路12が検出された。この水路は、南端の幅12m、北端の幅３ｍを測る大規模なものである。この水路の中には周囲の水路底よりも20cmほど深くなった部分が２ヶ所存在した。また、水路の脇では部分的に大畦畔が検出されたが、面の遺存状況を考慮すると本来は全体に存在していた可能性が高い。なお、水路12の北端では、埋土が２層に細分され、右岸側の第７層がそれに対応して細分された（概要ＸⅠ,p.25）。そのため、図Ⅲ－２ではこれらを第７－１層・７－２層としたが、こうした細分は当地区北東隅でのみ確認できるものである。その他の坪境のうち、八・九ノ坪間を流れる水路13、四・五ノ坪間を流れる水路14、五・六ノ坪間を流れる水路75は、いずれも水路12から分岐する。また、それ以外の坪境からは大畦畔が検出されている。



1　2.5Y5/2　灰黄　細砂混じりシルト（第5a層）
2　2.5GY4/1　暗オリーブ灰　粗砂が若干混じるシルト（第6a層）
3　2.5GY4/1　暗オリーブ灰　シルト（第7層）
4　10GY4/1　暗緑灰　細砂混じりシルト（第3面島畠作土）
5　5GY5/1　オリーブ灰　細砂～粗砂混じりシルト（第3面島畠盛土）
6　10BG4/1　暗青灰　シルト　粗砂が若干混じる（第3・2a層）
7　10BG4/1　暗青灰　細砂～粗砂混じりシルト（第4a面島畠作土？）
8　5G3/1　暗緑灰　細砂～粗砂混じりシルト（第4a面島畠盛土）
9　5B4/1　暗青灰　中砂～粗砂混じりシルト（第4a層）
10　10GY4/1　暗緑灰　シルト質中砂～粗砂（第6a層）
　　下部　粗砂にシルトのブロック混じる
11　10BG4/1　暗青灰　シルト～粘土（第7層）
12　5BG4/1　暗青灰　細砂～粗砂混じりシルト（第3・2a層）
13　5BG4/1　暗青灰　細砂混じりシルト（第3・2a層）
14　5Y5/3　灰オリーブ　中砂混じりシルト
　　シルトのブロック混じる（第3面島畠盛土）
15　5B4/1　暗青灰　中砂～粗砂混じりシルト（第4a層）
16　5G4/1　暗緑灰　中砂～粗砂混じりシルト
17　5G4/1　暗緑灰　粗砂混じりシルト（第4a面島畠盛土）
18　10G4/1　暗緑灰　細砂～粗砂混じりシルト（第6a層）
19　10BG4/1　暗青灰　中砂～粗砂混じりシルト（第6a面島畠盛土）
20　上部5BG4/1　暗青灰　下部7.5GY4/1　暗緑灰　シルト～粘土（第7層）
21　10BG4/1　暗青灰　シルト～粘土（第7面島畠作土・盛土）

図Ⅳ－37　第７面島畠関連断面図

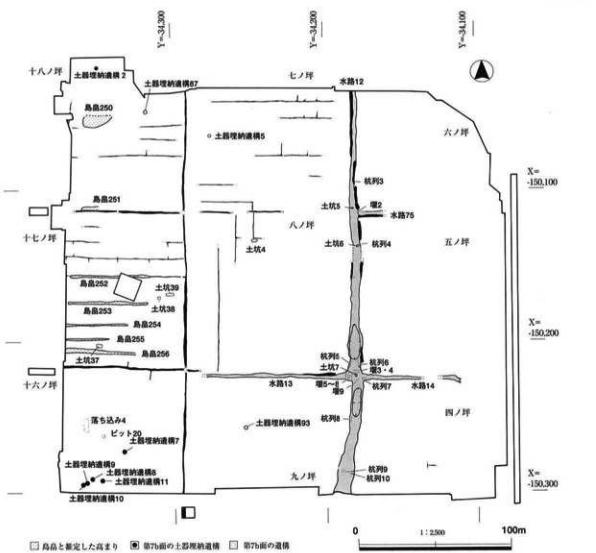
した瓦器椀は、13世紀中頃のものである。この調査区には第６ｂ層（上）は堆積しなかったと考えられるため、この遺構と第６ｂ層（上）との先後関係は不明である。

これまで述べてきた点をまとめると、第６ａ層は、12世紀後半と13世紀代の２回にわたって供給された堆積物を母材とする作土層といえる。第６ａ層中に含まれる最新の遺物は14世紀前半代であることも考慮し、第６ａ層の継続期間を12世紀後半から14世紀代と推定しておきたい。

表Ⅳ－14　第７面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畠250	90-2(H2)　島畑22
島畠251	87-3　島畑801
島畠252	90-1　島畑76
島畠253	90-1　島畑65
島畠254	90-1　島畑66
島畠255	90-1　畦畔78
島畠256	90-1　島畑67
水路12	90-2(H4)　溝153
	90-3(C)　坪境17
	93-1　坪境30
	93-2(B)　溝25
	93-2(C)　溝65
水路13	89-2　坪境溝
	93-1　坪境31
水路14	93-1　坪境29
水路75	90-3(C)　坪境18
土坑4	90-3(B)　土坑3
土坑5	90-3(C)　獣骨埋納土坑2
土坑6	90-3(C)　獣骨埋納土坑1
土坑7	93-1　土坑10
杭列3	90-3(C)　杭列3
杭列4	90-3(C)　杭列1
杭列5	93-1　杭列6
杭列6	93-1　杭列5

遺構番号	概要における遺構番号
杭列7	93-1　杭列4
杭列8	93-1　杭列7・8
杭列9	93-1　畑10
杭列10	93-1　畑11・12
畑2	90-3(C)　杭列2
畑3	93-1　畑3
畑4	93-1　畑13
畑5	93-1　畑4
畑6	93-1　畑5
畑7	93-1　畑6
畑8	93-1　畑7
（第7b面）	
遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構7	92-7　ピット4
土器埋納遺構8	92-7　ピット3
土器埋納遺構9	92-7　ピット2
土器埋納遺構10	92-7　ピットA
土器埋納遺構11	92-7　ピットC
土器埋納遺構87	90-2(H2)　—
土器埋納遺構93	89-3 —
土坑37	90-1　土坑113
土坑38	90-1　土坑116
土坑39	90-1　土坑118
ピット20	89-3　ピット218
落ち込み4	90-1　溝1002



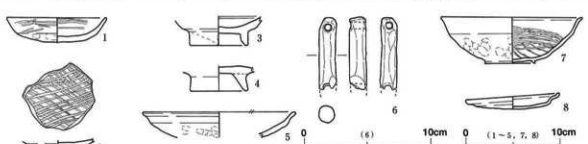
図Ⅳ－36　第７面平面図

さらに上から掘り込まれた可能性が高い。この遺構が検出された92-7調査区では、第７層に対応する「第10層」の上に「第９層」と呼ばれた地層が存在し、さらにその上に砂礫混じりシルトの「第８層」が堆積していた。「第９層」は「第10層」起源のシルトブロックを主体とし、その間に細砂が含まれるもので、人為的に撹乱された作土層と考えられる。土器埋納遺構６検出の経過を検証することは困難であるが、粒度の大きく異なる「第８層」が埋土に含まれていれば、第７面精査段階に気づく可能性が高い。その段階で気づかなかったのは、埋土が泥質であったためと考えられる。そのように考えると、土器埋納遺構６は「第９層」に関連した遺構であった可能性があり、その土器の時期からみて、「第９層」の母材となった砂は第６ｂ層（下）に対比できる。また、この層は90-1調査区南側にも存在しており、第７層最上部の「撹乱層」と記載されていた（概要ⅩⅡ，pp.13-16）。この「撹乱層」の上にはレンズ状に砂層が残存しており、これが第７面の島畠を覆う砂と同一のものと推定されたが、連続する状況が確認されたわけではない。むしろ、第７面の島畠が砂で覆われた部分において、その脇の水田部分に「撹乱層」が存在しなかったことが注意される。このことから、「撹乱層」は第７面の島畠を覆う砂層堆積後に形成された作土層の可能性が考えられる。第７面島畠を覆う砂層と「撹乱層」の母材となった砂の粒度を比較すると、後者のほうが細かいようであるが、これは同一の堆積物が僅方に粒径変化したものとも考えられる。ここではそうした考え方に立ち、第６ｂ面島畠の芯となった破堤堆積物も第６ｂ層（下）と推定したい。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構３は12世紀末～13世紀初頭のもので、土器埋納遺構６の時期に近接する。さらに、後述するように、第７層が細分された当地区北東隅では、上層の第７－１層に関連して13世紀前半代の土器が出土している。第７－１層は粒度がシルト～粘土であり、第６ｂ層（下）とは全く異なっているため別の地層と考えたが、この部分には第６ｂ層（下）は堆積しなかった可能性が高い。

第６ａ層は、第６ｂ層（下）が堆積しなかった部分でも砂礫混じりシルトであり、第６ｂ層（下）の堆積後に、もう一度砂礫が堆積したと考えられる（第６ｂ層〔上〕）。90-1調査区でレンズ状に残存していたのは、この砂層に対比できる。第６ｂ層（下）の堆積後に造成された島畠のほとんどは、第６ｂ層（上）堆積後の耕作によって削られた。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構４から出土

表Ⅳ－13　第６ｂ面関連土器埋納遺構一覧

遺構番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	図番号
					遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況		
土器埋納遺構３	86-1調査区 （府発Ⅲ）	ピット6004	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	直径40×15	埋土中位に埋納	12世紀末～13世紀初頭	—
土器埋納遺構４	86-1調査区 （府発Ⅲ）	土坑6026	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	50×30×51	土坑底面中央に正位で埋納	13世紀中頃	—
土器埋納遺構６	92-7調査区 （ⅩⅣ）	瓦器ピット1	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	一辺50×16	土坑底面南東寄りに正位で埋納	13世紀初頭	図Ⅳ－35：7



図Ⅳ－35　第６ａ層・第６ｂ面・層出土遺物

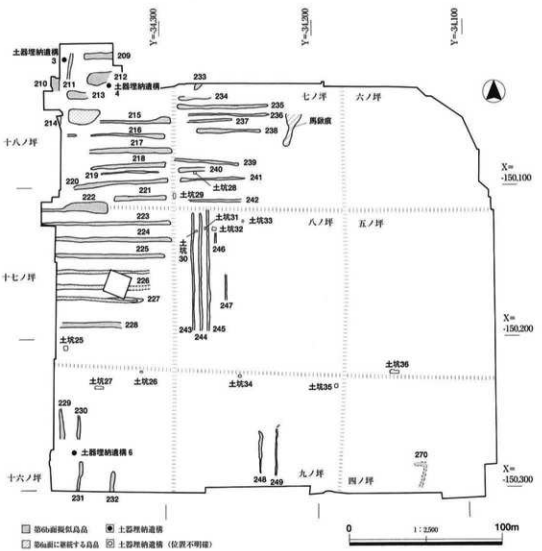
1～6：第６ａ層，7：土器埋納遺構6，8：第６ｂ層

の堆積過程と合わせて後にふれることにする。

また、第６ｂ層からは11世紀後半頃の土師器皿（８）等が出土した。

第６ｂ層の島畠の一部は第６ａ面の最終段階まで残存するが、多くはその段階には存在していない。この状況の原因は、第６層の堆積過程にあると思われる。そこで、この点を検討するために、第６ｂ層の堆積過程と遺構の関係について整理したい。

当地区南東部にあたる四ノ坪北西部には、第６ｂ層が比較的良好に残存していた。これは、第７面水路12から供給された砂礫と考えられる。この砂礫堆積後に形成された第６ａ層の直上からは、前述した瓦器椀の一括資料（12世紀中頃～後半）が検出されたが、その時期は後述する第７面水路12の最新遺物の時期と重なっている。このことから、この砂礫は第６ｂ層の中でも最も古いものと考えられる（第６ｂ層〔下〕）。一方、当地区北西部の島畠集中部は、南西－北東方向にのびている。府教委86-1調査区が第６ｂ層の堆積の末端に位置していたことを勘案すると、これは砂が堆積した範囲に対応する可能性が高い。堆積構造については観察されていないが、分布状況から破堤堆積の末端であった可能性が考えられ、その堆積によって生じた微高地を利用して島畠が造成されたと推定される。また、土器埋納遺構６（13世紀初め頃）は第７ｂ面の精査時に確認されたが、第７面の遺構の遺物よりも新しいため、本来は



図Ⅳ－34　第６ｂ面平面図

沢遺跡において「擬似畦畔B」と呼称されているもの（佐藤1999）と共通している（図Ⅳ－34）。

島畠の分布をみると、十七・十八ノ坪、七ノ坪西半、八ノ坪西端に集中する。また、島畠248・249は89-3調査区の調査段階では第８ａ面の遺構とされたが、第８ａ面の畠との関係が不自然であり、再検討が必要となっていた。断面図および写真をみると、これは第７層の上が盛り上がるものとして認識されたようであり、89-3調査区では第７面を調査しなかったために、第８ａ面精査段階まで残されたようである。写真では細かな点までチェックできないが、この調査区では第６ａ層と第７層が接しており、第７面の遺存状況はよくないと考えられるため、ここでは一応、第６ｂ面の遺構に含めている。

その他、この面に帰属する遺構としては土坑がある。このうち、土坑25～35は一辺２ｍ、深さ１ｍ程度のもので、人為的に埋め戻されたものである。また、土坑36は長辺6.5m、短辺２ｍ、深さ１ｍを測り、泥質のブロック土で埋積されている。この土坑では埋没時の環境を考えるために珪藻分析を実施した（第Ⅴ章２－１）が、堆積環境を示すようなデータは得られなかった。

表Ⅳ－12　第６ｂ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畠209	86-1　—
島畠210	86-1　—
島畠211	86-1　—
島畠212	86-1　—
島畠213	86-1　—
島畠214	90-1　—
島畠215	90-2(H2)　島畑19
島畠216	90-2(H2)　島畑20
	90-1　—
島畠217	90-2(H2)　島畑21
島畠218	90-3(A)　島畑20
島畠219	90-3(A)　畦畔18
島畠220	90-3(A)　島畑21
	87-3　—
島畠221	90-3(A)　島畑22
島畠222	90-3(A)　島畑23
	87-3　—
島畠223	90-3(A)　島畑24
	87-3　—
島畠224	90-3(A)　島畑25
	87-3　—
島畠225	87-3　—
島畠226	90-1　—
島畠227	90-1　—
島畠228	90-1　—
島畠229	90-1　島畑89
島畠230	90-1　島畑90
島畠231	92-7　—
島畠232	92-7　—
島畠233	90-2(H3)　島畑45
島畠234	90-2(H3)　島畑44
島畠235	90-2(H3)　島畑43
島畠236	90-2(H3)　島畑42
島畠237	90-2(H3)　島畑41
島畠238	90-2(H3)　島畑40

遺構番号	概要における遺構番号
島畠239	90-3(A)　島畑26
	90-3(B)　島畑3
島畠240	90-3(A)　島畑27
	90-3(B)　島畑10
島畠241	90-3(A)　島畑28
	90-3(B)　島畑11
島畠242	90-3(B)　島畑12
島畠243	89-1　畦畔15
	90-3(B)　島畑13
島畠244	89-1　畦畔14
	90-3(B)　島畑14
島畠245	89-1　畦畔13
	89-2　畦畔15
	90-3(B)　島畑15
島畠246	90-3(B)　島畑16
島畠247	89-1　畦畔12
島畠248	89-3　大畦畔4
島畠249	89-3　畦畔12
島畠270	93-1　—
土器埋納遺構2	86-1　土坑6011
土器埋納遺構3	86-1　ピット6004
土器埋納遺構4	86-1　土坑6026
土器埋納遺構5	90-2(H3)　—
土器埋納遺構6	92-7　ピット1
土坑25	90-1　土坑96
土坑26	90-1　土坑35
土坑27	90-1　土坑199
土坑28	90-3(B)　土坑5
土坑29	90-3(A)　土坑3
土坑30	90-3(B)　土坑6
土坑31	90-3(B)　土坑7
土坑32	90-3(B)　土坑4
土坑33	90-3(B)　土坑8
土坑34	89-2　土坑3
土坑35	93-1　土坑8
土坑36	93-1　土坑9

さらに、第７層上面で認識された農耕具痕の多くは、深さが数cm しかないことからみて、第７面段階の耕作に伴うものではなく、この面の段階のものと考えられる。鋤ないし鍬の痕跡がこの面の島畠の周囲を巡る形で検出された（図版13－２）ことも、その推定を補強する。さらに、七ノ坪東部では、馬鍬の歯の痕跡と考えられる平行する筋状の落ちも検出された（カラー図版15、図版13－３）。

なお当遺跡では、杯・椀などの土器を１個体ないし数個体埋納した古代～中世の土坑が検出されている。こうした土器埋納遺構のうち、第７ｂ面（砂層の上）の精査時に検出されたものの中に、土器の時期からみて第６ａ層の耕作期間中に埋納されたと思われるものが含まれている。そこで、土器埋納遺構出土土器の時期と、第７面や第６ａ面から出土した土器の時期を比較し、第６ｂ面に帰属する可能性が高いもの３基を図Ⅳ－34・表Ⅳ－13に示した。これらについては、第６層の堆積過程の整理と合わせて評価したい。

土器埋納遺構のうち、当センター調査区で検出されたものは土器埋納遺構６である。この遺構からは瓦器椀（図Ⅳ－35：７）が出土した。13世紀初め頃のものである。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構３・４の時期は概報に記載されているが、概報刊行後に瓦器椀の暦年代が見直されることになったため、写真（府発Ⅲ：図版32－１～３）を見て再検討した。その結果については、第６ｂ層

表Ⅳ－11　第６ａ面出土動物遺存体一覧

番号	遺構	調査区	調査時の遺構名称	時期	遺物番号	種名	部位	左右	部分	観察
1	第６a面・水路10	93-1	坪境27	12世紀後半～14世紀？	1138	不明				
2					1143	不明				
3					1154	スッポン	甲板			
4					1166	ウマ	腓骨			
5					1167	ウマ	下顎骨			オス12～13才。k_{13}C
6					1168	不明				
7					1169	ウマ	臼歯	左下		
8					1193	不明				ウシ／ウマか？
9					1229－a	ウマ	中足骨			解体痕あり
10					1229－b	ウマ	踵骨	右		
11					1295	不明				
12					1332	ウマ	中手骨			解体痕あり。最大長225mm＋α

13世紀ぐらいのもので、瓦器椀は12世紀中頃～14世紀初めまでのものと、時間幅がある。土師器皿も11世紀後半から14世紀ぐらいのものと時間幅がある。土器の時期としては14世紀前半までにおさまると思われる。

また図Ⅳ－35：１～５は、90-3調査区Ａトレンチにおいて第６ｂ層から出土したと報告されたものである（概要Ⅱ，p.26）。しかし、この調査区では第６ｂ層がほとんど残存しておらず、出土地区との照合の結果、第６ａ層から出土したものである可能性が高くなった。その中には瓦器皿（１）・椀（２）、中国製白磁碗（３）、土師器台付皿（４）、土師器皿（５）、土錘（６）等がある。

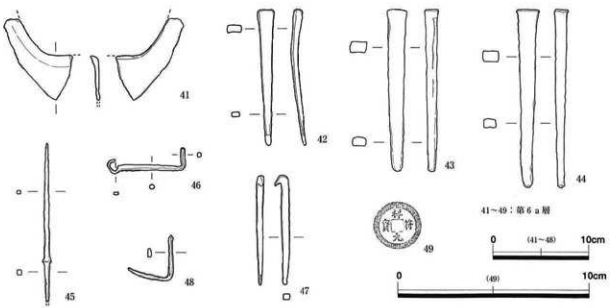
白磁碗は13世紀第１四半期頃のものである。また、瓦器椀は11世紀末～12世紀前半頃のもので、土師器皿は12世紀ぐらいのものである。また土錘は棒状有孔で、形態から古代以前のものと思われる。

鉄製品は犂先（41）、馬鍬の歯（42～44）、鎌（45）、煽止（46）、釘（47）、不明品（48）である。煽止は扉や戸を開けたまま壁や柱に固定する金具である。銭貨は北宋銭の祥符元寶（初鋳1009年）である。

第６ａ層の時期については、その母材となった氾濫・破堤堆積物の堆積過程と遺物との関係を丁寧に検討する必要があり、第６ｂ層の記述の後に整理することにしたい。

第６ｂ面　この面の状況は、島畠の起源に関する従来の議論を理解するために重要な意味を持っている。ここでは層序・遺構についての再検討をおこない、後の検討にあたっての前提としたい。

まず、90-2・90-3調査区などにおいて、第７面で検出されたとされる島畠の帰属面の問題を検討する。これらについては高さが数cm程度しかなく、島畠の上から畦畔が検出されるなど、検討が必要とされていた。この点について、井上（1999）は府教委86-1調査区の状況を検討し、同調査区「第５遺構面」が島状に残存した部分は第６ｂ面の島畠の痕跡であることを明らかにした。さらに、部分的に確認された第６ａ層（粗砂が多く混じる）の上に第４ａ層が直接のっているにもかかわらず、第４ａ層には砂がほとんど含まれていないことから、第６ａ層が第４ａ層の耕作によって消滅したのではなく、第６ｂ層（砂）の堆積域の末端部にあたっていたため、第６ｂ層（砂）が堆積しなかった部分では第７層を耕作し続けた状態に近かった可能性が高いことを示した。ただし、この時は他の調査区の検討が不十分であり、90-2・90-3調査区のものを第７面から存在し、第６ｂ層堆積後にも踏襲されると考えていた。しかし、さらに検討を進めたところ、図版13－４に示すとおり、島畠の上で検出された畦畔が砂でパックされていたことが判明した。その砂（第６ｂ層）は島畠とされた部分にのみ顕著に残存しており、調査時に島畠とされたものは、この砂を芯にして造成された島畠の痕跡と考えられる。この成因は、宮城県富



図Ⅳ－33　第６ａ面遺構・第６ａ層出土遺物②

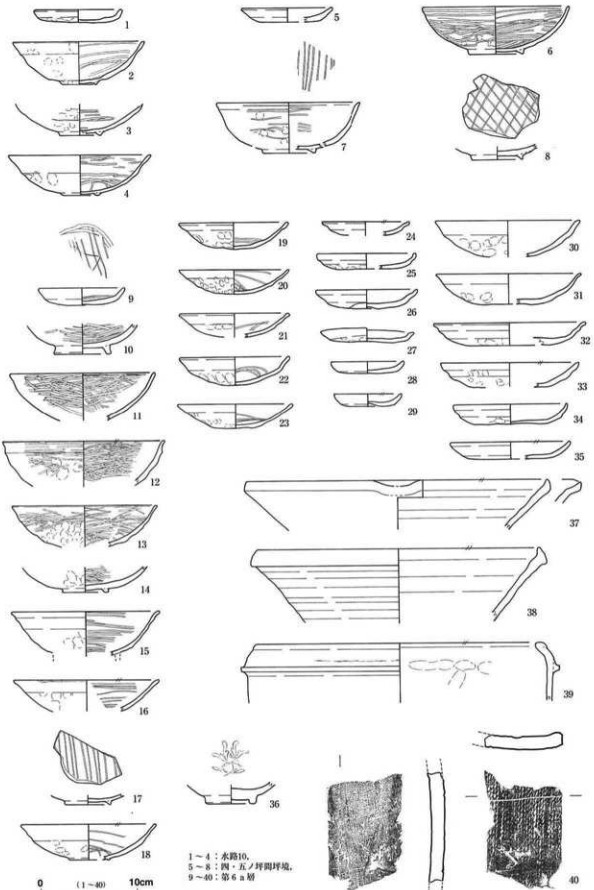
坪で検出されたものの中には、後述する第６ｂ面の島畠を踏襲し、第４ａ面まで踏襲されるものもある。また、他のものについては、砂層を芯にして造成されるのではなく、盛土のみで造成されている。なお、十六ノ坪では畝間の溝と推定される小溝群が検出された（畠10）が、これは島畠168の芯となった砂でパックされた状態で検出された。畝幅は約１ｍを測る。さらに、四、五ノ坪では畦畔が検出されているが、これは第５ｂ層がわずかに残存した部分で検出されたものである。

遺物の出土状況として注目されるのは、四・五ノ坪間坪境畦畔の南側の状況である。この部分の第６ａ面直上からは、土師器皿（図Ⅳ－32：５）、瓦器椀（６～８）が出土した。後者は３個体がまとまって出土し（図版12－２）、前者はそこから若干離れた位置から出土した。この瓦器椀の一括資料は、第６ａ面の存続時期を推定する上で重要な資料である。また、水路10からも遺物が出土した。特に、杭列１・２付近の水路底からは骨がまとまって出土した（表Ⅳ－11）[2]。骨はウマのものが大半をしめており、中手骨、中足骨には解体痕が認められた。なお、第７面水路12においてもほぼ同じ位置から遺物がまとまって出土したが、両者は層位的にわかれて出土しており、第７面段階の骨を誤って掘り出したとは考えられない。また、第７面段階に出土した骨はスッポンの腹甲板しかないため、本来下層に含まれていたウマの骨が巻き上げられたとは考えにくい。これらのことから、ウマの骨はもともと水路10埋土に含まれていたと判断した。

次に、第６ａ面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－32：１～８）。水路10からは、土師器皿（１）、瓦器椀（２～４）等が出土した。13世紀前半～中頃のものと思われる。（３）には重ね焼きの痕跡がある。四･五ノ坪間坪境畦畔脇の第６ａ面直上からは、前述のように、土師器皿（５）、瓦器椀（６～８）が出土した。土師器皿は13世紀ぐらいのものである。また、まとまって出土した瓦器椀は12世紀中頃～後半のものと思われる。

次に、第６ａ層から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－32・33）。この層からは、瓦器皿（９）・椀（10～23）、土師器皿（24～35）・羽釜（39）、中国製磁器（36）、瓦質？片口鉢（37）、須恵器片口鉢（38）、平瓦（40）、鉄製品（41～48）、銭貨（49）等が出土した。

中国製磁器は龍泉窯系青磁碗で、内底面に陰印刻草花文があり、13世紀後半のものである。瓦器皿は



図Ⅳ－32　第6a面遺構・第6a層出土遺物①

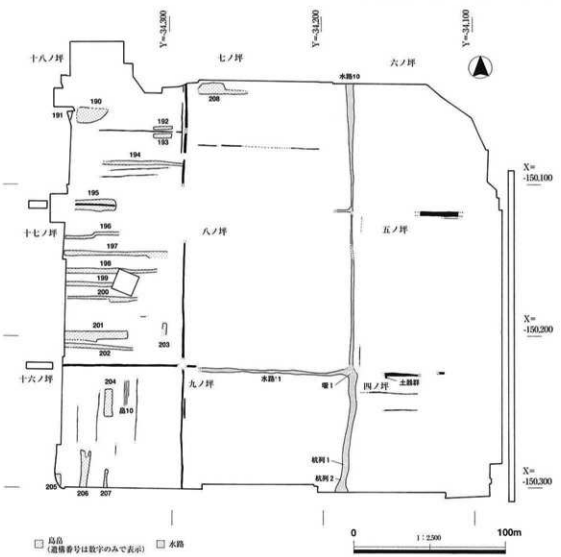
表Ⅳ－10　第６ａ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畠190	90-2(H2)　島畑16
	88-1　島畑801
島畠191	90-1　島畑42
島畠192	90-2(H2)　島畑17
島畠193	90-2(H2)　島畑18
島畠194	90-3(A)　島畑19
島畠195	90-3(A)　島畑18
島畠196	90-3(A)　島畑17
	90-1　島畑43
	87-3　島畑703
島畠197	90-1　島畑44
	87-3　島畑704
島畠198	90-1　島畑60
島畠199	90-1　島畑61
島畠200	90-1　島畑63
島畠201	90-1　島畑64
島畠202	90-1　島畑67
島畠203	90-1　島畑46

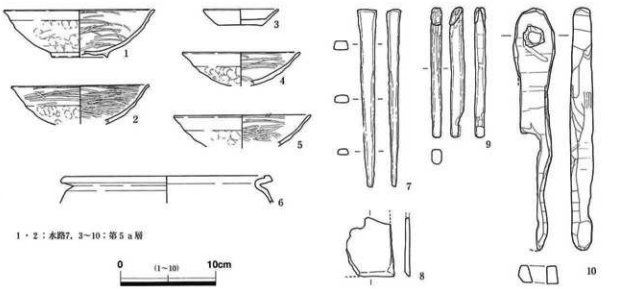
遺構番号	概要における遺構番号
島畠204	90-1　島畑88
島畠205	92-7　島畑30
島畠206	92-7　島畑31
島畠207	92-7　島畑32
島畠208	90-2(H4)　島畑39
水路10	90-2(H4)　溝152
	90-3(C)　坪境13
	90-3(C)　坪境16
	93-1　坪境27
	93-2(B)　溝23
	93-2(C)　溝61
水路11	89-2　坪境溝
	93-1　坪境28
堰1	93-1　堰1
杭列1	93-1　堰9
杭列2	93-1　杭列12
畠10	90-1　畝群23
土器群	93-1　土器群出土地点

放置されたため、その間の土壌化・撹乱によって明確にはできなかったが、やはり水路10から分岐する水路があった可能性が高い。ただし、その分岐点からは堰は検出されていない。さらに、水路10の南部では水路を横断して打設された杭列１・２が検出された。その性格については明らかにできないが、その南側の調査区外にある坪境交差点と関係する可能性もある。なお、その他の坪境には大畦畔が造成されていた。

その他の遺構については、当地区西部を中心に検出されている。この面で検出された島畠は18基で、十七ノ坪・十八ノ



図Ⅳ－31　第６ａ面平面図



図Ⅳ－30　第５ａ面遺構・第５ａ層出土遺物

ものは、第７面水路12→第６ａ面水路10→第５ａ面水路７と、幅を減じながら踏襲されたものである。また、島畠は六ノ坪から４基、四ノ坪から１基検出された。前者は第４ａ面には踏襲されない。また、後者は若干位置がずれるものの、第４ａ面の島畠183に踏襲される（図Ⅳ－21）。造成方法については、前者に属する島畠185～187、後者に属する島畠189が第５ｂ層の砂層を芯にして造成されたことを確認した。

なお、第６ａ面精査中に確認された土坑の中に、埋土に第５ａ層のブロックが含まれることから、第５ｂ面に帰属すると考えられるものが３基存在していた（土坑22～24）。いずれも一辺２ｍ、深さ１ｍ程度のもので、壁はほぼ垂直に立ち上がる（図版11－６）。埋土はシルトブロックと砂が入り混じった土であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

次に、第５ａ面の遺構と第５ａ層から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－30）。水路７からは瓦器椀（１・２）等が出土している。時期は12世紀末～13世紀前半のものである。この遺物は本来、第６ａ面水路10の中に含まれていた可能性がある。第５ａ層からは、鉄製馬鍬の歯（７）・不明品（８）、男根状木製品（９）・不明木製品（10）等が出土した。男根状木製品は四・五・八・九ノ坪交点付近から出土したもので、写実的に作られている。また、不明木製品には孔が１ヶ所残存するが、あと２ヶ所穿けられていたと思われ、何かの部材と思われる。第７面水路12の図Ⅳ－40：45も同様なものである。

また、取り上げの不備等により断定できないが、第５ａ層から出土したと考えられるものとして、中国製白磁皿（３）、瓦器椀（４・５）、土師器羽釜（６）等がある。時期は13～14世紀のものである。

これらの遺物から第５ａ面の時期を推定するのは難しいが、上下の層準の状況も勘案して、14世紀に年代の１点を有し、15世紀に一部かかる可能性がある、と推定しておきたい。

第６ａ面　この面は、西半部では第４ａ層を、東半部では第５ａ層を除去して検出した。上層の耕作の影響により遺存状況が悪かったため、等高線図は作成しなかった。

この面で検出された遺構としては、水路、畦畔、島畠等がある。まず当地区東部では、四・九ノ坪、五・八ノ坪、六・七ノ坪間を貫く水路10が検出された。これは第７面水路12が幅を狭めて踏襲されたものである。八・九ノ坪間も水路であるが（水路11）、これは水路10から分岐するものであり、その分岐点には堰が設置されていた（堰１）。また、七・八ノ坪間については、府教委Ｅトレンチ調査後にしばらく

表Ⅳ－9　第５ａ面遺構名称

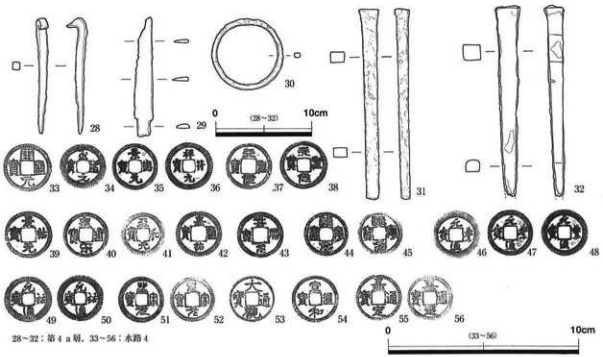
遺構番号	概要における遺構番号
島畠185	90-2(H4)　大畦畔36
島畠186	90-2(H4)　大畦畔37
島畠187	90-2(H4)　大畦畔38
島畠188	90-3(C)　島畠7
	93-2(A)　島畠14
島畠189	93-1　島畠42
水路6	90-3(C)　坪境14
	93-2(A)　溝21
水路7	93-1　坪境23
	93-2(B)　溝22
	93-2(D)　溝55
水路8	93-1　坪境25
水路9	93-1　坪境22
	Dトレンチ　－
土坑22	93-1　土坑5
土坑23	93-1　土坑7
土坑24	93-1　土坑20

断面図を再検討し、この点について整理した。

まず93-2調査区の「島畑25」については、第３ｂ層の堆積以後に造成されたことが、断面図の記載から明らかになった。また、90-3調査区Ｃトレンチにあたる五・六ノ坪間坪境は遺構が検出されなかったとされているが、断面の検討により、第６ａ面に対比される「第８面」で確認した「坪境14」と呼ばれた水路が、この面に帰属することが明らかになった。この調査区では島畠188の帰属面を追究して第５ａ面を認識しており、その他の遺構の帰属に関する検討が不十分であったと考えられる。さらに、90-2（Ｈ４）調査区「第10面」は第７面に対応するが、この面では島畠が３基検出されたと報告されている（図Ⅳ－37:上段、図版11－５）。しかし、第７面の島畠とされた部分の直上に、第５ｂ層の砂が堆積しているのは不可解である。この砂の下面は旧地表面にほぼ相当すると考えられるが、図では砂の下面が第６ａ面と第７面にまたがってしまっている。これが正しいとすると、第６ａ層段階に第７面を残して耕作したことになるが、砂の下面から推定される地表面は平坦であるから、第６ａ面段階に不自然な耕作方法を想定しなければならない。断面図の記載や写真を参考にすると、レンズ状に残存した第５ｂ層の下の部分が周囲に比べて若干違った色に見えたために、線引きを誤ってしまったと考えられる。なお、この部分の第５ｂ層は平面では帯状に残存し、10ｍ程度の間隔を置いて並んでいるため、第５ａ面の島畠の芯であった可能性が高い。これらの島畠の盛土は第４ａ面の耕作によって削られたと思われる。図Ⅳ－29では、以上の認識にもとづいて島畠185～187を図示した。さらに、92-6調査区では第６ａ面に対応する「第10面」付近から、完形の白磁皿（図Ⅳ－30：３）が出土している。これについて写真で出土状況を確認したところ、若干浮いた状態であったことが判明したため、第５ａ層に含まれていた可能性が高いと判断した。

図Ⅳ－29　第５ａ面平面図

こうした整理にもとづいて、この面に帰属する遺構について説明することにする。まず坪境については、四・九ノ坪間が畦畔、五・六ノ坪間、五・八ノ坪間、八・九ノ坪間、四・五ノ坪間が水路であった（水路６～９）。このうち五･八ノ坪間の



図Ⅳ－28　第４ａ面遺構・第４ａ層出土遺物②

次に、第４ａ面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－27・28）。島畠179盛土内からは瓦質甕（図Ⅳ－27：15）の小片が出土した。14世紀ぐらいのものである。島畠184盛土内からは瓦質羽釜（図Ⅳ－27：24）が出土した。15世紀ぐらいのものである。また、水路４からは銭貨（図Ⅳ－28：33～56）がまとまって出土した（図版11－４）。(33）が唐銭（開元通寶）、(34～54）が北宋銭（至道元寶、景徳元寶、祥符元寶、天聖元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、嘉祐通寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、聖宋元寶、大観通寶、宣和通寶）、(55･56）が南宋銭（嘉定通寶）である。初鋳年は955～1208年であり、ばらつきがある。

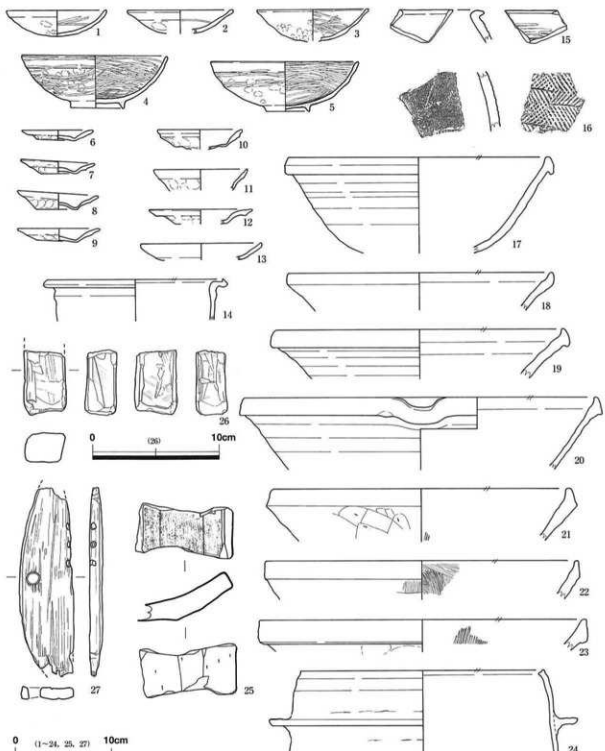
さらに、第４ａ層から出土した遺物には、土師器皿（６～11）、瓦器椀（１～５）、須恵器鉢（17～19）、瓦質擂鉢（21～23）、瓦？（25）、砥石（26）、不明木製品（27）、鉄製品（28～32）等がある。土師器皿は14～15世紀頃のものである。瓦器椀には12世紀代のものと14世紀前半のものがある。瓦器椀のうち、残りのよいものは五・八ノ坪間坪境付近から出土しており、もともと下層の水路に帰属していた可能性が考えられる。須恵器鉢は13世紀代のもの、須恵器甕は14世紀後半～15世紀前葉のものと思われ、東播系のものである。(16）は矢羽根状のタタキである。瓦質擂鉢は14～15世紀のものと思われ、土器の時期は15世紀前半までにおさまる。

不明木製品（27）は、何かを差し込んでいたのか、髄縁に孔が３個現存している。鉄製品は（28）が釘、(29）が刀、(30）は不明だが轡の一部と思われるもので、(31）・(32）が馬鍬の歯である。砥石は流紋岩製で、４面使用している。なお、取り上げ時の不備により断定できないが、第４ａ層出土の可能性がある遺物に、土師器皿（12）・羽釜（14）、須恵器鉢（20）等がある。13～15世紀のものである。

以上のような遺物の状況と、第３ｂ層の堆積時期を合わせて考えると、第４ａ層の耕作時期は15世紀代を中心とし、15世紀後半代に第３ｂ層の堆積によって埋没したと推定される。

第５ａ面　第５ａ層は当地区東部にのみ残存していた。ただし、この面は調査の終わりごろになって新たに認識され、遺存状況も悪かったため、遺構の帰属に関して混乱が生じてしまった。そこで今回、

群が検出された。これについても畝間の溝の可能性があると判断し、畠跡とした。畝幅は1～1.5mを測る。池島Ⅰ期地区の第4a面では、こうした畠跡が広範囲にわたって検出されている。当地区と池島Ⅰ期地区の第4a面は同時に埋没したのではない可能性が高いが、中世後期における土地利用のあり方を考える上で重要な資料といえる。その他、七ノ坪において、第3b層で埋没した井戸49を検出した。これは素掘りの井戸である。



図Ⅳ－27　第4a面遺構・第4a層出土遺物①

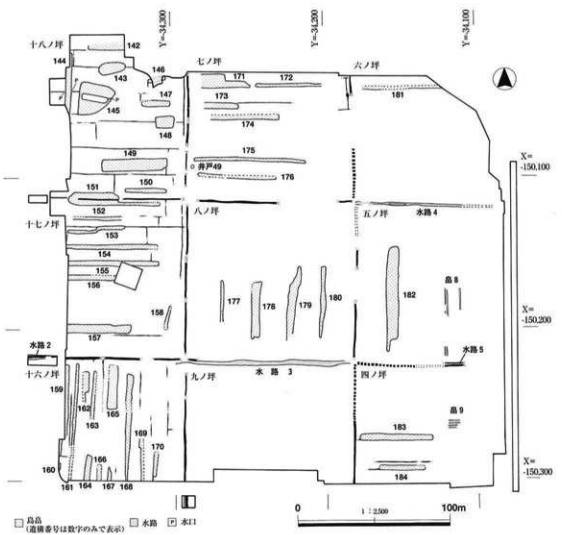
1～11・13・16～19・21～23・25～27：第4a層，12・14・20：第4a層？，15：島島179，24：島島184

第４ａ面　第３ｂ層を除去して検出した面である。第３ｂ層は当地区西側では厚く堆積していたものの、東側ではほとんど残存しておらず、第３面島畠の下にのみ残存していた。したがって、この面の遺構配置は明確にできたものの、第３面段階の耕作の影響を受けた部分が多く、等高線が本来の起伏を表しているとは言い難いため、等高線図は作成しなかった。

この面で検出された遺構としては、水路、畦畔、島畠等がある。坪境においては、八・九ノ坪間で水路３を検出した。水路３は十六・十七ノ坪間坪境のほうにものびているが、この坪境の西端で検出された水路２と接続していたかどうかは不明である。また、五・六ノ坪間では水路４を検出した。さらに四・五ノ坪間では大畦畔の北側に小畦畔が造成され、両者の間が水路として利用されたと考えられる（水路５）。その他の坪境では大畦畔が検出されたが、六・七ノ坪間、七・十八ノ坪間、八・十七ノ坪間では大畦畔に平行して小畦畔が設けられ、細長い水田区画が作られていた。

また、島畠は43基検出された。それらは当地区西側の七・十八・十七・十六ノ坪に多く認められ、四・五・六・八ノ坪にも若干存在していた。この面の島畠のうち、砂層を芯にして造成されたものは島畠168、178～180、183のみであり、大半は盛土のみによって造成されていた。

なお、四・五ノ坪では、第３ｂ層が第３面の島畠の芯に利用されて残存していた部分において、小溝



図Ⅳ－26　第４ａ面平面図

Y＝－36,360ライン断面において、「掘田埋土」の上に「掘田内作土」が存在したとされている（概要ⅩⅡ,p.11,pp.13-14）。この部分を示したのが図版10－6である。この作土は埋没した土坑の上に形成されたもので、土坑の影響で周囲よりもやや低くなっている（埋没後の沈下の可能性もある）が、第3－2a層とみてよいと思われる。以上のことから、これらの土坑が掘込田である可能性はほとんどないと判断される。この土坑の掘削の目的については明らかにできないが、島畠が集中して認められる微高地Aの末端部に存在するという立地にも注意しつつ、今後類例が調査されるのを待ちたい。

次に、第3－2a層～第3－4a層関連の出土遺物を列挙する（図Ⅳ－24）。第3－2a面島畠83作土・盛土内からは、13世紀前半頃の瓦器椀（1）、滑石製石鍋（2）等が出土した。石鍋も13世紀ぐらいのものである。第3－2a層からは、土師器皿（3～5）、砥石（7）、柿経（8）等が出土した。土師器皿は13～16世紀と時期がばらつく。柿経は『法華経』第5巻の一節「生故然（後）乃得成菩」である。砥石は流紋岩製で4面使用している。第3－3a～4a層からは、木製下駄（9）、鉄製馬鍬の歯（10）等が出土した。また、第3－4a層からは、14世紀ぐらいの時期の土師器皿（6）等が出土した。

表Ⅳ－8　第4a面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
島畠142	86-1　島畑4001
島畠143	86-1　島畑4005
島畠144	90-1　島畑33
	86-1　島畑4002
島畠145	90-2(H2)　島畑15
	86-1　島畑4003・4004
島畠146	90-2(H2)　島畑12
	86-1　島畑4006
島畠147	90-2(H2)　島畑13
島畠148	90-2(H2)　島畑14
島畠149	90-3(A)　－
島畠150	86-2　島畑502
島畠151	90-3(A)　島畑12
	86-2　坪掘畦畔504
島畠152	90-1　島畑34
	90-3(A)　島畑11
	87-3　島畑702
島畠153	90-1　島畑35
	90-3(A)　島畑10
	87-3　島畑703
島畠154	87-3　島畑704
島畠155	90-1　島畑55
島畠156	90-1　島畑56
島畠157	90-1　島畑58
島畠158	90-1　島畑45
島畠159	90-1　島畑81
	92-7　島畑17
島畠160	92-7　島畑18
島畠161	90-1　島畑82
島畠162	90-1　島畑83
島畠163	90-1　島畑84
島畠164	92-7　島畑19
島畠165	90-1　島畑85
島畠166	92-7　－
島畠167	92-7　島畑20
島畠168	90-1　島畑86
	92-7　島畑21
島畠169	92-7　島畑22
島畠170	92-7　島畑23
島畠171	90-2(H3)　島畑37
島畠172	90-2(H3)　大畦畔4
島畠173	90-2(H3)　島畑38
島畠174	90-2(H3)　島畑39
島畠175	90-3(B)　島畑8
島畠176	90-3(B)　島畑9
	86-2　島畑501
島畠177	89-1　島畑8
島畠178	89-1　島畑7
	89-2　島畑19
島畠179	89-1　島畑6
	89-2　島畑18
島畠180	89-1　島畑5
	89-2　島畑17
島畠181	90-2(H4)　大畦畔34・35
島畠182	90-3(C)　島畑24
	93-1　島畑24
	93-2(B)　島畑10
	93-2(C)　島畑24
	87-2　島状遺構801
島畠183	93-1　島畑40
島畠184	93-1　島畑41
島8	88-2　島903・904・905
島9	88-2　島902
水路2	Gトレンチ　－
水路3	89-2　坪境溝
	93-1　坪境21
水路4	90-3(C)　坪境10
	93-2(A)　溝19
	90-5　溝74
水路5	88-2　坪境溝901
井戸49	90-3(A)　井戸2

第3b層　氾濫・破堤堆積物と考えられる第3b層から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－25）。出土したのは、陶器茶碗（3）、土師器皿（1）、瓦器椀（2）、瓦質羽釜（4・5）・擂鉢（6）等である。

陶器茶碗は瀬戸窯系灰釉で、トチン跡がある。15世紀後半頃のものである。土師器皿は14世紀ぐらい、瓦器椀は13世紀末～14世紀初めのもの、瓦質土器類は15世紀ぐらいのものである。

このように、第3b層から出土した土器は15世紀後半までのものである。前後の層準から出土した遺物のあり方と合わせて考えると、この層の堆積時期は15世紀後半代と推定される。

第3b層・第2b層出土遺物の時期からみて、第3－4a～3－1a層の時期は15世紀後半～16世紀後半であり、氾濫堆積物が供給されるたびに復旧され、耕作が続けられたと考えられる。

形成されたことを意味する。

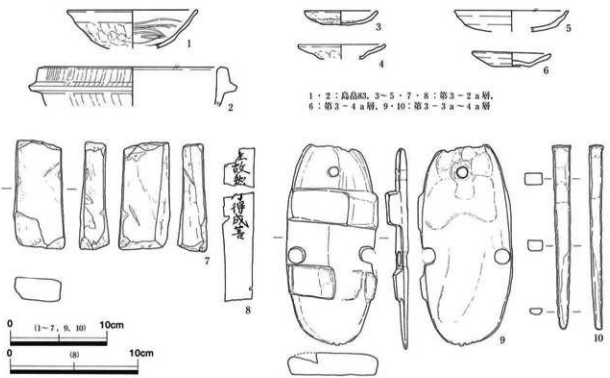
また、この面で特徴的なのは、島畠が氾濫堆積物の供給に伴って拡張されていく過程が明瞭に観察できたことである（図Ⅳ－22・23）。島畠は第３ｂ層（氾濫・破堤堆積物）を芯とするものが多いが、第４ａ面の島畠を踏襲する形で造成されたものもある。ただし、拡張の過程を見落としている調査区が少なくないため、拡張の過程を平面図に表すことは困難である。概要ＸＶでは93-1調査区における島畠の変遷を表した平面図が提示されているので、それを修正して島畠の拡張過程を示しておく（図Ⅳ－21）。この調査区では第５ａ面から島畠が造成されているが、第３ｂ層の堆積を契機にして島畠が増加し、第３－２ａ面では四ノ坪にあたる範囲において、７割以上の面積を島畠がしめるようになる。

なお、第３－２ａ面島畠125、島畠118とその前身の第３－３ａ・４ａ面島畠271の作土・周辺の水田作土・氾濫堆積物を対象にして、花粉分析を実施した（図Ⅳ－20、第Ⅴ章２－１）。その結果、島畠作土をはじめ、ほとんどの層準からソバ属の花粉が検出された。また、ゴマ属の花粉が検出された層準もあった。試料採取地点かどうかは難しいが、これらが周辺で栽培されていた可能性が考えられる。

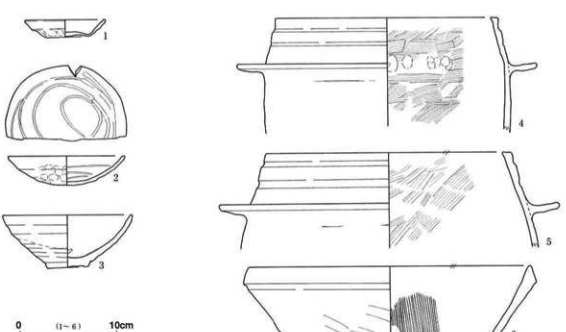
また、田面と同じレベルの場所で小溝群が検出された部分もあった。これについては畝間の溝の可能性があると判断し、畠跡と推定した（畠１～７、図版９－３・４）。こうした遺構は、八ノ坪の南東、九ノ坪の西端と東端、十六ノ坪の島畠の脇、六ノ坪の島畠間で検出された。畝幅は、畠１が1.2m、畠３が0.6～１m、畠２・４が約１m、畠５～７が0.5～0.7mを測る。いずれも残存高は数cmであるが、これについては圧密の影響を考慮する必要がある。

なお、第３層掘削中に土坑が８基検出された。これらは基本的に第３－２ｂ面に帰属すると考えられる。このうち、土坑50は平面形が長辺約２m、短辺約１mの長方形を呈し、深さは約１mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、砂とシルトブロックの入り混じった土で埋められていた。また、土坑20・21は、概要では「掘田」と解釈されている（概要ＸⅡ，p.45）。前者は長さ63m、幅４m、深さ0.3～0.4mを測るもので、後者は調査区外にのびるため長さは不明であるものの、幅や深さは前者と共通する。また、土坑16・18・19についても、やや確証に欠けるとしながら、やはり「掘田」としている。ここで問題なのは、「掘田」とは何を指すのか、ということである。少なくとも、第Ⅵ章４で言及する掘上田に伴う掘り潰れの井路（図Ⅵ－12）とは全く異なる。概報の記述を参考にすると、一段深く掘り下げた部分を水田として利用する「掘込田」（能登1997）のことのようであり、それは「極度の渇水に対する取組」であるとされる。しかしながら、この土坑底面が水田として利用されたとする根拠は明確ではない。土坑の底面に農耕具痕が残っていることが根拠のひとつにあげられているが、この農耕具痕は土坑底面から数cmしか深さがなく、土坑の埋土が中に入り込んでいる。このことからみて、これらは土坑底面の耕作に伴うものではなく、土坑掘削時につけられた掘削具の刃先の痕跡と考えられる。また、掘削は砂混じりシルトの第４ａ層まで到達しているにもかかわらず、埋土には砂が多く、砂の間にシルトブロックが含まれていた（図版10－６・７）。この砂は第３ｂ層起源のものと考えられるが、掘り返した土でそのまま埋め戻したとすれば、もっとシルトブロックが含まれていてもよいのではなかろうか。さらに、埋土の状況が第１ｂ面土坑群５に類似していることも注意される。これらのことからみて、この土坑は下層のシルトを採取した痕跡の可能性が高い。概報では、「掘田」の中で井戸や畦畔が検出されたとされている。しかし、土坑20西端にある円形の掘り込みを井戸とする積極的な根拠は存在しないし、土坑20・21内で検出されたとされる「畦畔」は、写真で確認したところ、その粒度からみて第４ａ層を掘り残したものである可能性が高い。これは土坑掘削の方法に関わるものではなかろうか。また、土坑21については、

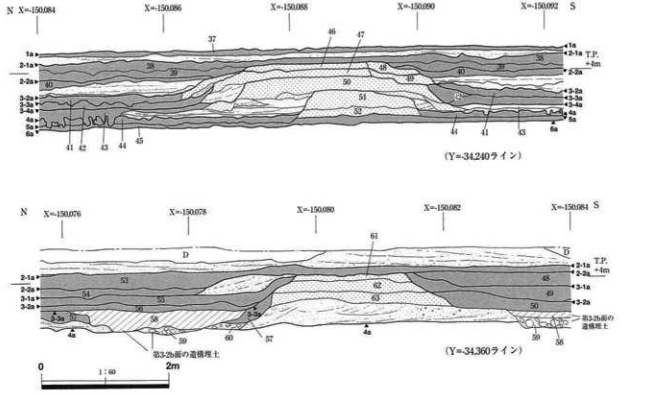
小溝群は、高まりの上ではなく、田面と同レベルの場所に立地している。このように、島畠が少ない部分では別の土地利用のあり方が推定できるため、島畠の集中部分は本来のあり方を示すと考えられる。また、この面の島畠の多くは第３ｂ層を芯にして造成されており、この砂礫層が厚く堆積した部分を中心に島畠が造成されたと思われる。表層微地形と比較すると、島畠が集中する部分は微高地ＡとＣの末端部にほぼ一致するが、このことは、当地区周辺における表層微地形の原型が第３ｂ層の堆積によって



図Ⅳ－24　第３－２ａ面遺構・第３－２ａ・３ａ・４ａ層出土遺物

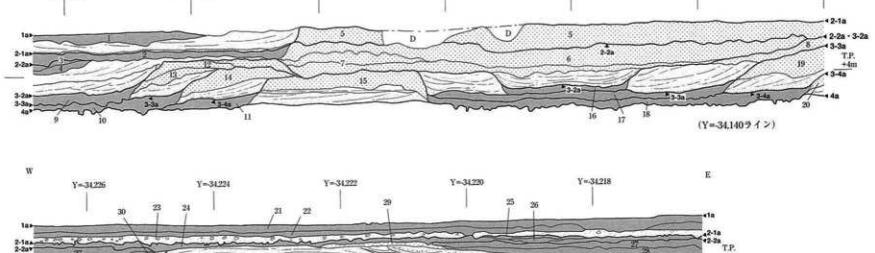


図Ⅳ－25　第３ｂ層出土遺物



37	5Y7/3	浅黄	粗砂混じりシルト	撹乱度強	※1a層
38	5G7/1	明緑灰	中砂～細礫混じりシルト	撹乱度強	※2-1a層
39	5Y5/2	灰オリーブ	細砂混じりシルト	撹乱度強	※2-1a層
40	2.5GY4/1	暗オリーブ灰	細砂混じりシルト	撹乱度強	※2-2a層
41	10Y6/1	灰	シルトブロック・細～中砂	撹乱度中	※3-2a層
42	5B4/1	暗青灰	細～中砂混じりシルト	撹乱度中	※3-3a層
43	5Y4/2	灰オリーブ	シルトブロック・細砂～細礫	撹乱度中	※3-4a層
44	5BG4/1	暗青灰	シルト	撹乱度強？	※4a層
45	7.5Y4/1	灰	シルト	撹乱度強？	※5a層
46	5Y5/3	灰オリーブ	中砂混じりシルト	撹乱度強	※3-2a面島畠作土
47	10YR5/4	にぶい黄褐	中砂混じりシルト	撹乱度強	※3-3a面島畠作土
48	7.5Y6/2	灰オリーブ	細砂・シルトブロック	撹乱度弱	※2-2a面島畠盛土
49	7.5Y6/1	灰	中砂混じりシルト	撹乱度中	※3-2a面島畠盛土
50	2.5Y6/4	にぶい黄	中砂混じりシルト	撹乱度強	※3-3a面島畠作土・盛土
51	10GY4/1	暗青灰	シルト	撹乱度強	※4a面島畠作土
52	10BG4/1	暗緑灰	シルト	撹乱度中	※4a面島畠盛土
53	10BG4/1	暗青灰	中～粗砂混じりシルト	撹乱度強	※2-1a層
54	5BG4/1	暗青灰	中砂混じりシルト	撹乱度強	※2-2a層
55	10BG4/1	暗青灰	シルトブロック・粗砂～細礫	撹乱度中	※3-1a層
56	10GY4/1	暗緑灰	粗砂～細礫混じりシルト	撹乱度中	※3-2a層
57	5Y4/3	暗オリーブ	シルトブロック・中砂～細礫	撹乱度中	※3-3a層
58	7.5GY4/1	暗緑灰	シルトブロック・中砂～細礫	撹乱度中	※3-2b面土坑埋土
59	10BG4/1	暗青灰	シルトブロック・中砂	撹乱度弱	※3-2b面土坑埋土
60	2.5Y6/6	明黄褐	シルトブロック・粗砂	撹乱度弱	※3-3a層
61	5Y4/3	暗オリーブ	粗砂～細礫混じりシルト	撹乱度中～強	※3-1a～3-3a面島畠作土・盛土
62	5B5/1	青灰	中～粗砂混じりシルト	撹乱度中～強	※3-1a～3-3a面島畠作土・盛土
63	5Y4/3	暗オリーブ	粗砂～細礫混じりシルト	撹乱度中	※3-1a～3-3a面島畠作土・盛土

図Ⅳ－23　第２－１ａ面～第４ａ面島畠断面図②



1	2.5Y6/2	灰黄	中砂～細礫混じり強細砂質シルト	攪乱度強	第1a層
2	5Y5/2	灰オリーブ	中砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第2-1a層
3	5Y5/2	灰オリーブ	粗砂混じりシルト	攪乱度強	第2-2a層
4	2.5Y6/2	灰黄	粗砂・シルトブロック	攪乱度中	第2-2a層
5	2.5Y6/3	にぶい黄	粗砂混じり細砂質シルト	攪乱度強	第2-1a面島畠作土
6	5Y6/2	灰オリーブ	中砂混じりシルト	攪乱度強	第2-2a面島畠作土
7	10YR5/4	にぶい黄褐	中砂混じりシルト	攪乱度強	第2-2a面島畠盛土
8	10YR4/4	褐	中～細砂・シルトブロック	攪乱度中	第3-2a面島畠作土・盛土
9	10GY6/1	暗緑灰	細礫混じりシルト	攪乱度中	第3-2a層
10	7.5Y4/2	灰オリーブ	シルトブロック・細砂	攪乱度中	第3-3a層
11	5G4/1	暗緑灰	粗砂・シルトブロック	攪乱度中	第3-4a層
12	2.5Y5/4	黄褐	中～細砂混じりシルト	攪乱度中	第3-2a面島畠作土
13	5YR4/8	赤褐	粗砂・シルトブロック	攪乱度弱	第3-2a面島畠盛土
14	2.5Y7/6	明黄褐	シルトブロック・中砂	攪乱度中	第3-2a面島畠盛土
15	2.5Y6/6	明黄褐	シルトブロック・中砂	攪乱度中	第3-4a面島畠盛土
16	2.5Y6/1	にぶい黄	シルトブロック・細砂	攪乱度中	第3-2a層
17	10GY4/1	暗緑灰	中砂混じりシルト	攪乱度中	第3-3a層
18	10GY4/1	暗緑灰	中砂混じりシルト	攪乱度中	第3-4a層
19	10YR5/4	にぶい黄褐	シルトブロック・中砂	攪乱度中	第3-3a面島畠作土・盛土
20	10YR3/6	明黄褐	シルトブロック・粗砂	攪乱度中	第3-4a面島畠作土・盛土
21	7.5Y5/1	灰	中砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第1a層
22	10Y5/1	灰	中砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第1a層
23	2.5Y7/6	明黄褐	シルトブロック・細砂	攪乱度中	第1a層（第1b層の構造を若干残す）
24	7.5Y6/2	灰オリーブ	粗砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第2-1a層
25	7.5Y5/1	灰	粗砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第2-1a層
26	2.5Y7/6	明黄褐	砂・シルトブロック	攪乱度中	第2-1a層
27	10GY5/1	緑灰	粗砂～細礫混じりシルト	攪乱度強	第2-2a層
28	10GY5/1	緑灰	粗砂～細礫質シルト	攪乱度強	第2-2a層
29	10GY5/1	緑灰	シルト		第2-2a面島畠盛土
30	10GY5/1	緑灰	粗砂・シルトブロック	攪乱度弱	第2-2a面遺構埋土
31	10GY4/1	緑灰	シルトブロック・中～粗砂	攪乱度中	第3-2a層
32	10G4/1	暗緑灰	粗砂混じりシルト	攪乱度中	第3-3a層
33	5BG4/1	暗青灰	シルトブロック・中～粗砂	攪乱度中	第3-4a層
34	10GY4/1	緑灰	中～細礫混じりシルト	攪乱度中～強	第3-2a・3a面島畠作土
35	5BG5/1	青灰	中砂混じりシルト	攪乱度中～強	第3-2a・3a面島畠盛土
36	2.5Y6/6	明黄褐	シルトブロック・中～粗砂	攪乱度中	第3-4a面島畠作土・盛土

図Ⅳ－22　第２－１ａ面～第４ａ面島畠断面図①

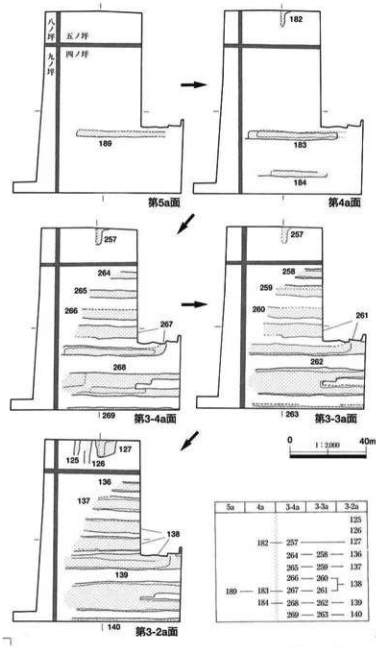
表Ⅳ－7　第３－３ａ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	備考
島畠257	93-1　島畑19	第3－3a～4a面
島畠258	93-1　島畑20	第3－3a面
島畠259	93-1　島畑21	
島畠260	93-1　島畑22	
島畠261	93-1　島畑23	
	93-1　島畑37	
島畠262	93-1　島畑38	
島畠263	93-1　島畑39	
島畠264	93-1　—	第3－4a面
島畠265	93-1　—	
島畠266	93-1　—	
島畠267	93-1　—	
島畠268	93-1　—	
島畠269	93-1　—	

堆積時の侵食痕と考えられる。同様の凹地は四ノ坪北西部でも認められ、島畠の一部が侵食されていた。さらに、当地区西半にある２つの坪境交差点も侵食されていた。

第３－２ａ面で検出された遺構としては、畦畔、島畠、畠などがある。坪境はすべて大畦畔であるが、侵食により流出してしまった部分もある。流出をまぬがれた四・五・八・九ノ坪交点では水口が検出された（図版９－５）。なお、八・九ノ坪間坪境では、89-2調査区で水路が検出されたと報告されている（概要Ⅰ，p.59）。しかしながら、図Ⅳ－22：下の断面図から読み取れるように、この部分では第３－２ａ層が流出して遺存していないばかりか、最も侵食された箇所では第３－３ａ・４ａ層すら流出していた。検出された水路は明瞭に認識できたようであるが、この調査区の情報だけではその帰属面を明らかにすることはできない。その後、89-2調査区の脇の90-1・93-1調査区において、第３－２ａ面で大畦畔が、第４ａ面では水路が検出されており、89-2調査区で検出された水路は第４ａ面に帰属する可能性が高い。第３－２ａ面では、この水路を埋めた砂を芯にして大畦畔が造成されていたと考えられる。

島畠の分布をみると、集中部分の存在が注目される。集中するのは、十六ノ坪の一部・十七・十八・七ノ坪と、四・五ノ坪・六ノ坪の南側の２つである。中央部が侵食されたため、結果としてそのような形になった、という意見も予想されるが、十六ノ坪～十七ノ坪の中央付近に南西－北東方向のラインを引くと、その北側に島畠が集中し、南側では畦畔が存在している。また、四ノ坪では島畠のしめる割合が水田の割合よりも多いが、坪境畦畔を挟んだ九ノ坪東部では畦畔および畠跡と考えられる小溝群が検出されている。この



図Ⅳ－21　第３－２ａ面～第５ａ面における島畠の変遷

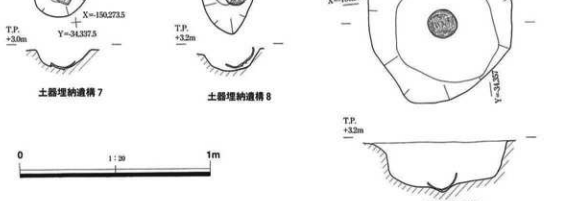
（6）が出土した。大和型で12世紀中頃～後半のものである。土器埋納遺構22からは瓦器椀（8）が出土した。大和型で12世紀中頃のものである。土器埋納遺構87からは黒色土器A類椀（7）が出土した。11世紀前半のものである。落ち込み4からは黒色土器A類椀（9）が出土した。11世紀前半のものである。

土器埋納遺構の時期を見ると、11世紀前半～中頃のものと、12世紀初頭頃のもの、12世紀中頃～後半のものがある。最初のものは第8ａ層の最新遺物の時期に重なっており、２番目のものは第7面出土遺物の時期と重なっている。また、最後のグループに属する瓦器椀は第7面の最新遺物や第6ａ面直上土器群の時期に重なっており、一応第7ｂ面に帰属すると推定した。ただし、これらの大半は第6ｂ面に帰属すると考えられる土器埋納遺構の近くから検出されており、第6ｂ層（下）の堆積後に埋納された可能性も残されている。

いずれにせよ、以上述べた状況をまとめれば、氾濫堆積物である第7ｂ層は11世紀前半ないし中頃に堆積し、その堆積後すぐに第7－3ａ層の耕作が開始されたと思われる。また、第7面の耕作は11世紀後半代には開始され、12世紀後半まで継続したといえる。そして、12世紀後半には第6ｂ層の堆積が始まり、第6ａ層の段階へ移行していったと考えられる。第7面関連の最新遺物と第6ａ面に関連する最古の遺物の時期が重なっているのは、第7面と第6ａ面の間に断絶がなく、砂礫堆積後すぐに復旧され

表Ⅳ－17　第7ｂ面土器埋納遺構一覧

構番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	遺物図番号
					遺構の形態	規模（cm） 長径×短径×深さ	土器の埋納状況		
土器埋納遺構2	86-1調査区（府発掘）	土坑6011	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	79×77×16	底面西寄りに正位で埋納	12世紀中頃	—
土器埋納遺構5	90-2調査区（Ⅵ）		瓦器椀1	七ノ坪	不明	不明		12世紀中頃	図Ⅳ－45：1
土器埋納遺構7	92-7調査区（ⅩⅣ）	瓦器ピット4	黒色土器B類椀1	十六ノ坪	土坑	直径30×10	土坑底面中央に正位で埋納	11世紀中頃	図Ⅳ－45：2
土器埋納遺構8	92-7調査区（ⅩⅣ）	瓦器ピット3	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	43×29×10	土坑底面西寄りに正位で埋納	12世紀中頃	図Ⅳ－45：3
土器埋納遺構9	92-7調査区（ⅩⅣ）	瓦器ピット2	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	直径76×24	土坑底面中央に正位で埋納	12世紀初頭	図Ⅳ－45：4
土器埋納遺構10	92-7調査区（ⅩⅣ）	瓦器ピットA	瓦器椀1	十六ノ坪	不明	不明		12世紀中頃	図Ⅳ－45：5
土器埋納遺構11	92-7調査区（ⅩⅣ）	瓦器ピットC	瓦器椀1	十六ノ坪	不明	不明		12世紀後半	図Ⅳ－45：6
土器埋納遺構87	90-2(H2)（Ⅲ）	不明	黒色土器A類椀1	十八ノ坪	不明	不明		11世紀前半	図Ⅳ－45：7
土器埋納遺構93	89-3(Ⅰ)	—	瓦器椀1	九ノ坪	—	—		12世紀中頃	図Ⅳ－45：8

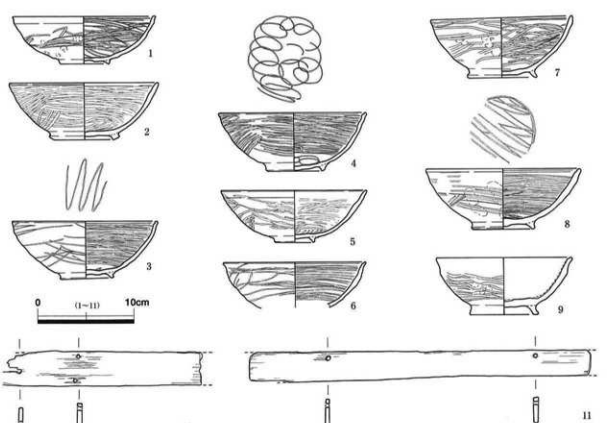


図Ⅳ－44　第7ｂ面土器埋納遺構

て耕作が続けられたことを示している。

第８ａ面　第７ｂ層を除去して検出した面である。第７ｂ層の氾濫堆積物は大畦畔１よりも西側に分布しており、その東側では第７層の泥層が厚く堆積していた。したがって、東側では遺構面の検出に苦労した部分が多く、第８ａ層が認識できない部分も存在した。これは第８ａ層が残存していなかったのではなく、第７層と類似していたため、識別できなかった可能性が高い。例えば府教委Ⅰトレンチでは、こうした状況を「湿地状の澱んだ堆積」と理解し、「土地利用がされていなかったのであろうか」と報告した（府発Ⅱ，p.12，p.54）。しかし、この推定は周囲の調査区で畦畔が検出されたことで否定された。

遺構の説明に入る前に、この面の微地形についてみておきたい（図Ⅳ－47）。当地区南西部には、南東－北西方向にのびる微高地が存在している。後述するように、この微高地は第11－２ａ面流路１の埋没に伴って形成されたものである。そして、こうした地形に対応して、微高地周辺は畠、その周囲は水田として利用されていた（図版16）。また、当地区南西隅における第８ａ面は、南西方向に緩やかに下がっていた。十六ノ坪には南東－北西方向にジグザグにのびる幅広の畦畔が存在するが、レベルが低くなるのはこの畦畔の南西側である。この畦畔の位置は第11－２ａ面流路２の位置と重なっている。流路２も埋没に伴って微高地を形成し、南西側に緩やかに下がる起伏をつくり出した。こうした地形が第８ａ面まで影響を与え、それに合わせて畦畔が設定されたと考えられる。なお、七ノ坪南部中央付近に存在する凹地は、第８ａ面埋没時に水流によって侵食された部分である。この部分の第７ｂ層は斜交層理のみ



図Ⅳ－45　第７ｂ面遺構・第７ｂ層出土遺物

1：土器埋納遺構5，2：同7，3：同8，4：同9，5：同10，6：同11，7：同87，8：同93，
9：落ち込み4，10・11：第７ｂ層

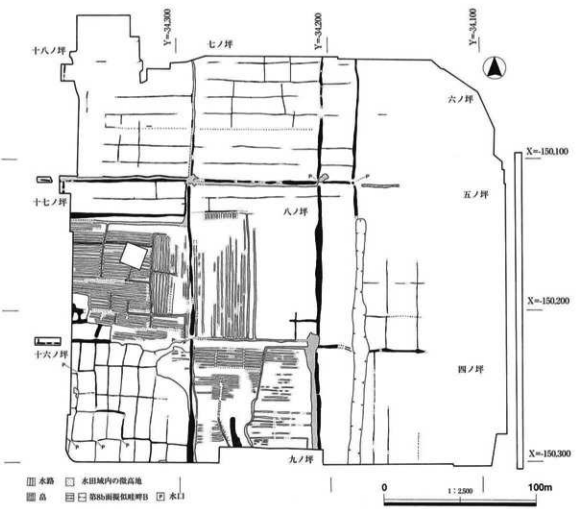
表Ⅳ－18　第８ａ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
水路15	89-2　流路１
	89-3　溝24
水路16	87-3　溝1101・1102
	90-3(A)　水路
水路17	90-3(A)　水路
水路18	90-3(B)　溝
水路19	90-2　溝32
水路20	89-3　溝22
水路21	89-3　溝23
水路22	89-1　—
	89-2　—
水路23	89-1　—
	89-2　—
	90-3(B)　—
水路24	90-1　—
水路25	90-1 —
水路26	90-1　溝568
水路27	90-1　溝569
水路28	90-1　—
水路29	90-1　溝564
水路30	90-1　溝75
水路31	90-1　溝562
水路32	90-1　溝563
水路33	89-2　坪境溝
水路34	90-1　—
	92-7　—
大畦畔１	89-1　畦畔19
	89-2　大畦畔１・２
	89-3　大畦畔１・２
	90-2(H３)　大畦畔６・７・10・11・12
	90-3(B)　畦畔19

られる砂礫層であり、水路15の北端から溢れたものであることを確認している。

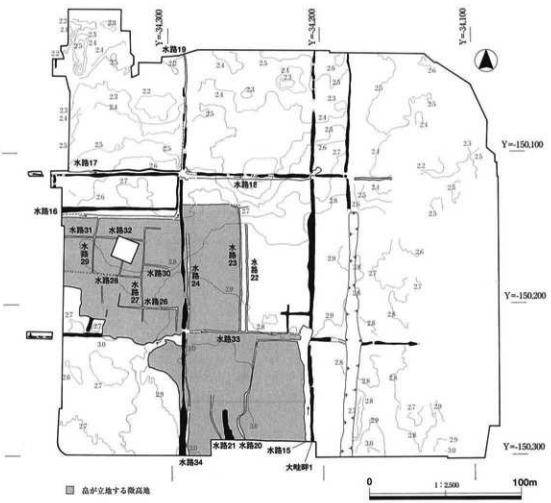
この面では水路、畦畔、畠等が良好に検出され、遺構配置の全容がほぼ把握できた。地割の基本となるのは、坪境に設けられた畦畔や水路である。ただし、当地区東部の南北坪境から西側に約20m離れた場所に、南北方向の大畦畔１が設けられている点が特異である。なお、五・六ノ坪間坪境は、第９ａ層の上で確認された擬似畦畔から復原したものである(概要ＸⅠ, pp.32-33)。八・九ノ坪東端部分で検出された畦畔も同様のものである。また、当地区東部の南北方向の坪境は、第７面水路12によって破壊された部分が多かったが、水路12の幅が狭かった北部では畦畔が遺存していた。

次に、坪ごとに検出遺構の状況をみていきたい。まず十八ノ坪は南東部を中心に畦畔が検出されている。その状況をみると、東西方向の長地型地割を基本とし、東西方向の畦畔の間を南北方向の畦畔でつないでいる。ただし、北部では斜めにのびる可能性が



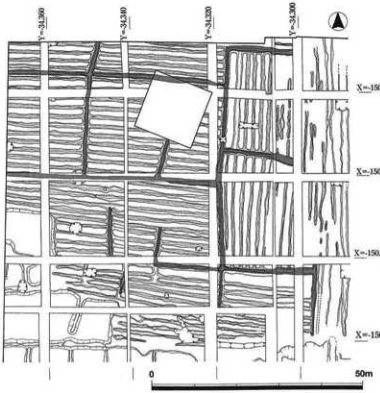
図Ⅳ－46　第８ａ面平面図

ある畦畔もみられる。七ノ坪も東西方向の長地型地割を基本とするが、六・七ノ坪間坪境の大畦畔から西へ約20m離れた場所には大畦畔１が存在し、それによって東西方向の区画が分断されている。十七ノ坪においても、十七・十八ノ坪間坪境から南へ約20m離れた場所に、東西方向にのびる幅広の畦畔が設けられていた。そして、その北側では畦畔が検出され、南側では畠の畝が検出された。この面で検出された畠の畝幅は1.2～2.4mであり、1.4m前後のものが多い。なお、この坪の南西部は一段低くなっているが、畦畔状の高まりが検出されているため、おそらくこの部分も水田として利用されたと考えられる。八ノ坪においても、十七ノ坪で検出された幅広の畦畔の延長線上に畦畔が設けられ、その北側では畦畔が、南側では畠の畝が検出された。なお、東半部では遺構の遺存状況が悪かったが、一部で畦畔が検出されているため、水田として利用されていた可能性が考えられる。また、五ノ坪でも畦畔が検出されており、南北方向の畦畔の間が東西方向の畦畔で区切られることによって、一辺20mの正方形に近い区画を形成している。そして十六ノ坪は、北東隅を除いて畦畔が良好に検出された。地割の方向は南北方向であるが、中央付近を南東から北西に向かってジグザグにのびる幅広の大畦畔が存在し、それが北東部と南西部をわけている。前述したように、これは微地形に合わせて畦畔を配置した結果である。なお、この坪内からは、島状に残された微高地が２つ検出されている。さらに、九ノ坪では全体で畝と畝間の溝が検出され、四ノ坪では南北方向にのびる畦畔が若干検出されている。この畦畔の一部については、第９ａ層の上で確認された擬似畦畔から復原した部分もある（概要ＸＶ，p.65）。

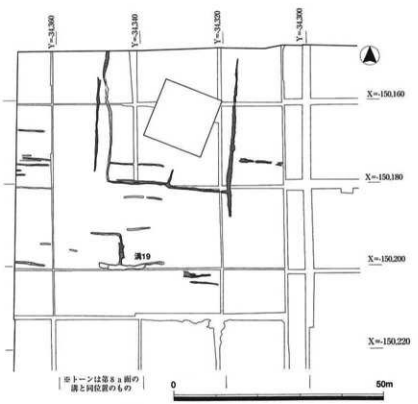


図Ⅳ－47　第８ａ面等高線図

この面の水利系統については、江浦（1992b）・井上（1995）で検討され、畠域を迂回して南側と西側から水路を回していた状況が復原されている。まず、水路15は南北方向の水利系統の中心的役割を果たす基幹水路と考えられるが、これが九ノ坪の大畦畔1沿いを北流し、八・九ノ坪間坪境との交差点から八ノ坪の水田に導水する。そして、この交差点から水路33に水が送られ、八・九・十六・十七ノ坪交差点の水口を通して十六ノ坪の水田に導水される。なお、水路22～24は畠域を灌漑するものであったと考えられているが、畠部分からの排水を水路33に流すという機能もあった可能性がある。そして、もうひとつの基幹水路と考えられる水路17は十七・十八ノ坪間坪境を東流し、七ノ坪の水田に導水する。さらに水路18にも水が送られ、大畦畔1の東側や六ノ坪の水田に導水される。また、十七ノ坪を東流する水路16は、北に折れて坪境交差点に至るが、これは十七ノ坪の水田の灌漑に関わったものであろう。なお、水路19は十八ノ坪の灌漑に関わった可能性もあるが、この坪への導水は西方の調査範囲外でおこなわれたとも考えられる。この場合、水路19は水路17を中心とする水利系統における排水の機能を果たしたものと推定される。なお、十七ノ坪の畠域に存在する水路



図Ⅳ－48　第8a面畠平面図



図Ⅳ－49　第8b面溝平面図

24～26・28～32は、畠域の排水の機能を果たしていた可能性がある。また、四・五・六ノ坪の灌漑方法については、南北方向の坪境が破壊されていたため、不明な点が多い。六ノ坪には七ノ坪のほうからも導水できるが、五ノ坪のほうから導水された可能性も考えられる。

さて、第10ｂ面に対比される90-1調査区の「第16－２面」では、東西方向や南北方向にのびる溝が検出され、「鋤溝」として報告されている（図Ⅳ－49）。この遺構については第８ａ面の畠域にあたる部分で検出されているため、これらと第８ａ面の遺構の位置（図Ⅳ－48）とを比較してみたい。まず、アミで示した部分は第８ａ面畠域内の水路と一致する。その他、東西方向の溝がまばらに検出されているが、断面図をみるとさらに多くの溝が記載されている（概要ＸⅡ，pp.13-14，pp.21-22）。断面の記載から考えて、これらは第８ｂ面に帰属するものと思われる。第８ａ面から溝底までは30～50cmあり、断面の記載によれば、第８ａ面畝間の溝の位置とは必ずしも一致しないようである。このような状況からみて、これらの溝は畠作土下面に残された耕作痕（佐藤1998）と考えられる。その性格については、作土の形成・維持と関連して下層を掘削した痕跡と想定されている（松田・パリノ・サーヴェイ1996，佐藤1998）。

この面からは、遺構面や遺構に関連して多くの遺物が出土している。それらは第８ａ面直上から出土したもの、第８ａ面の畦畔内から出土したもの、第８ｂ面の遺構から出土したものにわけられる。

第８ａ面直上出土遺物のうち、出土状況が注目されるものとして、十六ノ坪の大畦畔付近から出土した土器、骨、炭化物（図Ⅳ－50：28地点）がある。土器は土師器皿（図Ⅳ－53：３）で、骨はウマの上腕骨（右）である。炭化物集中部ではプラント・オパール分析が実施された[4]。それによると、イネの珪酸体（茎・穂・籾殻に含まれるもの）が全体の９割を占め、中でも穂の部分に含まれる珪酸体が多く検出された。ただし、炭化物の水洗選別の結果、イネの種実（稲籾）は検出されなかったため、収穫後に残った稲穂を焼いた痕跡と推定されている（概要ＸⅣ,p.48）。また、この大畦畔付近からはウマの下顎骨も出土している（概要ＸⅡ，p.62）。両側が存在しており、歯からみて年齢は４～５才と考えられる[2]。この骨は第８ａ層に半ば埋もれた形で出土したが、埋納されたのではなく、地表面に置かれていたと考えられる。さらに、八・九・十六・十七ノ坪交差点の西側では、断面観察のために掘削したトレンチから、ウマの臼歯が出土した（表Ⅳ－19）。これらの出土層準は第７ｂ層の下部～第８ａ面と考えられる。ウマの上顎臼歯・下顎臼歯が複数出土しているが、出土状況が不明なため、これ以上の検討はできない。なお、五ノ坪の第７層最下部からは、シカの下顎骨（右）が出土した。第８ａ面に近い高さから出土したため、本来は第８ａ面直上に存在していた可能性もある。

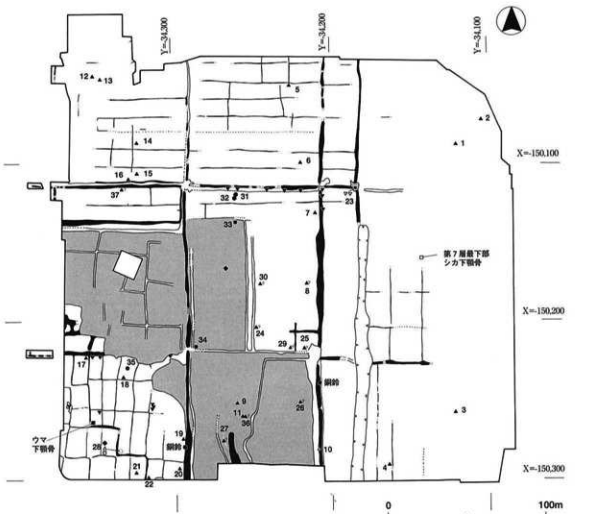
また、第８ａ面ないし第８ａ層中からは拳大前後の石が多く出土した。このような石が自然の営力で泥質堆積物中に取り込まれるとは考えがたいため、人為的に持ち込まれたものと思われる。このうち、特に注目されるのは七・八ノ坪間坪境の状況である。多くは大畦畔盛土内にあったが、この坪境と大畦畔１の交点には第８ａ面直上に石が置かれていた（概要Ⅶ，pp.21-23，p.84）。また、十六ノ坪においても、石が第８ａ層中から出土した。

次に、第８ａ面の遺構ないし面直上から出土した遺物を列挙する。まず、水路15からは土師器皿（図Ⅳ－53：１）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。また、（２）・（３）は第８ａ面直上から出土した土師器皿である。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。

大畦畔盛土内から出土した遺物としては銅製鈴がある。まず、大畦畔１から出土したものについては、大畦畔に直交する形で掘削された溝状の落ちのひとつから出土した（図Ⅳ－51）。正置された状態で出土しており、意図的に埋納されたと考えられる。また、九・十六ノ坪間坪境畦畔盛土中から出土した銅製

表Ⅳ－19　第８ａ面関連動物遺存体一覧（90-1調査区）

出土層位・遺構面	調査区	調査時の 出土層位	調査時の 遺構名称	時期	遺物番号	種名	部位	左右	部分	観察
第７ｂ層下部	90-1	12~13層			197	ウマ	上顎臼歯	左		計３本
第７ｂ層下部	90-1	12~13層			197	ウマ	下顎臼歯	右		計２本
第８ａ層	90-1	14層			242	ウマ	上顎臼歯	右		
第８ａ層	90-1	14層			246	ウマ	上顎臼歯	左		
第８ａ層	90-1	14・15層			882	ウマ	臼歯破片			
第８ａ層	90-1	14層			987	ウマ	上顎臼歯	左		
第８ａ層	90-1	14・15層			2500	不明	骨破片			
第８ａ層	90-1	14・15層			2502	ウマ？	臼歯破片			
第８ａ層	90-1	14層			2525	不明	椎骨			
第８ａ層	90-1	14層			2525	不明	椎骨破片			
第８ａ層	90-1	14面				ウマ	下顎骨			年齢は４～５才。歯は永久歯
第８ａ層	90-1	14・15層			2473	ウマ	上顎臼歯			
第８ａ層	90-1	14・15層			2483	ウマ	下顎臼歯	右		第４前臼歯。若い



図Ⅳ－50　第８ａ面～第８ｂ面遺物出土位置図

表Ⅳ－20　第８ａ面直上遺物一覧

遺構番号	出土遺物	所在呼名	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号	図Ⅳ－50
			遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土層の埋納状況				
	土師器1、馬の右上腕骨、炭化物	十六ノ坪				10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ－53：3	28

表Ⅳ－21　第８ａ層・第８ｂ面遺物一覧

遺構番号	出土遺物	所在呼名	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号	図Ⅳ－50
			遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土層の埋納状況				
土師埋納遺構12	黒色土器椀1	六ノ坪	土坑	直径31×36	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	10世紀前頃		図Ⅳ－58：1	1
土師埋納遺構13	土師器杯1	六ノ坪	土坑	直径27×19	土坑底面中央に正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ－58：2	2
土師埋納遺構14	土師器皿1	四ノ坪	土坑	直径18×3<	土坑底面中央に正位で埋納	10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ－58：3	3
土師埋納遺構15	土師器杯1	四ノ坪	土坑	26×22×18	土坑底面中央から南東に偏して正位で埋納	10世紀前半	口縁部打ち欠き？底面に墨書あり	図Ⅳ－58：4	4
土師埋納遺構16	黒色土器A類椀2 土師器杯1	七ノ坪	土坑	直径90×37	口縁部の一部を欠いた黒色土器椀と土師器皿を正位で組み合わせ、その中に焼成を6個入れる	10世紀前半～中頃		土師器：図Ⅳ－58：5、黒色土器：図Ⅳ－58：6、図Ⅳ－58：7	5
土師埋納遺構17	土師器杯1	七ノ坪	土坑	37×27×6	土坑底面の北寄りに正位で埋納	10世紀中頃	口縁部打ち欠き、内面に焼成後のヘラ記号？あり	図Ⅳ－58：8	6
土師埋納遺構18	土師器杯1	八ノ坪	土坑	63×58×22	最低36cmで一段深く掘り込まれた部分に正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ－58：9	7
土師埋納遺構19	土師器杯1	八ノ坪	土坑	直径30×25	土坑底面に正位で埋納	10世紀前半		図Ⅳ－58：10	8
土師埋納遺構20	土師器杯1	九ノ坪	土坑	直径95×20	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ－58：11	9
土師埋納遺構21	土師器皿2	九ノ坪	暗褐盛土	幅50～100	暗褐盛土中への一括埋納？詳細不明	10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ－58：12・13	10
土師埋納遺構22	黒色土器A類椀1	九ノ坪	土坑	直径95×35	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ－58：14	11
土師埋納遺構23	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	50×32×22	土坑底面中央から偏して正位で埋納	11世紀前半	北側は深く3層にかかわる	—	12
土師埋納遺構24	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	54×36×12	土坑底面中央からやや偏して正位で埋納	10世紀前半		—	13
土師埋納遺構25	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	直径30×10	土坑底面中央に正位で埋納	11世紀前半	底面に墨書あり	図Ⅳ－58：15	14
土師埋納遺構26	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	直径45×12	土坑底面の北西縁を深く掘り込み、その部分に正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ－58：16	15
土師埋納遺構27	土師器杯1	十七ノ坪	土坑	直径50×22	土坑底面中央からやや偏して正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ－58：17	16
土師埋納遺構28	黒色土器B類椀1	十七・十八ノ坪間	暗褐土土坑	46<×37<×6	坪底暗褐土のピット状の落ち込みのほぼ中央に正位で埋納、底面からはやや深く	11世紀前半～中頃	暗褐盛土への埋納？	図Ⅳ－58：18	17
土師埋納遺構29	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径17×5	土坑底面に正位で埋納	10世紀前半		図Ⅳ－58：19	18
土師埋納遺構30	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径27×14	土坑底面からやや小ぶりに正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ－58：20	19
土師埋納遺構31	黒色土器A類椀1	十六ノ坪	土坑	直径22×45	土坑下層に逆位で埋納	10世紀中頃	底台を全周打ち欠き	図Ⅳ－58：21	20
土師埋納遺構32	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径34×20	土坑底面からやや小ぶりに正位で埋納	10世紀後半	口縁部打ち欠き	図Ⅳ－58：22	21
土師埋納遺構33	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	39×24×12	土坑底面中央よりやや北寄りに正位で埋納	11世紀前半	底部に墨書あり	図Ⅳ－58：23	22
土師埋納遺構34	土師器杯					10世紀前半		図Ⅳ－58：24	29
土師埋納遺構35	黒色土器A類椀1					10世紀前半	底面に墨書「目下記」あり	図Ⅳ－58：25	24
土師埋納遺構36	土師器杯1					10世紀前半		図Ⅳ－58：26	25
土師埋納遺構37	土師器杯1					10世紀中頃		図Ⅳ－58：27	26
土師埋納遺構69	黒色土器A類椀1	八ノ坪	土坑？			10世紀前半	第10ｂ層掘削時に確認	図Ⅳ－58：28	30
土師埋納遺構91	土師器杯	九ノ坪				11世紀前半		図Ⅳ－58：29	36
土師埋納遺構92	土師器椀	十七ノ坪				10世紀中頃		図Ⅳ－58：30	37
落ち込み5	木柱1・曲物（桶）1							曲物：図Ⅳ－59：4、木柱：図Ⅳ－59：6	23

（溝）

溝3	黒色土器A類椀			幅70～50、深さ30		10世紀後半		図Ⅳ－59：3	27

第8a層出土銭貨

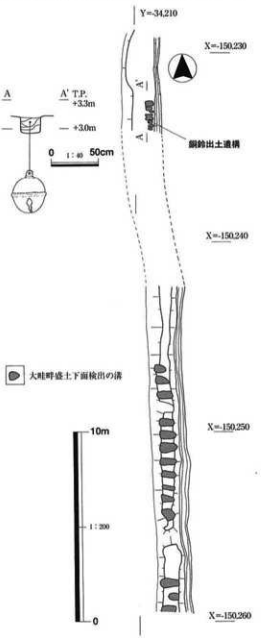
	銭貨（乾元大宝）	八ノ坪	—	—	—			—	31
	銭貨（乾元大宝）	八ノ坪	—	—	—			—	32
	銭貨（富寿神宝）	八ノ坪	—	—	—			図Ⅳ－56：115	33
	銭貨（富寿神宝）	八ノ坪	—	—	—			図Ⅳ－56：114	34
	銭貨（神功開宝）	十六ノ坪	—	—	—			図Ⅳ－56：116	35

鈴も、意図的に埋納されたものと考えられている（渡辺1995）。図Ⅳ－59：（7）が大畦畔1から出土したもの、（8）が九・十六ノ坪間坪境畦畔から出土したものである。銅製鈴は古代から寺院の地鎮め具のひとつとして用いられることがあり、これも地鎮め具として水田畦畔に埋納されたものかもしれない。

第8b面検出遺構のほとんどは土器埋納遺構である（図Ⅳ－52、表Ⅳ－21、図版17－7・8）。なお、調査の不備により出土状況が十分に観察できなかったが、状況から土器埋納遺構と推定されるものも存在しており、それらについても図Ⅳ－50に大まかな位置を示した。土器埋納遺構には、土坑の中に土師器杯や黒色土器椀を1個体埋納するものが多く、土器埋納遺構16のように、桃の核を入れたものもあった。その分布については、江浦（1992b）で指摘されたように、第8a面の畦畔付近の位置に当たるもの（図Ⅳ－50：4・5・7・14・15・16・17・19・20・22地点）があり、畠域の境付近に存在する可能性があるもの（24・30地点）もある。しかしながら、畦畔の位置とは合わないもの（6地点など）や、畠域内に存在するものもある（9・11・26地点）。また、五・六・七・八ノ坪交差点付近では、第8b面で落ち込み5が検出されたが、この中には木柱と曲物（桶）が埋納されていた（図版17－6）。

次に、第8b面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－58・59）。

まず、土器埋納遺構出土遺物を見ていきたい（図Ⅳ－58）。土器埋納遺構12からは黒色土器A類椀（1）が出土した。10世紀初め頃のものである。土器埋納遺構13からは土師器椀（2）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構14からは土師器皿（3）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。土器埋納遺構15からは土師器杯（4）が出土した。10世紀前半頃のものである。外底面に「利富」[5]という吉祥句が墨書されている。土器埋納遺構16からは土師器杯（5）、黒色土器A類椀（6・7）が出土した。10世紀前半～中頃のものである。土器埋納遺構17からは土師器杯（8）が出土した。10世紀中頃のものである。口縁に打ち欠きがあり、内面にヘラ記号？がある。土器埋納遺構18からは土師器椀（9）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構19からは土師器杯（10）が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構20からは土師器杯（11）が出土した。11世紀前半頃のものである。外底面にヘラ記号がある。土器埋納遺構21からは土師器皿（12・13）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。土器埋納遺構22からは黒色土器A類椀（14）が出土した。11世紀前半頃のものである。土器埋納遺構25からは土師器杯（15）が出土した。11世紀前半頃のものかと思われる。



図Ⅳ－51　大畦畔1下面検出遺構・遺物出土位置図

内底面に「𠆢」と墨書されている。土器埋納遺構26からは土師器杯（16）が出土した。11世紀前半頃のものかと思われる。土器埋納遺構27からは土師器椀（17）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構28からは黒色土器B類椀(18)が出土した。11世紀前半～中頃のものである。口縁部に打ち欠きかと思われる欠けがある。土器埋納遺構29からは土師器杯（19）が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構30からは土師器椀（20）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構31からは黒色土器A類椀（21）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構32からは土師器杯（22）が出土した。10世紀後半頃のものかと思われる。口縁部に打ち欠きかと思われる欠けがある。土器埋納遺構33からは土師器杯（23）が出土した。11世紀前半頃のものである。外底面に「つ」と墨書されている。土器埋納遺構34からは土師器杯(24)が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構35からは黒色土器A類椀（25）が出土した。10世紀前半頃のものである。外底面に「日下宅」と墨書されている。「宅」は律令制下にあって、私的な土地所有を内包する語であり、「日下（くさか）」を当遺跡の北北東約5 km の地（東大阪市）の地名と関連づける考え方もある（信田1995）。土器埋納遺構36からは土師器杯（26）が出土した。10世紀前半のものである。土器埋納遺構37からは土師器椀（27）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構89からは黒色土器A類椀（28）が出土した。10世紀後半のものである。土器埋納遺構91からは土師器杯（29）が出土した。11世紀前半頃のものである。土器埋納遺構92からは土師器椀（30）が出土した。10世紀中頃のものである。

表Ⅳ－22　第８ｂ面遺構名称

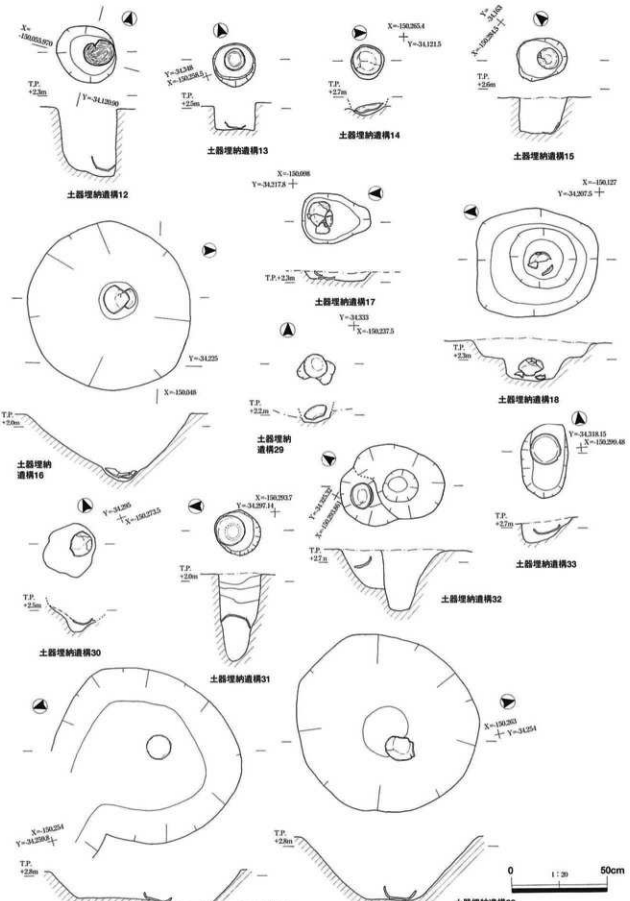
遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構12	92-6　土器埋納遺構1
土器埋納遺構13	92-6　土器埋納遺構2
土器埋納遺構14	93-1　土器埋納遺構3
土器埋納遺構15	93-1　土器埋納遺構4
土器埋納遺構16	90-2(H3)　土坑11
土器埋納遺構17	90-3(B)　土器埋納遺構2
土器埋納遺構18	90-3(B)　土器埋納遺構1
土器埋納遺構19	89-1　土器埋納ピット2
土器埋納遺構20	89-1　土坑32
土器埋納遺構21	89-1　大畦畔6
土器埋納遺構22	89-1　ピット218
土器埋納遺構23	86-1　土坑8022
土器埋納遺構24	86-1　土坑8024
土器埋納遺構25	90-3(A)　土器埋納ピット1
土器埋納遺構26	90-3(A)　土器埋納ピット5
土器埋納遺構27	90-3(A)　土器埋納ピット2
土器埋納遺構28	90-1　拝徳36出土土器
土器埋納遺構29	90-1　土器埋納遺構13
土器埋納遺構30	92-7　ピット282
土器埋納遺構31	92-7　ピット283
土器埋納遺構32	92-7　ピット183
土器埋納遺構33	92-7　土器埋納ピットa
土器埋納遺構34	89-2　ピット1
土器埋納遺構35	89-2　—
土器埋納遺構36	89-2　—
土器埋納遺構37	89-2　—
土器埋納遺構91	89-3　掘り残し土坑
土器埋納遺構92	90-3(A)　—
溝3	89-3　溝80
落ち込み5	90-3(C)　落ち込み
土器埋納遺構89	89-1　—

その他の第８ｂ面検出遺構からは、次のような遺物が出土している（図Ⅳ－59）。溝19からは土師器甑（２）、弥生土器甕（１）が出土した。土師器甑は５世紀中頃～６世紀ぐらい、弥生土器甕は第Ⅴ様式で、本来は下層に含まれていた遺物と思われる。溝３からは黒色土器A類椀（３）が出土した。10世紀後半頃のものである。また前述したように、落ち込み５からは木製品（４～６）が出土した。（４）は桶、（５）は杭？である。（６）は全長2.05mの擬宝珠のある柱で、断面７角形を呈し、ホゾ孔が15個残存し、一部炭化している。

第８ａ層出土遺物　第８ａ層から出土した遺物は後述する古墳時代後期の集落と関連するものが多く、後の記述の便宜上、ここでまとめておきたい（図Ⅳ－53：４～図Ⅳ－57：133、図版57－117・118）。

土師器皿（４～12）・杯（13）・椀（14～19）・甕（23）、黒色土器A類椀（20～22）、墨書土器片（24～28）、須恵器杯蓋（29～49）・杯（50～75）・皿（76）・高杯（77～83）・提瓶？（84）・樽形瓶（85）・壺（86～89）・甕（90）・短頸壺（91）・甕（92～94）・筒形器台（95）、灰釉鉢（96）、製塩土器（97）、韓式系土器片（98・99）、埴輪片（100～103）、土器片（104）、鉄製品（105～109）、砥石（110～113）、銭貨（114～116、図版57―117・118）、水晶製切子玉（119）、滑石製品（120～133）等が出土した。

土師器皿は10世紀後半～11世紀前半のものの他、８世紀中頃と９世紀かと思われるものがある。土師器椀も、８世紀末～９世紀初めと思われるものと10世紀中頃と思われるものがある。黒色土器A類椀は９世紀後半～10世紀前半のものである。墨書土器[5]のうち、(24)は「華」の一部の可能性が高く、(25)



図Ⅳ－52　第８ｂ面土器埋納遺構

が「カ」、(26) が記号「ゐ」、(27) が「三」、(28) が「島」と読める。(26) の記号は第９ｂ面土器埋納遺構67(図Ⅳ－79：10) から出土した須恵器杯にも墨書されている。

須恵器杯蓋は中村　浩編年のⅠ型式第５段階～Ⅳ型式第３段階までのものがあるが、Ⅱ型式第１～２段階のものが多い。(34)・(41) は口縁端部にハケ状刻目を施し、(34)・(42)・(48) にはヘラ記号を施している。杯もⅠ型式第５段階～Ⅳ型式４段階までのものがあり、Ⅱ型式第１～２段階のものがやや多い。(65)・(67)・(75) にはヘラ記号を施している。須恵器皿はⅣ型式第１段階、高杯はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階のものがある。壺類・甕類はⅡ型式のものとⅣ型式のものがある。甕はⅡ型式第１～３段階のものである。(92) はヘラ記号？が施されている。筒形器台 (95) はⅡ型式前半ぐらいのものと思われ、筒部の透かしは長方形８方向、裾部の透かしは三角形４方向である。凸線と刺突文と７～15条の波状文で飾る。

製塩土器 (97) は積山　洋編年の丸底Ⅰ式で、６世紀前半のものである。韓式系土器片 (98・99) は外面が格子状？タタキで、内面に当て具痕をもつものである。埴輪片は川西宏幸編年の第Ⅴ期ぐらいのものである。鉄製品は (105) が鑿かと思われるもので、(106) は雁叉鏃、(107～109) は馬鍬の歯である。砥石は流紋岩製と流紋岩質凝灰岩製で、いずれも４面使用している。

銭貨は (114～115) が富壽神寶、(116) が神功開寶である。また、(図版57－117・118) は残りが悪いものの、大きさや材質の粗悪さなどの特徴から、乾元大寶の可能性がある。いずれも皇朝十二銭であり、初鋳年はそれぞれ、818年、765年、958年である。

滑石製品は (121) が剣形、(122～125) が双孔円板、(126～133) が有孔円板である。

その他、第８ａ層からは動物遺存体も出土した (表Ⅳ－19)。同定できたものは、すべてウマの臼歯である。

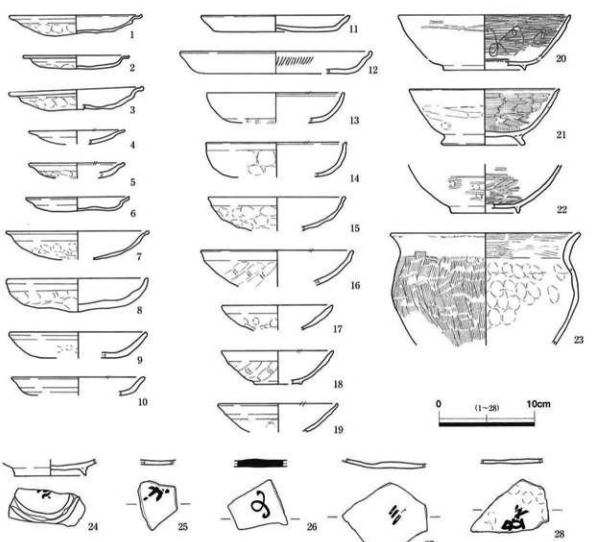
第８ａ層出土遺物の多くは、下層から巻き上げられたと思われる６～８世紀のものである。また、10～11世紀のものが散見されるが、これらは第８ａ面段階の遺物と考えられる。鉄製品のうち、馬鍬の歯や雁叉鏃は第８ａ面段階のものと考えられる。銭貨も第８ａ面段階のものと思われるが、これらについては意図的に埋納したと推定する意見もある (江浦1992ｂ)。銭貨については、出土段階で掘り込みの有無を確認することは困難であるが、乾元大寶は２枚重なった状態で出土しており、意図的に埋め込まれた可能性が高い。いずれにせよ、水田跡から出土する銭貨は祭祀に関わる可能性があり、今後注意すべき遺物といえる。また、ウマの臼歯に関しては、第10ｂ面の遺構からも出土しているため、下層から巻き上げられた可能性も考えられる。

ここで提示した第８ａ層、第８ａ面、第８ｂ面の遺物からみて、第８ａ層の耕作時期は10世紀前半～11世紀前半と推定される。また、第７ｂ面土器埋納遺構の時期も考慮すると、11世紀中頃までには氾濫堆積物の第７ｂ層によって埋没したと思われる。

第９ａ・ｂ面　第９ａ層は部分的にしか残存していなかったため、実態は不明な点が多い。調査では第８ａ層掘削後に精査をおこなったが、この段階で第８ｂ面、第９ｂ面、第10ｂ面の遺構を同時に検出した調査区が多く、第９ａ面が検出できたのは一部にすぎなかった。これは、第８ａ面の耕作によって第９ａ層、第10ａ層の大半が削られたことを示している。こうした状況に対して概要Ⅰでは、過去の状態をそのまま残していると短絡的に解釈し、古墳時代～平安時代に同一地表面で人間活動がおこなわれたと理解していた (「古墳～古代面」)。しかしながら、その後の調査で第９ａ層の存在が確認された結果、そうした考え方が誤りであることが明らかになった。調査段階で層序を念頭に置いて遺構埋土が検討さ

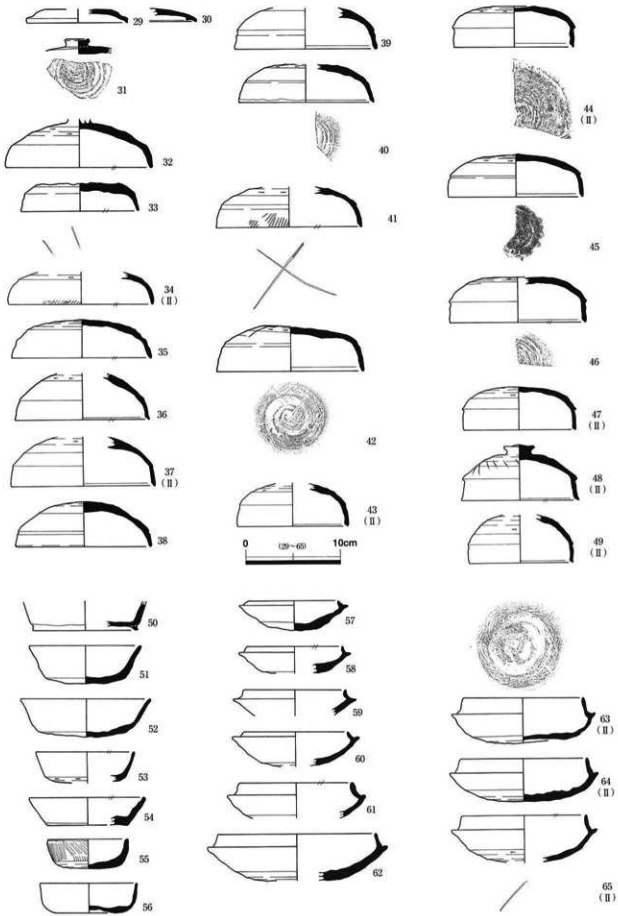
れなかったため、すべての遺構について帰属面を分別することは困難であるが、各遺構の出土遺物と第８ａ面・第９ａ面の出土遺物とを比較することで、ある程度整理することは可能である。本書では、この段階で検出された遺構のうち、10～11世紀の遺物が含まれていたものを第８ｂ面、７～９世紀の遺物が含まれていたものを第９ｂ面、古墳時代の遺物が含まれていたものを第10ｂ面の遺構として分別した。

まず、第９ａ面の遺構をみていきたい。第８ａ面大畦畔１の直下では、水路35が検出された。これは当地区中部を南北に貫くもので、第８ａ面の耕作の影響を免れた部分では両脇に大畦畔が伴っていたことも明らかになった。第９ａ層も人為的に攪乱されていると思われるため、水田が営まれていた可能性が高く、この水路も水田の灌漑に使用されたものと思われる。また、この水路は地形を無視して南北方向にのびているので、正方位地割にもとづいて掘削されたものであった可能性が高い。水路35の断面については、概要Ⅶ（カラー図版1，p.25）に写真・断面図が掲載されているが、若干矛盾する点があったため、写真を検討して一部修正した（図Ⅳ－61）。修正したのは、第８ａ面の遺構である大畦畔１の盛土の下に、第８ａ層がもぐりこむとされている点である。これは、大畦畔１盛土の下に存在した地層が第８ａ層と類似していたため、第８ａ層とつないでしまったものである。水路35は砂で埋没していたが、

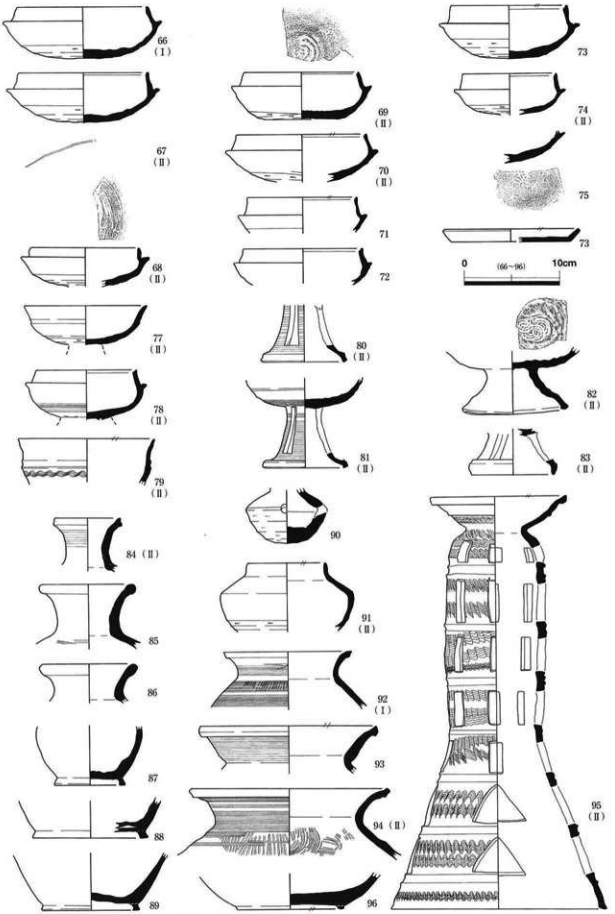


図Ⅳ－53　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物①

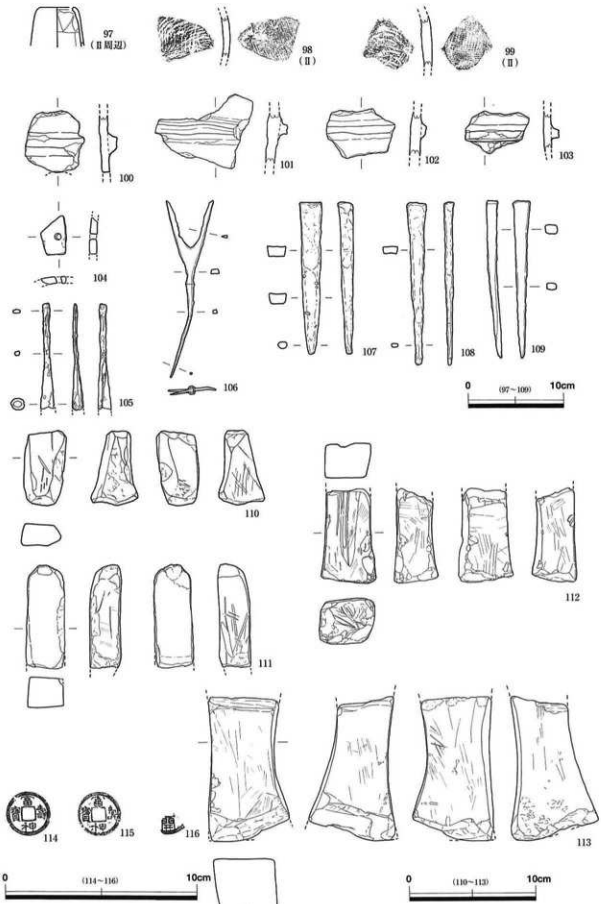
1：水路15，2・3：第８ａ面直上，4～28：第８ａ層



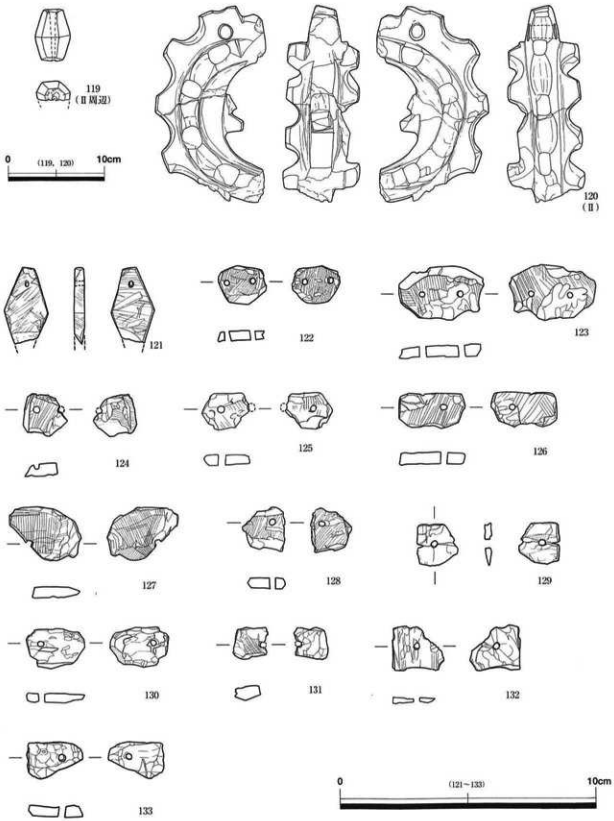
図Ⅳ－54　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物②（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



図Ⅳ－55　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物③（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

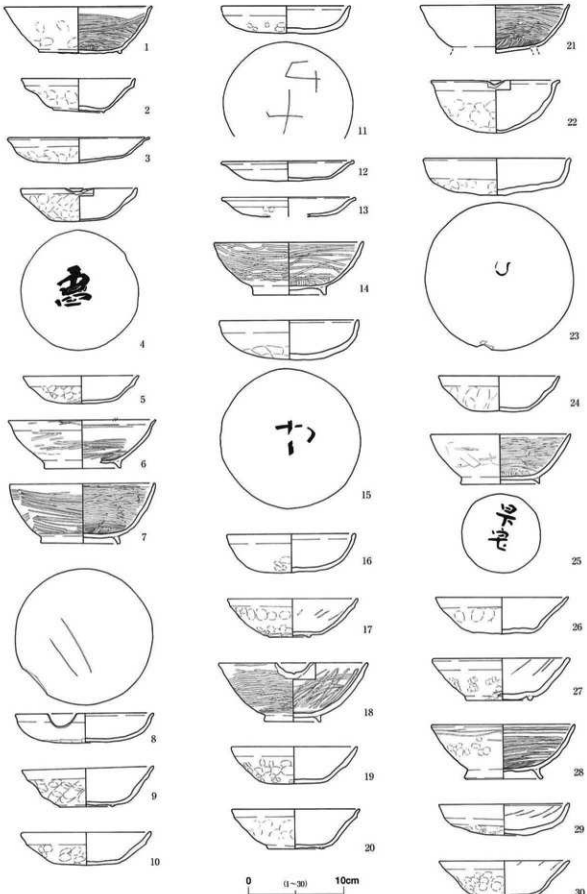


図Ⅳ－56　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物④（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

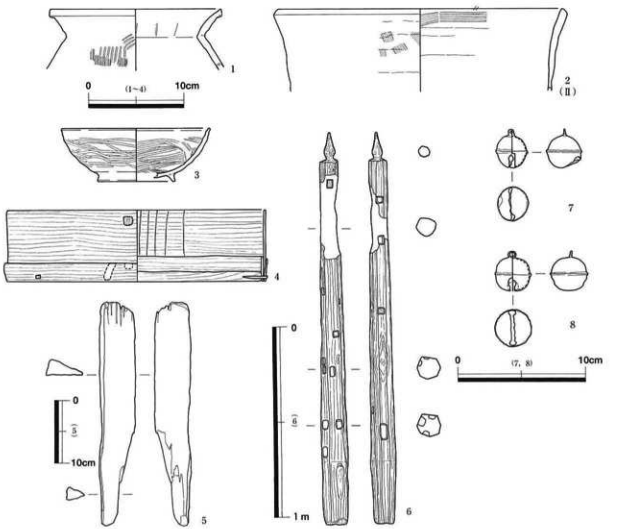


図Ⅳ－57　第８ａ面遺構・第８ａ層出土遺物⑤（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

図Ⅳ－54　29～65：第８ａ層　　図Ⅳ－55　66～95：第８ａ層
図Ⅳ－56　109～113：第８ａ層　　図Ⅳ－57　119～133：第８ａ層



図Ⅳ－58　第８ｂ面土器埋納遺構出土遺物



図Ⅳ－59　第８ｂ面遺構出土遺物（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

図Ⅳ－58　1：土器埋納遺構12，2：同13，3：同14，4：同15，5～7：同16，8：同17，9：同18
10：同19，11：同20，12・13：同21，14：同22，15：同25，16：同26，17：同27，18：同28，19：同29，20：同30，21：同31，22：同32，23：同33，24：同34，25：同35，26：同36，27：同37，28：同89，29：同91，30：同92
図Ⅳ－59　1・2：溝19，3：溝3，4～6：落ち込み5，7：大畦畔1，8：九・十六ノ坪間坪境畦畔

すべての断面で砂の上にシルトが存在することが確認されていた。注目されるのは、X＝－150,080ライン（図Ⅳ－61：上段）と、X＝－150,100ライン（同：中段）において、水路を埋める砂層が不自然に盛り上がって残存していたことである。これは水路35埋没後、この砂層を芯にして畦畔が造成されたことを示すと考えられ、問題のシルト層はこの畦畔の盛土である可能性が高い。水路を埋める砂層の上ではピットが検出された部分もある（図版18－３）が、これは畦畔に伴う造構であろう。以上のことから第９ａ面は、水路35が機能していた段階と、その埋没後畦畔となった段階の２段階に分けられることがわかる。しかしながら、この２つの段階が層序として完全に分離していたかどうかは不明である。こうした変化が水路35周辺だけで起こり、それ以外の部分では同じ層を耕作し続けた可能性も否定することはできない。

次に、水路35に関連すると思われる遺物を示す（図Ⅳ－65：１～７）。その中には、水路周辺の第９ａ層上面付近から出土したもの（１～４）と、水路35を埋める砂層から出土したもの（５～７）がある。前者には、須恵器杯蓋（１）・杯（２）、土師器杯Ａ（３）・皿（４）がある。７世紀代と８世紀中頃のも

表Ⅳ－23　第９面遺構名称

（第９a面）

遺構番号	概要における遺構番号
水路35	89-2　—
	89-3　—
	90-2(H３)　溝73
	90-3(B)　溝１

（第９b面）

遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構38	86-1　土坑8873
土器埋納遺構39	86-1　土坑8874
土器埋納遺構40	86-1　土坑8043
土器埋納遺構41	90-3(A)　土器埋納ピット３
土器埋納遺構42	90-3(A)　土器埋納ピット４
土器埋納遺構43	90-2(H３)　ピット613
土器埋納遺構44	90-3(B)　土器埋納遺構８
土器埋納遺構45	90-3(B)　土器埋納遺構３
土器埋納遺構46	90-3(B)　土器埋納遺構４
土器埋納遺構47	90-3(B)　土器埋納遺構７
土器埋納遺構48	90-3(B)　土器埋納遺構５
土器埋納遺構49	90-3(B)　土器埋納遺構６
土器埋納遺構50	89-1　土器埋納ピット１
土器埋納遺構51	90-1　建物10北端柱穴
土器埋納遺構52	90-1　土器埋納遺構１
土器埋納遺構53	89-3　土坑35
土器埋納遺構54	89-3　ピット88
土器埋納遺構55	90-1　土器埋納遺構２
土器埋納遺構56	Ⅰトレンチ　ピット１
土器埋納遺構57	86-3　ピット３-202

遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構58	Ⅰトレンチ　ピット２
土器埋納遺構59	Ⅰトレンチ　ピット３
土器埋納遺構60	90-6　—
土器埋納遺構61	93-1　土器埋納遺構５
土器埋納遺構62	92-7　土器埋納ピットｃ
土器埋納遺構63	92-7　ピット215
土器埋納遺構64	90-1　土器埋納遺構11
土器埋納遺構65	90-1　土器埋納遺構７
土器埋納遺構66	90-1　土器埋納遺構８
土器埋納遺構67	90-1　土器埋納遺構５
土器埋納遺構68	89-3　土坑42
土器埋納遺構69	90-2(H３)　ピット614
土器埋納遺構70	90-1　土器埋納遺構14
土器埋納遺構71	90-7　土器埋納ピットｂ
土器埋納遺構72	90-1　土器埋納遺構12
土器埋納遺構73	89-3　ピット３-201
土器埋納遺構74	92-7　土坑１
土器埋納遺構88	93-1　土器埋納ピット⑦
土器埋納遺構90	89-3　側溝内出土
土坑８	90-1　土坑209
ピット21	90-1　ピット1893
ピット22	90-1　ピット1779
ピット23	90-1　ピット2515
ピット12	92-7　ピット25
ピット25	92-7　ピット44
ピット26	92-7　ピット132

のである。後者には、土師器杯Ｃ(５)・椀Ｃ(６)・杯Ａ(７)がある。８世紀代のものである。なお、土器埋納遺構49は水路35に伴う大畦畔盛土内に土器を埋納したもので、この水路に関連する遺構である。ここから出土したのは須恵器杯（図Ⅳ－80：17）で、Ⅲ型式第３段階のものである。

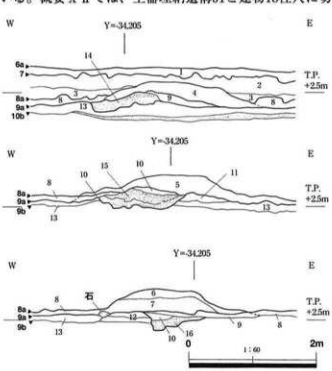
遺構と遺物の関係を総合すると、水路35は土器埋納遺構49の時期（７世紀末）には存在しており、８世紀代に埋没したと考えられる。そして埋没後、堆積した砂を芯にして

図Ⅳ－60　第９a面・第９b面検出遺構

畦畔が造成されたと思われる。水路周辺から出土した遺物のうち、８世紀代のものは畦畔造成後の遺物の可能性がある。

次に、第９ｂ面の遺構について説明する。この面からは土器埋納遺構が38基検出された（図Ⅳ－63・64、表Ⅳ－24）。これらのうち、当地区東部において南北方向に並ぶように分布するものがあり、南北方向の地割に沿って埋納がおこなわれた可能性が指摘されている。そこから推定される南北地割は、水路35から東に約110m離れた場所にあることから、第９ａ面で確認される正方位地割は条里型地割であった可能性が指摘されている（江浦1992ｂ）。しかし、それらは土器埋納遺構の一部であり、分布の意味を明らかにするためには、他のものについても検討することが必要である。そこでまず、当地区南西部をみると、土器埋納遺構が南東－北西方向に並んでいることが注目される。これと微地形との関係を明らかにするために、第10ｂ面の等高線図に土器埋納遺構の位置を記入すると（図Ⅳ－62）、それらは微高地の縁辺に沿って分布していることがわかる。この微高地は水田として利用することは難しく、非水田域であった可能性が高い。土器埋納遺構が微高地縁辺に沿って分布することは、水田域と非水田域の境付近に土器が埋納された可能性を示唆する。また、土器埋納遺構69～49も傾斜変換点付近に集中しており、この付近に畦畔が造成されていた可能性も考えられる。

ここで指摘した非水田域の存在は、他の遺構の評価にも影響を与える。概要ⅩⅡ（pp.115･116）では、「第16－２面」で検出された建物の中に７世紀代のものが含まれる可能性が指摘されている。これは、土器埋納遺構51（７世紀中頃）が建物18の柱穴と考えられるためであり、他に建物29の柱穴から、内面に暗文の認められる土師器杯の細片も出土している。概要ⅩⅡでは、土器埋納遺構51と建物18柱穴に切り合い関係があったものの認識できなかった可能性や、集落が存在したことが確実な古墳時代後期の遺物に比べて７世紀代の遺物がきわめて少ないことなどから、これらの建物の時期を保留している。今回、土器埋納遺構51の断面写真を検討したところ、少なくとも複数の遺構の切り合いを示唆するような状況は認められなかった。また、建物29出土の土師器杯の細片については、柱穴を半裁して堆積状況を確認した後、残りを掘削した段階で出土したようである。これ以上の検証は難しいが、少なくとも７世紀代の居住域がここに存在していたとしても、何ら不思議ではない。このことをふまえて図Ⅳ－60には、建物18・29とともに、これらと軸が揃っており、同時期の建物の可能性が指摘されている17・19・20・21を示した。また、土坑８は微高地の縁辺に



図Ⅳ－61　水路35断面図

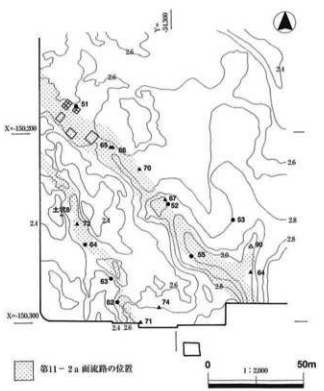
位置している。この遺構には深くなった部分が２ヶ所存在しており、それぞれの断面形状は漏斗状を呈する。ここから出土遺物には複数の時期のものがあることから、２つの遺構が切り合っていた可能性が高いが、断面の残し方が適切でなかったために、断定はできない。ただし、７世紀初め頃～中頃のものが多く、土器埋納遺構51の時期に近接することからすれば、これらの中に飛鳥時代の井戸が含まれている可能性もある。また、図Ⅳ－66：(35) の土師器羽釜は６世紀と考えられるものと比べて鍔が小さく、７世紀代の可能性がある。これは第９ａ層最下部から出土したが、破片が大きく、残りもよいため、遺構に入っていた可能性も否定できない。この羽釜は建物29の東側から出土した点が注意される。

次に、第９ｂ面の遺構から出土した遺物を列挙する。

まず、前述の居住域？に関連する遺物を見ていきたい。建物18柱穴の可能性がある土器埋納遺構51からは、土師器杯Ｃ（図Ⅳ－80：19）が出土した。７世紀中頃のものである。土坑８からは、須恵器杯蓋（１～３）・杯（４・５）、土師器杯Ｃ（６・７）・高杯（８）等が出土した。７世紀初め～中頃の時期のものが多い。杯蓋（２）・（３）がそれより古い時期のものである。杯蓋（２）と杯（５）にはヘラ記号が施されている。杯蓋（３）の内面には縄目のような痕跡がある。

また、小規模な遺構から出土した遺物としては、以下のものがある。ピット12からは土師器杯（図Ⅳ－79：１）が出土した。７世紀第４四半期頃のものである。ピット21からは土師器椀Ｃ（２）・杯Ａ（３）が出土した。８世紀初め頃のものである。ピット22からは、土師器杯Ａ（４）が出土した。８世紀末～９世紀初め頃のものである。ピット23からは、土師器杯Ｂ？（５）が出土した。８世紀前半頃のものである。ピット25からは、須恵器杯Ｂ蓋（６）が出土した。８世紀初め頃のものである。ピット26からは、土師器片口鉢（７）が出土した。８世紀中頃～後半のものである。

次に、土器埋納遺構から出土した遺物のうち、８世紀代のものを見ていくことにする（図Ⅳ－79）。土器埋納遺構65からは土師器杯（８）が出土した。８世紀初め頃のものである。土器埋納遺構66からは土師器鉢（９）が出土した。８世紀初め頃のものである。土器埋納遺構67からは須恵器杯（10）、土師器杯Ａ（11・12）・鉢Ｂ（13）・羽釜（14）等が出土した。８世紀前半～中頃のものである。須恵器杯（10）には、外底面に記号「ふ」の墨書がある。第８ａ層で同じようなもの（図Ⅳ－53：26）が出土している。土師器杯Ａ（11）には、外底面にヘラ記号？が施されている。土器埋納遺構68からは土師器羽釜（15）が出土した。８世紀後半頃のものである。土器埋納遺構69からは土師器杯（16）が出土した。８世紀初め頃のものである。外底面に「華」の墨書がある。土器埋納遺構70からは土師器杯Ａ（17）が出土した。８世紀前半頃のものである。土器埋納遺構71からは土師器杯Ａ（18）が出土した。



図Ⅳ－62　土器埋納遺構と微地形の関係

8世紀前半頃のものである。外底面にヘラ書きがある。土器埋納遺構72からは土師器鍋（19）が出土した。8世紀後半頃のものである。土器埋納遺構74からは土師器羽釜（20）が出土した。8世紀前半頃のものである。土器埋納遺構88からは土師器椀X（21）が出土した。8世紀初め頃のものである。土器埋納遺構90からは土師器杯A（22）が出土した。8世紀前半頃のものである。

また、土器埋納遺構のうち、7世紀代のものを図Ⅳ－80に示した。土器埋納遺構41からは土師器杯C（9）が出土した。7世紀後半頃のものである。土器埋納遺構42からは、須恵器杯（10）が出土した。Ⅱ型式第5段階のものである。外底面にヘラ記号を施す。土器埋納遺構43からは土師器杯C（11）が出土した。7世紀後半頃のものである。外底面にヘラ記号を施す。土器埋納遺構44からは須恵器杯（12）が出土した。Ⅲ型式第2段階のものである。土器埋納遺構45からは須恵器杯蓋（13）が出土した。Ⅱ型式第5～6段階のものである。土器埋納遺構46からは須恵器杯（14）が出土した。Ⅱ型式第6段階のものである。土器埋納遺構47からは須恵器杯（15）が出土した。Ⅳ型式第1段階のものである。口縁部に打ち欠きかと思える欠けがある。土器埋納遺構48からは土師器甕（16）が出土した。7世紀後半頃のものである。土器埋納遺構49からは須恵器杯（17）が出土した。Ⅱ型式第3段階のものである。土器埋納遺構50からは土師器杯C（18）が出土した。7世紀後半代のものである。内面にヘラ書きの可能性があるものが認められる。土器埋納遺構51からは土師器杯C(19)が出土した。7世紀中頃のものである。土器埋納遺構52からは土師器杯C（20）が出土した。7世紀中頃のものである。土器埋納遺構53からは須恵器杯蓋（21）が出土した。Ⅱ型式第6段階のものである。口縁部に打ち欠きと思われる欠けがあり、天井部にはヘラ記号を施している。土器埋納遺構54からは須恵器杯（22）が出土した。Ⅱ型式第6段階のものである。土器埋納遺構55からは土師器杯C（23）が出土した。7世紀後半のものである。内面にヘラ書きの可能性のあるものが認められる。土器埋納遺構60からは土師器杯（24）が出土した。7世紀中頃のものである。内面にヘラ書きを施している。土器埋納遺構61からは土師器椀(25)が出土した。8世紀初め頃のものである。外面にヘラ書きの可能性のあるものが認められる。土器埋納遺構62からは土師器杯C(26)が出土した。7世紀中頃のものである。外面にヘラ書きを施している。土器埋納遺構63からは土師器把手付椀（27）が出土した。7世紀第1四半期のものである。土器埋納遺構64からは土師器杯C（28）が出土した。7世紀後半頃のものである。

これらのうち最も古いのは、土器埋納遺構42・45・46であり、7世紀初め頃のものと思われる。また、最も新しいのが土器埋納遺構72で、8世紀後半である。これらを時期別に整理すると、7世紀代のもののうち、初頭～前半が8基、中頃が9基、後半が9基となる。また、8世紀代のもののうち、前半が10基、中頃が2基、後半が1基となる。土器の時期推定にはある程度の幅を考慮する必要もあるが、この傾向は第9a層の耕作期間を考えるための参考になると思われる。

第9a面については遺存状況が悪く、詳細を明らかにすることはできないが、以上のような遺物のあり方からみて、7世紀初め頃から水田開発が始まり、7世紀中頃～末には正方位地割が形成されていたと考えられる。この地割は第8a面に一部継承されるものの、第8a面でみられる条里型地割には基本的に合致しない。また、8世紀代には水路35が埋没したが、畦畔として地割が継承され、継続して耕作が続けられたと思われる。なお、土器埋納遺構の時期をみると、9世紀代のものが皆無である点が注目される。第8a層などから9世紀代に入る可能性がある土器は若干出土しているが、前後の時期の土器と比べるときわめて少ない。9世紀代にどのような土地利用がなされていたかについては明らかにできないが、第8a面における地割変更の背景を考える上でも注意すべき事実である。

第９ａ層出土遺物　第９ａ層から出土した遺物も、後述する古墳時代後期集落に関連するものが大半をしめるため、後の記述の便宜上、ここにまとめておきたい（図Ⅳ－65：８～Ⅳ－78：338）。

この層からは遺物が大量に出土しているので、須恵器以外の遺物を先に記述する。土師器椀Ｃ（８）・杯（14・16）・杯Ａ（18）・杯Ｃ（９～13）・杯Ｂ蓋（17）・皿Ａ（15）・甕（19～22・49・50）・高杯（23～25・36～43）・小型丸底壺（26～29）・竈（30～33）・甑（34）・羽釜（35）・複合口縁壺（46）・鉢（52～54）、弥生土器短頸壺（47・48）・高杯（44・45）・甕（51）、軟質土器片（56・57）、韓式系甕（58）等が出土した。

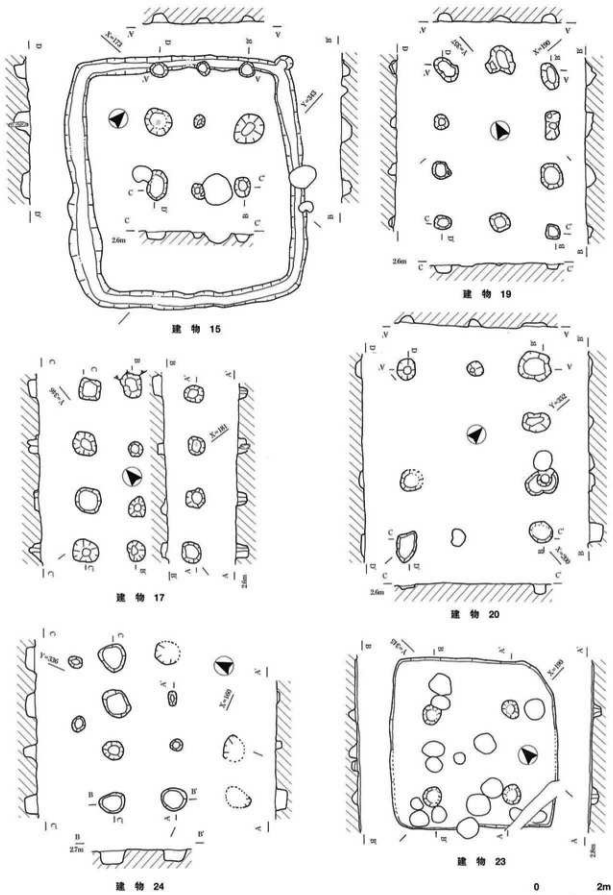
土師器椀・杯・皿類は７～８世紀のものである。甕・高杯・小型丸底壺・甑は５～６世紀のもので、それに若干の弥生土器第Ⅴ様式～庄内期の土器が混じっている。土師器杯（10）の内面には、ヘラ記号が施されている。土師器竈（30～32）の口縁端部には、同心円スタンプまたは車輪風スタンプが施されている。（33）は竈の庇の部分である。土師器羽釜（35）は７世紀ぐらいのものと思われる。

軟質土器（56）は甕で口縁端部に凸線を持つ。（57）は外面斜格子状タタキである。韓式系甕（58）は陶質で、口縁端部に凸線を持ち、外面には平行タタキの後沈線を施している。

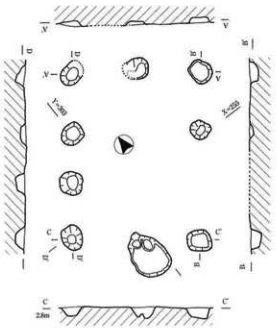
須恵器は杯蓋（59～100）・杯（101～151）・高杯（152～168）・鼓（169～175）・壺（176・177・182・183・187～193）・横瓶（178・180）・平瓶（179）・短頸壺（181・184～186）・甕（194～205）・器台（206・207）等が出土した。杯蓋はⅠ型式第４段階～Ⅳ型式第１段階までのものがあり、Ⅰ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階のものが多い。（63）・（78）・（92）にはヘラ記号が施され、（79）・（80）・（87）の口縁部外面にはハケ状刻目が施されている。（88）には別個体の破片が溶着している。（100）は凸線文２条と連続櫛描刺突文で飾られている。杯はⅠ型式第４段階～Ⅲ型式第２段階までのものがあり、Ⅰ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階のものが多い。（122）・（142～144）にはヘラ記号が施され、（117）・（124）・（141）・（151）には別個体の破片が溶着している。（133）には、内外面の一部に赤色顔料が付着している。（136）は焼きが悪いものか、須恵器を模倣した土師器か不明のものである。高杯はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第５段階までのものがあり、Ⅰ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階がほとんどである。（153）の内面には、点々状の当て具痕が残る。（162）には３方向の透かしが認められるが、そのうちのひとつが未貫通である。鼓はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第５段階までのものである。横瓶はⅠ型式第５段階のものと７世紀ぐらいのものである。平瓶は７世紀ぐらいのものである。壺はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第３段階までのものである。（177）は外底面に格子状タタキを施している。（191）には竹管文が１個施されている。短頸壺にはⅡ型式第２段階～第４段階のものがある。甕はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第３段階までにおさまるものが多いが、（203）はそれより古いⅠ型式第１～２段階のものである。（195）・（200）には頸部外面にヘラ記号が施されている。器台（206）は、凹線文と波状文（13～17条）で飾り、透かしは筒部に長方形のものが４方向、三角形のものが４方向で２段あり、脚部に三角形のものが４方向、半円形のものが４方向に認められる。子持器台（207）は、子杯が６個付いていたと推定され、外面にヘラ記号を施している。器台部分への杯の接合部分は内部を空洞にしており、火通りをよくするためか、空洞に対して穿孔が施されている。体部にも穿孔が１つ残存する。

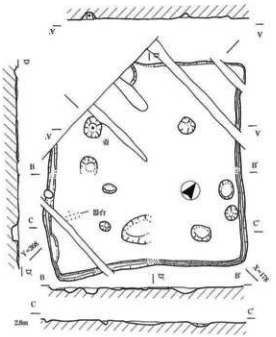
その他の遺物として、土製紡錘車（208）、鉄滓（209）、砥石（210～222）、滑石製品（223～256・261～339）、ガラス小玉（257～260）等が出土した。砥石は流紋岩製と流紋岩質凝灰岩製のものが多いが、（222）は砂岩製である。４面使用しているものが多い。（221）は砥石かどうか不明のものである。

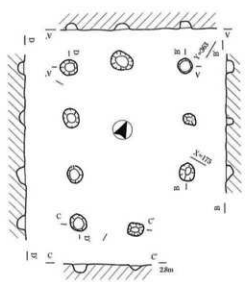
滑石製品は臼玉（223～249）、紡錘車（252～256）、切子玉（261）、管玉（250・262～266）、双孔円板

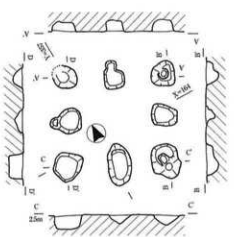


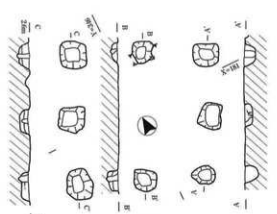
図Ⅳ－89　第９ｂ・10ｂ面建物④

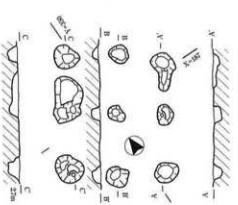




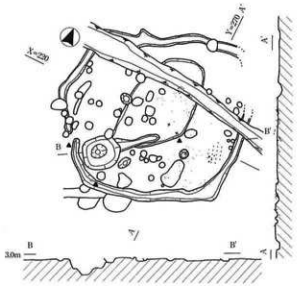




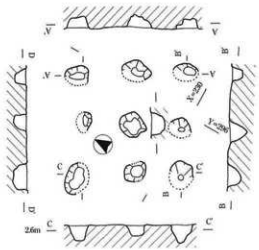




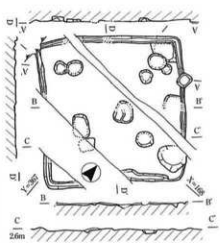
図Ⅳ－88　第９ｂ・10ｂ面建物③



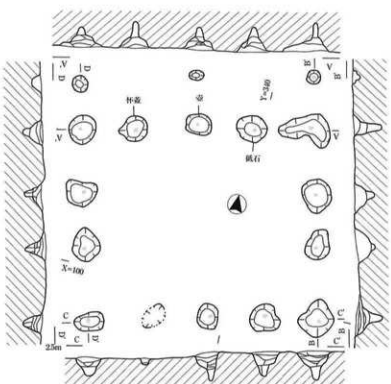
（建　物　8）



建　物　9



建　物　11



建　物　4

0　2m

土器集積　赤色顔料？

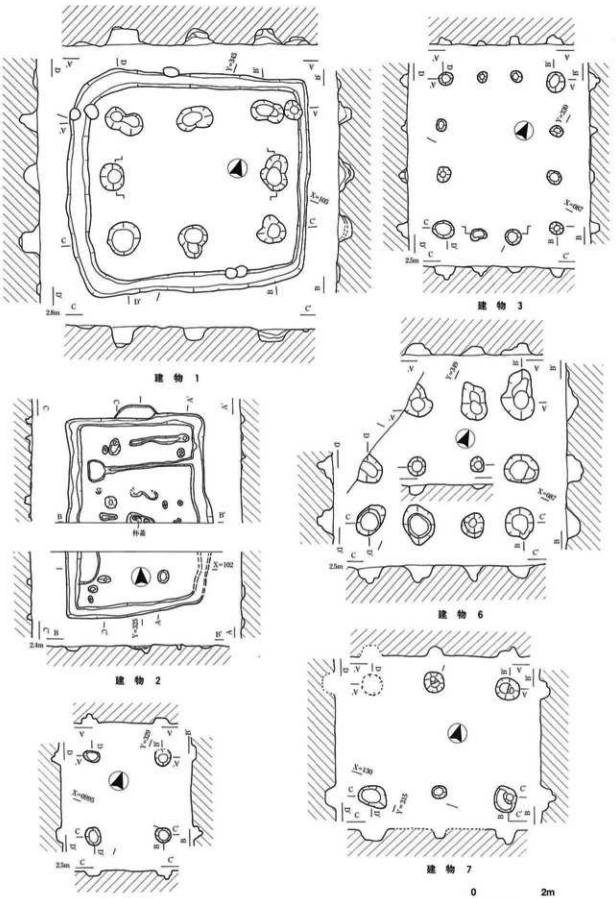
柱痕跡

玉

鉄器

※建物跡の座標、標高の表示について
1、座標はXの「-150」、Yの「34」を省略。
2、標高は「T.P.+」を省略。

図Ⅳ－87　第９ｂ・10ｂ面建物②



図Ⅳ－86　第９ｂ・10ｂ面建物①

れていたと考えられるものである。

竪穴建物である建物２からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－92：２～４）・杯（５）・高杯（６・７）、土師器竈（８）、滑石製臼玉（９～21）等が出土した。このうち、（３）は建物中央のピットに埋納されていた。須恵器はⅡ型式第１～第２段階のものである。（６）は口縁が小さくて高杯かどうか不明である。高杯（７）にはヘラ記号が施されている。（２）は建物中央部のピット内に逆位の状態で埋納されていたものである。土師器竈は口縁部外面に同心円スタンプを施している。滑石製臼玉は15個出土した。

建物４の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－92:22～25）、土師器甕（26）・直口壺底部（27）、砥石（28）等が出土した。前述のように、これらは複数の柱穴に埋納されたものである。須恵器はⅡ型式第１～第２段階のもので、土師器は６世紀ぐらいのものである。砥石は頁岩で４面使用している。

「建物８」とされた部分の落ち込み内からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－93：29～31）・杯（32・33）・甕（34・35）、土師器高杯脚（36）、滑石製品（37～82）、サヌカイト剥片（83）等が出土した。須恵器はⅡ型式第１段階～第２段階のものである。杯（32）には別個体の破片が溶着している。滑石製品は臼玉（37）～（81）と有孔円板（82）である。臼玉は総数237点出土している。

建物９の柱穴からは木製品（図Ⅳ－93：84）が出土した。礎板の可能性のあるものである。

竪穴建物である建物11からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－93：85～87）・杯（88・89）・高杯（90）等が出土した。Ⅰ型式第４段階～Ⅱ型式第２段階のものである。高杯は凸線１条と波状文５条で飾り、透かしは４方向である。

竪穴建物である建物12からは、須恵器壺（図Ⅳ－94：91）・器台（92）、土師器鉢？（93）、弥生土器高杯脚（94）、滑石製臼玉（95）等が出土した。（91）は柱抜き取り後、柱穴に埋納されたものである。須恵器の時期はⅠ型式第４段階である。器台は杯部・脚部ともに凸線と波状文（７～12条）で飾る。透かしは三角形で、６方向に２段存在する。土師器鉢？は時期不明である。この土器は器面が変色しており、二次的に被熱した可能性が高い。弥生土器高杯脚は第Ⅵ様式～庄内式ぐらいのものであり、この建物に伴うものではない。臼玉は１個出土した。

建物15の柱穴からは、土師器甕（図Ⅳ－94：96）、板状木製品（98）、柱根（97・99）が出土した。土師器は６世紀ぐらいのものである。板状木製品は柱穴底面に貼り付いた状態で出土しており、礎板の可能性がある。柱根は端部が炭化している。

建物16の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－94：100・101）・短頸壺（102）、礎板（103）等が出土した。須恵器はⅡ型式第１段階～第２段階のものである。

竪穴建物である建物23からは、須恵器杯（図Ⅳ－94:107）、滑石製剣形石製品（108）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第２段階のものである。

建物24の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－94：109）・短頸壺（110）等が出土した。杯蓋はⅡ型式第１～２段階、短頸壺はⅠ型式第４段階と若干の時期差がある。短頸壺は凸線２条と刺突文で飾られており、別個体の破片が溶着している。

建物25の周辺からは、滑石製臼玉（図Ⅳ－95：111～139）・有孔円板（140～144）が出土した。総数は双孔円板２、有孔円板５、臼玉197点である。この建物の中央部で検出された土坑14でも多数の滑石製品が出土しており、それとの関連が考えられる。

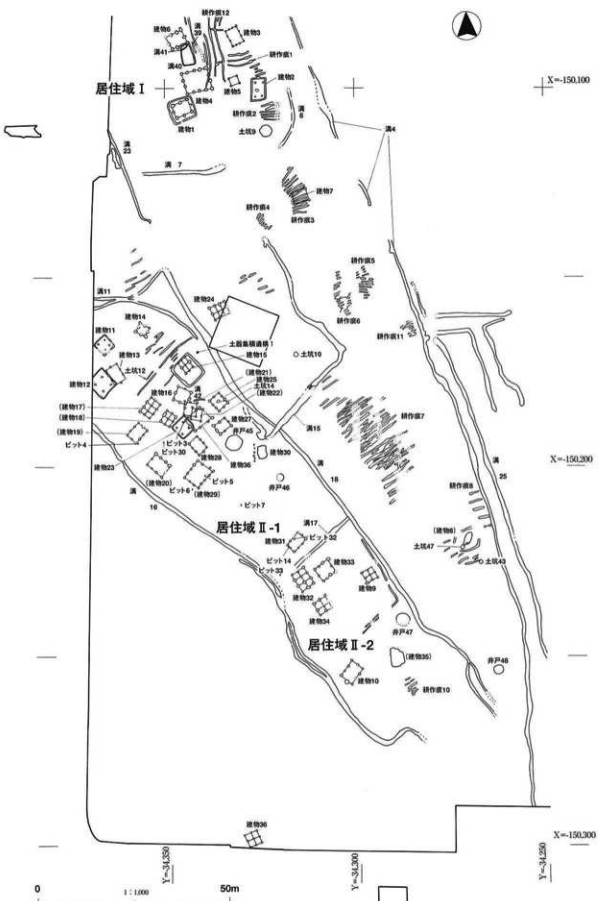
竪穴建物である建物30からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－95：149～154）・杯（155）・高杯（156）・壺（157）、土師器甕（158～160）・甑（161・162）・羽釜（163・164）等が出土した。須恵器はⅡ型式第１段階のも

a層の小さな落ち込みが混在し、そこに新しい時期の遺物が入っている危険がある。実際、建物30では、わずかながら6世紀末～7世紀初め頃と考えられる土師器片が出土している。写真（概要Ⅹ Ⅱ，p.81）をみると、建物の平面形が認識された時点で多くの小穴が確認されているが、これらは建物よりも新しい遺構であり、このような中に土器が入っていた可能性がきわめて高い。また、「玉製作址」とする意見もある「建物８」には、以下のような問題が存在する。この「建物」については壁溝が検出されただけで、柱穴と推定されているピットもきわめて浅く、「建物」とは関係しない小穴も多く重複して検出されるなど、遺存状況はきわめて悪かった。そして、「建物」の平面形をみると、かなりいびつな形をしている。周囲の遺構も含めて観察すると、壁溝と認識された溝の２辺が耕作痕９の溝の向きと一致するだけでなく、その延長線上に位置する点も注意される（図版20－５）。なお、玉製作に関連するとされる土坑47は、断面図では明瞭な２段の掘り込みとして表現されているが、写真をみると実際は上半部がすり鉢状をなし、中央部が深くなる形状を呈していたようである。この「建物」内の落ち込みからは、滑石製品と須恵器が多数出土した（図版20－６）。これらの遺物はレベルがほぼそろっており、一連の廃棄の結果残されたものが比較的良好に遺存したと考えられる。断面写真や断面の記載を点検したところ、この部分では第８ａ層の下に「粗砂混じり黒色粘土」が薄く残存しており、この層に遺物が含まれていたことが判明した。この層は第10ａ層に対比される可能性が高く、浅い落ち込みのような場所に土器や玉が廃棄され、それらが土壌の中に取り込まれる形で埋没したと推定することができる。ちなみに、この「建物」にあたる地点の第８ａ層からは遺物が全く出土しておらず、第８ａ面段階の耕作によって遺物集中部分が攪乱された可能性は低い。以上のことを総合すると、「建物」とされた遺構と臼玉などの遺物は直接関係しないと考えられる。この「建物」を玉製作工房跡とする想定は、「建物」内から多くの玉類、刀子状の鉄製品、赤色顔料などが出土したことや、土坑47を玉製作工房跡の事例にみられる方形土坑と同じ性格の遺構とみなすことから導かれている。しかしながら、これを竪穴建物跡とするには柱の並びが不自然なだけでなく、平面形態からみた主軸と合わないなどの問題があるし、仮に建物跡が削られたとすれば、それは遺物が廃棄される以前であったと考えられる。このように、この遺構については、遺構の重なりや遺物の廃棄、埋没後の削剥など、人間活動の重複を主体とする遺構形成過程を考慮して、建物かどうかも含めて慎重に評価することが求められる。

また、掘立柱建物については時期を明確にしがたいものが多いが、建物４・16では柱穴の中に土器が埋納されており、時期推定が可能である。また、建物24についても雛溝掘削中に完形の須恵器杯蓋が出土しており、これも柱穴に埋納されていた可能性が指摘されている。これらはいずれも、柱抜き取り後に埋納されたもので、建物４の場合、３つの柱穴に土器や砥石が埋納され、須恵器杯蓋を埋めた柱穴からはウリ類の種子も出土した。（概要Ⅱ，pp.46-47）。なお、建物１に関しては、概要Ⅱでは遺物は出土しなかったと記載されているが、遺構掘削を開始した直後に柱穴のひとつから須恵器の細片が出土していたことが判明した。これはⅡ型式第５段階に属するものと考えられ、どの段階で入り込んだかが問題となる。この建物については柱の抜き取り痕が明瞭に残り、柱穴は柱抜き取り後に流入した土で埋積されたことが確認されている。したがって、この土器片は建物廃絶後に入り込んだもので、建物の時期は示さない。

次に、建物跡から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ－92～96）。

建物１の柱穴からは、須恵器壺（図Ⅳ－92：１）が出土した。Ⅱ型式第５段階ぐらいのものかと思われる。頸部外面は平行タタキの後ナデている。これは前述のように、柱抜き取り後の流入土の中に含ま



図Ⅳ－85　第10ｂ面集落関連遺構平面図

－北東方向に枝分かれして舌状にのびている。以上の微高地は、第11－２ａ面～第11－１面流路１・２を埋める流路堆積物と、流路１から供給された破堤堆積物によって形成されたものである。また、当地区南東部には南北方向にのびる微高地が存在するが、これは第11ｂ層の堆積によって生じ、第11－２ａ面から存在していたもので、この部分には第10ｂ層がほとんど堆積していない。さらに当地区北東部にも、南東－北西方向にのびるわずかな高まりがあるが、これは第13ｂ層の堆積によって生じ、弥生時代を通じて存在した微高地が痕跡的に残存したものである（弥生時代の堆積物と微地形の関係は次項で詳述）。第10ｂ面は旧地表面ではないが、第10ａ層はここで記述した起伏の上に形成されたものであるから、この起伏が古墳時代の地表面の状況を反映していると考えてよい。

遺構が多く検出されたのは、当地区西部の微高地上である。特に流路１が埋没して形成された微高地の上や、流路１から供給された破堤堆積物によって形成された微高地の末端には遺構が集中する。江浦洋（1991ｂ）では古墳時代後期の集落について、「グループⅠ」・「グループⅡ」という区分がなされた。その後、概要ⅩⅡではその名称が「集落Ⅰ」・「集落Ⅱ」と呼びかえられ、さらに後者が「集落Ⅱ－１」・「集落Ⅱ－２」と細分された。本書では概要ⅩⅡの区分を踏襲して記述するが、「集落」を「居住域」と言い換えることにする。それは、こうしたグループが別個の集落を形成していたのではなく、いくつか集まってひとつの集落を構成していた可能性が高いと考えるためである。

建物　まず、居住域内で検出された建物についてみていきたい（図Ⅳ－86～91、表Ⅳ－26）。ただし、ここには飛鳥時代に属する可能性がある建物17・18・19・20・21も合わせて図示しているので注意されたい。

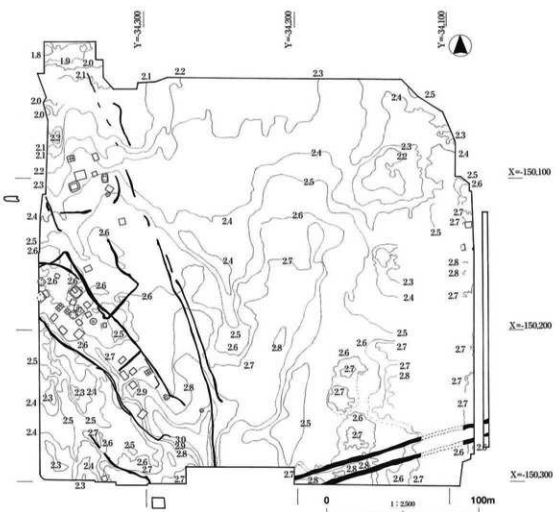
この面で検出された建物跡には、竪穴建物と掘立柱建物がある。前者については、住居として利用されたと考えられるものの他、「竈屋」として使われた可能性が指摘されているものが含まれている。また、後者については、平地式建物か高床式建物かを厳密に区別する基準を見出せないため、両者を一括した呼称として使用する。竪穴建物は確実なもので６基検出されたが、ここでは90-1調査区で「落ち込み６」と呼称され、「竈屋」の可能性があるとされた遺構も「建物35」として含め、計７基を表示している。「竈屋」と推定された建物のうち、建物30では作り付け竈が２基検出されている。このうち１基（図版20－８）は確実で、もう１基は壁体の下に炭化物層がもぐり込むなど、問題も残るとされている（概要ⅩⅡ，p.81）。また、建物２とその周辺では土師器竈・羽釜・甑の破片等が多く出土した。なお、90-3調査区の「建物跡３」は、概報の実測図では壁溝が長方形にめぐるように表現されているが、原図や写真をみると、壁溝と一括された溝の間に切り合い関係が認められる。したがって、これについては建物跡からは除外し、壁溝とされたものを一括して溝40とした。また、掘立柱建物は29基を示したが、このうち５基は、前述のように飛鳥時代に属する可能性がある。また、90-1調査区において、調査時に掘立柱建物の可能性が考えられたものの、その想定に疑問点が多いため概報には掲載されなかった遺構が２つ存在するが、これについても（建物21）・（建物22）として図Ⅳ－85に位置を記載した。なお、建物の実測図は、概要Ⅰ・Ⅱ・ⅩⅡ・ⅩⅣに掲載されたものを若干修正している。建物に関するデータは表Ⅳ－26にまとめたが、詳細はそれぞれの概報を参照されたい。

竪穴建物からは比較的多く遺物が出土しており、時期を決定しやすい。例えば、柱抜き取り後の柱穴に須恵器壺を埋納し、床面直上から須恵器器台が出土した建物12は、炭化物の出土状況からみて最終的に部材の一部が燃やされたと考えられており、遺存状況はよかった。しかし全体としてみると、第10ａ層が第９ａ層・第８ａ層の耕作によって大きく削られているため、竪穴建物の埋土の中に第９ａ・第８

第10層と呼称されている。こうした状況をふまえて断面写真を再検討したところ、90-3調査区Aトレンチにおいて、第8a層と弥生時代後期末の砂礫層の間に、2枚の古土壌が存在することが明らかになった。このうち、上のもの（調査時に「第11₂層」と呼称）からは古墳時代の遺物の他、飛鳥・奈良時代の遺物が出土しており、第9a層に対比できる。しかし、下のものについては部分的にしか残存していなかったこともあり、どのような遺物が含まれていたかは明らかではない。ただし、遺構の埋土をみると、弥生時代後期末の器台が出土した溝9など、確実に下の古土壌起源の土で充填された遺構が存在することが判明し、下の古土壌が第9a層以前に形成されたものであると考えるに至った（図版22－7・8）。この古土壌には、下の砂礫層に起源する砂礫が多く含まれており、これを母材のひとつとしていることがわかる。こうした状況に着目して砂礫層を第10b層とし、これを母材のひとつとして形成された土壌を第10a層と呼称することにした。

前項で述べたように、第10b面に帰属する遺構は第9b面・第8b面の遺構と同時に検出された部分が多い。ここでは、第10b面精査時に検出された遺構の中から、第10b面に帰属すると考えられるものを抽出して説明することにしたい。

微地形　まず、この面の起伏を概観したい（図Ⅳ－84）。当地区南西部には南東－北西方向にのびる細長い微高地が2つ存在する。また、当地区中部にも微高地が存在するが、これは南東－北西方向と南西



図Ⅳ－84　第10b面等高線図

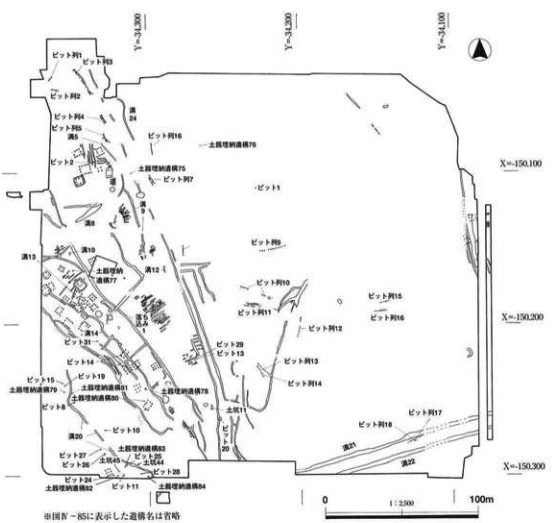
3. 第10ｂ面ー古墳時代遺構面の調査ー

府教委Ｃトレンチ（府発Ⅰ，pp.14-26）において古墳時代後期の滑石製玉類が大量に出土したことから、当遺跡を玉作りの集落とする考え方が早くから出されてきた（小野1995など）。その後の調査によって、この時期の建物をはじめとする多くの遺構が検出され、集落の様子が明らかになってきた。さらに、玉類以外に土師器移動式竈、須恵器器台など、様々な遺物が出土しており、それをもとにした集落の性格に関する検討もおこなわれている（森本1997）。

また、当地区からは古墳時代前期にさかのぼる遺構も検出された。恩智川を挟んで東側に位置する池島Ⅰ期地区においても、画文帯神獣鏡の破片など、古墳時代前期に属する遺物・遺構が検出されており、今後周辺の調査が進めば、古墳時代前期の土地利用の実態が明らかになると期待される。

本項では、古墳時代の遺構が多数検出された第10ｂ面の調査成果を記述する。

第10ｂ面の設定　当初、この面は「古墳～古代面」（概要Ⅰ）と呼称され、古墳時代から平安時代まで地表面であったと考えられていたが、その後第９ａ層が確認されたことで、この認識が誤りであることが明確になった。また、最近の池島Ⅰ期地区の調査では、古墳時代に属する古土壌が確認されており、



図Ⅳ－83　第10ｂ面平面図

表Ⅳ－25　第10ｂ面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	備考
井戸45	90-1　井戸14	
井戸46	90-1　井戸15	
井戸47	90-1　井戸８	
井戸48	89-3　井戸13	
土坑９	90-3(A)　土坑222	
土坑10	90-1　土坑133	
土坑11	89-3　土坑33	
土坑12	90-1　土坑125	
土坑13	92-7　古墳画土坑	所在不明
土坑14	90-1　土坑137	玉出土
土坑43	89-2　土坑３	
土坑44	92-7　土坑１	
土坑45	92-7　土坑５	
土坑47	89-2　土坑１	
落ち込み１	90-1　落15	落93・193と同一
土器集積遺構１	90-1　土器集積遺構	
溝４	90-3(A)　溝68	
溝５	90-3(A)　溝40	
溝６	90-3(A)　溝58	
溝７	90-3(A)　溝12	
溝８	90-3(A)　溝22	
溝９	90-3(A)　溝60	
溝10	90-1　溝581	
溝11	90-1　溝711	
溝12	90-1　溝258	
溝13	90-1　溝629	
溝14	90-1　溝633	
溝15	90-1　溝700	
溝16	90-1　溝635	
	92-7　仮溝C	
溝17	90-1　溝314	
溝18	90-1　溝585	溝313と同一
溝19	90-1　溝653	第８ｂ面で検出
溝20	92-7　溝A	
溝21	90-1　溝28	
溝22	93-1　溝29	
溝23	90-1　溝210	
	87-3　溝1211	
溝24	90-2　溝40・41	
溝25	89-1　溝28	
	89-2　溝２	
溝39	90-3(A)　溝28	
溝40	90-3(A)　建物跡３	
溝41	90-3(A)　溝29	
溝42	90-1　溝649	玉出土
耕作痕１	90-3(A)　畝溝状遺構２	
耕作痕２	90-3(A)　畝溝状遺構４	
耕作痕３	90-3(A)　畝溝状遺構５	
耕作痕４	90-3(A)　畝溝状遺構６	
耕作痕５	90-1　―	
耕作痕６	90-1　―	
耕作痕７	90-1　―	
耕作痕８	89-2　―	
耕作痕９	89-2　―	
耕作痕10	90-1　―	
耕作痕11	90-1　―	
耕作痕12	90-3(A)　畝溝状遺構１	
ピット１	90-3(B)　ピット18	
ピット２	90-3(A)　ピット192	
ピット３	90-1　ピット1976	
ピット４	90-1　ピット1889	
ピット５	90-1　ピット3089	
ピット６	90-1　ピット2124	
ピット７	90-1　ピット2508	
ピット８	90-1　ピット2781	耳環ピット
ピット９	90-1　建物21に切られたピット	所在不明
ピット10	92-7　ピット239	
ピット11	92-7　ピット94	
ピット13	89-2　ピット42	玉出土
ピット14	90-1　ピット2976	
ピット15	90-1　ピット3086	
ピット19	90-1　ピット3084	玉出土

遺構番号	概要における遺構番号	備考
ピット24	92-7　ピット171	
ピット27	92-7　ピット130	
ピット28	92-7　ピット８	
ピット29	89-2　ピット９	
ピット30	90-1　ピット1922	
ピット31	90-1　ピット2904	
ピット32	90-1　ピット2969	
ピット33	90-1　ピット2987	
土器埋納遺構75	90-3(A)　掘りのこし土器埋納ピット６	
土器埋納遺構76	90-3(B)　掘りのこし土器埋納ピット７	
土器埋納遺構77	90-1　土器埋納遺構６	
土器埋納遺構78	90-1　土器埋納遺構４	
土器埋納遺構79	90-1　土器埋納遺構９	
土器埋納遺構80	90-1　土器埋納遺構３	
土器埋納遺構81	90-1　土器埋納遺構10	
土器埋納遺構82	92-7　土坑４	
土器埋納遺構83	92-7　土坑２	
土器埋納遺構84	92-7　土坑３	
建物１	90-3(A)　建物７	
建物２	90-3(A)　建物６	
建物３	90-3(A)　建物１	
建物４	90-3(A)　建物４	
建物５	90-3(A)　建物５	
建物６	90-3(A)　建物２	
建物７	90-3(A)　建物９	
(建物８)	89-2　竪穴住居	
建物９	90-1　建物１	
建物10	90-1　建物２	
建物11	90-1　建物３	
建物12	90-1　建物４	
建物13	90-1　建物５	
建物14	90-1　建物６	
建物15	90-1　建物７	
建物16	90-1　建物８	
建物17	90-1　建物９	
建物18	90-1　建物10	
建物19	90-1　建物11	
建物20	90-1　建物12	
(建物21)	90-1　建物13	
(建物22)	90-1　建物14	
建物23	90-1　建物15	
建物24	90-1　建物16	
建物25	90-1　建物17	
建物26	90-1　建物18	
建物27	90-1　建物19	
建物28	90-1　建物20	
建物29	90-1　建物21	
建物30	90-1　建物22	
建物31	90-1　建物23	
建物32	90-1　建物24	
建物33	90-1　建物25	
建物34	90-1　建物26	
(建物35)	90-1　建物28(落ち込み６)	
建物36	92-7　掘立柱建物１	
ピット列１	86-1　―	
ピット列２	86-1　―	
ピット列３	86-1　―	
ピット列４	90-2(H２)　―	
ピット列５	90-2(H２)　―	
ピット列６	90-3(A)　棚１	
ピット列７	90-3(A)　棚２	
ピット列８	89-1　―	
ピット列９	89-1　棚列１	
ピット列10	89-1　棚列３	
ピット列11	89-1　棚列２	
ピット列12	89-2　ピット列１	
ピット列13	89-2　ピット列３	
ピット列14	89-2　ピット列４	
ピット列15	93-2(C)　ピット63～72	
ピット列16	93-2(C)　ピット80～104	
ピット列17	93-1　ピット列１	
ピット列18	93-1　ピット列２	

e．農耕祭祀に関する問題

古代～中世における農耕祭祀の痕跡については、土器埋納遺構と坪境水路の状況が注目される。

土器埋納遺構に関しては、江浦　洋（1992b・1996）が体系的に整理し、その性格についても論じている。今回、各面の遺構配置に関して最終的な整理が完了したので、改めて土器埋納遺構の分布を各面ごとに再検討した。まず、第9a面に関連するものは、地割に沿った部分とともに、非水田域の可能性が高い微高地と水田域の境界付近などにも分布していることが判明した。続く第8a面に関連するものは、当地区の広い範囲から検出されているが、畦畔の近くなどに位置するものも目立つ。一方、第7面・第6b面に関連するものは、十六ノ坪や十八ノ坪に集中する傾向を示す。その後、土器埋納遺構はほとんどみられなくなり、わずかに第2b面で1基検出されるにとどまる。このように、当初は地割や水田域の境界などを意識して土器が埋納されたが、中世になるとそうした決まりが薄れ、分布にも偏りが生じるようになった。そして、14世紀以降、こうした祭祀形態は衰退したようである。

もうひとつの祭祀の痕跡として、第7面水路12と第6a面水路10から出土した遺物があげられる。ここで注目されるのは、牛馬を中心とする獣骨がまとまって出土していることである。これについては、雨乞いなどに伴う動物犠牲に関連するものと推定されている（松井1995a・b、久保2000）。第7面の場合、水路北部においてはウシの骨にサギなどの骨が伴うのに対し、南部で出土したのはウマの骨であるという違いがある。なお、第6a面水路10南部から出土したものはウマの骨である。これらの骨の中には解体痕が認められるものもあり、水路の周囲でウシやウマが解体された可能性がある。また、水路12の底面には、ウシの頭骨や下顎骨が埋納された土坑が検出された。注目されるのは、土坑5に埋納された頭骨には下顎骨や角が伴っておらず、土坑6に埋納されたものも下顎骨の一部であったことである。こうした状況について松井　章は、何らかの原因で死んだウシの頭骨を祭祀のために準備していたもので、祭祀に使用した際には既に白骨化していた、と推定している。第8a面から出土したウマの下顎骨も、既に白骨化していたものを大畦畔付近に置いた可能性が高い。

その他、祭祀に関連すると考えられる遺物としては、第8a面の大畦畔に埋納されていた銅製鈴、第8a層以降各層準で出土した銭貨、第5a面坪境交差点付近から出土した男根状木製品などがある。ただし、こうした事例は水田でおこなわれた祭祀の一部を示すにすぎない。また、祭祀の性格にも様々な種類があると予想される。祭祀の実態を明らかにするのは簡単なことではないため、漠然としたイメージで理解してしまうのではなく、現場に残された痕跡を詳細に検討することが重要である。

註

2）動物遺存体の同定は松井　章氏（奈良文化財研究所）による。なお、第7面の動物遺存体については、既に松井（1995b）によって考察がなされている。

3）岩石肉眼鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社による。

4）プラント・オパール分析は外山秀一氏による。

5）概報作成段階に不明とされた墨書の文字に関しては、清水みき氏（向日市教育委員会）に解読していただいた。なお、図Ⅳ－58：（4）に関しては清水氏の他、平川　南氏（国立歴史民俗博物館）にも御教示いただいた。

世初期にクレバススプレー堆積地形が発達すると推定されている。当地区との層序対比を試みると、クレバススプレー堆積物と考えられた7層が第3b層、5層が第2b層に対比される可能性がある。また、当地区の北方向に位置する第11次調査地点でクレバススプレー堆積物とされた地層は、レベル・当地区における砂礫の分布などから、6層が第6b層、10層が第7b層に対比されると思われる。調査区の位置関係からみて、前者は島畠造成の契機となった破堤堆積物に連続するもので、後者は水路15北端から溢れて凹地を形成した流れに関わる堆積物と考えられる。

d.耕作技術の問題

中世～近世の耕作技術を考えるための資料としては、牛馬耕や畠作に関連するものがある。

牛馬耕関連資料としては、鉄製馬鍬の歯や犂先がある。馬鍬の歯は第8a層から第3－3a～4a層より出土しており、犂先は第6a層・第2－2a層から出土した。馬鍬の歯については金属学的分析を実施し、素材や製作方法について検討している（第Ⅴ章5）。また、水田作土下面についた馬鍬の歯の痕跡は第7－3a層下面や第6b面で検出された。本書では犂溝についてはふれていないが、第8a層以上の各層準に関わるものが検出されている。

また、今回の調査では田面と同レベルで平行した小溝群が検出されたものもあり、畠の畝と解釈した。この遺構は第3－2a面で顕著に認められ、第2－1a面や第4a面・第6a面の一部でも検出されている。大半は島畠の芯となって残存した砂の下面でパックされた状態で検出されたが、中には畦畔配置から分布範囲を推定できる場合もある。

近世農書の記述を参考にすると、近世以降には二毛作とともに、水田と畠を定期的に繰り返す田畠輪換がおこなわれていたことがわかる。その効果には畠作に対するものの他、水田雑草の繁茂の抑制、乾土効果・地温上昇効果による地力の向上といった、稲の増収につながるものも含まれている（宮本1994、若月1997など）。また河野通明（1994）は、長床犂による「畦立耕」が関西では近世からおこなわれていたと推定している。現代でも冬季に水田を畝立てするように耕す光景が若干みられるが、畠作を伴わないことが多いものの、稲作に対する効果という点ではその耕作方法と共通した発想にもとづくものである。田畠輪換農法は排水の徹底と豊富な用水の確保、施肥を前提としており、こうした条件は近世には整っていたと考えられる。したがって、第2－1a面の遺構はこうした考え方で説明できるかもしれないが、中世の遺構をこうしたイメージで理解するのは危険である。それでは、14世紀～16世紀の面から検出されたものはどのように理解すればよいのであろうか。奈良盆地では中世後半における耕地拡大に伴い、灌漑水の不足が生じて水田を一時的に畠として利用することがおこなわれたと指摘されている（山川1995）。また、磯貝富士男（2002）は文献史料を検討し、鎌倉末～南北朝期に稲囮作に伴う臨時的救荒的水田裏作が拡大していったことを論じている。ただし、磯貝が気候変化を検討する際に使用した地質学のデータは、現在の学問水準からの批判的検討が必要である。今後はこうした研究を参考にして検討を進める必要があるが、その場合は一般論によって解釈するのではなく、当遺跡の立地や水文・土壌条件の特徴をふまえて具体的な議論をおこなわなければならない。そのためには、遺構の形状だけではなく、堆積環境や土壌の構造も視野に入れた調査が必要であるが、問題解明のための調査技術は未だ整備されているとはいえない。土壌の成分分析や微細形態の検討など、調査技術の向上が望まれる。

から東西に水路が分岐する状況からみて、当地区周辺における基幹水路であったと思われる。この水路は第６ａ面の水路10に踏襲される。また、第５ａ面では四・九ノ坪間は畦畔となっているが、五・八ノ坪間坪境では水路７となっており、四・五・八・九ノ坪交差点から東西に水路がのびる状況も認められる。こうしたあり方からみて、第５ａ面段階には前段階同様、当地区東部の南北方向の坪境沿いに水が集められたと思われるものの、水利系統が変化した可能性がある。第４ａ面では四・五ノ坪間、八・九ノ坪間、五・六ノ坪間で東西方向の水路が検出されているが、南北方向の水路は検出されていない。続く第３－２ａ面では、水路は検出されていないが、四・五・八・九ノ坪交差点では水口が検出され、南から導かれた水が八ノ坪と九ノ坪に送られるようになっている。第５ａ面～第３－２ａ面においては、前段階にみられた基幹水路がなく、大局的には南から北へ、各坪に順番に水を送っていたものと考えられる。坪境に設けられた短い水路や、坪境畦畔に沿う細長い水田区画も、こうした水回りと関連すると思われる。

第２－２ａ面の水利については、当地区西側の南北方向の坪境が現代のコンクリート水路により破壊されていたこともあり、不明な点が多い。続く第２－１ａ面では、当地区東側の南北方向の坪境を貫く水路１が検出されたが、『福萬寺村惣繪圖』を参考にすると、西側の南北方向の坪境にも水路があった可能性が高い。このように、この面では基幹水路を中心とする水路網が整備されており、基本的に南側から導水した水を東西方向に送りつつ、各坪の灌漑をおこなうという形態をとっていたと考えられる。

ｃ．地形形成と土地利用

当地区における土地利用のあり方は、地形形成過程と密接に関わっていた。まず第９ａ面では、土器埋納遺構の分布と微地形からみて、第10ｂ層の堆積によって形成された微高地は非水田域であったと考えられ、７世紀代には居住域として利用された可能性もある。この微高地は第８ａ面にも残存し、その周辺が畠として利用されていたが、その他の低い部分は水田となっていた。

第７面では、島畠の原初形態と推定した高まりが造成される。遺存状況が悪いため不確定要素もあるが、水田域内がやや高くなっていた部分において、水回りをよくするために田面の削平がおこなわれ、その結果生じた土砂を畦畔部分にかき寄せて造成されたと推定される。島畠はその後、破堤堆積物や氾濫堆積物の供給に対応して造成・拡張されていく。第６ｂ面のものは当地区西側に供給された破堤堆積物の分布範囲に対応して造成された可能性が高い。第６ａ面では島畠が減少するが、第４ａ面になると再び増加する。この面の島畠の分布は第６ｂ面と類似しており、第６ｂ面によって形成された微地形がこの面まで影響を与えていたと思われる。また第３面の島畠は、第３ｂ層の堆積によって形成された微高地に対応して、当地区北西部と南東部を中心に造成されたことが明らかである。さらに第２－２ａ面では、それまで島畠が少なかった八ノ坪にも多く造成されているが、これは第２ｂ層が当地区中央部に厚く堆積したことに起因している。なお、第３ｂ層の堆積により原型が形成された微高地Ａは中世末以降畠として利用されてきたが、その状況は当地区の西側周辺において現在でも確認できる。当地区の調査によって、現景観の形成過程が明らかにできた点は重要な成果といえる。

なお、当地区と第二寝屋川を挟んで北側にあたる場所では、㈶東大阪市文化財協会によって池島遺跡第11・12次調査がおこなわれている（松田1994ｂ・1995、調査地点は図Ⅴ－２－４参照）。この調査では玉串川起源のクレバススプレー堆積地形の発達時期が検討されており、当地区の調査成果を検証するための重要なデータといえる。このうち、当地区の北西方向に位置する第12次調査地点では、中世末～近

小結　第１ｂ面から第９ｂ面の調査では、古代から近世以降の耕作地の実態を明らかにすることができた。ここでは当地区における条里型水田面の成果をまとめておきたい。

ａ．条里型地割の変遷

第Ⅱ章で述べたように、当遺跡周辺には近年まで条里型地割が良好に残存しており、その起源と変遷過程を明らかにすることが調査課題のひとつであった。当初はそれぞれの調査区における最古の条里面を明らかにし、その時期に関する検討が進められた。その後、層序の対応関係の検討が進むにつれて、表層条里型地割の初現が第８ａ面（10世紀前半～11世紀前半）にあることが認識され、「最古条里面」と呼称されるようになった。ただし、その下層からは飛鳥～奈良時代の遺構・遺物も確認されており、その時期の土地利用形態の究明が課題となっていた。そうした中で、第９ａ面水路35が検出されることによって、さらに古い正方位地割の存在が明らかになり、土器埋納遺構の分布との関係から、それが条里型地割であった可能性も指摘されるに至った。この面では南北方向の地割しか明らかになっていないが、表層地割の坪境から約20m西にずれていることは注目される。なお、土器埋納遺構には９世紀代のものが存在していない。９世紀は第９ａ面と第８ａ面の時期の間にあたっており、この事実と地割変更との関連を今後検討する必要がある。

第９ａ面における地割の詳細については明らかではないが、等高線図を参考にすれば、正方位地割の中に南東－北西方向の微高地が存在し、そこが非水田域であった可能性が高い。また、水路35の埋没後、その堆積物を芯にして畦畔が造成され、それが第８ａ面の大畦畔１に踏襲されたことも判明した。第８ａ面では表層地割の坪境の位置に大畦畔や水路が作られていたが、同時に第９ａ面以来の地割線も一部残存し、地割の中に変則的な部分が存在することになった。第９ａ面の地割線が第８ａ面にも踏襲されたのは、この部分に基幹水路と考えられる水路15が存在することと関連するかもしれない。なお、この大畦畔１・水路15は第７面には踏襲されず、坪境に沿って基幹水路（水路12）が設定された。

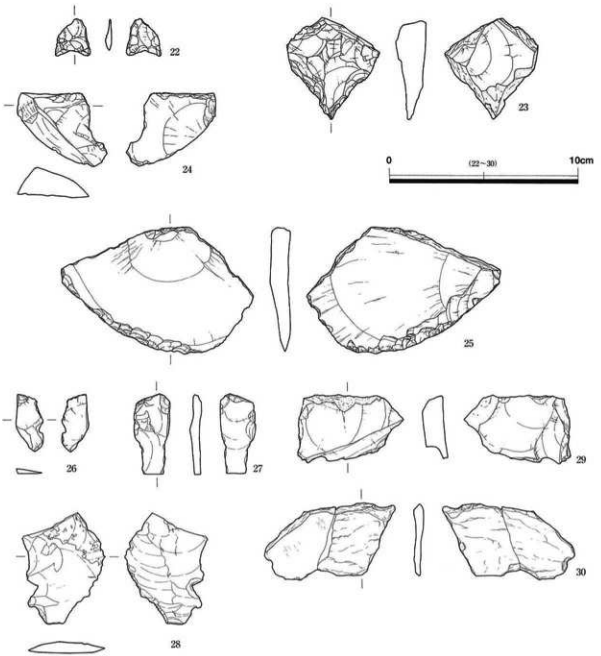
坪内の地割の仕方をみると、畦畔配置は時期によって変化するが、地割の方向にはほとんど変化がない。変化するのは四ノ坪であり、第８ａ面では南北方向の地割であったものが、第６ａ面以降は東西方向となる。第７面では畦畔がわずかしか検出していないため断定はできないが、こうした変化が第７面で生じた可能性がある。また、九ノ坪においては、第８ａ面では畠の畝が東西方向に造成されていたが、第６ｂ面以降は南北方向の地割になっていた。地割の方向が何に起因して決められるかは不明である。ただし、その要因のひとつが坪内の水回りにあるとすれば、こうした変化が弥生時代後期末に形成された微高地の埋没と関連する可能性もあろう。

ｂ．水利系統の変化

今回の調査では、検出された水路や微地形などから、各面の水利系統を復原することができた。

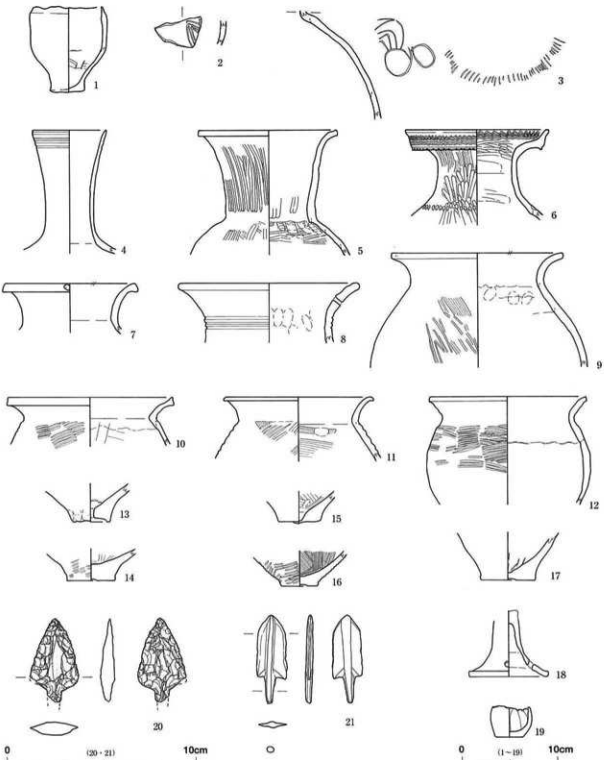
まず第９ａ面段階のうち、少なくとも飛鳥時代には水路35が基幹水路のひとつであったと考えられる。また、第８ａ面では畠として利用された微高地を避けて南側と西側から導水し、支線水路も配置して、水田域に水が回るように工夫されていた。これらの面では、弥生時代後期末に形成された微地形に合わせて、水利系統が整備されたものと考えられる。

第７面には当地区東部の南北方向の坪境を貫く水路12が存在したが、幅がきわめて広いことや、ここ



図Ⅳ－82　第９ａ面以上から出土した弥生時代遺物②

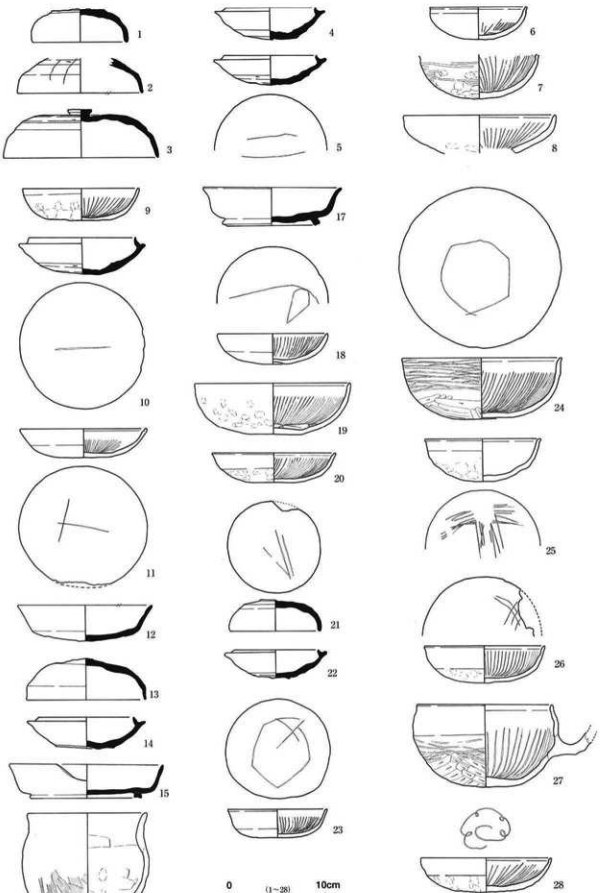
図Ⅳ－81　１・２：第７面水路12，３：第９ａ層，４・５：第８ａ面以上，６～21：第９ａ層
図Ⅳ－82　22：第６ａ層，23：第８ｂ層～第12－１ａ層，24：第２－１ａ層，25：第７層，26：第２－１ａ層
27：第８ａ層，28：第２－２ａ層，29：第８ｂ層，30：第２－１ａ層



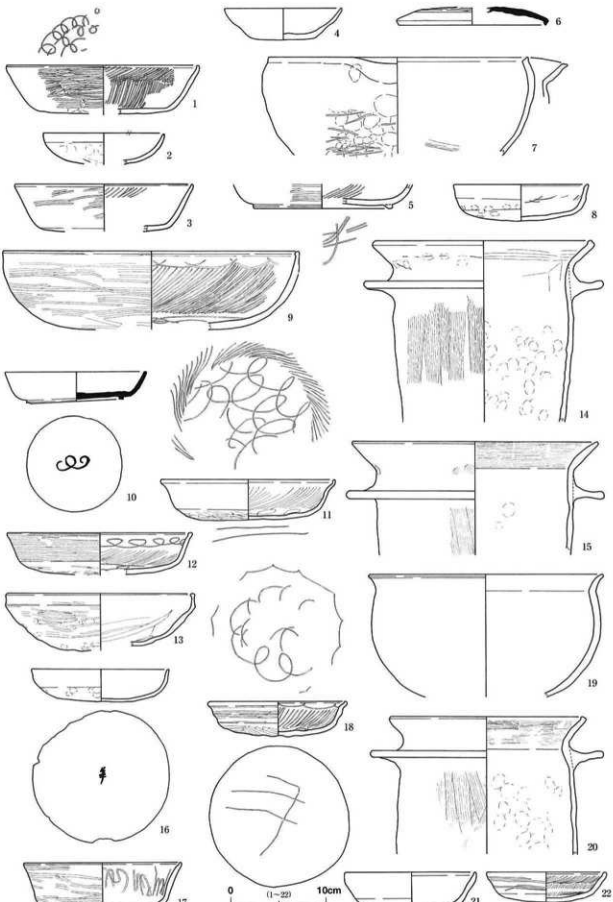
図Ⅳ－81　第９ａ面以上から出土した弥生時代遺物①

図Ⅳ－79　1：ピット12，2・3：同21，4：同22，5：同23，6：同25，7：同26，8：土器埋納遺構65
9：同66，10～14：同67，15：同68，16：同69，17：同70，18：同71，19：同72，20：同74，21：同88，22：同90

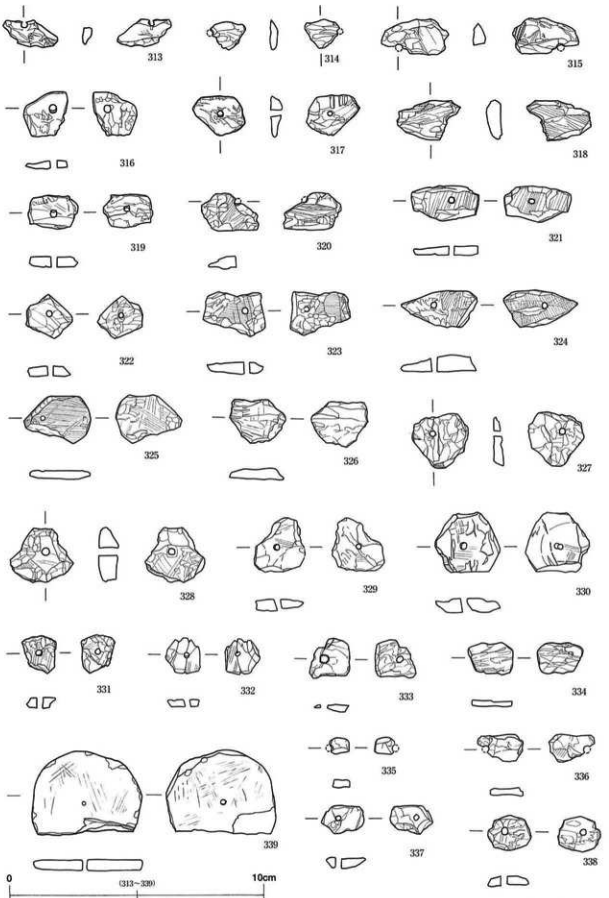
図Ⅳ－80　1～8：土坑8，9：土器埋納遺構41，10：同42，11：同43，12：同44，13：同45，14：同46
15：同47，16：同48，17：同49，18：同50，19：同51，20：同52，21：同53，22：同54，23：同55
24：同60，25：同61，26：同62，27：同63，28：同64



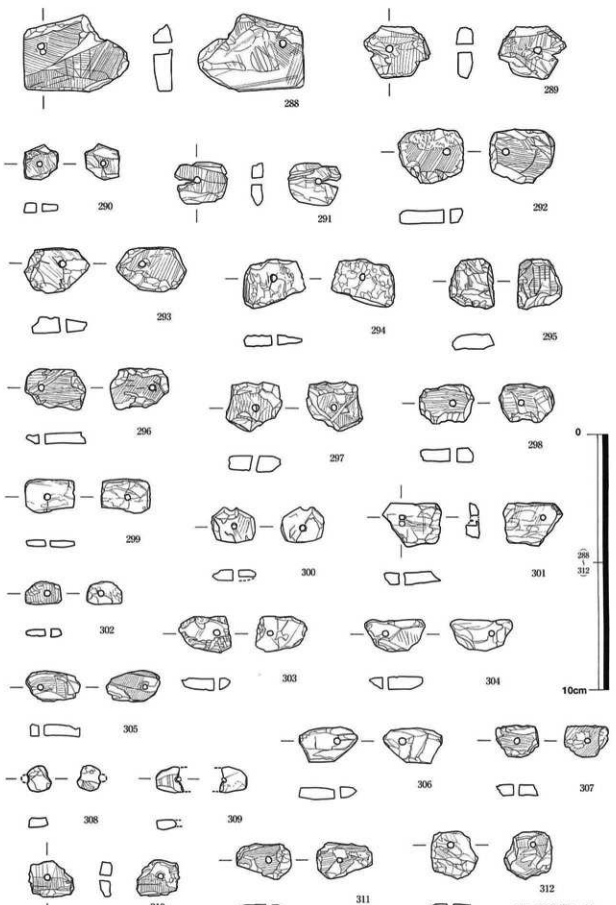
図Ⅳ－80　第９ｂ面遺構出土遺物（飛鳥時代）



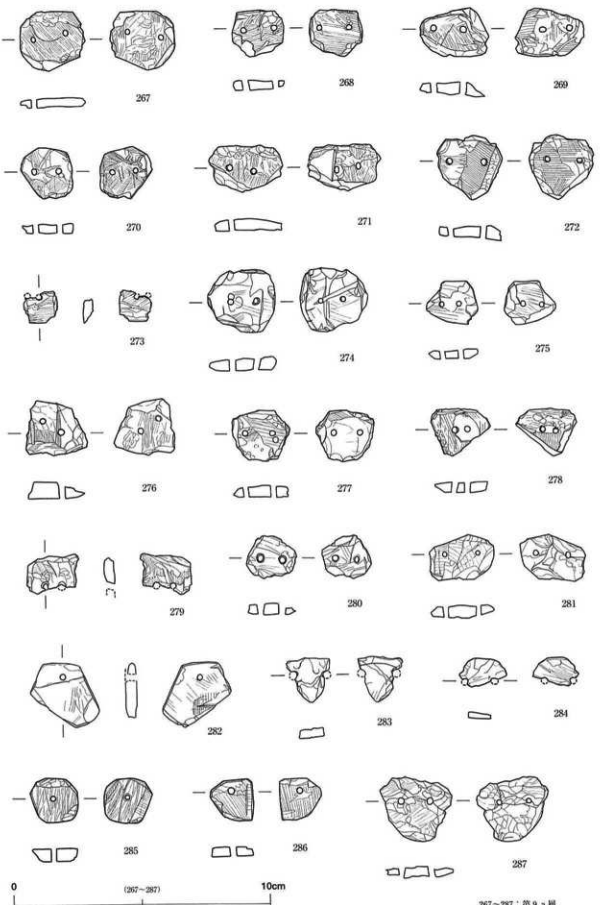
図Ⅳ－79　第９ｂ面遺構出土遺物（奈良時代）



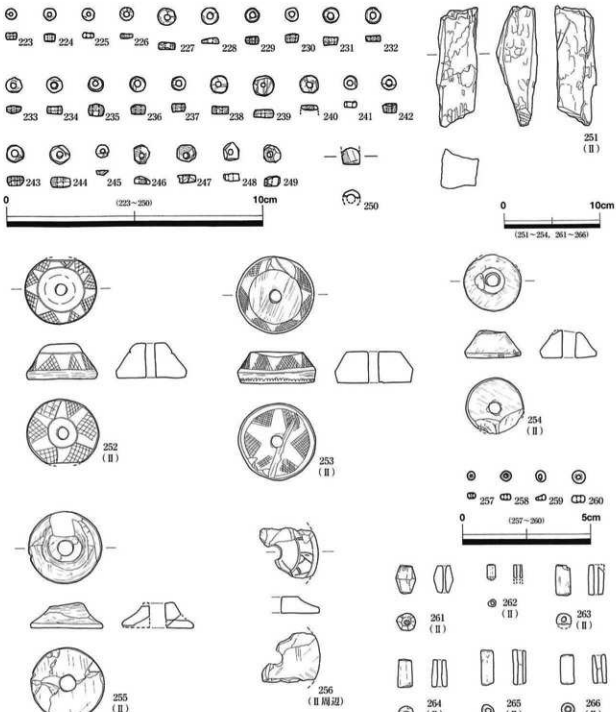
図Ⅳ－78　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑭



図Ⅳ－77　第9a面遺構・第9a層出土遺物⑬



図Ⅳ－76　第9a面遺構・第9a層出土遺物⑫



図Ⅳ－75　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑪（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

223～266：第９ａ層

（267～281・283・284・287）、有孔円板（282・285・286・288～338）である。（251）は滑石の原石である。

第９ａ層から出土した遺物のほとんどは古墳時代後期のものである。後述するように、この時期の遺物に関しては、本来は第10ａ層に含まれていた可能性が高い。

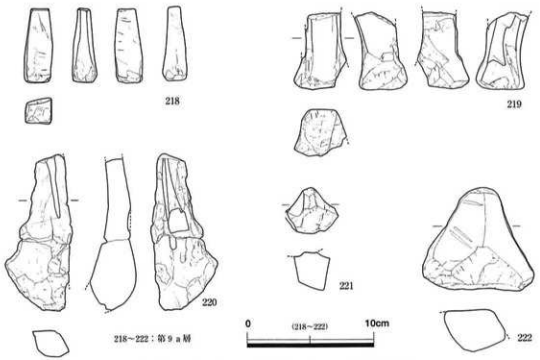
第９ａ層以上から出土した弥生時代遺物　条里型水田に関連する遺構面の記述を終えるにあたって、第９ａ層以上の層準から出土した弥生時代に属すると考えられる遺物をまとめておきたい（図Ⅳ－81・82）。

弥生土器は第Ⅴ～Ⅵ様式のものが多い。（２）は第Ⅰ様式のものの体部片と思われ、木葉文が施されている。（３）は第Ⅴ様式の壺であり、肩部に絵画文が施されている。何を表しているか不明である。

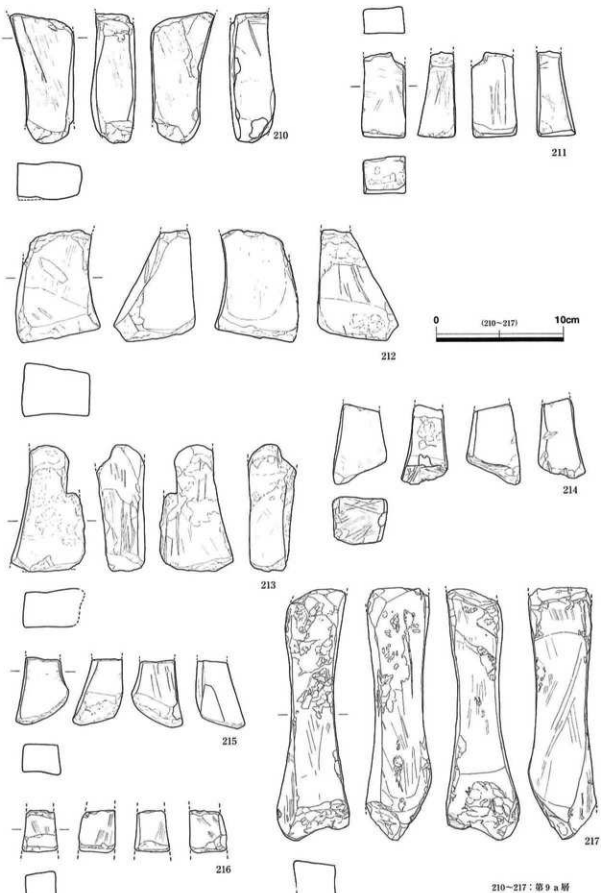
（21）は銅鏃である。有茎で、逆刺は左右非対称であり、両面に樋が通っている。弥生時代後期～古墳時代前期初頭のものと推定されている（概要Ⅹ Ⅵ，p.53）。なお、この銅鏃については非破壊の成分分析を実施した（第Ⅴ章５－１）。

石製品としては、石鏃（20・22）、石錐（23）、楔形石器（24）、不定形刃器（25）、サヌカイト剥片（26～29）、石庖丁未製品（30）がある。

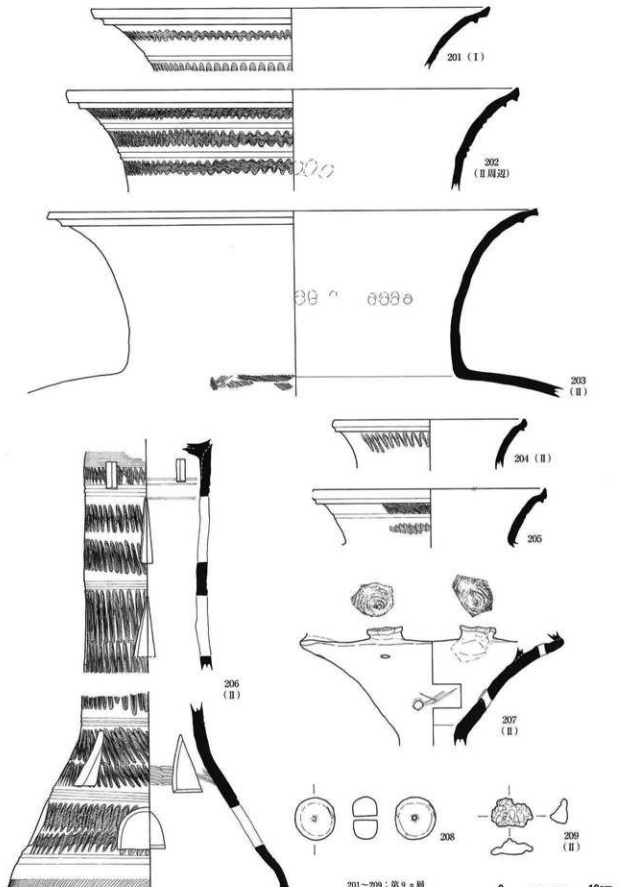
（20）はサヌカイト製の凸基有茎式石鏃で、両面に主要剥離面を残す。（22）はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃で、基部のみが残っている。（30）は未製品ながら部分的に研磨痕がある。



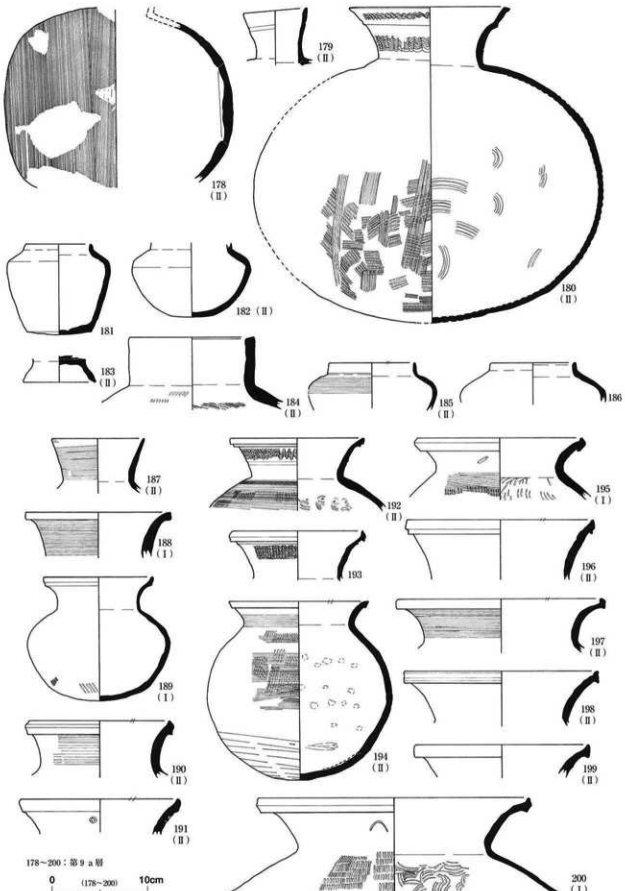
図Ⅳ－74　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑩



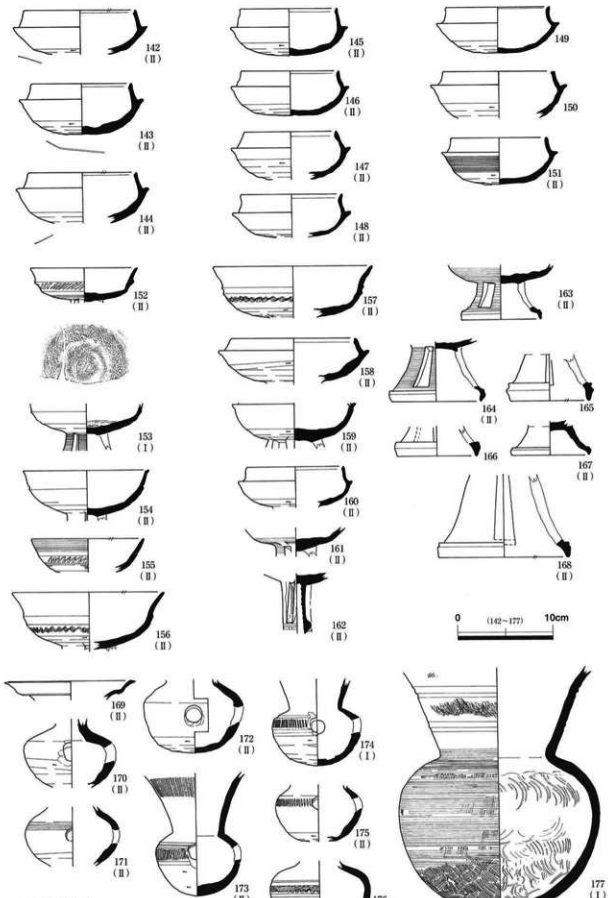
図Ⅳ－73　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑨



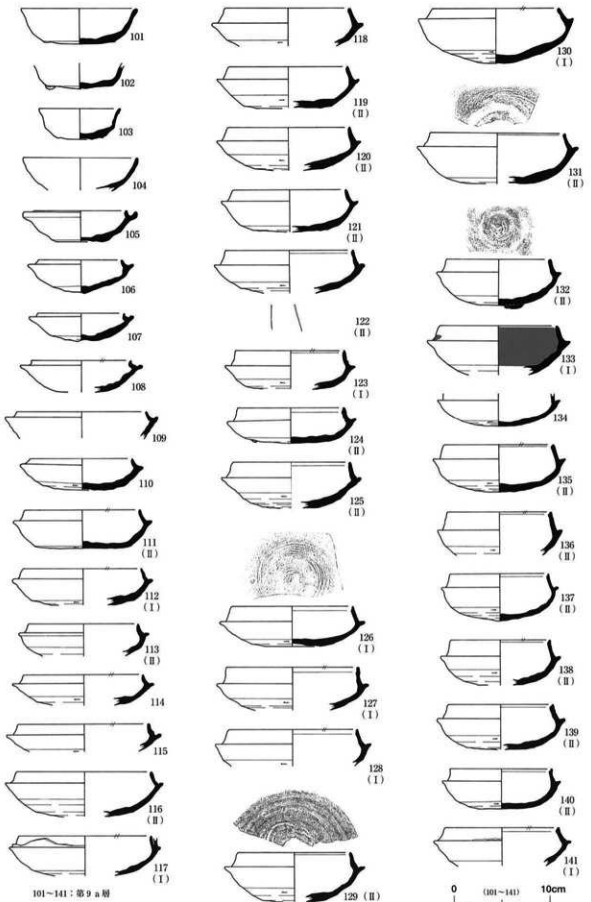
図Ⅳ－72　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑧（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



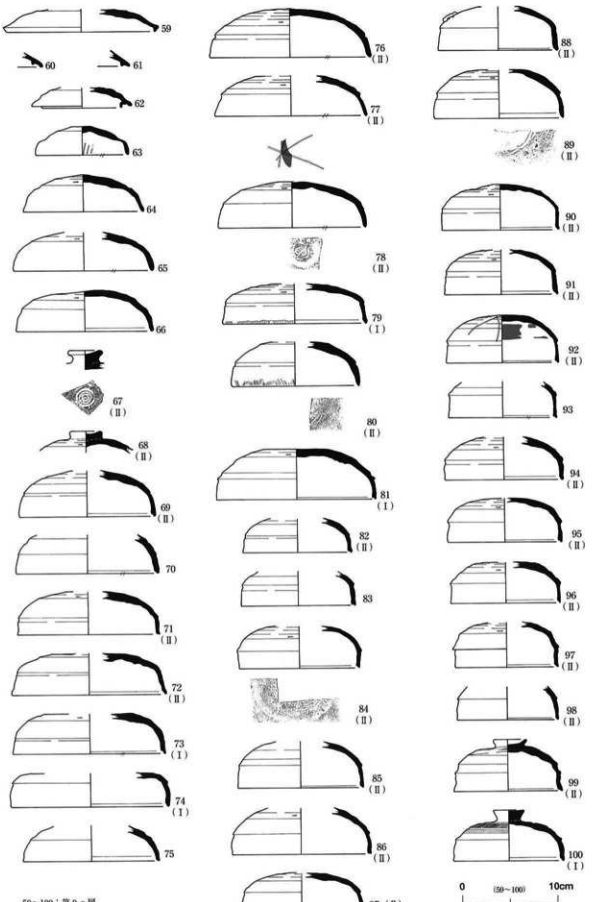
図Ⅳ－71　第9a面遺構・第9a層出土遺物⑦（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



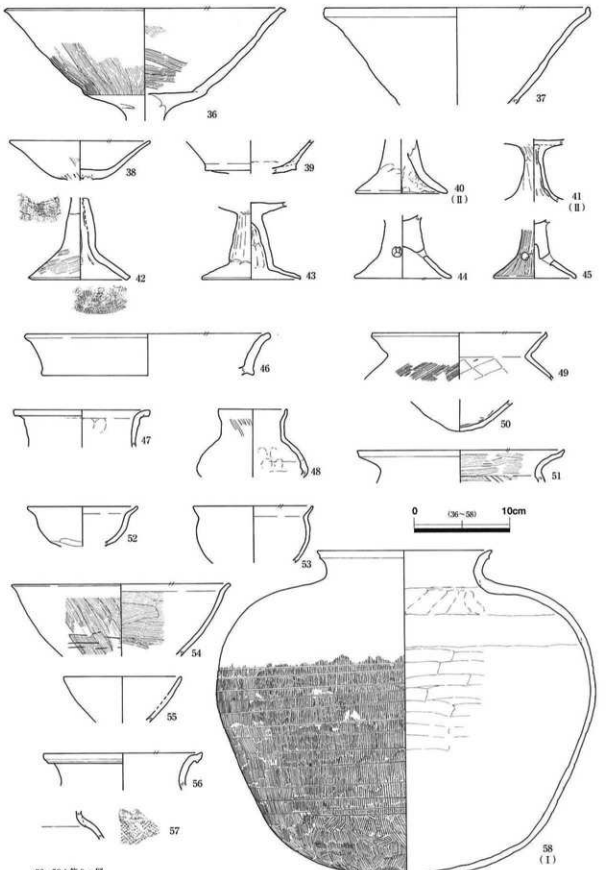
図Ⅳ－70　第9a面遺構・第9a層出土遺物⑥（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



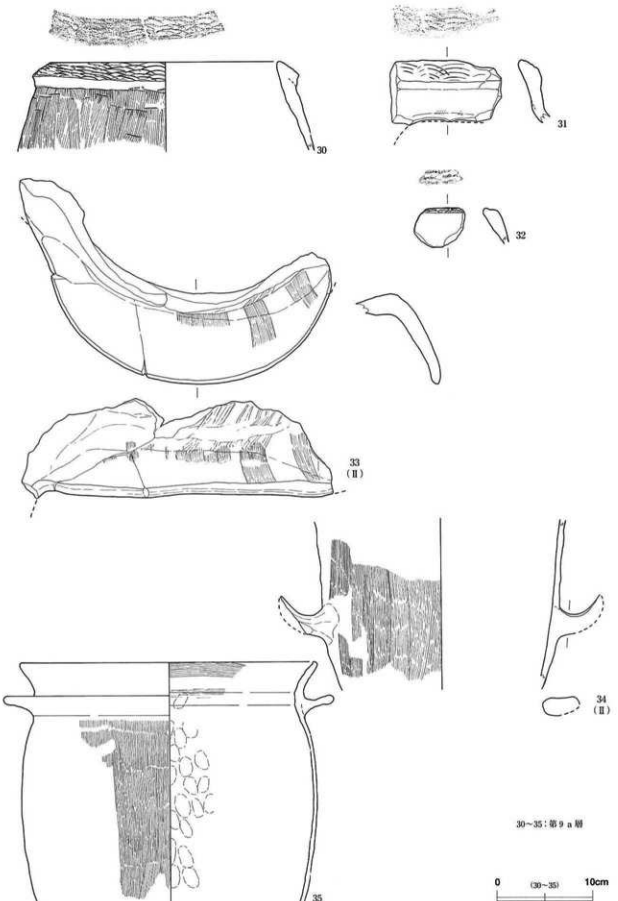
図Ⅳ－69　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物⑤（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



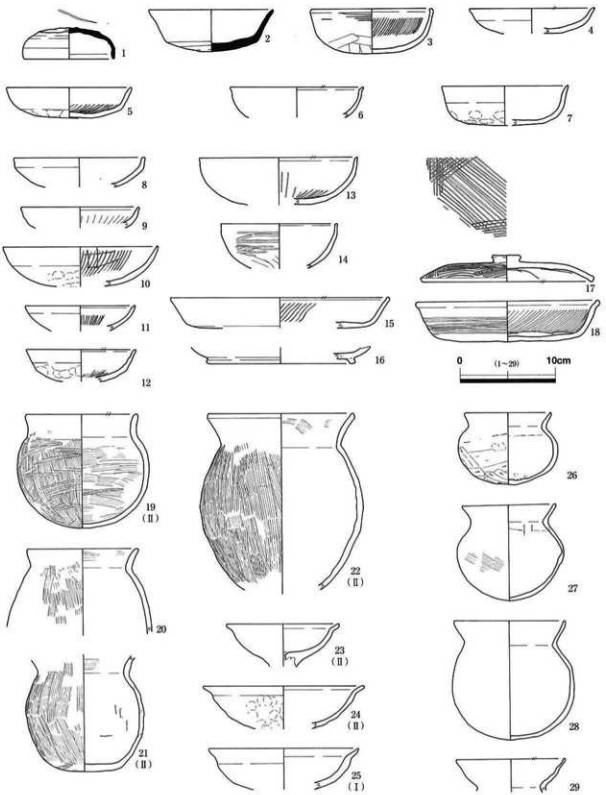
図Ⅳ－68　第9a面遺構・第9a層出土遺物④（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



図Ⅳ－67　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物③（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



図Ⅳ－66　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物②（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）



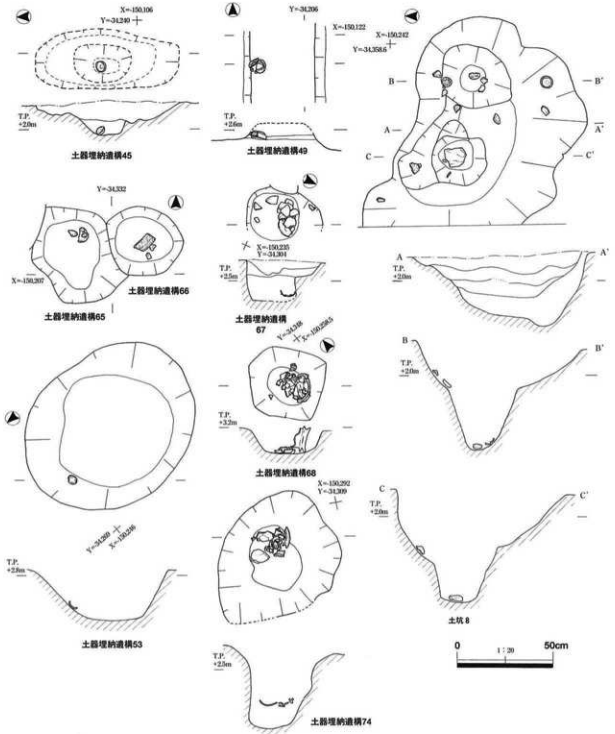
図Ⅳ－65　第９ａ面遺構・第９ａ層出土遺物①（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

1～7：水路35、8～29：第９ａ層

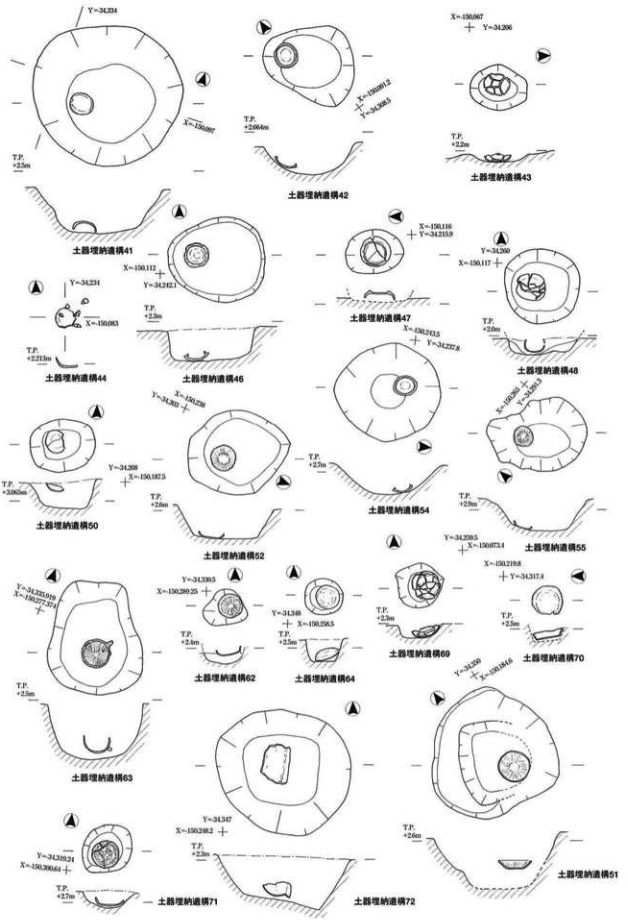
表Ⅳ－24　第９ｂ面検出遺構一覧

遺構番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号
				遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況			
土器埋納遺構38	86－1 調査区（府発掘）	土坑8873	土師器・羽釜	土坑	直径40×13	土坑中央底面に埋納	7 世紀後半	厨部に穿孔あり	—
土器埋納遺構39	86－1 調査区（府発掘）	土坑8874	須恵器杯H１	土坑	直径35×10	土坑底面中央からやや東に偏して正位で埋納	7 世紀中頃		—
土器埋納遺構40	86－1 調査区（府発掘）	土坑8043	土師器杯C１	土坑	42×39×17	土坑底面から15cm浮いて正位で埋納	7 世紀後半		—
土器埋納遺構41	90－3 調査区（Ⅱ）	土器埋納ピット３	土師器杯C１	土坑	直径80×24	土坑底面西端に逆位で埋納	7 世紀後半		図Ⅳ－80：９
土器埋納遺構42	90－3 調査区（Ⅱ）	土器埋納ピット４	須恵器H１	土坑	直径50×15	土坑底面西端に正位で埋納	Ⅱ－５		図Ⅳ－80：10
土器埋納遺構43	90－2 調査区（Ⅵ）	ピット613	土師器杯C１	土坑	30×24×５	土坑底面中央に正位で埋納	7 世紀後半		図Ⅳ－80：11
土器埋納遺構44	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構８	須恵器杯A１	不明	不明	正位での出土ではあるが、詳細は不明	Ⅲ－２		図Ⅳ－80：12
土器埋納遺構45	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構３	須恵器杯蓋１	土坑	132×66×36	２段に積りこまれた土坑の底面の北に偏して逆位で埋納	Ⅱ－５～６		図Ⅳ－80：13
土器埋納遺構46	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構４	須恵器杯H１	土坑	51×46×17	土坑底面中央から西に偏して正位で埋納	Ⅱ－６		図Ⅳ－80：14
土器埋納遺構47	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構７	須恵器杯B１	土坑	33×22×３	土坑底面中央に逆位で埋納	Ⅳ－１	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：15
土器埋納遺構48	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構５	土師器鍋１	土坑	直径29×８	土坑底面中央からやや西に偏して口縁部を斜め上方に向けて埋納。ウリ科種子が出土	7 世紀後半		図Ⅳ－80：16
土器埋納遺構49	90－3 調査区（Ⅵ）	土器埋納遺構６	須恵器杯B１	畦畔盛土	幅46	畦畔盛土の西端に逆位で埋納	Ⅲ－３		図Ⅳ－80：17
土器埋納遺構50	89－1 調査区（ｉ）	土器埋納ピット１	土師器杯C１	土坑	34×27×15	土坑底面から浮いて正位で埋納。単一土で埋め戻す。	7 世紀後半	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：18
土器埋納遺構51	90－1 調査区（Ⅺ）	建物10北端柱穴	土師器杯C１	土坑	直径65×28	土坑底面から10cm浮いて、南容りに正位で埋納	7 世紀中頃	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：19
土器埋納遺構52	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構１	土師器杯C１	土坑	52×44×16	土坑底面に中央から南に偏して正位で埋納	7 世紀中頃		図Ⅳ－80：20
土器埋納遺構53	89－3 調査区（ｉ）	土坑35	須恵器杯蓋１	土坑	195×155×50	土坑底面北端に逆位で埋納	Ⅱ－６	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：21
土器埋納遺構54	89－3 調査区（ｉ）	ピット88	須恵器杯１	土坑	直径55×17	底面中央から北西方向に偏して正位で埋納	7 世紀中頃	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：22
土器埋納遺構55	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構２	土師器杯C１	土坑	52×40×18	土坑底面中央から北西方向に偏して正位で埋納	7 世紀前半	見込みに焼成後の線刻あり	図Ⅳ－80：23
土器埋納遺構56	トレンチ（府発Ⅱ）	ピット１	土師器杯C１	土坑	40×34×20	土坑底面からやや浮いて正位で埋納	7 世紀中頃		—
土器埋納遺構57	86－3 調査区（府発掘）	ピット３－202	土師器杯C１	土坑	直径40×？	詳細不明	7 世紀中頃		—
土器埋納遺構58	トレンチ（府発Ⅱ）	ピット２	土師器杯C１	土坑	70×62×27	土坑底面南壁に貼りつくように正位で埋納	7 世紀中頃		—
土器埋納遺構59	トレンチ（府発Ⅱ）	ピット３	土師器杯C１	土坑	直径40×25	土坑上部南東に正位で埋納	7 世紀中頃	煙土上方に埋納	—
土器埋納遺構60	90－6 調査区（Ⅲ）	—	土師器杯C１	不明	不明	正位	7 世紀中頃	見込みに焼成後の線刻あり	図Ⅳ－80：24
土器埋納遺構61	93－1 調査区（ⅩⅤ）	土器埋納遺構５	土師器椀C１	土坑	直径40×５	土坑底面北端に破砕した土師器杯を置いて埋納	8 世紀初頭		図Ⅳ－80：25
土器埋納遺構62	92－7 調査区（ⅩⅣ）	土器埋納ピットｅ	土師器杯C１	土坑	23×19×５	土坑底面からやや浮いて正位で埋納	7 世紀中頃	口縁部打ち欠きあり	図Ⅳ－80：26
土器埋納遺構63	92－7 調査区（ⅩⅣ）	P215	土師器把手付椀１	土坑	56×48×27	土坑底面中央からやや南寄りで杭様１個と共に埋納	7 世紀初頭	把手先端を欠く	図Ⅳ－80：27
土器埋納遺構64	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構11	土師器杯C１	土坑	21×18×11	土坑底面東寄りに土師器杯を逆位で埋納	7 世紀後半		図Ⅳ－80：28
土器埋納遺構65	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構７	土師器杯A１ 他	土坑	98×102×７	底面北イに中央から北へ偏して正位で埋納	8 世紀初頭	土器埋納遺構66に接する	図Ⅳ－79：８
土器埋納遺構66	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構８	土師器鉢１と破片	土坑	82×71×７	底面中央付近に破砕して埋納	8 世紀初頭	土器埋納遺構65に接する	図Ⅳ－79：９
土器埋納遺構67	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構５	羽釜１、杯３、鉢１	土坑	75×60×42	土坑底面近くに破砕して埋納	8 世紀前半～中頃	埋納土器はいずれも破片	図Ⅳ－79：10～14
土器埋納遺構68	89－3 調査区（ｉ）	土坑42	羽釜１	土坑	一部70×30	土坑中央に口縁部を斜め下方に向けて横位で埋納	8 世紀前半		図Ⅳ－79：15
土器埋納遺構69	90－2 調査区（Ⅵ）	ピット614	土師器杯A１	土坑	直径23×７	土坑底面東寄りに正位で埋納	8 世紀前頭	「墨」墨書あり	図Ⅳ－79：16
土器埋納遺構70	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構14	土師器杯A１	土坑	直径17×６	正位で埋納	8 世紀前半		図Ⅳ－79：17
土器埋納遺構71	92－7 調査区（ⅩⅣ）	土器埋納ピットｂ	土師器杯A１	土坑	直径25×９	土坑中央底面に正位で埋納	8 世紀前半		図Ⅳ－79：18
土器埋納遺構72	90－1 調査区（Ⅺ）	土器埋納遺構12	土師器鍋１	土坑	69×67×27	土坑底面中央に破砕して横位で埋納	8 世紀後半		図Ⅳ－79：19
土器埋納遺構73	87－1 調査区（府発掘）	土坑３－201	須恵器壺１	土坑			Ⅳ－３		—
土器埋納遺構74	92－7 調査区（ⅩⅣ）	土坑１	羽釜１、石２	土坑	140×120×85		8 世紀前半		図Ⅳ－79：20
土器埋納遺構88	90－1 調査区（Ⅺ）	土器ピット①（X=-150,240の見落とし）	土師器椀X１				8 世紀初頭		図Ⅳ－79：21
土器埋納遺構90	89－3 調査区（ｉ）	側溝内出土	土師器杯A１				8 世紀前半		図Ⅳ－79：22
土坑８	90－1 調査区（Ⅺ）	土坑209	須恵器杯蓋３、須恵器杯身２、土師器杯３	土坑					図Ⅳ－80：１～８

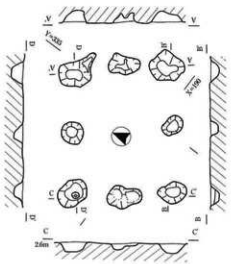
※須恵器：中村浩編年による。

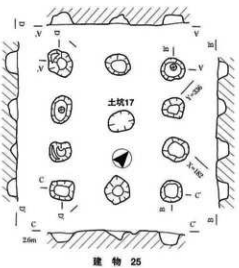


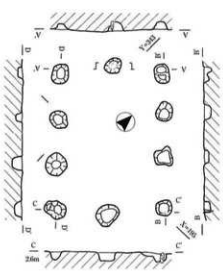
図Ⅳ－64　第９ｂ面土器埋納遺構②・土坑

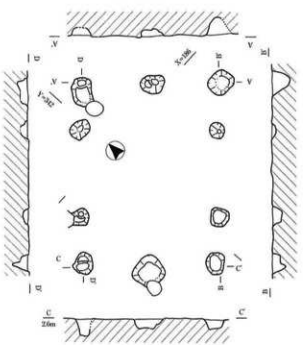


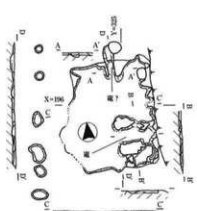
図Ⅳ－63　第９ｂ面土器埋納遺構①（スケールは図Ⅳ－64と共通）



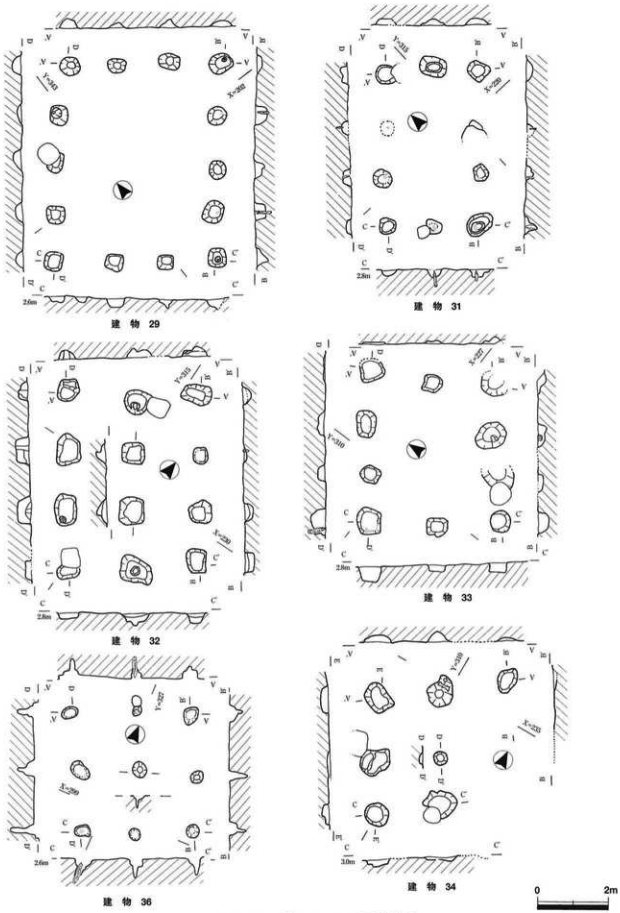








図Ⅳ－90　第９ｂ・10ｂ面建物⑤



図Ⅳ－91　第9b・10b面建物⑥

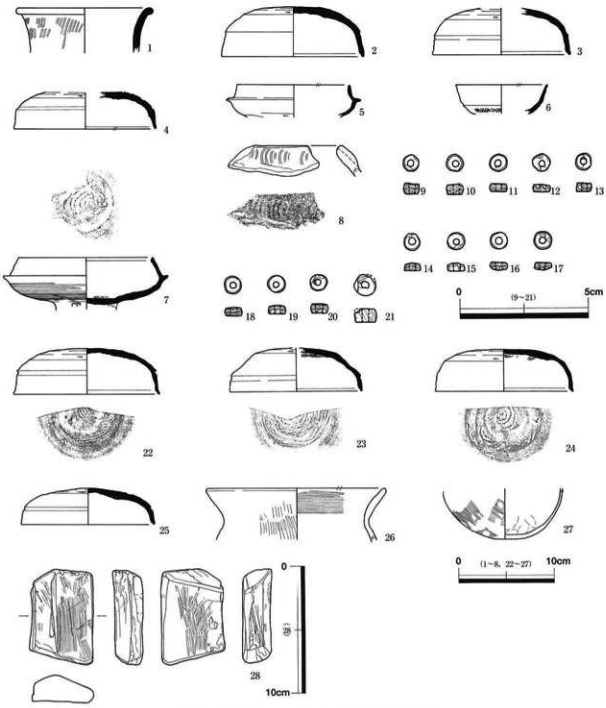
表Ⅳ－26　第９b・10b面建物一覧

統一名称	調査区	調査時の遺構名称	種別	構造	規模（m）	建物方向	面積（㎡）	柱穴規模（m）	時期	特徴
建物１	90-3（A）	建物跡７	掘立	２間×２間	4.50×3.65	N－20.5°－W	16.4	0.65～1.00		柱抜き取り　周溝あり
建物２	90-3（A）	建物跡６	竪穴	—	5.80×4.30	N－1°－W	24.9	0.20～0.35	Ⅱ－１～２	
建物３	90-3（A）	建物跡１	掘立	３間×３間	4.35×3.30	N－26°－W	14.4	0.25～0.60		
建物４	90-3（A）	建物跡４	掘立	４間×３間	6.75×5.60	N－13.5°－W	37.8	0.75～1.10	Ⅱ－１～２	柱抜き取り後に土器埋納庇あり
建物５	90-3（A）	建物跡５	掘立	１間×１間	3.35×2.15	N－20°－W	5.1	0.40～0.45		
建物６	90-3（A）	建物跡２	掘立	３間×２間	4.50×3.50	N－23°－W	15.8	0.35～0.95		束柱２　羽釜破片３
建物７	90-3（A）	建物跡９	掘立	２間×１間	4.1×3.15	N－18°－W	12.9	0.40～0.65		基作痕３を切る
（建物８）	89-2	竪穴住居跡		—	5.1×6.2	—	—	—		土器類・玉類150以上　建物かどうか不明
建物９	90-1（B）	掘立柱建物１	掘立	２間×２間	2.7×2.9	N－31°－W	8.4	0.52～0.96		束柱あり　礎板？あり
建物10	90-1（B）	掘立柱建物２	掘立	２間×３間	3.8×4.9	N－38.5°－E	18.6	0.60～0.72		
建物11	90-1（B）	建物３	竪穴	—	4.2×4.25	N－40°－W	17.9	0.34～0.48	Ⅱ－２？	
建物12	90-1（B）	建物４	竪穴	—	5.6×5.8	N－45°－E	32.6	0.30～0.58	Ⅰ－４	土器埋納・炭化部材出土
建物13	90-1（B）	建物５	掘立	２間×３間	3.4×4.6	N－32°－W	15.6	0.36～0.68		建物12より新しい
建物14	90-1（B）	建物６	掘立	２間×２間	2.6×3.0	N－29°－E	7.8	0.54～1.20	Ⅱ－１～２	
建物15	90-1（B）	建物７	掘立	２間×２間	2.6×3.5	N－40°－W	9.1	0.36～0.88		周溝　束柱　柱根１
建物16	90-1（B）	建物８	掘立	２間×２間	3.8×3.95	N－28°－E	13.8	0.64～0.90	Ⅱ－１～２	土器埋納　礎板
建物17	90-1（B）	建物９	掘立	２間×３間	3.3×4.75	N－37°－E	15.7	0.40～0.74	飛鳥？	束柱　柱根１
建物18	90-1（B）	建物10	掘立	２間×２間	2.75×3.4	N－33.5°－E	9.4	0.46～0.72	７世紀中頃	束柱　土器埋納遺構51
建物19	90-1（B）	建物11	掘立	２間×３間	3.2×4.7	N－42°－E	15.0	0.41～0.78	飛鳥？	
建物20	90-1（B）	建物12	掘立	２間×３間	3.9×4.95	N－42°－E	19.3	0.46～0.92	飛鳥？	
（建物21）	90-1（B）	建物13	掘立	２間×２間	3.0×3.8	N－14.5°－E	11.4	0.46～0.80		概要未掲載
（建物22）	90-1（B）	建物14	掘立	２間×２間	2.85×3.05	N－10°－E	8.7	0.28～0.52		概要未掲載
建物23	90-1（B）	建物15	竪穴	—	4.8×4.9	N－41°－W	23.5	0.50～0.60	Ⅱ－２	土器埋納？　剣形石製品
建物24	90-1（B）	建物16	掘立	２間×３間	3.5×4.3	N－26.5°－W	15.0	0.32～0.84	Ⅱ－１～２	束柱　土器埋納？
建物25	90-1（B）	建物17	掘立	２間×３間	3.3×3.6	N－43°－E	11.9	0.60～0.84	Ⅱ－１～２？	臼玉集中
建物26	90-1（B）	建物18	掘立	２間×３間	4.0×5.45	N－42°－W	21.8	0.43～0.92		建物23より古い　建物25と軸が揃う
建物27	90-1（B）	建物19	掘立	２間×２間	2.8×3.8	N－41°－W	10.3	0.62～1.00		建物25と軸が揃う
建物28	90-1（B）	建物20	掘立	２間×３間	3.15×4.15	N－43°－W	13.4	0.44～0.66		柱根２
建物29	90-1（B）	建物21	掘立	３間×４間	4.7×5.85	N－38°－E	27.5	0.47～0.66	飛鳥？	柱根２
建物30	90-1（B）	建物22	竪穴	—	3.5×4.4	N－5.5°－W	15.4	—	Ⅱ－１	片屋根？　カマド検出
建物31	90-1（B）	建物23	掘立	２間×３間	2.55×4.65	N－42.5°－E	11.9	0.42～0.79		柱根６
建物32	90-1（B）	建物24	掘立	２間×３間	3.8×5.25	N－35°－W	20.0	0.48～0.92		束柱　柱根１
建物33	90-1（B）	建物25	掘立	２間×３間	3.55×4.2	N－37.5°－W	14.9	0.51～0.82		柱根１
建物34	90-1（B）	建物26	掘立	２間×２間	3.5×3.75	N－32°－W	13.1	0.64～0.90		束柱
（建物35）	90-1（B）	落ち込み６	竪穴	—	—	—	—	—		
建物36	92-7	掘立柱建物１	掘立	２間×２間	—	—	—	—		柱根２遺存

のが主である。土師器甕は６世紀ぐらいと思われるものと６世紀末～７世紀初め頃と思われるものがある。前述のように、後者は建物埋没以後の落ち込み内に含まれていた可能性が高く、この建物には伴わないと思われる。土師器甑は６世紀ぐらいと思われるものである。また土師器羽釜については、江浦洋（1991ａ）によって、従来良好な資料がなかった６世紀前半代の事例として評価されている。なお、土師器甕（158）には割れ口に擦ったような痕跡がある。

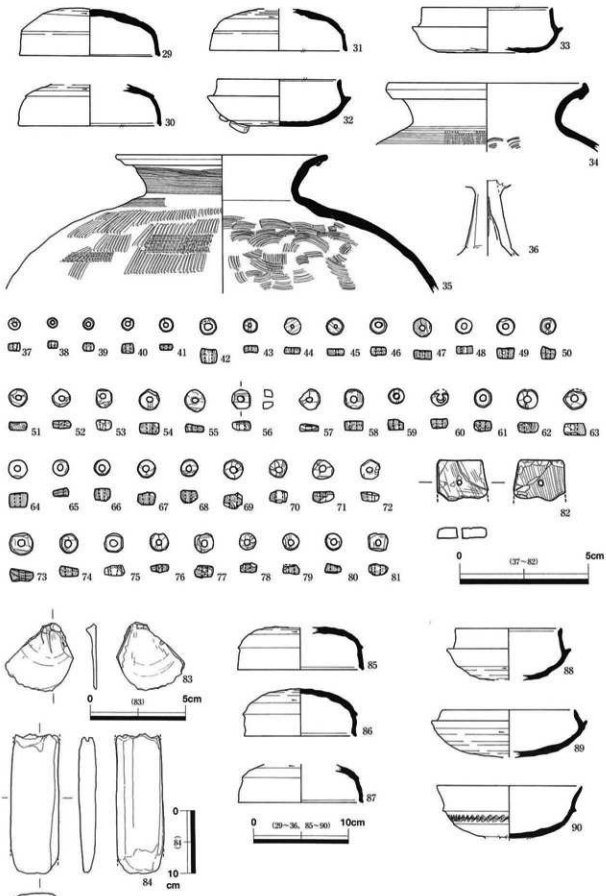
その他、掘立柱建物の柱穴に柱根が残存していたものがあった（図Ⅳ－96）。（165）～（170）は建物31、（171）は建物32、（172）は建物33、（173・174）は建物36から出土した。その多くは居住域Ⅱ－２から検出されている。このことについて概要ⅩⅡ（p.116）では、この居住域が集落存続期間の後半に形成されたことと関連する可能性を示唆しているが、その解釈にあたっては、包含される地層の地下水量の差といった埋没環境も考慮する必要がある。

なお、前項でふれた飛鳥時代の可能性がある建物の柱穴からも、遺物が出土している。建物17からは柱根（図Ⅳ－94：104）が出土した。建物19柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－94：105）が出土した。Ⅱ

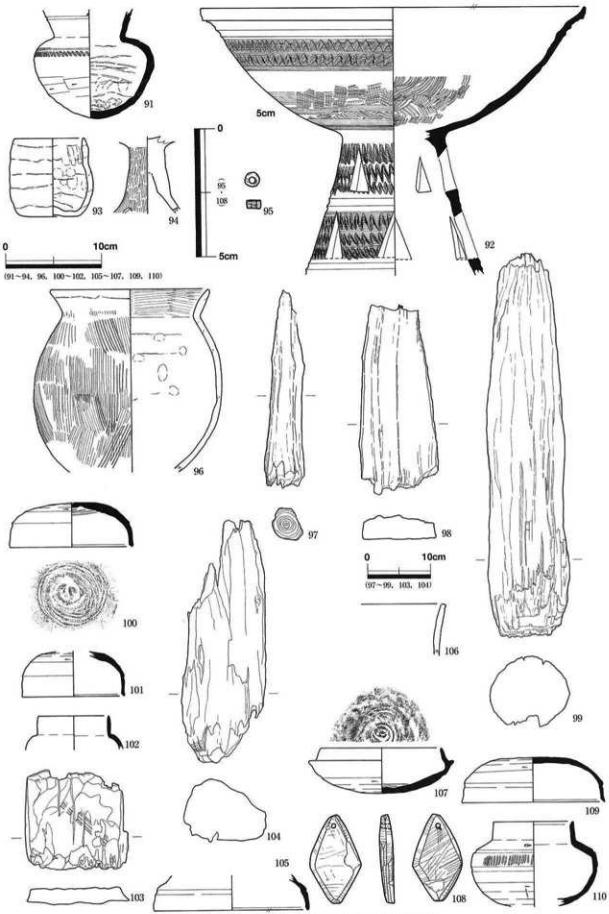


図Ⅳ－92　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物①

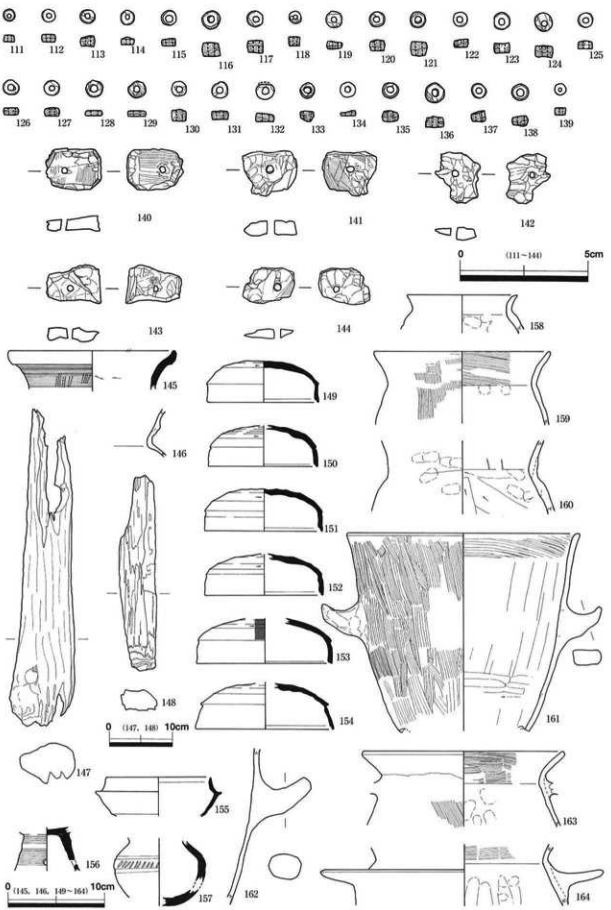
図Ⅳ－92　1：建物1，2～21：建物2，22～28：建物4
図Ⅳ－93　29～83：建物8，84：建物9，85～90：建物11
図Ⅳ－94　91～95：建物12，96～99：建物15，100～103：建物16，104：建物17，105：建物19
106：建物20，107・108：建物23，109・110：建物24
図Ⅳ－95　111～144：建物25，145～148：建物29，149～164：建物30
図Ⅳ－96　165～170：建物31，171：建物32，172～174：建物36



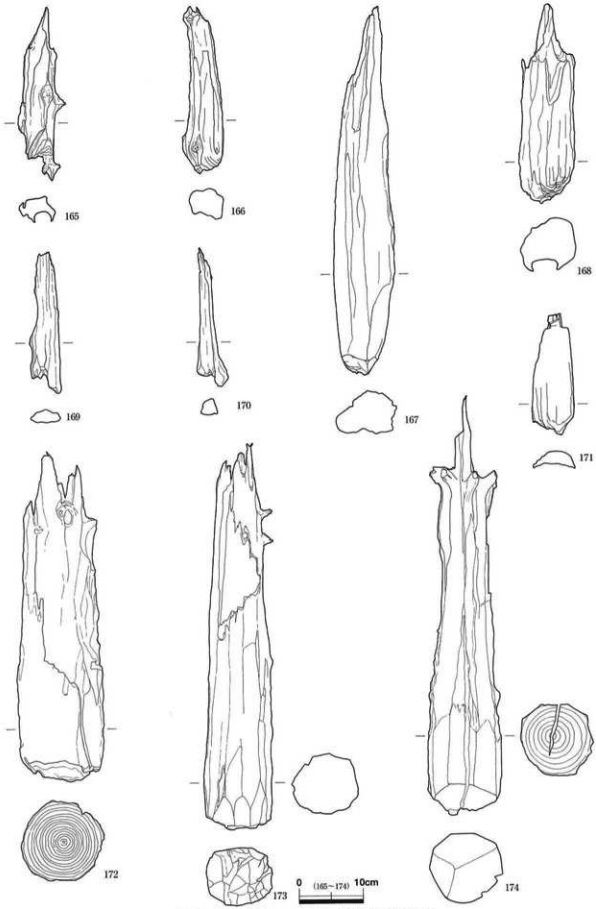
図Ⅳ－93　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物②



図Ⅳ－94　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物③



図Ⅳ－95　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物④



図Ⅳ－96　第９ｂ・10ｂ面建物出土遺物⑤

型式第２段階のものである。また、建物20柱穴からは土師器甑片（図Ⅳ－94：106）が出土した。６世紀ぐらいのものと思われる。建物29の柱穴からは、須恵器甕（図Ⅳ－95：145）、土師器小形複合口縁壺の破片（146）、柱根（147・148）等が出土した。須恵器甕はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第１段階のものである。土師器小形複合口縁壺は布留期のもので、山陰・北陸地方系になるのか、頸部の形が似ている。なお、この建物の柱穴のひとつからは、前述したように飛鳥時代のものと思われる土師器杯の細片が出土している。

ピット　ここでいうピットは小規模な落ち込みの総称である。ここから出土したもののほとんどは意図的に埋納されたものではなく、周辺に存在していた遺物が入り込んだものである。ただし、居住域Ⅱ周辺のピット８から出土した耳環については、意図的に入れられた可能性もある。さらに、居住域Ⅱおよびその周辺からは、建物になる可能性は低いが、柱根や礎板と考えられる木製品が出土したピットもある。

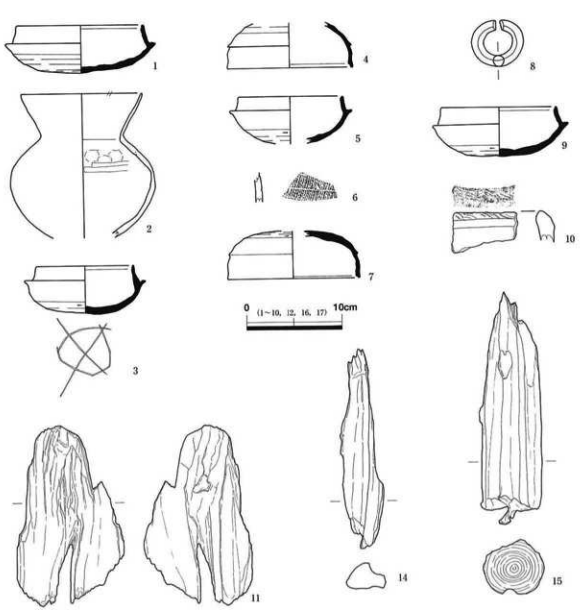
ピットから出土した遺物としては、以下のようなものがある。ピット２からは、須恵器杯（図Ⅳ－97：１）、土師器直口壺（２）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第１段階、土師器直口壺は６世紀ぐらいのものと思われる。ピット３からは須恵器杯（図Ⅳ－97：３）が出土した。Ⅰ型式第５段階のものである。外底面には、○の上に×印のヘラ記号を施している。ピット４からは須恵器杯蓋（図Ⅳ－97：４）が出土した。Ⅰ型式第４～５段階のものである。ピット５からは須恵器杯（図Ⅳ－97：５）が出土した。Ⅱ型式第１段階のものである。ピット６からは韓式系土器片（図Ⅳ－97：６）が出土した。陶質で、縄席文タタキの上に沈線文を施している。ピット７からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－97：７）が出土した。Ⅱ型式第１段階のものである。ピット８からは金銅製の耳環（図Ⅳ－97：８）が出土した。また、ピット９は建物29の柱穴との切り合いが認められたとされる遺構であるが、記録の不備により正確な位置がわからなくなってしまった。このピットからは須恵器杯（図Ⅳ－97：９）が出土した。Ⅰ型式第５段階～Ⅱ型式第１段階のものである。ピット10からは土師器竈片（図Ⅳ－97：10）が出土した。口縁部外面に同心円文スタンプを施している。ピット12からは弥生土器長頸壺（図Ⅳ－97：12）が出土した。第Ⅵ－２様式である。ピット27からは土師器杯（図Ⅳ－97：16）が出土した。５世紀後半～６世紀初め頃のものである。ピット28からは須恵器杯（図Ⅳ－97：17）が出土した。Ⅱ型式第１～２段階のものである。

また、柱根や礎板と考えられる木製品が出土したピットとして、礎板？（図Ⅳ－97：11）が出土したピット11、柱根（図Ⅳ－97：14）が出土したピット14、柱根（図Ⅳ－97：15）が出土したピット15がある。

ピットのうち、滑石製品が出土したものとしては以下のものがある。ピット13からは滑石製臼玉（図Ⅳ－97：13）が出土した。なお、図示はしなかったが、ピット29から滑石製臼玉２個、ピット30から滑石製臼玉２個、ピット31から臼玉１個、ピット32から臼玉１個が出土した。

井戸・土坑　この面では、井戸や水溜と考えられる土坑も検出されている（図Ⅳ－98）。まず、居住域Ⅰからは土坑９が検出された。これは泥質の堆積物で埋積されており、水溜として利用された可能性が指摘されている。また、居住域Ⅱ－１からは、井戸45・46が、同Ⅱ－２からは井戸47が検出されている。このうち、井戸46からは種子が約400点出土した。その種類としては、イヌホオズキ、ヒョウタン類、ウリ類などがある（第Ⅴ章２－３）。さらに、溝４と溝18で囲まれた部分では井戸48が検出された。

なお、溝15で囲まれた区画内からは土坑10が検出されたが、ここからは須恵器鼈、臼玉172点、有孔板９点などが出土しており、祭祀性の強い遺構と評価されている。



図Ⅳ－97　第10b面ピット出土遺物

1・2：ピット2，3：同3，4：同4，5：同5，6：同6，7：同7，8：同8，9：同9，10：同10，11：同11
12：同12，13：同13，14：同14，15：同15，16：同27，17：同28

次に、井戸・土坑から出土した遺物を列挙する。井戸45からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－99：1～7）・杯（8～12）・平瓶（13）、土師器高杯（14）、滑石製有孔円板（15～17）、骨製品（18）、木製品（19・20）等が出土した。須恵器杯蓋がⅡ型式第1～2段階、杯がⅠ型式第5段階～Ⅱ型式第3段階までのもので、平瓶はⅡ型式後半のものと思われ、時期差がある。断面図の記載によると、この井戸から出土した遺物には中層出土のものと最上層出土のものがあり、その時期差かもしれないが、各層準出土の遺物が一括

して遺物登録されてしまったため、検証することができない。また、土師器高杯は5世紀末～6世紀ぐらいのものである。骨製品は孔のあき方が自然ではないということで製品とした。これについては鹿角製の可能性がある[6]。剣形木製品（19）は両側が鋸歯状になっている。板状木製品（20）には加工痕が残っている。滑石製品は有孔円板が3点、臼玉が4点出土した。

井戸46からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－99：21）・杯（22）・壺（23）・甕（24）、土師器直口壺（25）・甕（26～29）等が出土した。須恵器の時期はⅡ型式前半におさまる。土師器は6世紀ぐらいと思われるものである。土師器甕（27）・（28）の一部には赤色顔料が付着している。

井戸47からは、須恵器杯（図Ⅳ－100：30～32）・有脚短頸壺（33）、土師器甕（34・35）・鍋（36）、滑石製子持勾玉（37）等が出土した。須恵器はⅡ型式第2～3段階ぐらいのもので、土師器甕・鍋は6世紀ぐらいのものである。土師器鍋は焼成後に二次的に被熱した痕跡がある。

井戸48からは、須恵器杯（図Ⅳ－100：38）、土師器甕（39）が出土した。須恵器杯はⅠ型式第5段階、土師器甕は6世紀ぐらいのものである。

居住域Ⅰに関わる水溜と推定されている土坑9からは、須恵器甕（図Ⅳ－101：1）・壺（2）、土師器竈（3）等が出土した。須恵器はⅠ型式第5段階～Ⅱ型式第1段階のものである。土師器竈片の口縁端部には同心円文スタンプが施されているようである。

土坑10からは、須恵器甕（図Ⅳ－101：4）、滑石製品（5～29）等が出土した。須恵器甕はⅡ型式前半頃のものである。滑石製品は臼玉（5～21）、有孔円板（22～26）、双孔円板（27～29）である。実測しなかったものを合わせると、臼玉172点、双孔円板3点、有孔円板6点が出土した。なお、臼玉のうち2つは甕の中から出土した。

土坑11からは土師器甕（図Ⅳ－101：30）が出土した。6世紀ぐらいのものである。

土坑12からは土師器小形甕（図Ⅳ－101：31）、滑石製臼玉（32）が出土した。土師器小形甕は6世紀ぐらいのものである。

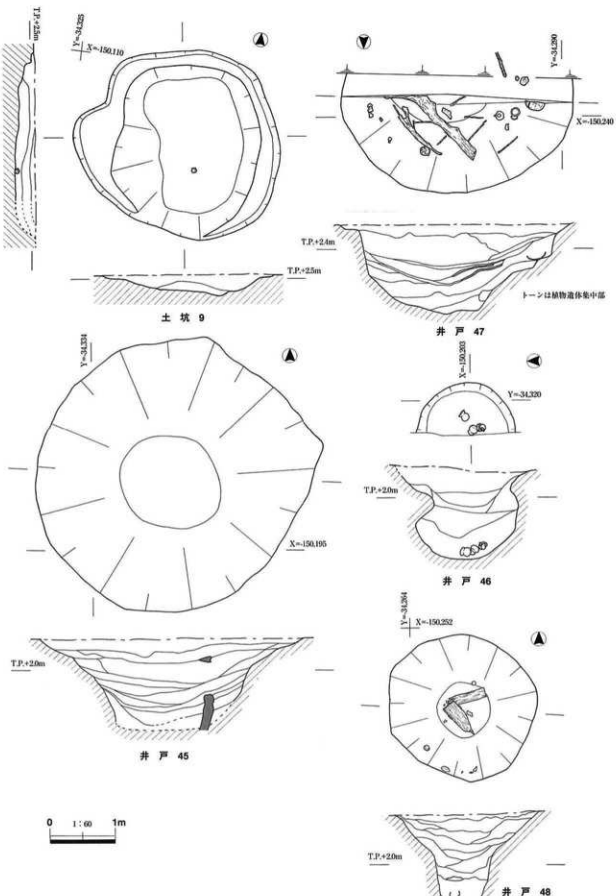
土坑13は92-7調査区で検出されたものであるが、記録の不備により位置がわからなくなってしまった。この土坑から出土した可能性のあるものとして、須恵器杯（図Ⅳ－101：33）、弥生土器甕（34）がある。須恵器杯はⅠ型式第1～2段階のものと思われ、外面に波状文（7条）を2段施している。弥生土器は第Ⅴ様式である。土坑13から出土したと記載されている遺物には土師器高杯（図Ⅳ－101：35）がある。6世紀ぐらいのものと思われる。

土坑14は建物25の中心付近で検出された遺構であり、滑石製臼玉（図Ⅳ－102：36～62）・有孔円板（63・65）・双孔円板（64）が出土した。出土した臼玉の総数は126点である。

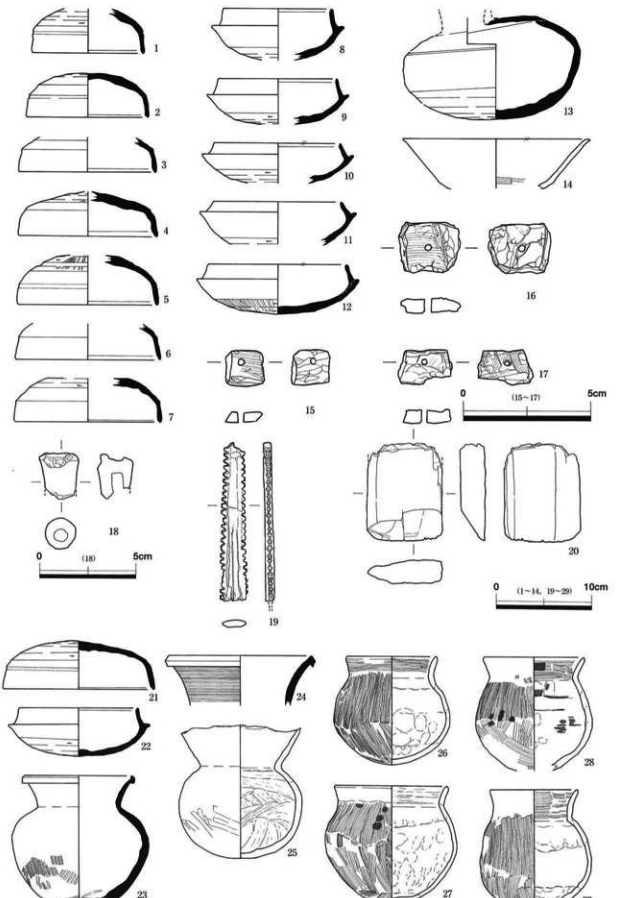
土坑43からは滑石製臼玉（図Ⅳ－102：66・67）が出土した。その総数は8点である。

その他、図示していないが、土坑47からは滑石製臼玉が17点出土した。

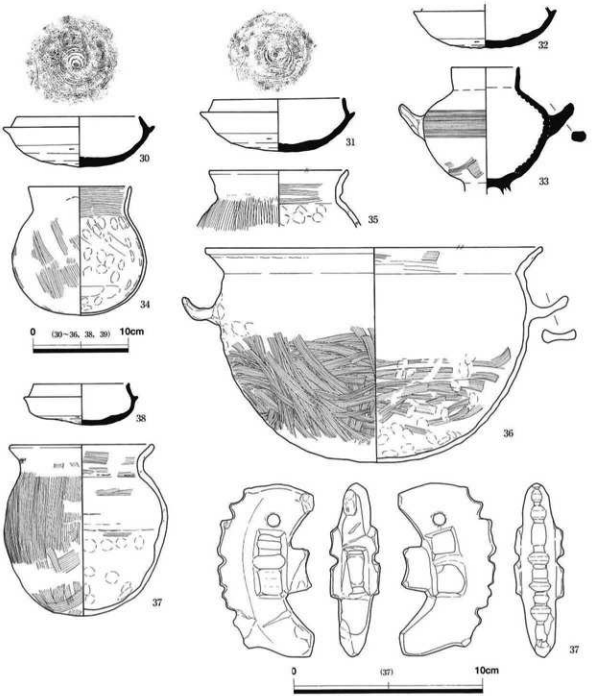
溝　次に、この面で検出された溝について記述したい。注目されるのは、100m以上のびる溝や、建物群を取り囲むように配置された溝が存在することである。まず、居住域Ⅰは溝6・溝7・溝23によって囲まれている。また、溝18・溝16で囲まれた部分が居住域Ⅱにあたり、2つの溝をつなぐ溝17の北西側がⅡ－1、南東側がⅡ－2となる。また、溝15はコの字状に巡る溝で、溝18を切っている。これと溝11が本来つながっており、居住域Ⅱ－1の南東端を画する時期があった可能性もある。なお、溝15(90-1調査区「溝700」)からは比較的多くの遺物が出土しているが、この溝に切られた落ち込み1（同「落ち込み193」）からも遺物がまとまって出土したと報告されている（概要Ⅹ Ⅱ，pp.93-96）。溝15は落ち込み1



図Ⅳ－98　第10ｂ面井戸

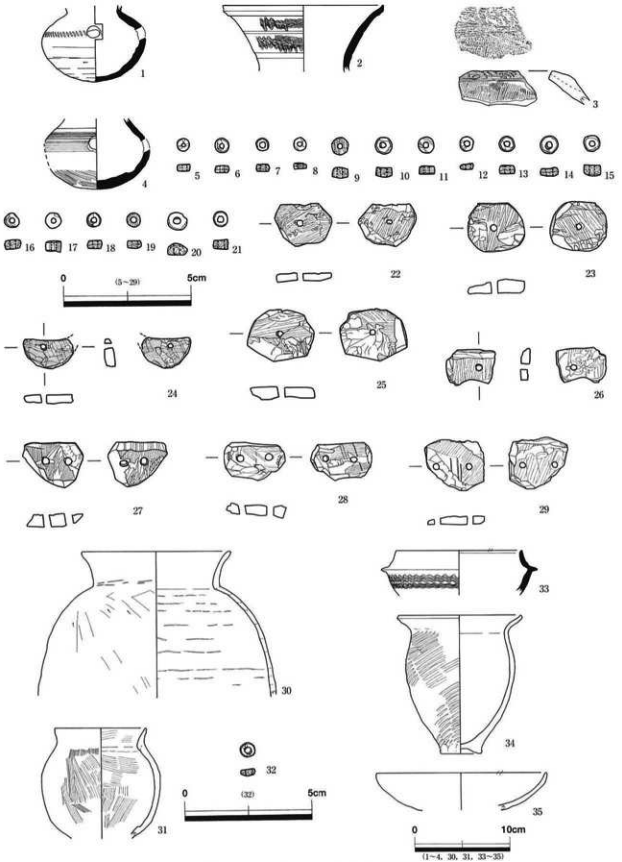


図Ⅳ－99　第10ｂ面井戸出土遺物①



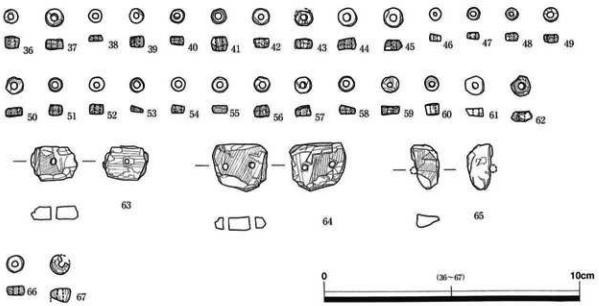
図Ⅳ－100　第10ｂ面井戸出土遺物②

図Ⅳ－99　1～20：井戸45，21～29：井戸46
図Ⅳ－100　30～37：井戸47，38・39：井戸48



図Ⅳ－101　第10ｂ面土坑出土遺物①

図Ⅳ－101　1～3：土坑9，4～29：土坑10，30：土坑11，31・32：土坑12，33・34：土坑13？，35：土坑13
図Ⅳ－102　36～65：土坑14，66・67：土坑43



図Ⅳ－102　第10ｂ面土坑出土遺物②

と重なる部分で幅が狭くなり、やや湾曲して収束すると認識されたが、落ち込み１の西辺は直線的であり、その部分に沿って土器片がまとまって出土した。その部分の土器の時期をみると、落ち込み１の他の部分から出土したものと比べて新しいものが多く、溝15出土土器と同時期と考えられる。このことから、落ち込み１の西端と認識された部分は本来溝15の肩であった可能性が高い。したがって本書では、「落ち込み193」出土とされていた遺物のうち、溝15に含まれていた可能性が考えられるものについては、溝15出土遺物に含めて掲載している。また、90-1調査区の「溝711」はＹ字状に分岐する溝とされている（概要Ⅹⅱ，pp.96-98）。しかし、溝の位置関係からすると、溝18とカーブしてのびる溝が切り合っていた可能性がある。ここで溝11としたものは、このうちの後者を指している。さらに、溝４や溝25は耕作痕や建物が検出された範囲の南東端に位置する。なお、居住域Ⅱ－１・２の中央部にあたる位置を南東－北西方向に縦断する溝14は、居住域よりも古い溝であるが、ここからは５世紀末の須恵器と弥生時代後期の土器が出土した。この溝は、居住域Ⅱ－１の中で最も古い建物である建物12に切られている。両者の出土土器は同型式であり、１型式内での変遷と考えることもできるが、この溝が本来１つの遺構ではなかったか、掘削時に別の遺構も一緒に掘削してしまい、遺物が混入した可能性も考慮する必要がある。

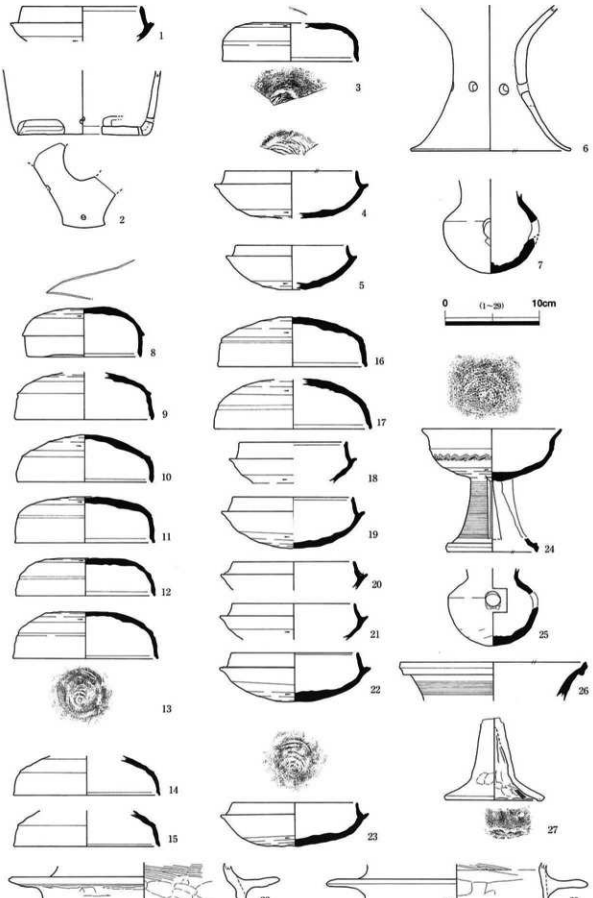
居住域Ⅰおよびその周辺の溝から、以下のような遺物が出土した。溝４からは滑石製臼玉、須恵器杯（図Ⅳ－103：１）が出土した。須恵器はⅡ型式第１段階のものである。

溝５からは土師器甑（図Ⅳ－103：２）が出土した。６世紀ぐらいのものと思われる。底部中央に円形孔１個、周辺に楕円孔４個を配すると思われる。その間に底面に推定４個、側面に４個の小孔を穿けていると思われる。この小孔は布を結束するためのものと推測されている（概要Ⅱ，p.56）。

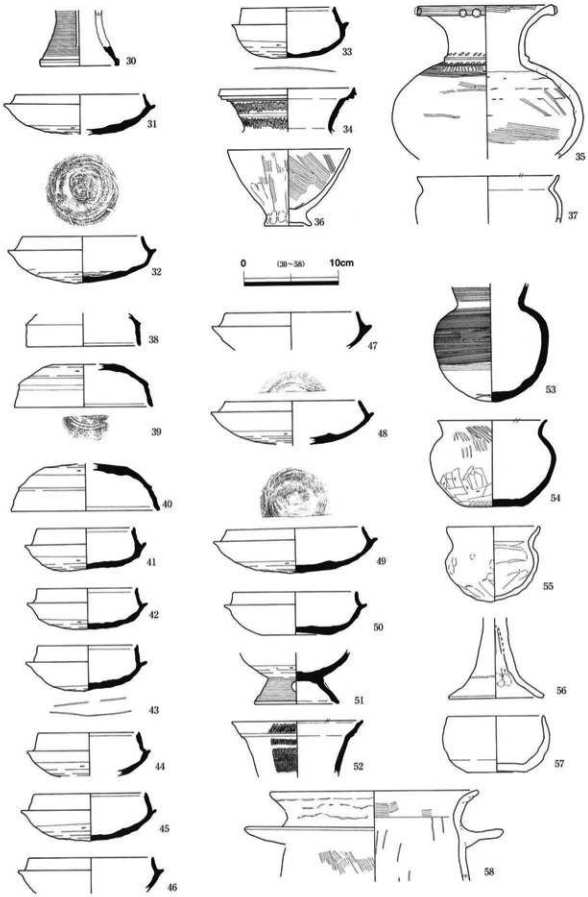
溝６からは須恵器杯蓋（図Ⅳ－103：３）等が出土した。Ⅱ型式第２段階のものである。外底面にヘラ記号が施されている。

溝７からは須恵器杯（図Ⅳ－103：４）が出土した。Ⅱ型式第２段階のものである。

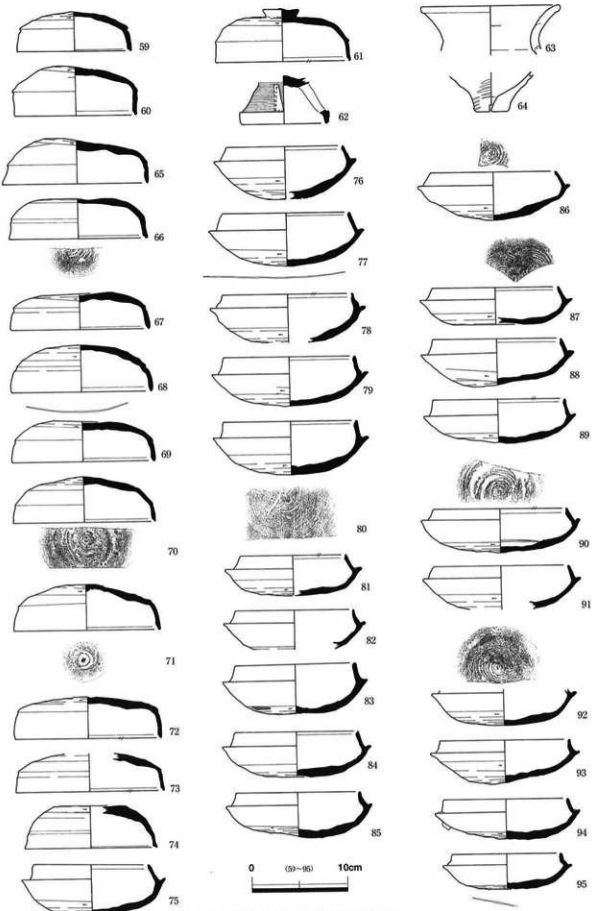
溝８からは須恵器杯（図Ⅳ－103：５）が出土した。Ⅱ型式第２段階のものである。



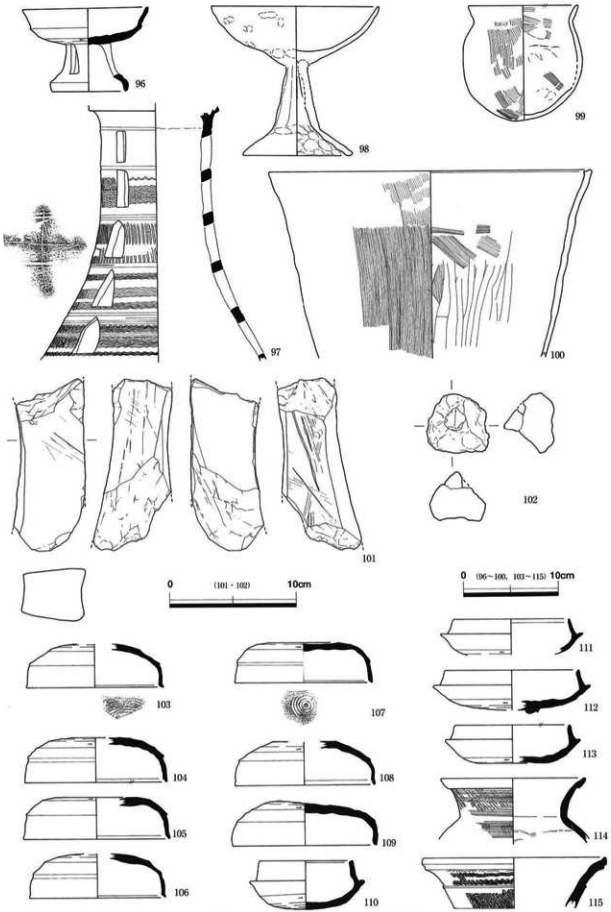
図Ⅳ－103　第10ｂ面溝出土遺物①



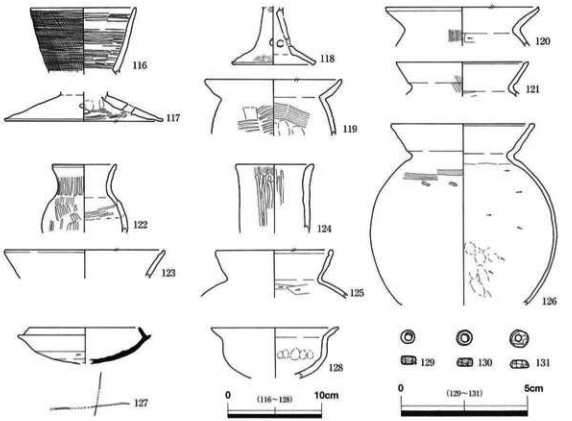
図Ⅳ－104　第10ｂ面溝出土遺物②



図Ⅳ－105　第10ｂ面溝出土遺物③



図Ⅳ－106　第10ｂ面溝出土遺物④



図Ⅳ－107　第10ｂ面溝出土遺物⑤

図Ⅳ－103　1：溝4，2：溝5，3：溝6，4：溝7，5：溝8，6：溝9，7：溝10，8～29：溝11
図Ⅳ－104　30：溝12，31・32：溝13，33～37：溝14，38～58：溝15
図Ⅳ－105　59～64：溝16，65～95：溝17
図Ⅳ－106　96～102：溝17，103～115：溝18
図Ⅳ－107　116～121：溝20，122～123：溝21，124～126：溝22，127～128：溝40，129～131：溝42

溝10からは須恵器亀（図Ⅳ－103：７）が出土した。Ⅱ型式第２段階のものである。

なお、概報で「建物」とされていた溝40からは、須恵器杯（図Ⅳ－107：127）、土師器鉢（128）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第４段階のものであり、外底面にヘラ記号を施している。土師器鉢は６世紀ぐらいのものかと思われる。

居住域Ⅱ内および周辺の溝から、以下のような遺物が出土した。溝11からは須恵器杯蓋（図Ⅳ－103：８～17）・杯（18～23）・高杯（24）・亀（25）・甕（26）、土師器高杯脚（27）・羽釜（28・29）等が出土した。須恵器はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階ぐらいまでのものである。土師器高杯脚は６世紀ぐらいのものと思われる。また、土師器羽釜は、前述のように江浦（1991ａ）によって６世紀代と位置づけられたものである。須恵器高杯（24）は凸線１条と波状文を施し、透かしは４方向である。土師器高杯脚は内面に布目痕が残る。

溝12からは須恵器高杯脚（図Ⅳ－104：30）が出土した。Ⅱ型式第２段階のものである。凸線１条を施し、透かしは３方向である。

溝13からは須恵器杯（図Ⅳ－104：31・32）が出土した。Ⅱ型式第２～３段階のものである。

建物12に切られている溝14からは、須恵器杯（図Ⅳ－104：33）・壺（34）、弥生土器壺（35）・鉢（36・37）等が出土した。須恵器はⅠ型式第４～５段階のものである。弥生土器は第Ⅵ様式のものである。須恵器杯は外底面にヘラ記号を施す。須恵器甕は凸線２条、凹線文１条、波状文（８条、10条）で飾る。

弥生土器壺は口縁端部に沈線文３条、２個１対の円形浮文が６ヶ所認められ、頸部から肩部に凸帯１条、直線文（４条、６条）、刺突文が３帯施されている。

溝15からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－104：38～40）・杯（41～50）・高杯脚（51）・甕（52）・壺（53・54）、土師器小型丸底壺（55）・高杯脚（56）・椀（57）・羽釜（58）等が出土した。須恵器はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第３段階までにおさまり、Ⅱ型式第２段階のものが多い。壺（54）は静止ヘラ削り等の調整から考えてⅠ型式第１～２段階のものとした。なお、第９ａ層出土の甕（図Ⅳ－72:203）もこれと同じぐらいの時期のものである。杯（43）はヘラ記号を施している。壺（53）も外底部にヘラ記号？が施されている。須恵器高杯脚の透かしは１ヶ所未穿孔である。甕は凹線文と波状文（６～18条）で飾られている。土師器の時期は小型丸底壺が布留Ⅳ期、高杯脚が６世紀ぐらいである。土師器椀（57）は時期不明である。

溝16からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－105：59～61）・高杯脚（62）、弥生土器壺（63）・底部（有孔）（64）等が出土した。須恵器はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第１段階、弥生土器は第Ⅵ様式のものである。

溝17からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－105・106：65～74）・杯（75～95）・高杯（96）・器台（97）、土師器高杯（98）・甕（99）・甑（100）、砥石（101）、鉄滓（102）等が出土した。後述するように、この溝からはウシ・ウマの歯も出土している。須恵器杯蓋はほとんどがⅡ型式第１～２段階におさまるものであるが、（74）のみⅡ型式第３～４段階のものである。（69）の外面にはヘラ記号が施されている。須恵器杯はⅡ型式第１～３段階におさまる。（77）・（80）・（95）の外面にはヘラ記号が施されている。（75）・（83）の外面の一部には赤色顔料が付着している。（94）には別個体の破片が溶着している。（77）・（78）・（95）は生焼けである。須恵器高杯はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第１段階で、器台はⅡ型式前半頃のものである。器台（97）にはヘラ記号が施され、凸線文、凹線文、波状文、列点文で飾り、透かしは方形のものが３方向に２段、三角形のものが３方向に３段存在する。土師器は６世紀ぐらいのものである。土器の時期はⅠ型式第５段階～Ⅱ型式前半におさまる。砥石は流紋岩製で４面使用している。鉄滓は分析の結果（第Ⅴ章５－１）、鍛錬鍛冶滓であることが判明したものであるが、単独で出土し、鍛冶に関連するような遺物は伴っていない。

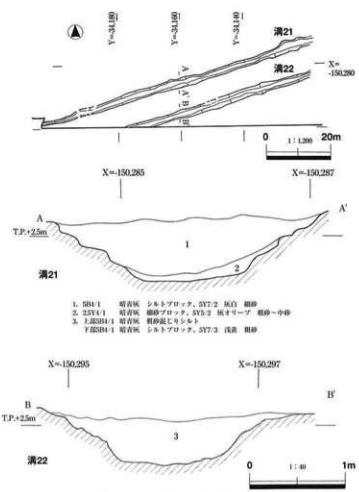
溝18からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－106：103～109）・杯（110～113）・壺（114）・甕（115）等が出土している。Ⅰ型式第４段階～Ⅱ型式第３段階におさまり、Ⅱ型式第１～２段階が主である。杯（112）には別個体の破片が溶着している。

溝42からは滑石製臼玉（図Ⅳ－107：129～131）が３点出土した。

この面では古墳時代前期ないしそれ以前と考えられる溝も検出されている。まず溝９は、これまで古墳時代後期集落の区画溝のひとつとされてきたが、弥生時代後期末の器台が出土している。写真で出土状況を確認したところ、溝の底面から横位の状態で出土しており、第10ａ層起源と考えられる土に包含されていたことを確認した（図版23－８）。この部分は第10ｂ層が厚く堆積しており、89-3調査区のように第11－２ａ面の微高地上に存在していた遺物を掘り出してしまった可能性は低い。この遺物は第10ｂ面の遺構形成の開始時期を考える上で重要な資料である。また、溝20からは古墳時代前期に属する土師器が出土しており、その時期の遺構である可能性が高い。

さらに、溝21・22は当地区南東部で検出された、西南西－東北東方向にのびる溝である（図Ⅳ－108）。当センターの調査では93-1調査区において検出されたが、これらは府教委86-3・87-1調査区の「溝状遺構３－201・３－202」に連続すると考えられる。また、府教委Ⅰトレンチ（第10ｂ面は未調査）におい

て第11－２ａ面検出時に確認された「溝状遺構１・２」が、これらに連続すると思われる。ちなみに、「溝状遺構２」では布留式甕が出土しており(府発Ⅱ，pp.39-40)、93-1調査区の出土土器と時期が一致する。このように、当地区の範囲では長さ約130ｍにわたって、２条の溝が平行して直線的にのびることが確認された。ただし、恩智川の対岸にあたる池島Ⅰ期地区では、これらの溝の続きは検出されていないため、現在恩智川が存在している場所で収束するか、そこから南東方向に屈曲すると考えられる。なお、ピット列17・18は溝21の南側に沿って存在しており、溝と関連する遺構の可能性がある。これらの溝の性格は現段階では不明であるが、その解明の手がかりが福万寺Ⅱ期地区に存在する可能性もあり、今後の調査が期待される。

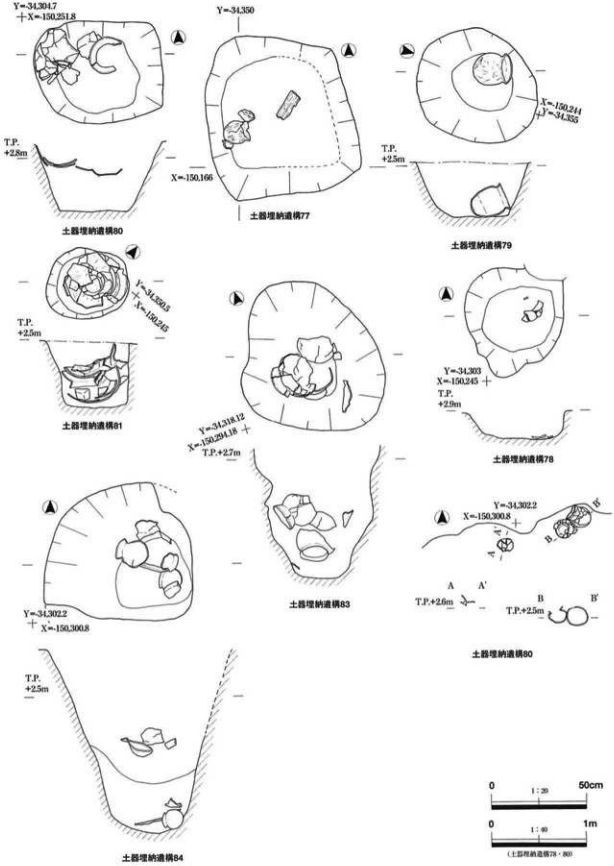


図Ⅳ－108　第10ｂ面溝21・22

これらの溝から出土した遺物を列挙する。溝９からは弥生土器器台（図Ⅳ－103：６）が出土した。第Ⅵ様式である。溝20からは、土師器直口壺（図Ⅳ－107：116）・高杯脚（117・118）、弥生土器甕（119）、庄内式甕（120）、布留式甕（121）等が出土した。布留Ⅰ期～Ⅲ期におさまると思われるが、高杯脚（118）が布留Ⅳ期？で、弥生土器甕（119）が第Ⅴ様式～庄内期のいずれかの時期のものである。

また、平行してのびる溝21・22のうち、前者からは弥生土器壺（図Ⅳ－107：122）、庄内式甕（123）が出土した。弥生土器は第Ⅵ様式のものである。また、後者からは布留式甕（図Ⅳ－107：125・126）、弥生土器長頸壺（124）が出土した。布留式甕は布留Ⅱ～Ⅲ期のもので、弥生土器長頸壺は第Ⅵ様式のものである。(126）は肩部に刺突文を施している。前述したように、この布留式甕と同時期のものが府教委調査区からも出土しており、これらの溝の時期を示す可能性が高い。

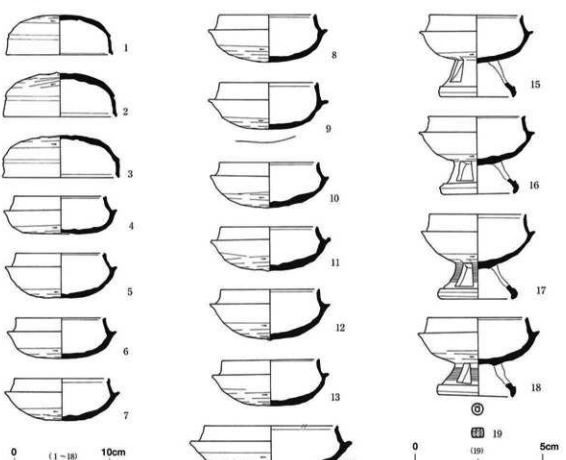
土器集積遺構・埋納遺構　土器集積遺構１は居住域Ⅱ－１で検出された（図版21－５）。これについては掘り形が検出されていないが、古土壌下面である第10ｂ面に接して土器が出土したことからみて、浅く掘りくぼめた場所に土器が置かれたと考えられる。また、ここでいう土器埋納遺構とは、土器を意図的に埋め込んだ遺構の総称である（図Ⅳ－109、表Ⅳ－27)。古代以降の水田祭祀に関連する土器埋納遺構とは性格が異なるため、別名称にすることも考えたが、90-1調査区における名称を尊重して変更しなかった。古墳時代に属する土器埋納遺構は、後期のものと前期のものがそれぞれ５基ずつ検出されている。それらはすべて当地区南東部に存在する。



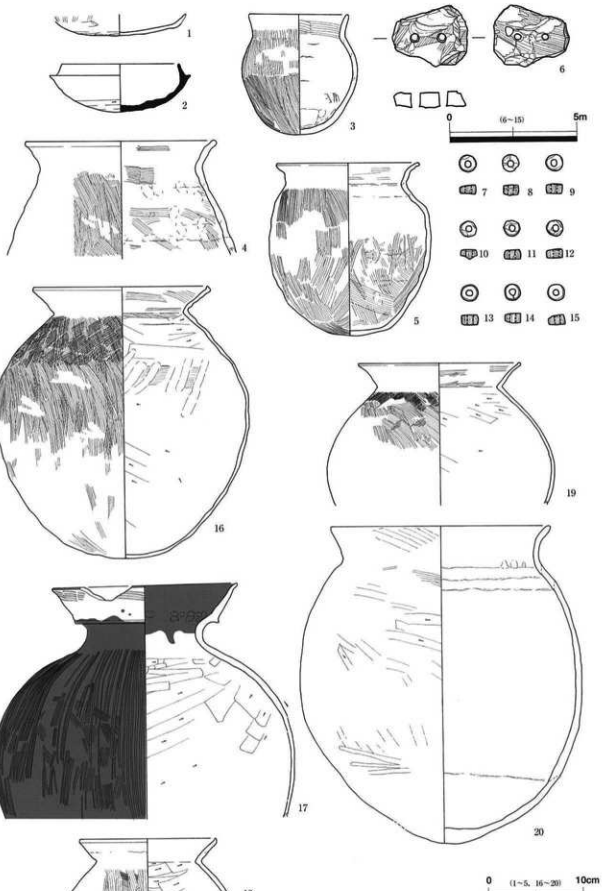
図Ⅳ－109　第10ｂ面土器埋納遺構

表Ⅳ－27　第10b面土器埋納遺構一覧

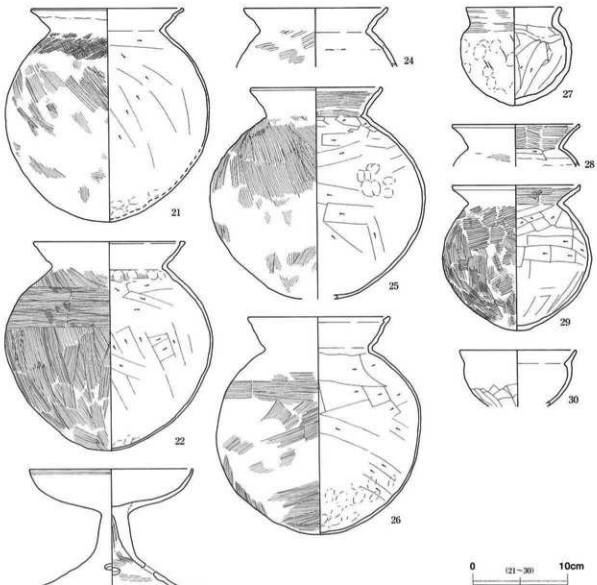
番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号
				遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況			
土器埋納遺構80	90-1調査区（Ⅹ Ⅱ）	土器埋納遺構 3	土師器甕	円形土坑	54×67×35	破片を重ねて埋納	古墳前期		図Ⅳ－111：16
土器埋納遺構81	90-1調査区（Ⅹ Ⅱ）	土器埋納遺構10	土師器甕 3、土師器 1	不整円形土坑	37×42×36	甕器を作りの底辺外は口縁部から体部上半のみを埋納	古墳前期		図Ⅳ－112：17～20
土器埋納遺構82	92-7調査区（Ⅹ Ⅳ）	土坑 4	土師器甕 2	大半が調査区外	不明		古墳前期		図Ⅳ－112：21～23
土器埋納遺構83	92-7調査区（Ⅹ Ⅳ）	土坑 2	土師器甕 2	不整円形土坑	直径75×70		古墳前期		図Ⅳ－112：24～26
土器埋納遺構84	92-7調査区（Ⅹ Ⅳ）	土坑 3	土師器甕 2、小形壺 1、鉢 1	大半が調査区外	79×75×95		古墳前期		図Ⅳ－112：27～30
土器埋納遺構75	90-3(A)（Ⅱ）	掘り残し土器埋納ピット 6	土師器甕／鍋底部	不明	不明		6 C		図Ⅳ－111：1
土器埋納遺構76	90-3(B)（Ⅵ）	掘り残し土器埋納ピット 7	須恵器杯	不明	不明		Ⅱ～1～2		図Ⅳ－111：2
土器埋納遺構77	90-1調査区（Ⅹ Ⅱ）	土器埋納遺構 6	土師器甕、須恵器杯片、滑石製双孔円板	不整円形土坑	83×78	土坑底面に西に傾して埋納。また、土坑底面中央に木片。	6 C		図Ⅳ－111：3・4
土器埋納遺構78	90-1調査区（Ⅹ Ⅱ）	土器埋納遺構 4	土師器甕	不整円形土坑	112×104×32	正面からやや東よりに埋納	6 C		図Ⅳ－111：5
土器埋納遺構79	90-1調査区（Ⅹ Ⅱ）	土器埋納遺構 9	土師器甕	円形土坑	61×63×28	完形の土師器甕の口を北へ向けて倒れかかった状態で埋納。内部から滑石臼玉 9 点、有孔板 1 点を検出。	6 C		図Ⅳ－111：6～15



図Ⅳ－110　第10b面土器集積遺構１出土遺物



図Ⅳ－111　第10ｂ面土器埋納遺構出土遺物①



図Ⅳ－112　第10ｂ面土器埋納遺構出土遺物②

図Ⅳ－111　1：土器埋納遺構75，2：同76，3：同77，4：同78，5～15：同79，16：同80，17～20：同81
図Ⅳ－112　21～23：土器埋納遺構82，24～26：同83，27～30：同84

土器集積遺構１からは須恵器杯蓋（図Ⅳ－110：１～３）・杯（４～14）・高杯（15～18）、滑石製臼玉（19）が出土した。須恵器はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第１段階におさまる。杯（９）の外底面にはヘラ記号？が施されている。高杯（15）～（18）の透かしは３方向である。臼玉の出土総数は10点である。

土器埋納遺構75からは、土師器甕か鍋底部（図Ⅳ－111：１）が出土した。６世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構76からは須恵器杯（図Ⅳ－111：２）が出土した。Ⅱ型式第１～２段階のものである。土器埋納遺構77からは土師器甕（図Ⅳ－111：３）が出土した。土師器甕は６世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構78からは土師器甕（図Ⅳ－111：４）が出土した。６世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構79からは、土師器甕（図Ⅳ－111：５）、滑石製双孔円板（６）・臼玉（７～15）等が出土した。土師器甕は６世紀ぐらいのものである。滑石製品の総数は双孔円板１、臼玉９点である。土器埋納遺構80からは庄内式甕（図Ⅳ－111：16）が出土した。布留Ⅰ期のものである。土器埋納遺構81からは、土師器複合口縁

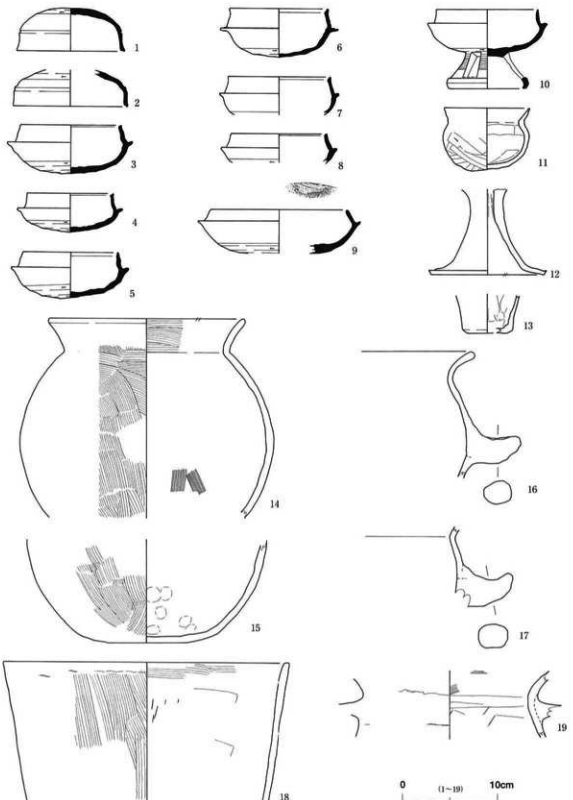
壺（図Ⅳ－111：17）・甕（20）、庄内式甕（18・19）等が出土した。布留Ⅰ期のものと思われる。土師器複合口縁壺は山陰・北陸地方系と思われるが、胎土は生駒西麓産である。口縁部には打ち欠きかと思われる欠けがあり、外面頸部以下と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。胴部以下には赤色顔料の下に黒色物質が塗布されている。土師器甕は摂津系と思われる形態をしている。土器埋納遺構82からは、庄内式甕（図Ⅳ－112:21）、布留式甕（22）、弥生土器高杯（23）が出土した。このうち、前二者は後者と離れて存在しており、別遺構の可能性が高い。(21)・(22) が布留Ⅰ期のもので、弥生土器高杯は第Ⅵ様式～庄内期にかけてのものと思われる。土器埋納遺構83からは、庄内式甕（図Ⅳ－112：25）、布留式甕（26）、弥生土器甕（24）が出土した。(25)・(26) が布留Ⅰ～Ⅱ期のもので、弥生土器甕は第Ⅵ様式～庄内期にかけてのものである。後者は破片であり、混入の可能性もある。土器埋納遺構84からは、土師器小形壺（図Ⅳ－112：27）・鉢（30）、庄内式甕（28・29）等が出土した。このうち、(27)・(28) が上層、(29)・(30) が下層から出土した。(27) は庄内期ごろ、(28) が布留Ⅰ期のものと思われ、(29) が庄内Ⅲ期、(30) が庄内Ⅰ期のものと思われる。

その他の遺構　居住域Ⅱ－１内で検出された落ち込み１は溝15に切られている。この遺構内には土器が散在していた。また、小溝群も12ヶ所で検出されている（図版22－５）。これらは第10ａ層と考えられる土壌で充填されており、深さ10cm 程度のものが多い。溝の底面は凹凸が激しく、肩がほぼまっすぐに立ち上がるものもある。溝の間隔は30～40cm程度のものが多い。これらについては「畝溝状遺構」と呼称されていたが、こうした特徴からみて、畝間の溝ではなく、畠作土形成に関わる耕作痕の可能性が高い（松田・パリノ・サーヴェイ1996・佐藤1998）。なお、居住域Ⅰの区画内にある耕作痕12について、概要Ⅱでは溝のひとつが建物４の柱穴に切られるように図示されていたが、平面図を確認したところ、溝のほうが柱穴を切っていたことが判明した。なお、前述した溝40は耕作痕12に接しており、溝の向きに共通性が認められる。このことは、溝40が耕作痕12の一部であった可能性を示唆している。それが正しければ、溝40から出土したⅡ型式第４段階の須恵器杯から考えて、この耕作痕は居住域Ⅰの廃絶後に形成された可能性も考えられる。また、建物２に隣接する耕作痕２からは、比較的多くの遺物が出土した。その中には土師器竈の破片も含まれており、本来は建物２の周囲に廃棄された遺物であった可能性がある。さらに、居住域Ⅰの外側にある耕作痕７は建物７の柱穴に切られており、建物以前の遺構と考えられる。

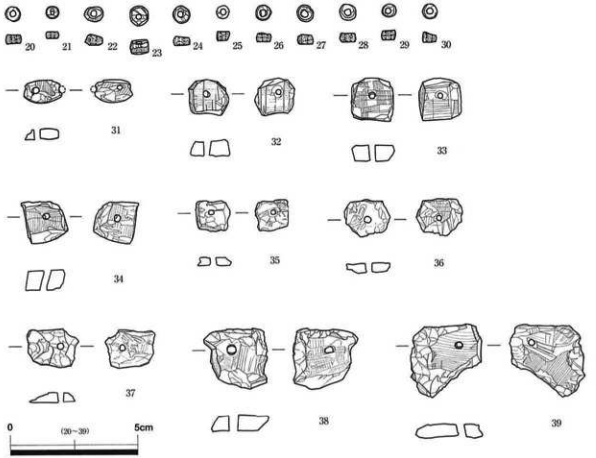
その他、ピット列も16ヶ所で検出された。これらの時期は不明であるものの、第９ａ面でみられた正方位地割とは全く合わず、微高地の縁辺付近で多く検出された点からみて、古墳時代に属する可能性がある。ただし、これらが同時に存在していたどうかは不明である。

次に、落ち込み・耕作痕などから出土した遺物を列挙する。落ち込み１からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ－113・114：１・２）・杯（３～９）・高杯（10）、土師器小型丸底壺（11）・高杯脚（12）・ミニチュア土器（13）・甕（14）・鍋（15～17）・甑（18）・羽釜（19）、滑石製品（20～39）等が出土した。須恵器はⅠ型式第４段階～Ⅱ型式第２段階におさまる。土師器は６世紀かと思われるものがほとんどである。滑石製品は臼玉（20～30）、双孔円板（31）、有孔円板（32～39）である。総数は双孔円板１、有孔円板８、臼玉293点が出土した。

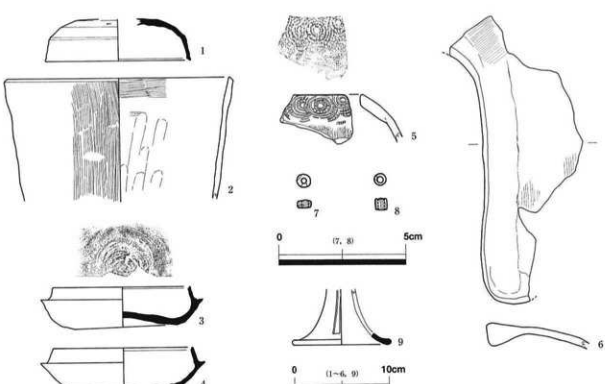
耕作痕１からは須恵器杯蓋（図Ⅳ－115：１）、土師器甑（３）が出土した。須恵器はⅡ型式第２段階のもので、土師器甑は６世紀ぐらいのものである。耕作痕２からは須恵器杯（図Ⅳ－115：４・５）、土師器竈（６・７）、滑石製臼玉（８・９）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第１段階のものである。竈（６）



図Ⅳ－113　第10ｂ面落ち込み１出土遺物①



図Ⅳ－114　第10b面落ち込み1出土遺物②



図Ⅳ－115　第10b面耕作痕出土遺物

1・2：耕作痕1，3～8：耕作痕2，9：耕作痕12

は口縁部外面に同心円文スタンプを施している。(7)は焚き口下部で支脚状に突出している。臼玉は2点出土した。耕作痕12からは須恵器高杯脚（図Ⅳ－115：2）が出土した。Ⅱ型式第2段階のものである。

小結　第10b面では主に、古墳時代前期の遺構と中期後半～後期の遺構が検出された。このうち前者に関しては、遺構分布の中心が調査範囲外に存在する可能性が高いため、現状では十分な評価ができない。したがって、ここでは後者の遺構に着目して、古墳時代中期後半～後期の集落の概要を復原したい。

a．居住域の実態

前述のように、第10b面の建物群は周囲を囲む区画溝の存在から細分が可能であり、居住域Ⅰ・Ⅱ－1・Ⅱ－2という居住単位を復原した。ここではまず、これらの実態について検討したい。

まず居住域Ⅰについては、江浦（1991b）による復原がある。江浦は、建物1の溝と建物4の柱穴という隣接する遺構の関係について、検出段階が異なったことを層位関係とみなし、建物4→建物1という変遷を考えた。さらに、建物6と建物1の軸が揃うことから両者を同時存在とみなし、この区域の建物群を大きく2時期にわけた。遺構に切り合い関係がないため、この仮説の当否は判断できないが、1時期に掘立柱建物が数棟存在し、竪穴建物1棟、水溜1基、小規模な畠などが伴っていたという想定は可能であろう。なお、この竪穴建物の周辺からは竈・羽釜・甑の破片が出土しており、住居ではなく、「竈屋」としての性格が想定されている。この区域で時期が判明した建物は少ないが、Ⅱ型式第1～2段階の須恵器が柱穴に埋納された事例などから、6世紀前葉～中葉の幅でとらえることができる。なお、建物1・4など、この居住域を構成する建物は、居住域Ⅱ－1・2の建物と比べて規模が大きい点も注意される。

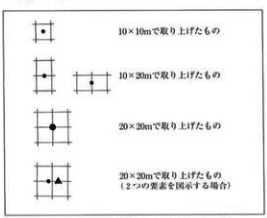
居住域Ⅱ－1からは、竪穴建物と掘立柱建物が検出されている。飛鳥時代に属する可能性のあるものと、認定に疑問の残る「建物21・22」を除くと、前者が4基、後者が9基となる。前者のうち、建物30からは作り付け竈が検出されており、「竈屋」としての性格が想定されている。これらのうち、時期が判明しているのは少ないが、建物12はⅠ型式第4段階の須恵器が出土し、当地区では最も古い5世紀後半のものであることが判明している。また、Ⅱ型式第1～2段階の建物も存在しており、6世紀中葉まで、建て替えが繰り返されたことがわかる。なお、この区域からは井戸も2基検出されている。こうした状況から考えると、この区域でも1時期の状況は、竪穴建物ないし掘立柱建物数棟に「竈屋」や井戸が伴うものであった可能性が高い。なお、「竈屋」と想定される建物は建物30しか検出されていないが、作り付け竈と推定された2つの遺構の時期が異なる可能性や、土師器炊飯具を伴う簡単な施設が存在した可能性を検討する必要がある。

また、居住域Ⅱ－2からは、掘立柱建物5棟、「竈屋」の可能性も指摘された竪穴1基、井戸1基が検出されている。建物の順序は不明であるものの、1時期の状況としては他の居住域と類似したものであったと考えられる。

その他、居住域とは離れた位置で、建物や井戸が単独で検出される場合がある。建物7や井戸48である。建物24・36もこれに含まれる可能性があるが、両者の周囲には未調査部分が広がっており、断定はできない。また、居住域の周囲には畠も広がっていたようで、耕作痕が複数検出されている。

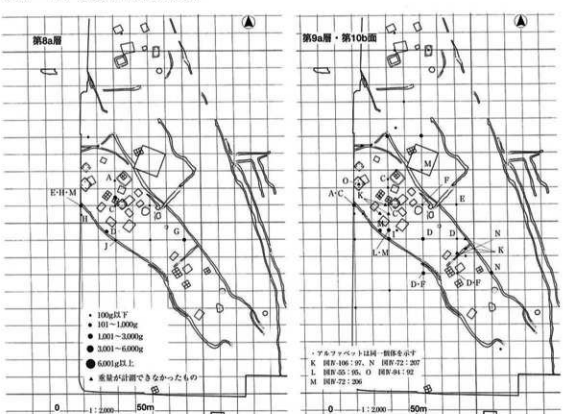
b．遺物の特徴と出土傾向

この集落に関連すると考えられる遺物は、須恵器の型式でいうとⅠ型式第５段階～Ⅱ型式第２段階ぐらいのものが多い。そして、その中にⅠ型式第１～２段階のものが若干混じるという状況である。また、古墳時代の遺構に関連する第10ａ層は、第８ａ層・第９ａ層段階の耕作によって大きく削られており、本来第10ａ層に含まれていた遺物の多くが第８ａ層・第９ａ層から出土した。したがって、この遺構群を評価するためには、第８ａ層・第９ａ層の出土遺物も含めて検討する必要がある。この場合、遺物が後世の耕作によって大きく移動した可能性もあり、これらの層準の遺物出土位置を第10ｂ面の遺構と直結させて理解することには危険が伴う。しかし、第10ｂ面の遺構が集中する部分と第８ａ層・第９ａ層の遺物集中範囲を比較すると、両者の間には対応関係が認められる。したがって、上層の遺物出土傾向を居住域単位で整理する程度であれば、一定の意味があると思われる。



図Ⅳ－116　遺物出土位置図凡例

第８ａ層・第９ａ層出土遺物のうち、居住域Ⅰ・Ⅱにあたる位置から出土したものについては図Ⅳ－54～57・65～72に記載した。Ⅱ周辺としたものは、主に居住域Ⅱ外側の南西部から出土したものである。これを見てもわかるように、遺物の多くが居住域Ⅱにあたる位置から出土している。さらにいえば、それらは居住域Ⅱ－１部分に集中する傾向がある。須恵器を見ても、居住域Ⅱ－１から出土したものは５世紀後半から６世紀中頃までの各時期のものを含み、それより先行する須恵器もわずかに



図Ⅳ－117　第10ｂ面関連遺物出土位置①（須恵器器台）

出土している。これに対し、居住域Ⅰ部分から出土したものは、韓式系土器甕を除けば6世紀前葉～中頃にあたるものである。こうした事実は調査段階から注目されており、居住域Ⅱ－1が先行して形成され、やや遅れて居住域ⅠやⅡ－2の形成が始まると推測されていた。このことは、各居住域内の建物の時期とも整合する。

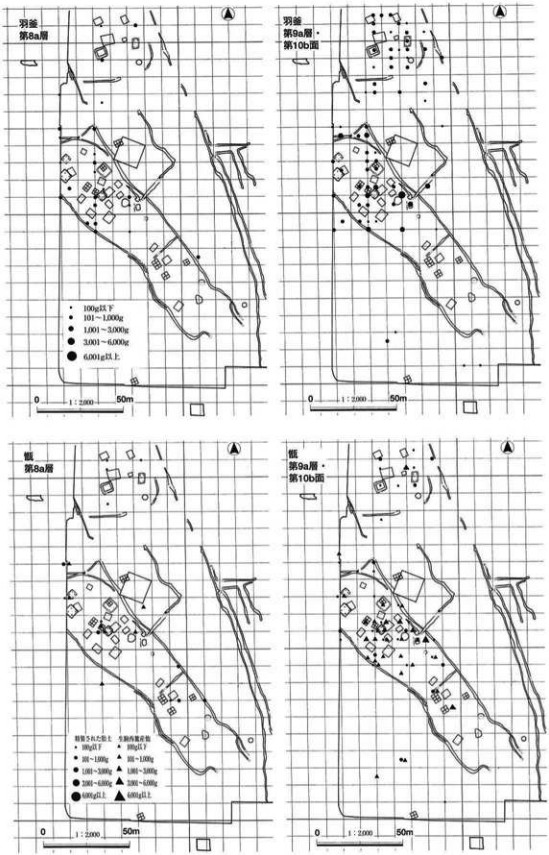
なお、第8a層～第10b面から出土している須恵器のヘラ記号についてまとめると、施されている器種は杯が多く、次いで杯蓋で、壺、甕、器台、高杯にも少し見られる。時期的に見るとⅠ型式第4段階～Ⅱ型式第6段階までのものに施され、多いのはⅠ型式第5段階のものとⅡ型式第2段階のもので、次いでⅡ型式第1段階のものである。ただし、これはその時期の遺物出土量が多いため、結果的にそうなっただけかもしれない。ヘラ記号は1条、2条、3条、4条、6条で書かれたものと、○に×印のもの、竹管文のものがある。その中で多いのは1条のものであり、次いで2条のものが多く見られる。2条のものは、平行状のもの、×印のもの、V字状のもの、＋印のもの（器台に書かれたもの）がある。

須恵器の中で注目される遺物は、須恵器大甕（図Ⅳ－72：203）や韓式系土器甕（図Ⅳ－67：58）である。これらは5世紀中頃～後半と、集落の時期に先行するか、開始期のものである。出土位置は居住域Ⅰ、Ⅱ－1、Ⅱ周辺であり、居住域との関連を推測させる。特に、韓式系土器甕の破片は居住域Ⅰの建物1・4周辺の狭い範囲からまとまって出土しており、これらの建物と関連する可能性も考えられる。これらについては、集団の移動とともに、時期的に遡る土器が持ち込まれたとする推定がなされている（森本1997）。江浦（1991b）において、韓式系土器甕が居住した集団の出自を示すと想定されたのも、同様の考え方にもとづいている。

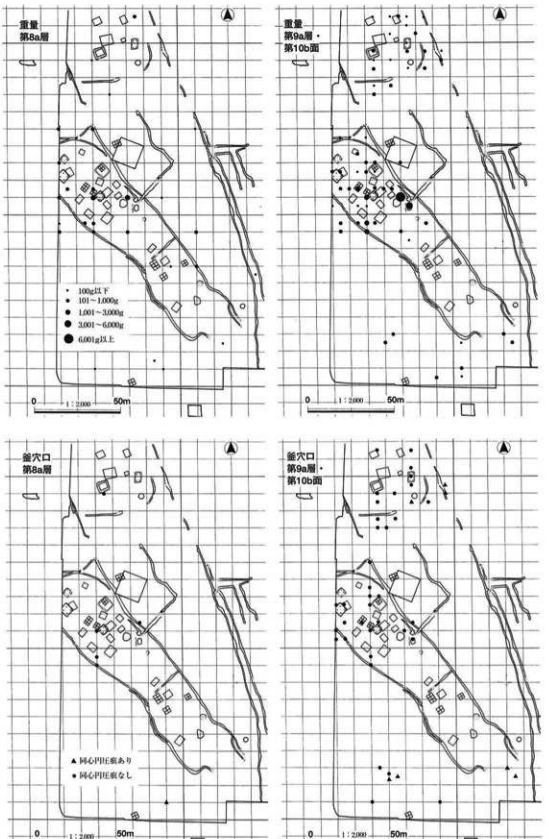
次に、須恵器器台、土師器炊飯具、動物遺存体、滑石製玉類について、出土位置を図示して説明したい（図Ⅳ－116～121）。当初、第Ⅳ区画の10mグリッドごとに遺物の出土量を示そうとしたが、遺物の取り上げが10×20m、20×20mの範囲など、掘削作業の単位にしたがっておこなわれており、一定の面積で取り上げられてはいなかった。このため、10mグリッドごとに遺物の量を集計することができなかったので、図Ⅳ－116に示すように、現地で取り上げられた状態に即した表示方法をとった。この表示方法では、ひとつのグリッドから出土した遺物が複数のドットで表示される場合が生じてしまうが、二重にカウントされることはないので、出土傾向の概略を読み取ることは可能である。なお、土器片については重量、動物遺存体・玉類については個数で表示した。

須恵器器台（図Ⅳ－117）は個体数が少なく、特徴的であるため、個体識別が比較的容易であった。その分布状況をみると、まず、層位的には第8a層と第9a層から出土したものが接合した。また、平面的にも約50m離れて出土したものが接合した。これらは、第10a層埋没後の耕作の影響による遺物移動のあり方を示しており、この面に関連した遺物分布を評価する際には考慮すべき事実である。このような問題もあるが、大局的にみて須恵器器台が居住域Ⅱ－1を中心に分布していることは確かであろう。

また、炊飯具のセットである羽釜・甑（図Ⅳ－118）、竈（図Ⅳ－119）については、居住域Ⅰ、居住域Ⅱ－1という2つの分布の中心が存在することがわかる。居住域Ⅱ－1についていえば、区画中央部の建物集中地点に多いという傾向が認められる。なお図の範囲外であるが、居住域Ⅱ－2外の南東にあたる89-3調査区でも、竈の破片が出土している。また、甑については、生駒西麓産の胎土のものと、砂粒をほとんど含まない精良な胎土のものが存在する。甑のうち実測図を掲載したものは一部であるが、掲載しなかった細片も含めて検討すると、胎土の違いに対応して、口縁端部の仕上げ方に一定の傾向が認められる。すなわち、生駒西麓の胎土の甑は端部がやや外反して丸くおさまるもの（図Ⅳ－95：161）や、



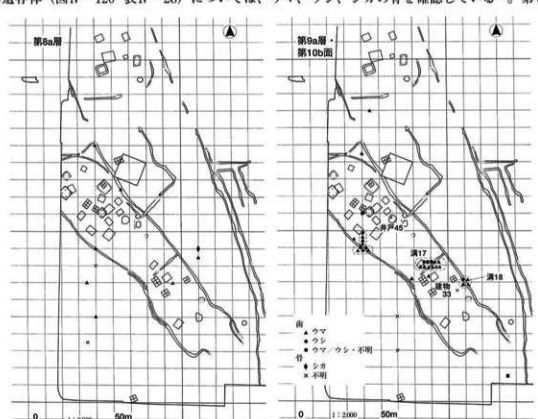
図Ⅳ－118　第10ｂ面関連遺物出土位置②（羽釜・甑）



図Ⅳ－119　第10ｂ面関連遺物出土位置③（窪）

端部を面取りしたもの（図Ⅳ－95：18）が多く、外側に面を持つように仕上げられるものもある（図Ⅳ－115：3）。これに対し、精良な胎土のものは、端部を面取りしたものについては内面側の端を肥厚させるものが多く、内面側に凸帯をめぐらすもの（図Ⅳ－106：100）も複数存在する。また、竈については釜穴口に同心円文スタンプが施されるものが注意されていたが、これについては居住域Ⅰや居住域Ⅱ－2外の南東側・南西側などから出土している。居住域Ⅱ－1からは同心円文スタンプがないものが出土しているが、竈についてはほとんど接合できておらず、同心円文スタンプがないと判断したものの中に焚口部の破片が混じっている可能性も否定することはできない。なお、甑や竈の個体数については把手の数からの推定がなされている。居住域Ⅰからは竈の把手と考えられるものが14点出土している。また、把手以外の特徴からみた甑の最低個体数は、精良な胎土のもの4個体、生駒西麓産のもの1個体であるが、把手からみると後者は最低3個体存在していた可能性が指摘されている（概要Ⅱ，pp.54-56）。また、居住域Ⅱについては把手の大半がⅡ－1の範囲から出土している。その内訳は精良な胎土のものが18個、生駒西麓産のものが284個である。第8a層・第9a層には古墳時代以降のものも含まれている可能性があるが、第10b面に近いほど出土量が増える傾向があるので、その多くは古墳時代のものである可能性が高い。このうち、生駒西麓産のものに注目すると、竈にしては小さなものが106個、竈の可能性が考えられるものが178個ある。時期の特定が難しいことを考慮しても、古墳時代集落の継続期間中に50個体以上の竈が存在していた可能性が高い。なお、居住域Ⅰから出土した炊飯具セットの多くに煤の付着など、使用した痕跡が認められるため、こうした炊飯具のセットは日常的に使用されていたと推定されている。ただし、居住域Ⅱ－1の建物30には作り付け竈が存在しており、この居住域出土の竈の全てがこの区域で使用されるためのものであったかどうかについては、問題が残る。

動物遺存体（図Ⅳ－120・表Ⅳ－28）については、ウマ、ウシ、シカの骨を確認している[6]。第8a層



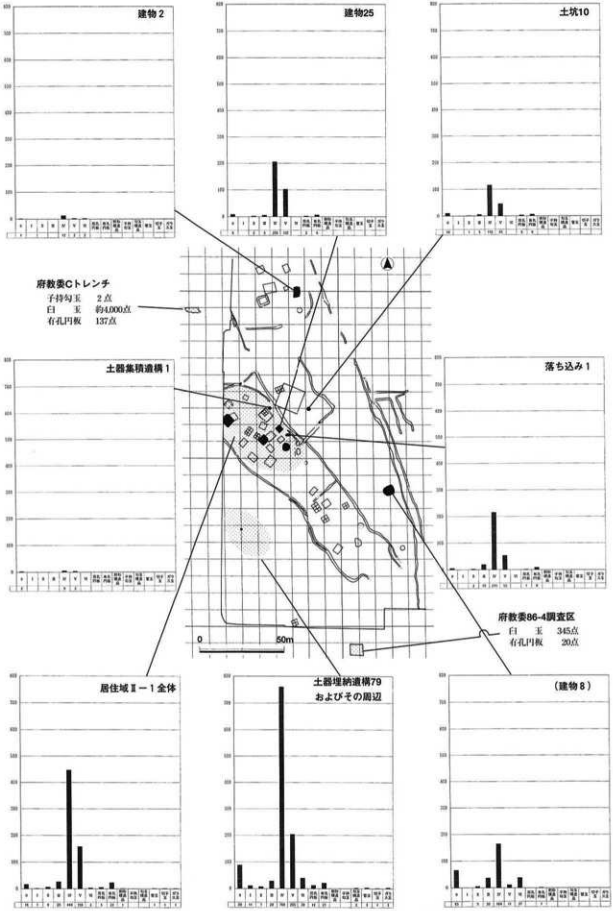
図Ⅳ－120　第10b面関連遺物出土位置④（動物遺存体）

・第９ａ層から出土したものの中には飛鳥時代～平安時代に属するものが含まれている可能性もあるが、居住域の区画溝である溝17や、居住域縁辺から出土したものが多い点が注意される。特に、溝17では３～４本の歯が並んだ状態で出土した地点を３ヶ所確認した（図版21－８）。これらは、歯が上顎や下顎骨についた状態で廃棄され、埋没過程や埋没後の腐食によって大半が消滅したものと考えられる。また、居住域縁辺で出土したものについても、同様な形で廃棄されたものが二次的に移動した可能性がある。さらに、出土したのが比較的遺存しやすい歯であり、上顎や下顎骨が消滅したと考えられることを考慮すると、他の部位の骨も本来廃棄されており、地表面に露出している段階ないし埋没後に消滅した可能性が考えられる。

ここで注目されるのは、ウマだけでなく、ウシの歯の存在も確認されたことである。ウシの普及時期は６世紀後半～飛鳥時代前半と考えられるが、やや古い例として大阪市瓜破遺跡の事例や、長原遺跡の６世紀前半とみられる偶蹄目の足跡があげられている（久保2000）。当遺跡の事例は共伴した土器から６世紀前葉～中頃と考えられ、比較的古い事例といえる。

表Ⅳ－28　第10ｂ面関連動物遺存体一覧

出土層位・遺構面	調査区	調査時の		登録番号	種名	部位	左右	部分	観察
		出土層位	遺構名称						
第８～９ａ層	90-1	14～16－１層	南北・東西セクション	990	ウマ	臼歯破片			
第８a～９a層	90-1	15～16層	南側溝	801	ウマ	上顎臼歯	左		
第９a層	90-1	16－１層		325	ウマ	上顎臼歯	右		
第９a層	90-1	16－１層		325	ウシ	上顎臼歯	右		M２/M３（短いもの）
第９a層	90-1	16－１層		325	ウマ	臼歯破片			
第９a層	90-1	16－１層		325	ウマ	臼歯破片			
第９a層	90-1	16－１層		501	ウマ	下顎臼歯	右		若い
第９a層	90-1	16－２層		504	シカ	上頭骨	右		オス、角座
第９a層	90-1	16－１層		325	ウマ	上顎臼歯	左		
第９a層	90-1	16－１層		325	ウマ	下顎臼歯			
第９a層	90-1	16層		928	ウマ	下顎臼歯	右		
第９a層	90-1	16層		928	ウマ	上顎臼歯	右		
第９a層	90-1	16層		961	ウマ	下顎臼歯	不明		
第９a層	90-1	16層		962	ウシ？	臼歯？			
第９a層	90-1	16層		963	ウマ	臼歯破片			
第９a層	90-1	16層		971	ウマ	下顎臼歯	左		
第９a層	90-1	16層		980	ウマ	上顎臼歯	左		
第９a層	90-1	16層		982	ウマ	上顎臼歯	左		
第９a層	90-1	16－１層		1002	ウマ	臼歯破片			
第９a層	90-1	16－１層		1003	ウシ	臼歯破片			
第９a層	90-1	16－１層		1004	ウシ	上顎臼歯	右		M２/M３
第９a層	90-1	16－１層		1010	ウマ/ウシ	歯破片			エナメル質
第９a層	90-1	16－１層		2519	不明	骨破片			
第９a層	90-1	16－１層		2528	不明	骨破片			
第９a層	90-1	16－２面		1571	不明	骨破片			
第９a層	90-1	16－１層		2513	ウマ	上顎臼歯	右		6,7才
第９a層	90-1	16－１層		2588	ウマ	下顎臼歯	右		第一後臼歯
第９a層	90-1			91②	ウマ	臼歯破片			
第９a層	90-3	11ｂ層		183	ウマ	上顎臼歯	左		M３
第９a層	90-3	11ｂ層		184	ウマ	臼歯破片			
第10ｂ面	89-3	11～１面		296	ウマ/ウシ	歯破片			
第10ｂ面	90-1	16－１面・土器４		275	不明	不明	不明		
第10ｂ面・ピット33	90-1	16－２面	ピット2987	2640	ウマ	上顎臼歯	右		
第10ｂ面・建物33	90-1	16－２面	建物25柱穴	2644	ウマ	下顎臼歯	左		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－１	2531	ウシ/ウマ	歯破片			エナメル質
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－２	2532	ウマ	臼歯破片			
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－15	2554	ウシ	下顎臼歯破片			計４点
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－17	2556	ウマ	臼歯破片			
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－20	2559	ウマ	切歯	不明		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－43	2582	ウマ	下顎臼歯	右		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－44	2583	ウマ	上顎臼歯	左		M１？
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－45	2584	ウマ	下顎臼歯	右		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－46	2585	ウマ/ウシ	臼歯破片			
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－58	2691	ウマ	下顎臼歯	左		
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－24	2563	ウマ	切歯			
第10ｂ面・溝17	90-1	16－２面	溝314－78	2720	ウマ	上顎臼歯破片			
第10ｂ面・溝18	90-1	16－２面	溝313	351	ウマ	上顎臼歯	左		



図Ⅳ－121　第10b面関連遺物出土位置⑤（玉類）

滑石製玉類（図Ⅳ－121）については遺構内から出土した場合と、一定の範囲から大量の玉類が出土した場合がある。前者には土坑10や建物２などがあり、祭祀に使用された後に遺棄されたものを含む可能性がある。一方、後者には「建物８」とされた部分の落ち込み内、居住域Ⅱ－２外側南西部（「土器埋納遺構79およびその周辺」としたもの、土器埋納遺構出土資料の数は臼玉９点、有孔円板１点）がある。府教委Ｃトレンチや86-4調査区も、後者に含められる。後者の状況は、これまで滑石製玉類の生産に関連すると考えられてきた。しかし今回、廣瀬時習の検討によって、こうした考え方に疑問が出されるに至った（第Ⅵ章３）。詳細は廣瀬の論考に譲るが、当遺跡から出土した玉類に関して、集落内で随時生産・使用されたと推定している。図Ⅳ－121で示したように、製作段階を基準にした分類（第Ⅵ章３）にもとづく臼玉の個体数の傾向は、玉類集中部出土資料、遺構出土資料ともに共通している。また居住域Ⅱ外側南西部からは、水晶製切子玉、ガラス玉なども同時に出土したことが注意される。確かに、滑石の原石や未穿孔の臼玉未製品も若干含まれているため、付近で臼玉の製作がおこなわれた可能性は考えられるが、こうした玉類集中地点も、玉を使用する何らかの活動に関わる廃棄場所であったと想定することができる。もちろん、そうであったとしても、すべての居住域・集落において玉類が製作されたり、大量に使用されたわけではないと思われるから、多くの玉類を有していた点がこの集落の特徴であることは間違いない。「玉作り」といっても一律ではなく、製品の流通・使用との関連で異なる性格のものが存在したことも予想されるため、今後は集落内での位置づけを遺跡ごとに検討していく必要があろう。

なお、当センター調査範囲では、滑石製子持勾玉・紡錘車は居住域Ⅱおよびその周辺にあたる位置から出土した。子持勾玉はその他、府教委Ｃトレンチからも出土している。

その他の遺物のうち、製塩土器（図Ⅳ－56：97）は当地区南西隅から出土したものであるが、製塩土器の可能性のある土器細片は、居住域ⅠやⅡからも若干出土している。また、円筒埴輪の破片は集落の時期と重なるものであり、居住域Ⅰ・Ⅱの周辺から出土している。鉄滓（鍛錬鍛冶滓）は溝17と居住域Ⅱにあたる部分の第９ａ層から出土したが、その他に鍛冶に関わる遺物や遺構は確認されていない。円筒埴輪や鉄滓の評価は現状では難しく、福万寺Ⅱ期地区の調査課題としておきたい。

以上のように、居住域Ⅱ－１からは他の居住域よりも多くの遺物が出土し、種類も多いことが判明した。これは居住期間の長さにも原因があると思われるが、それだけではなく、この区域に居住した集団の集落内での立場や役割を反映している可能性も考えられる。

ｃ．古墳時代集落の評価をめぐって

本項で記述した古墳時代中期後半～後期集落の性格については、「玉作り集落」（小野1995）、「葬送儀礼専業集落」（森本1997）などとする見解が出されており、特に前者の考え方は広く浸透しているようである。また江浦（1991ｂ）は、陶質土器の存在や炊飯具セットの多量の保有など、外来的要素が強いと考え、渡来人の第二世代を中心とする人々によって営まれた新興集落と推定した。こうした仮説の検証は今後の課題となっており、今回の整理結果をもとに議論を進めていく必要がある。

これまで記述してきたように、この集落は、建物数棟に炊事施設、井戸、畠などが伴う居住単位によって構成されていた。当地区で確認された居住域は３ヶ所であるが、この集落が立地する微高地は調査範囲外にものびているため、調査範囲外にも別の居住域が存在し、それらが関連をもって１集落を構成していた可能性が考えられる。しかし、居住域ⅠやⅡ－２が居住域Ⅱ－１よりも新しく形成されたことでわかるように、こうした居住単位は必ずしも固定的ではなく、集落の継続期間の中でも変動すること

があったと思われる。居住域の廃絶については不明な点が多いものの、前述した耕作痕12が居住域Ⅰ廃絶後に形成されたとすれば、居住域Ⅰ廃絶後にも、周辺に居住域がまだ存続していた可能性も出てくる。また、居住域Ⅱ－1の出土遺物の豊富さから、この区域に居住した集団の立場や性格が異なっていた可能性も指摘したが、居住域Ⅰの建物規模が居住域Ⅱ－1・2と比べて大きい点も、この区域に居住した集団の立場を反映しているのかもしれない。これらのことは、ひとつの集落を構成する居住単位が必ずしも等質的ではなかった可能性を示唆する。集落を構成する個々の居住単位の動向は、集落の実態を整理する際に重要な視点となろう。

また、この集落を「葬送儀礼専業集落」とする仮説については、遺物の中に古墳の祭祀で使用されるものが含まれていることから導かれている。確かに、居住域Ⅱ－1およびその周辺からは古墳の祭祀にも使用されるような遺物が認められるので、そこに居住した集団がそうした物資の流通・使用に際して重要な役割をはたした可能性はある。しかし、これを「専業」と理解するためには不確定要素も多いし、そのように一面的にとらえることで、この集落の特色が見えにくくなってしまう危険もある。理論面での検討は今後さらに必要であるが、抽象的な論理を展開する前に、具体的なデータに即した集落像の検討を進めることが重要である。その際、廃棄・埋没後の腐食・耕作による攪乱等の影響により、本来有していた情報のかなりの部分が失われていることを念頭に置くことも必要である。

いずれにせよ、当遺跡の古墳時代中期後半～後期集落は、居住域の実態をある程度明らかにできただけでなく、出土遺物から集落の性格について議論できる可能性を有しており、今後の古墳時代集落研究にとって重要な資料であるといえよう。

なお、集落が立地する微高地の形成は、弥生時代後期における流路の埋没によるものであるが、これは当地区周辺の流路変遷の中で大きな画期である。これ以降、当地区では堆積速度が遅くなり、第10b面の微地形が第8a面まで影響を与えることになった。古墳時代集落が営まれた時期には、流路はやや離れた位置にあったと考えられる。ただし、流路の周辺では堆積環境が大きく異なることが予想され、古墳時代後期の水田跡が検出される可能性も否定できない。周辺の調査においては、層序関係を機械的に当地区に合わせるのではなく、堆積過程を正確に把握し、出土遺物などと合わせて層序対比を進める必要がある。

註

6）古墳時代関連の骨製品・動物遺存体についても、松井　章氏（奈良文化財研究所）の同定による。